

SGRA REPORT

SGRAレポート No. 106

NO.106

ISSN 1346-0382

第72回 SGRAフォーラム

第8回 日本・中国・韓国における 国史たちの対話の可能性

20世紀の戦争・植民地支配と
和解はどのように語られてきたのか
—教育・メディア・研究—

第8回 日本・中国・韓国における 国史たちの対話の可能性

20世紀の戦争・植民地支配と和解はどのように語られてきたのか
—教育・メディア・研究—

■ 開催の経緯（詳細はp12）

「国史たちの対話」企画は、自国の歴史を専門とする各国の研究者たちの対話・交流を目的として2016年に始まり、これまでに7回開催した。国境を越えて多くの参加者が集い、各国の国史研究の現状と課題や、個別の実証研究をめぐって、議論と交流を深めてきた。2021年からは新型コロナ流行下でも対話を継続すべく、オンライン開催を3回試み、討論を深めることができた。

第8回となる今回は3年ぶりに対面型で開催。来られない人はオンラインで参加することとした。また、コロナ前と同様に、日中韓3本ずつ、計9本の論文発表と討論を行った。なお、今回も、円滑な対話を進めるため、日本語⇄中国語、日本語⇄韓国語、中国語⇄韓国語の同時通訳を行った。

■ 本フォーラムの趣旨

2016年から始まった「国史たちの対話」の目的は、日中韓「国史」研究者の交流を深めることによって、知のプラットフォームを構築し、3カ国間に横たわっている歴史認識問題の克服に知恵を提供することである。

東アジア歴史問題の起因は、20世紀の戦争と植民地支配をめぐる認識の違いと指摘されることが多い。しかし、公表された日韓、日中の歴史共同研究の報告書が示しているように、個別の歴史事実の解釈をめぐる違いはあるものの、20世紀東アジア歴史の大筋についての認識には大きな齟齬は存在しない。それでも東アジアの国際関係がしばしば歴史問題で紛糾している理由の一つに、相手の「歴史認識」への認識が不十分ということを挙げるができる。

戦後の東アジアは冷戦、和解、日本主導の経済協力、中国の台頭など複数の局面と複雑な変動を経験した。各国は各自の政治、社会的環境のなかで、自国史のコンテキストに基づいて歴史観を形成し、国民に広げてきた。戦後各国の歴史観はなかば閉鎖的な歴史環境のなかで形成されたものである。各国の歴史認識の形成過程、内在する論理、政治との関係、国民に広がるプロセスなどについての情報は、東アジアの歴史家に共有されていない。歴史認識をめぐる対立は、このような情報の欠如と深く関わっているのである。

20世紀の戦争と植民地支配をめぐる国民の歴史認識は、国家の歴史観、家庭教育、学校教育、歴史家の研究と発信、メディア、文化・芸術などが複雑に作用し合いながら形成されたものである。歴史家の研究は国家の歴史観との緊張関係を保ちながらも、学校教育に大きな影響を及ぼしていることは言うまでもない。今回の対話のテーマの一つは、歴史家が戦後どのように歴史を研究してきたのか、である。戦後東アジア各国では激しい政治変動が発生し、歴史家の歴史研究と歴史認識も激しく揺れ動いた。歴史家の研究と発信の軌跡を跡づけることは、各国の歴史認識の形成過程を確認する有効な手段であろう。

映画・テレビなどのメディアも国民の歴史認識の形成に重要な役割を担っている。戦後、各国は各自の歴史観に立って、戦争と植民地に関係する作品を多数創作した。このような作品が国民の歴史認識に与えた影響は無視できない。また、メディア交流が展開されるなかで、多数の映画やテレビドラマが共同で制作された。国民同士はこれらの作品を鑑賞することで、間接的に歴史対話を行ってきた。各国の文化、社会環境が歴史認識にどう影響したのか、確認したい問題の一つである。

歴史認識をめぐる国家間の対立が発生すると、相手の歴史解釈と歴史認識の問題点を指摘することが多い。しかし、自国内に発生した政治、社会変動に誘発される歴史認識の対立の方がむしろ多い。相手の歴史認識を認識する過程は、自分の歴史認識を問い直す機会でもあろう。このような観点から、第8回の国史対話は、今までの対話をさらに深めることを目指した。

SGRAとは

関口グローバル研究会 (Sekiguchi Global Research Association/SGRA) は、良き地球市民 (Global Citizen) の実現に貢献することを目標に2000年に設立されました。渥美国際交流財団の所在地、東京都文京区「関口」に因みます。SGRAは日本の大学院で博士号の取得を目指して研究を行い、渥美奨学生として共に過ごした外国人および日本人の研究者が中心となり、現代の課題に立ち向かうための研究や提言を、フォーラムやレポート等を通じて社会に発信しています。幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動が狙いで、多国籍の研究者が広汎な知恵とネットワークを結集し、多面的なデータを用いて分析・考察を行います。

SGRAかわらばん

SGRA フォーラムなどのお知らせと、世界各地からのSGRA会員のエッセイを、毎週木曜日に電子メールで配信しています。SGRAかわらばんは、どなたにも無料で購読いただけます。購読ご希望の方は、ホームページから自動登録できます。

https://www.aisf.or.jp/sgra/entry/registration_form/

第8回

日本・中国・韓国における 国史たちの対話の可能性

20世紀の戦争・植民地支配と和解は
どのように語られてきたのか—教育・メディア・研究—

日時 2023年8月8日(火)～9日(水)
会場 早稲田大学14号館8階 及びオンライン
主催 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性実行委員会
共催 渥美国際交流財団関口グローバル研究会 (SGRA)
共催 早稲田大学先端社会科学研究所・東アジア国際関係研究所
助成 高橋産業経済研究財団



第1セッション

[司会：村 和明 (東京大学)]

【開会挨拶】

劉 傑 (早稲田大学) 5

【趣旨説明】

三谷 博 (東京大学名誉教授) 7

第2セッション

サブテーマ：**教育** [司会：南 基正 (ソウル大学)]

【発表1 (韓国)】

解放後における韓国人知識人層の脱植民地議論と
歴史叙事構成の変化

14

金 泰雄 (ソウル大学)

【発表2 (中国)】

歴史をめぐる記憶の戦争と著述の倫理
—20世紀半ばの中国に関する「歴史の戦い」—

28

唐 小兵 (華東師範大学)

【発表3 (日本)】

日本の歴史教育は戦争と植民地支配をどう伝えてきたか
—教科書と教育現場から考える—

37

塩出浩之 (京都大学)

【討論・質疑応答】

パネリスト同士の討論・参加者との質疑応答 49

第3セッション

サブテーマ：**メディア** [司会：李 恩民 (桜美林大学)]

【発表4 (中国)】

保身、愛国と屈服
—ある偽満州国の「協力者」の心理状態に対する考察—

58

江 沛 (南開大学)

| | | |
|------------|---|-----|
| 【発表5 (日本)】 | 戦後日本のメディア文化と「戦争の語り」の変容 福間良明 (立命館大学) | 68 |
| 【発表6 (韓国)】 | 現代韓国メディアの植民地、戦争経験の形象化とその影響 —映画、ドラマを中心に— 李基勳 (延世大学) | 77 |
| 【討論・質疑応答】 | パネリスト同士の討論・参加者との質疑応答 | 90 |
| 第4セッション | サブテーマ: 研究 [司会: 宋志勇 (南開大学)] | |
| 【発表7 (日本)】 | 「わたし」の歴史、「わたしたち」の歴史 —色川大吉の「自分史」論を手がかりに— 安岡健一 (大阪大学) | 97 |
| 【発表8 (韓国)】 | 「発展」を越える、新しい歴史叙述の可能性 —韓国における植民地期経済史研究の行方— 梁知恵 (東北亜歴史財団) | 106 |
| 【発表9 (中国)】 | 民国期の中国人は「日本軍閥」という概念をどのように認識したか 陳紅民 (浙江大学) | 114 |
| 【討論・質疑応答】 | パネリスト同士の討論・参加者との質疑応答) 論点整理 劉傑 (早稲田大学) | 127 |
| 第5セッション | 指定討論／全体討議 [司会: 鄭淳一 (高麗大学)] 議論を始めるに当たって: 三谷博 (東京大学名誉教授) 指定討論者 (発言順): 金憲柱 (国立ハンバット大学)、袁慶豊 (中国伝媒大学)、 吉井文美 (国立歴史民俗博物館)、史博公 (中国伝媒大学) | 139 |
| 第6セッション | 指定討論／全体討議 [司会: 彭浩 (大阪公立大学)] 指定討論者 (発言順): 張曉剛 (長春師範大学)、金滸 (ソウル大学)、平山昇 (神奈川大学) | 160 |
| 【閉会挨拶】 | 趙珖 (高麗大学名誉教授) 185 8回の国史対話ふりかえりとこれから 今西淳子 (渥美国際交流財団) 188 著者略歴 190 あとがきにかえて 金キョンテ 192 参加者リスト 198 | |

※同時通訳
日本語⇄中国語:
丁莉 (北京大学)、
宋剛 (北京外国語大学)

日本語⇄韓国語:
李ヘリ (韓国外国語大学)、
安ヨンヒ (韓国外国語大学)

中国語⇄韓国語:
金丹実 (通訳翻訳者)、
朴賢 (京都大学)

※所属・肩書は本フォーラム開催時のもの。

劉傑

早稲田大学

[原文は中国語、翻訳：于寧（東京大学）]



会議が始まる前に、今回の会議の実行委員会の一員として、「国史たちの対話」について、簡単に紹介させていただきます。

今回の「対話」のテーマは「20世紀の戦争・植民地支配と和解はどのように語られてきたのか」です。ためらいもありましたが、時間をかけて十分に検討し、慎重な議論を重ねた結果、このテーマに決めたのです。「蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」というテーマで第2回の「対話」を開催した後、17世紀そして19世紀と時系列で議論してきました。その流れで今回は20世紀に注目し、20世紀の戦争と植民地支配について対話するという発想に自然に辿り着きましたが、このテーマでの対話は非常に難しいであろうと容易に想像できたのでためらったのです。今までの数回の「対話」では、私たちは多くの挫折を経験し、あまり円満な結果を得ることはできませんでした。ただし、私たちはすでに『東アジア』の誕生—19世紀における国際秩序の転換—というテーマで「対話」を行った蓄積があったため、最終的に今回は「20世紀の戦争・植民地支配と和解はどのように語られてきたのか」について、冷静に対話できる条件が整ったという判断を下したのです。

「国史たちの対話」の今までの経緯について紹介します。そもそもなぜ対話が必要なのでしょう。東アジア3カ国をとりまく歴史認識問題が3カ国の国民感情にもたらした対立が、私たちが「国史たちの対話」プロジェクトを起動した根本的な出発点でした。

日中両国の間で行われた相手国に対する印象に関する世論調査によると、中国に良くない印象を持っている日本人は90%に達しており、日本に良くない印象を持っている中国人の割合も相当高くなっています。この状況に至った主な原因は何でしょうか。中国人はなぜ日本に良くない印象を持っているのか、その原因について中国の世論を見てみると、最も多いのが「中国を侵略した歴史について、きちんと謝罪し反省していないから」となっています。これが多くの中国人が日本に良くない印象を持っている主な原因になります。一方、日本人は中国に良くない印象を持っている原因について、多くの日本人も歴史認識問題に言及していて、中国人が歴史問題をもって日本を批判するから日本人が中国に良くない印象を持つようになったとなっています。現在、歴史認識問題は日本人が中国に良くない印象を持っている最も重要な原因ではなくなりましたが、中国人にとっては、日本に良くない印象を持っている最も重要な原因は依然として歴史認識問題です。これは私たちが対話する原因の一つになります。

本日私は主に日中両国の関係を中心にお話しします。中国と日本は国交正常化

を実現してから今に至るまで、すでに50年以上の歳月が経ちました。この間、両国の知識人たちは多くの共同研究を行ってきましたが、「対話」という形式はまだ新鮮でしょう。共同研究を行うために「求同存異」という共通の原則が設けられました。「求同存異」とは、できるだけ双方の共通認識を組み合わせることを通じて、比較的円満な共同研究の結果を達成することです。一方、認識が食い違うところに関しては、それを棚上げすることにしておきました。最初の大規模な共同研究は日中戦争勃発50周年の1987年に行われ、それは双方の「求同存異」の結果でした。

先ほど述べた通り、「求同存異」という原則により、日中両国では様々な「共同研究」が行われましたが、「対話」はいつから始まったのでしょうか。歴史認識問題が政治、外交問題化し、両国関係に大きく影響するようになってから歴史対話が始まったと思います。単なる「求同存異」ではなく、対話を始める必要があると人々は思うようになったのです。しかし、最初の対話は主に相手の歴史認識を批判し、自分たちの歴史認識で相手を説得しようとする形態で行われました。しかし、自分の認識を諦めて相手の歴史認識を受け入れることはなかなかできないので、これは「対話」の難しいところです。これを受けてその後私たちは、「国境を越えた対話の可能性の模索」という提案をしました。ここで言う「国境を越えた対話」とは、国家間、あるいは異なる国家の人々が対話を行うという意味ではなく、心の中で国境という制約を無くした状態で対話の可能性を探るといった新しい対話の形式でした。同時に、政治と距離を置く前提で歴史対話を試みました。長年の対話を通じた交流を重ね、また各国における学術の状況も変化するにつれて、東アジア3カ国の歴史研究者の間に知のネットワークと知のプラットフォームが形成されてきました。この知のネットワークと知のプラットフォームをより堅実なものにするために、まずは13世紀のモンゴル帝国の形成と拡張をめぐる対話を開始し、その後は様々な対話を重ねてきました。

これらの対話を参考に、私たちの歴史対話は現在どの状況にあるのかと考えることができます。東アジアの歴史研究者は対話を通じて、知識を共有するプラットフォームを構築してきたと私たちは認識しています。しかも、このプラットフォーム上で、われわれは今まで考えてこなかったことを思考しはじめています。例えば、各国をとりまく歴史認識問題の差異と対立は、国家間の対立や認識の差異によるものよりは、自国内に発生した政治、社会変動に誘発される歴史認識の対立の方に起因することが多いでしょう。同時に、相手の歴史認識に耳を傾ける過程は、自分の歴史認識と自国内部の歴史問題を問い直す機会でもあります。つまり、歴史認識問題について、単に自分の歴史認識と異なる認識を持つ相手を責めるのではなく、相手と対話する中で自分の歴史認識問題を再考すべきで、これは歴史対話の新たな課題でしょう。このような認識に基づいて、今回のテーマを設定したわけです。今回の「対話」に寄せられた発表論文からは私が先ほど述べた基本的な見方を確認することができるだろうと思います。ですから、今日と明日二日間にわたって開催する今回の「国史たちの対話」に大きく期待しています。

私の説明は以上です。ありがとうございました。

趣旨説明



三谷 博

東京大学名誉教授

おはようございます。劉傑先生の話に引き続き、趣旨について補足します。

この国史たちの対話というプロジェクトは、今から8、9年前に劉傑先生と今西さんがお話しになって、私にも手伝えということが始まりました。実は今日我々がやろうとしている対話が一番やりたいテーマだったのですが、いきなりそこから始めると上手くいかないかもしれないという恐れがあったので、迂回作戦をとり、はるか大昔、モンゴル来襲の時代から対話を始めることにしました。何年か続けてきて、ようやく本来のテーマを扱えるようになったというのが現状です。

ただし、その年月の間にはいろいろな変化が起きていて、ポジティブな変化もあれば、マイナスの変化もありましたが、こうして、この早稲田大学に一堂に会することができて、我々は大変喜んでおります。それで今日私が補足的にお話したいのは、私個人のこの歴史対話に関する経験です。多分、今までそれを全部話す機会はなかったのではないのでしょうか。あらましかけても、私が何をやってきたかということをお話しして、背景にある日本と隣国の韓国や中国の人たちとの対話がどんなものであったかを、ちょっと思い出していただきたい。これが最初の話です。

それから今日、これから展開する対話について、私なりに気をつけなければいけないと思ってることがありますので、それを二番目にお話ししたいと思います。

まず私の個人的な経験ですが、私の専門は19世紀の日本史、特に明治維新とその政治外交史です。それにプラスして19世紀の東アジア全体の関係とか、あるいは最近では、明治維新という事件は世界最大の革命の一つだったわけですが、それはどんなものだったかということ、17世紀のイギリス革命から今世紀初めのいわゆる「アラブの春」まで、革命八つを取り上げて比較するという仕事を、国内外の研究者と共にやっています。ですから、私の関心の中心はどこにあるかというと、19世後半の日本なわけです。それに対し、この歴史対話のそもそもの焦点がどこにあるのかというと20世紀前半の歴史です。私の専門とは遠く離れている。率直に言ってしまうと、19世紀の研究をしている人間が20世紀前半の問題に首を突っ込むということは、研究者としてはあまりないことなのです。ただ、私はいろいろな事情からそれに踏み込んで、今日ここに来ているということなんですね。

記憶をたどってみますと、たぶん最初に私がそれを意識したのはいつ頃でしょう。いつのことか忘れましたが、いわゆる歴史教科書の問題について、外国の先生方との対話を始めたのは、かなり古い話でした。まず最初の経験は、東京にい

ろいろな外国の先生方に来ていただいて、その国の歴史の教科書が日本をどう書いているかをお聞きして、ここはちょっと直してくださいねって願います。そういう仕事をやりました。いろいろな国からおいでになりました。例えば、タイとかアメリカ。その中で、韓国の先生方がおいでになった時、会議が終わった後にホテルのロビーでお茶を飲みました。その時の韓国側の中心人物が鄭在貞先生チョンジエジョンだったんですね。ソウル市立大学の先生です。のちには東北亜歴史財団の理事長をなさいました。大体同世代でお互い若い頃だったのですが、お茶を飲みながら話をしているうちに、鄭在貞さんが「わが国の歴史の一部は外国の歴史になっています」とおっしゃった。「えっ、何それ？」と、最初びっくりしたのです。何を言っているのかわからなかった。でも、しばらくして、「あ、そうか」と日本が支配していた時代、いわゆる植民地にしていた時代のことをお話しになっていたのだと気がついたのですが、その時、私、瞬間的にですね。もし日本がそれと同じ状態になったらどうだろうと考えました。これは大変な問題だと気がついたのです。

私自身は、実は大学の学部卒業論文で、「満洲国」ができる過程についての論文を書きました。ですから、植民地とか植民地支配は事実としては知っていたわけです。事実は知っていた。私に限りません。日本の中学・高校の教科書には、その事実はちゃんと書いてある。ところが問題はそれが何を意味しているのかということに全然考えたことがない。そこで日本人がどう植民地に出ていき、そこで何をやったかとかは、あれこれ調べて本に書いてはあるんだけど、その時に支配された方々が何を感じていたかということは教わった経験がない。読んだ経験もなかったんですね。浅学の至りですけれども、これはいかに。やはり日本人の視点からこと細かな研究をするだけでは意味がない、と。相手が、外国の方々は何を経験したのかを知らないと、植民地支配だの戦争だのということは考えられないのだと、やっとその時に気が付いた。大体40歳前後だったかな？歴史の研究を始めてから20年ぐらい経っていた頃だろうと思います。そういった経験があったものですから、たとえ20世紀で私の専門分野と違うとは言っても、これは真面目に考えなきゃいかんと思ったんですね。それが最初のお話です。

それから、これは非常によく知られていることですが、今世紀最初の年、2001年に日本の中学の歴史教科書について大論争が巻き起こりました。右翼系の団体が作った教科書が文部科学省の検定を通過して販売されることになった。それについて国内で侃々諤々の論争が起きたわけです。それはまた隣国にも飛び火して、韓国も中国も日本政府に抗議をし、3月から7月ぐらいまでの間、この論争は猛烈な勢いで日本の中で展開されました。本屋の店頭にもたくさん関係の本が平積みされるということがあったんですね。

私は専門外の時代ではあるけれども、学者たちが開いた国内外の会議に出かけ行って議論したことがあります。その結果はむしろ良かった。今までは相互に無関心だったそれぞれの国の歴史学者たちは、例えば、中国の日本史関係者とか、あるいは国際関係の人たちとかは日本に関心があるけれど、自国史をやっている人たちは全く日本の歴史なんか関係ないという態度だった。それが、たまた

まこういう大きな政治問題が起きたので、お互いに関心を持ち始めた。そしてまた、様々な団体が経済的な支援をしてくれ、あちこちの大都市でいろいろな会議が開かれた。北京、ソウル、もちろん東京、それからアメリカの都市でも開かれたことがあります。

この時ですね、そういう支援を政府並びに民間団体からしていただけたということは、なぜか。それは関係三国の政府がみな、この歴史問題を政治・外交から隔離するという方針を共通して取っていたからです。当時、中国にしても韓国にしても日本から様々な経済的支援とか、あるいは技術的支援を得ていました。ですから、内心に思うこと、言いたいことがあっても、日本に向かっては言えない。今とはまるで違う国際関係が今世紀の初頭まではあったのです。そこで、現在を生きること、あるいは未来に向かって経済を建設していくことが大事だと思っていたら、日本に対して言いたいことも言えない。政府は言えない。だけど、代わりに学者にやってもらいましょう。これが当時の各国政府の判断だったのだらうと思います。そこで、学者たちの対話に大きな支援をしていただいたわけです。

ただこの時、政府が直接にスポンサーとなった、日韓、日中の対話はもちろん行われましたが、私自身はある理由がありまして、政府の仕事には関与しなかった。私は反政府という人間では全くないのですが、学者としてはやりたくないと思っていたので、関わりませんでした。その反面、民間でやることには積極的に加担しました。その際、私を引っ張り込んだ張本人はここにおります劉傑先生。彼とは日中の仕事をしましたが、日韓では同じ早稲田大学の李成市先生。この春に定年でお辞めになりましたけれども、彼らが私を引っ張り込み、大いに勉強させられた。そういうご縁で私は日中・日韓とも民間のレベルでは非常に深い関係を持つことになったのです。その成果はおいおいと上がってきました。その代表的な成果は、劉傑先生と私と、それからアメリカのワシントン大学にいらっしゃる楊大慶先生が編集した『国境を越える歴史認識』（東京大学出版会、2006年）。劉傑先生は、若手の研究者を集め、一次史料に基づいて日中関係のセンシティブな部分、非常に微妙な問題についてきっちり書きましようということを提案なさった。実際に、いろいろな方を呼んで対話を繰り返し、最後は本にまとめることができました。これは同時に北京の出版社から中文でも出版され、後に楊大慶先生のおかげで英語版も出るようになりました。

このときの私の経験を申しますと、中国や韓国の学者たちとの対話というのは、最初は怖かった。劉傑先生を中心とした研究会だったのですが、参加した私は怖くてたまらないというのが現実でした。それ以前にも歴史対話の会に顔を出したことがあったのですが、だいたい日本側が叱られるんですね。少し変なこと言うと本当に怒鳴られるのです。それを見ていたものですから、私、怖かったんですよ。だけど劉傑先生の会はそうではなくて、とにかく史料を持ち寄ってきっちり議論しましょうと。それができる方に来ていただいた。それでもやはり、例えば楊大慶先生がお出でになった時のテーマは南京大虐殺だった。私、ほんと怖かったんですよ。だからきちんとお話ができてほっとしました。まともな学者同士の対話だったらちゃんと通ずると知って恐怖心は消失。それ以来、私はたい

いは大丈夫だと思えるようになりました。いろいろな会議で対話すると、確かに意見は違う。違うけれども、なんで相手は違う意見を語るのかを考えると、かれらの背景が見えてくる。そうすると、あまりこちら側もムカッとしないで済むわけです。そこで、こうした対話を重ねているうちに、私は、2008年にたまたま滞在していたハーバード大学に劉傑先生や李成市先生や、他にも多くの中国や韓国の先生方においていただいて、大きな公開発表会をやりました。その最後に言った私の言葉は今でも覚えています。「今後、政治家が変な行動を起こさない限り、我々の歴史対話は順調に進むであろう」と。

これは2008年の私の発言です。しかしながら、現実逆さまに動いた。2010年に尖閣列島沖で、中国の漁船が日本の巡視船に衝突するということがありました。2年後の2012年には韓国の大統領が竹島に上陸するということも起きました。それで日本の世論は一気に硬化いたしました。やられっぱなしだ、面白くないという感情が席卷した。そのため、日本政府は、2014年にそれまで設けていた歴史教科書の検定基準を変え、例えばそれまでは隣国の歴史認識に配慮することというような条項があったのに、これを削ってしまった。このような変化が日本側に起きました。それ以来もう、歴史問題については、隣国との間でも国内でも、何を話しても無駄だと思えるようになった。私はこの対話からいったんは撤退しました。何をやっても無駄と思ったのです。

ところがその時に渥美財団の今西さん、劉傑さんがもう一度やり直そうということ提案をなされた。私は実はしぶしぶながら参加したのですが、やってるうちに何とか続けられそうだと思うようになった。特に若手の方々が、今まで無関心そうに見えた若手の学者たちが参加してくれるようになったので、大変喜んで次第です。一方、それとは別に、今までの歴史対話は非常にきわどい政治問題を扱ってきたけれど、本格的な学術研究のレベルで、若手の学者に交流会をもってもらおうということも考えた。この早稲田大学、上海の復旦大学、それからソウル大学校と三か所持ち回りで、復旦大学の張翔先生やソウル大学校の朴薫先生のご協力を得て、若手による大きな学術会議を開催しました。後に分厚い本、日本語版を出すことができました（三谷・張翔・朴薫編『響き合う東アジア史』東京大学出版会、2019年）。この本は後になって生きるだろうと信じております。

ここまでがお話ししたかったことの半分なのですが、あと2分しかないということで急いでお話しします。

「歴史認識」というのは日本語で言うと普通名詞のはずですが、東アジアでは固有名詞になる。「日本による隣国の侵略や加害」のことです。隣国の民は、常に20世紀の前半に日本人が我々の先祖に対してやったことを、日本人は今どう思っているのか、反省しているのか、本当に。と問いかける。日本はこれにどう答えるかという問題なのです。日本側に必要なことははっきりしています。20世紀前半に日本の先祖がやったことを正視し、記憶を共有する。それがどうしても必要です。しかし、これを普通の日本人に対して語るのは大変難しい。今でも大変です。事実ですよと言っても聞きたくない。耳を塞ぐ。若い人であればあるほどそうです。しかしながら、事実として日本による韓国の併合・支配は36年、日本による中国への侵略戦争は15年間あった。これを隠蔽しようとしたって無

理です。日本の右翼の中には、小さな事件を取り上げて「これは実はなかった」と言う人がいる。小さな事件を取り上げてなかったことが証明できれば、日本による中国への侵略全体がなかったことにできているように思っているようです。そんな無理が通るはずがない。でも、これをどうやって普通の日本人に納得させるのかは大変です。

逆に隣国の側をお願いしたいこともあります。時の隔たり、日本の侵略が終わり、帝国が崩壊して植民地支配が終わってから78年が経っています。三世代・四世代経って、現在生きている人たちは、元加害国、元被害国の国民であっても、当事者ではありません。これやはり十分に意識しないといけないことと思います。

それから最後をお願いしたいのは、日本という国は一つしかないのでしょうか。日本とか日本人と名前がついたら常に同じ行動をするのでしょうか。政治文化は持続性が高い。例えば、日本人は議論が嫌い、これは大昔からずっと今まで続いています。しかし、対外態度は激変しています。豊臣秀吉は二度朝鮮半島を侵略した。本当は中国を支配したかった。当時の満洲人と同じくですね。非常に攻撃的だった。ところが秀吉の後を引き継いだ徳川家康から後、徳川家は274年間、完璧な平和を維持しました。対外戦争だけでなく、国内の内乱もありません。これは世界史上の稀なレコードだと思います。そういう完璧な平和があった後、日清戦争から後、日本人はまた非常に好戦的になった。51年間、1945年にアメリカに完膚なきまでに叩き潰されるまで、それを続けました。で、負けてしまったあとどうなったかという、一切戦争しないことにして、78年間それを続けてきた。だから同じ日本という名前はついていても、対外行動は一貫性がなく、逆の極端を行ったり来たりしているのです。

そこで、これから先、日本にまた逆の極端にいつて欲しいかと私は皆さんに問いかけたい。無論、それがお互い、良いはずがありません。そうならないようにするにはどうしていただきたいか。私は隣国の方々に、戦後に日本人が戦争しなかったということを正当に評価してもらいたい。これを私の知人の中国人の方に言ったら、それは日本人が反省したからではなくて、アメリカに支配されたからそうせざるをえなくなっているんだという答えでした。いま、日本には大きな米軍基地が7つもあって、日本がアメリカに反抗しようとしたら必ず叩き潰される。それが怖いから戦争したくてもできないだろうと、こういう解釈です。どうですか、それぞれの国でどう考えていらっしゃるのでしょうか。このとき私は「違います」と言いました。私は親から「戦争なんて二度とするもんじゃない」といつも言われて育ったのです。先日、故郷に帰ったとき、高校の同級生と懇談したら、話がウクライナ戦争におよび、その際に、「私は親からこう言われたよ」と言ったら、みんな「そうだ、そうだ」と答えました。そこにいた人の中にはいわゆる右翼的な考えを持つてる人もいたのです。でも、彼もまたそうだったと言ってくれた。ですから、戦後の日本人はこういう経験を共有してきたのです。それはやっぱり隣国の方々に認めてほしい。そして、それを続けると言ってほしいのです。これが今日、私がもっともお願いしたいことです。

あとは対話に際してのテクニカルな問題ですが、これからより良い未来を共有

するためには、どのように過去を語るべきかという問題ですね。その際、まず自分の発表が大事なのは無論です。でも、それ以上に人がどんな発表をなさるかに耳を傾けてほしい。そして、そこに出てくる自分とは異なる意見、それに気をつけて「なんで意見が違うんだろう」と考えていただきたい。明日、総合討論を行い

■ 「国史たちの対話」プロジェクトのあゆみ

渥美国際交流財団は2015年7月に第49回SGRA(関口グローバル研究会)フォーラムを開催し、「東アジアの公共財」及び「東アジア市民社会」の可能性について議論した。そのなかで、まず東アジアに「知の共有空間」あるいは「知のプラットフォーム」を構築し、そこから和解につながる智恵を東アジアに供給することの意義を確認した。

このプラットフォームに「国史たちの対話」のコーナーを設置したのは2016年9月の第3回アジア未来会議の機会に開催された第1回「国史たちの対話」であった。いままで3カ国の研究者の間ではさまざまな対話が行われてきたが、各国の歴史認識を左右する「国史研究者」同士の対話はまだ深められていない、という意識から、まず東アジアにおける歴史対話を可能にする条件を探った。具体的には、三谷博先生(東京大学名誉教授)、葛兆光先生(復旦大学教授)、趙珖先生(高麗大学名誉教授)の講演により、3カ国のそれぞれの「国史」の中でアジアの出来事がどのように扱われているかを検討した。

第2回対話は、自国史と国際関係をより構造的に理解するために、「蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」というテーマを設定した。2017年8月、北九州に日本・中国・韓国・モンゴルから11名の国史研究者が集まり、各国の国史の視点からの研究発表の後、東アジアの歴史という視点から、朝貢冊封の問題、モンゴル史と中国史の問題、資料の扱い方等について活発な議論が行われた。この会議の諸発表は、東アジア全体の動きに注目すると国際関係だけでなく、個別の国と社会をより深く理解する手掛りも示すことを明らかにした。

第3回対話はさらに時代を下げて「17世紀東アジアの国際関係」と設定した。2018年8月、ソウルに日本・中国・韓国から9名の国史研究者が集まり、日本の豊臣秀吉と満洲のホンタイジによる各2度の朝鮮侵攻と、その背景にある銀貿易を主軸とする緊密な経済関係、戦乱の後の安定について検討した。また、3回の国史対話を振り返って次につなげるため、早稲田大学主催による「和解に向けた歴史家共同研究ネットワークの検証」のパネルディスカッションが開催された。

第4回対話は「『東アジア』の誕生－19世紀における国際秩序の転換－」

ますが、その時のために今日はいろいろな方の発表を聞きながらメモを取り、明日これについて発言しようというメモを用意していただきたい。少し時間をオーバーしましたが、こんなお願いをして私の補足説明を終わります。どうもありがとうございました。

というテーマで、2020年1月にフィリピンのマニラ市近郊に日本・中国・韓国から国史研究者が集まり、各国の「西洋への認識」「伝統への挑戦と創造」「国境を越えた人の移動」について論文発表と活発な討論が行われた。

第5回対話は「19世紀東アジアにおける感染症の流行と社会的対応」というテーマで、コロナ禍中の2021年1月に完全オンライン形式で開催され、19世紀に感染症の問題を各国がどのように認識し、いかに対応策を用意したかを見て、さらに各国の相互協力とその限界について考えた。各国からの論文発表に加え、過去4回の参加者がパネリストとして多数参加し、活発な討論が行われた。新型コロナウイルス感染症流行により、やむを得ずオンライン開催となったものの、結果としてはZoomウェビナーというプラットフォームを得ることになり、新たな展開につながる有意義な対話となった。

第6回対話は2021年9月に、アジア近現代の「人の移動と境界・権力・民族」をテーマとして、第5回に引き続きオンライン（3言語同時通訳）で行われた。塩出浩之先生（京都大学教授）は問題提起で、近現代における人の移動を左右してきた国境に焦点を当て、人の移動が国家主権体制や国際政治構造（帝国主義や冷戦）と密接にかかわる点を指摘した。その後のセッションでも議論が白熱した。やや実験的に自由討論を主体に一日を費やした構成であったが、活発な議論を進めることができたと高く評価された。

第7回対話は、2022年8月に「『歴史大衆化』と東アジアの歴史学」をテーマにオンラインで開催された。韓成敏先生（高麗大学研究教授）が日ごろ韓国の歴史学者の中で議論している「歴史大衆化」問題を提起され、危機的状況にある歴史学の状況を分析、ひとつの解決方法として「パブリック・ヒストリー」を提案した。その後各国の異なる状況を踏まえて「歴史の大衆化」を多角的に検討する活発な議論が交わされた。

本プロジェクトは、フォーラム、セッションでの対話だけでなく、3言語に対応したレポートの配布とリレーエッセイのメールマガジン等により、円卓会議参加者のネットワーク化を図ることを目的としてスタートした。6年にわたる蓄積から、日本・中国・韓国の各国の国史研究者340人を超すネットワークとして成長している。

第2セッション
教育

発表 1 (韓国)



解放後における 韓国知識人層の 脱植民地議論と 歴史叙事構成の変化

金 泰雄

ソウル大学

[原文は韓国語 翻訳：尹 在彦 (立教大学)]

1. 序言

解放後から現在まで韓日関係はローラーコースター (roller coaster) のように極端と極端の間を揺れているように見える。しかし韓国社会が脱植民地化と冷戦秩序を経て、分断と戦争、産業化、民主化、南北関係の変化などによって日本社会とは異なり急激に変動したため、このようなローラーコースターは予見されたものかもしれない。それは国内政治と国際外交が決して分離できないためである。そして何より韓日関係に潜んでいた暗い過去の影に対する見直しが韓日両国学者たちの資料の発掘と整理から本格化したためである。

ところが両国関係のこのようなローラーコースターは、自国内の歴史叙述の構成及び韓国史・東アジア史の教育に影響を及ぼした。脱植民地を眺める時代状況と支配層の見方、そして識者層の韓日関係認識などが国内外の当面の課題と絡み合い、決して一貫した方向へは進まなかったためである。特に韓国の政界は日本と同様に、この問題を学界と教育界に任せて長期的かつ持続的に扱うよりは、直接介入して教育現場を混乱に追い込むこともあった。

本発表は韓国政局の変動と脱植民地化の課題が相互連動する中で起きる歴史叙述の変化に焦点を当て、叙事の再構成とその意味を追った。特に歴史教科書とこれを裏付ける教育課程の変化に重点を置いた。それはこれらの歴史教科書が歴史叙事の構成を内蔵し、市民として成長する学生らの歴史意識の形成に影響を与えるためである。

2. 脱植民地言説と歴史問題の再構成： 1945～1948

1945年8月15日、韓半島は日帝から解放されたことで、新国家を建設し、自らの文化を再建して奪われた歴史を回復することができるようになった。いわ

『国史教本』(1946)と『中等歴史』(1944)

| 国史教本 (1946) | 中等歴史 2 (1944) |
|------------------------------------|-------------------------|
| 第1編 上古 (太古、三国時代) | 第1編 太古 (天照大神から大化改新まで) |
| 第2編 中古 (新羅統一期～高麗) | 第2編 古代 (大化改新から平安期まで) |
| 第3編 近世 (李氏朝鮮) | 第3編 中世 (鎌倉幕府から江戸幕府以前まで) |
| 第4編 最近 (国号4243～4278年、西暦1910～1945年) | 第4編 近世 (江戸幕府から明治維新以前まで) |
| | 第5編 現代 (明治維新から国際連盟脱退まで) |

表 1

ゆる脱植民地化の可能性を切り開くことになった。大多数の識者層は、新国家建設に貢献するために学術・教育運動に積極的に参加した。特に、日本帝国が構築した植民地文化の残滓を清算し、歴史的経験に対する評価が非常に重要であった。それは脱植民地のための歴史叙事の再構成であり、未来に進むための踏み台であった¹。そこで歴史叙事は民族的受難及び侵略的歴史の清算に焦点を当て、単一民族国家の構想と、被圧迫民族の連帯に基づく倫理的アジアへの展望でもあった²。しかし、歴史叙事は虚構的な思想に基づいた文学とは異なり、あくまでも事実に基づいて構成することに重点を置いた。

歴史叙事のこのような構成と再生産は学界よりは教育界で先んじて行われた。なぜなら、新国家建設の文化建設と集団記憶の再構成は、学問的成果に先立って国民教育が優先されなければならなかったためである。このため日本語と日本史に付随した韓国語と韓国史の分離・独立が急務であった。朝鮮語学会と震檀学会がそれぞれ1945年12月と1946年5月、『初等国語教本』と『中等国史教本』を刊行した。後者の凡例からも分かるように「我が民族文化・国家社会の変遷発展の大意をできるだけ簡明に叙述することに努めた」。そして「国史学習の意義」を「我が民族及び文化の伝統と発展に対する認識を深め、民族性の本質を体得して健全な国民精神と国民的道德及び正しい精神を培う」と規定した。すなわち、歴史教科書に潜んでいる叙事は民族国家建設という時代的課題と密接に関連していた。

既存の日本史教科書と比較すると「表1」のようになる。

主体は韓国人の歴史に書き換えたが、時期区分と内容構成は『国史教本』と『中等歴史』は大同小異である。それは韓国史に対する研究が本格化していない中で、日本史の枠組みをそのまま持ち込んだためである。

1 歴史叙事は文学や神話と違って、1次事件は虚構ではなく実際の事件を意味する。ただし、歴史叙事は文学が開発したプロットの類型になっており、一つの文化が収めた過去の出来事に形態を与え、2次の意味の類型へ変換させる。これに関しては Donald E. Polkinghorne、강현석ほか共訳、『내러티브, 인문과학을 만나다』, 학지사, 2009, 137~138頁; 梁豪煥, 『歴史教育の立論과 構想』, 책과함께, 2012, 193~207頁参照。

2 하신애, 「해방기 역사서상의 탈/식민성과 新生 아시아의 상상—金東仁을 중심으로」, 『동아시아문화연구』 81, 2020.

『中等歴史1』（1944）

| 序説：皇国と東亜及び世界 | |
|--------------|--------------|
| 前編 | 後編 |
| 1. 古代のアジア | 1. 上古時代の欧州 |
| 2. アジア諸民族の交渉 | 2. 欧州社会の成立 |
| 3. アジア諸文化の興亜 | 3. 欧州の転換 |
| 4. アジア諸民族の活躍 | 4. 近世諸外国家の発達 |
| 5. 近世の東亜 | 5. 欧州の革新 |
| | 6. 欧州の世界政策 |

表2

一方、東・西洋史を含んだ1944年度版「中等歴史1」は「表2」の通りである。しかし、このような東・西洋史は日本史を念頭に教えられていた。

『中等歴史1』の序説である「皇国と東亜及び世界」には次のように学習目標と方向が提示されている。

「東亜及び世界」の歴史は、これを東西の二つの部分に分けて、まず前編で皇国以外の大東亜の歴史を学び、次の後編では主に欧米の歴史を学ぶ。さらに両者を密接な関連に基づいて学習する際、東亜の過去と現在は世界の歴史の中での的確に把握され、皇国進展の背景や鮮明さを得ることができる。皇国民は東亜及び世界の歴史を学ぶ時、常にこの学習目的を忘れてはならない³。

これにより、東・西洋史を扱う学習目標が「皇国進展」、すなわち大東亜戦争の背景とその当為性を知ることにあることが確認できる。ここでいう皇国には朝鮮史も含まれる。

歴史教科のこのような三分主義は解放後もそのまま続いた。教授要目以前の緊急措置時期（朴正熙政権期の1972年に改正された憲法（維新憲法）により、大統領に絶大な権限が与えられた）に著された金庠基・金一出・金聖七の『新東洋史』（1948）は、そのような東アジア史の構成をよく示している。冒頭において、叙事・構成に関して次のように提示している。

国史に関する事実はできるだけ相互関係で詳しく叙述し、国史と東洋史の関連性を明らかにしようと努力した⁴。

3 文部省、『中等歴史1』，中等學校教科書株式會社，昭和19年(1944)8月13日，4～9頁．

4 金庠基・金一出・金聖七、『新東洋史』，同志社，1948，巻頭言。

ところが、ここでいう東洋史で日本史は除外されている。東洋史の意義及び範囲を以下のように設定している。

東洋史というのは私たちの隣国である中国を中心に、政治的に、文化的に密接な関係を持つ諸外国と民族の興亡から明らかにするものだ。(国史に関する事実は、ただし隣国と関連を持つものだけに限り取り上げる)

そして東洋史の地理的範囲は大概時代に沿って広がっていくので、一律的に取り上げ難いが、概ねインドから中央アジア東南部に至る線を基準として、その東側に延びている大陸一帯と太平洋方面に散在している色々な島国をこの範囲に入れることができるのだ⁵。

次例を見ると、東洋史教科書であるにもかかわらず、中国史一色で構成されている。そして近代に入ってフランスのベトナム侵略、インドとベトナムの独立運動を叙述している。ただし、日本は「アメリカと日本」「清日戦争」「日露戦争」で簡略に記述されている。また、明朝末期の北虜倭乱に言及し、「東洋の倭乱」という小主題の単元で倭寇と豊臣秀吉を東洋の三国を揺るがした張本人として叙述している。日本の前近代を含む通史というよりは、日本の侵略に焦点を当て、韓日関係史を中心に叙述しているのである。解放後の脱植民地化の課題の中で歴史学界が大韓民国政府樹立を控え、日本帝国が自らを東洋平和の守護者として作り出した枠組みを破り、日本について東洋平和を破った張本人として記述することにより、歴史叙事の逆転を示している。一方、1948年8月15日に大韓民国政府が樹立した直後の10月、崔南善が著した「中等国史」、「朝鮮本位中等東洋史」などが李光洙の「文章読本」と共に文教部から使用禁止処分を受けた⁶。

もちろん、中国中心の歴史叙述に対する問題意識がなかったわけではない⁷。1949年に出版された『隣国の生活:歴史』の場合、中国の相対化が目立った⁸。しかし、脱植民地という緊急課題のもとで、日本史の比重を高めることはできなかった。

中学校の場合、1年生は「隣国(東洋史)」、2年生は「遠い国(西洋史)」、3年生から「わが国(国史)」を履修するようにした。ただし、この過程で日本史は徹底的に排除された。崔南善の「隣国歴史」は、中国史中心の歴史書に他ならなかった。解放直前の東洋史が日本中心の東洋史だったとすれば、今は中国中心の東洋史に変換したのである。すなわち、日本中心の序列型連帯論に基づく東洋史から、今は中国中心の序列型文化論に基づく東洋史へと変わった⁹。さらに東洋史は高級公務員試験と大学予備試験の筆記試験の選択科目として西洋史と共に試験科目に含まれた¹⁰。

5 金庠基・金一出・金聖七、『新東洋史』、同志社、1948、1頁。

6 「문교부, 전국중등학교 교장회의에서 친일파 교과서 사용금지 등을 지시」, 『조선일보』 1948.10.12. : 「教科書와 風紀取締 등 學制最後決定」, 『朝鮮日報』 1948.10.12.

7 孫晉泰・李海南, 『이웃나라 생활(역사부문)』, 탐구당, 1952, 冒頭。これに関して유용태, 「한국의 동아시아사 인식과 구성: 동양사 연구 60년을 통해서 본 동아시아사」, 『역사교육』 107, 2008, 140~143頁。

8 유용태, 前掲論文, 142~143頁

9 戦時体制期の知識人の東洋談論に関しては尹詳綯, 「1950년대 知識人들의 民族 談論 연구」, 서울대학교 국사학과 박사학위논문, 2013, 36~40頁を参照。

10 「고시위원회, 국가 고등고시 실시예 따른 시행규칙을 마련」 『東亞日報』 1948. 10. 11.

1945年8月までの日本史、東洋史、西洋史という日帝の歴史教育の既存の三分主義を受け継ぎ¹¹、日本が主流だった既存の歴史書の構成から日本を脱落させ、そこに韓国史を代入・配置しただけでなく、東洋平和言説を被侵略者の立場から再確立したのである。その点で、このような叙事構成は日帝が主導した一国中心の歴史叙事を基軸に形成された三分主義が無意識的に継承された結果である。

3. 「中共」言説と二分主義構成の登場： 1949～1964

1949年10月1日、中華人民共和国が建国した。この出来事は日帝の敗亡に劣らず、東アジア史と世界史に多大な影響を及ぼした事件だった。後日、第3次世界大戦を招きかねないいわゆる韓国戦争の起源がここから始まった。もちろん冷戦秩序の登場と深化がこのような戦争の勃発に影響を及ぼした。しかし、韓半島の分断と続く左右対立、そして中国の国共内戦と中国共産党の勝利は冷戦秩序の固着化以上に戦争に大きな影響を及ぼした。特に李承晩政権は、中国を韓国の北進統一を妨げた「中共傀儡」と呼んだ。反共主義と北進統一論に基づく「中共」言説である¹²。

こうして韓国政府の支配層は中国に対する二重意識を堅持し始めた。現在、大陸を占領している「中共」に対しては反共主義に基づいて伝統の中国から分離し、台湾に対しては反共の堡壘として連帯する中で、台湾と伝統の中国を結び付けた¹³。歴史叙事の再構成が空間と時間の分離だったわけである。そして現実存在する中国大陸は歴史と分離したまま台湾として表象される東洋史の空間になっていった。

一方、1950年代に社会科学分野の自由主義系知識人たちが「人類文化」への貢献と「後進性の克服」を強調し始め主流へと浮上した。それは後進的な東洋が文明史的に先進的だった過去と現在の自由建設の中心といえる西洋に学ぶことで後進性を克服し自由主義を実現できるということである¹⁴。社会学者の李相伯は、「西欧化が現代化」と主張するほどであった。もちろん、このような東洋論でも日本一国はやっと後進性を免れた国だと評価している¹⁵。このような議論はアジアの停滞性論につながった。さらに経済学者の裴成龍は、ヴィットフォゲル (Karl August Wittfogel) の影響を受け、「中共」とソ連を東洋的専制政治と規定した。

そして歴史学者の金龍徳は、中国と同様に韓国もこのような国家権力の特性で市民階級が成長できず停滞したと主張した¹⁶。マルクス主義の影響を受けた経済史学者でさえ、アジア的生産様式論を受け入れていた¹⁷。その結果、このような

11 大韓帝国時期、政府は本国史と万国史という二分主義に則って歴史叙事を構成した。これについては 金興洙, 『韓国歴史教育史』, 大韓教科書株式會社, 1992, 46~49頁を参照。

12 金泰雄, 「1950년대 李承晩 政府의 錯綜된 중국 이미지」, 『동북아역사재단 동아시아 역사교과서 비교 분석 국제학술회의발표자료집』, 2022.

13 同上。

14 윤상현, 前掲論文, 91頁。

15 윤상현, 前掲論文, 140~144頁。

16 金龍徳, 「국사의 기본성격-우리 사회의 정체성을 중심으로」, 『思想界』1953年9月号, 53頁。

17 김용섭, 『역사의 오솔길을 가면서-해방 세대 학자의 역사연구 역사강의』, 지식산업사, 2011, 98頁。

東洋的停滞性論は脱植民地論に進むよりは、むしろ韓国改造の必要性（後進性）を力説するための修辞的方法的装置に過ぎなかった。もちろん、後日、中国史研究者の一部では伝統的な中国と現実の中国を連携させ、内在的力量を重視する流れも現れた¹⁸。彼らは中華人民共和国の樹立を近代化の失敗ではなく「中国的近代化」の実現と認識した。

また、このような流れから日本史の内在的な発展を重視することもあった¹⁹。しかし、東洋的専制主義理論が後進性理論と結合して広範囲にわたり影響を及ぼしていたため、このような傾向は「ティーカップの中の微風」に過ぎなかった。特に、自由党政権内部で全体主義的民族主義系列である民青系が排除され、主導権は欧州中心の歴史認識を堅持した自由主義系列に渡された²⁰。このような政局の変動により西欧中心の歴史叙事が主流に浮上し、脱植民地の課題も民族問題の解決よりは経済成長・近代化に重点を置かれ始めた。

このように東洋に対する否定的な言説は、歴史叙事そのものの矛盾を内包しており、東洋史は1955年の中等学校教育課程で独自の教科書として存続できなくなった。もちろん、世界の歴史を統合的に学習してより幅広い歴史の見解を持つようにし、これを土台にわが国の歴史をもう少し客観化して深化、理解するようにしようとする意図によるものであったことは否めない²¹。

しかし、東洋史、すなわち中国史に対する偏見が強く作用した。歴史的文脈は異なるが、大韓帝国期の二分主義に戻ったのである。そのため、中国中心の東洋史は『世界史』に含まれた。さらに東洋史が世界史に編入されたことで西欧中心的観点が深まった²²。もちろん、西欧中心観点は日本による植民地時代以来、堅持されてきた。しかし、植民地時代は日本史中心の東洋史が一方で存続したため、西欧中心の歴史教育を牽制することができた。しかし、東洋史が独自性を喪失したことで、西欧中心の歴史叙事構成が独占するに至った。

分量がそれを端的に示している。東洋史の分量は30%に過ぎないのに対し、西洋史の分量は70%を上回った。このような過度な不均衡は、世界の歴史を統合的に理解し、幅広い歴史の見解を保つという趣旨にも反する。

したがって、西欧中心的観点に基づいた世界史において中国史は下位構成に組み込まれた。もちろん、日本史もこのような世界史叙事の下位に配置された。第1次教育課程の世界史構成における日本史関連の内容は以下の通りである。

3. アジア勢力の膨張とヨーロッパ社会の形成

- (1) イスラム世界はどのように成り立ったのか？
- (2) 唐、宋時代はどうだったのか？
- (3) モンゴルと日本はどのように発展したのか？

18 정문상, 『중공, 자유중국 그리고 중국-냉전시기 한국인의 중국인식』, 해안, 2019.

19 全海宗·閔斗基, 『日本史』, 知文閣, 1964.

20 藤井たけし, 「제1공화국의 지배 이데올로기-반공주의와 그 변용들」, 『역사비평』 83, 2008, 140~142頁.

21 교육과정·교과서연구회編, 『한국교과교육과정의 변천—중학교』, 대한교과서주식회사, 1990, 96~97頁.

22 남한호, 「제1차 교육과정 세계사 서술체제와 내용분석」, 『역사와교육』 22, 2016, 143~145頁.

5. 近世東洋はどうだったのか？

- (1) 明、清の中国はどうだったのか？
- (2) 西南アジアの変動はどうだったのか？
- (3) 西洋勢力はどのようにアジアに侵入したのか？
- (4) 近世日本はどのように変遷したのか？
- (5) 東洋各国の相互関係はどうだったのか？

高校の場合も事情は同様であった。たとえ日本史の分量が中学校に比べ増えたとしても、西洋史中心の世界史の中で、中国史の下位範疇として断片的な時代概観が続いた²³。

それでも、このような自由主義は李承晩大統領の権威主義に対抗して4・19革命をもたらす知的基盤として作用した。ただし、それは後進性論に基づいていたため、韓日国交正常化を控えて再度提起された脱植民地の課題に能動的に対応できなかった。

一方、韓国史内部でも植民史観問題が本格化し始めた。従来、韓国の歴史は日本人学者たちの植民地史観として歪曲・解釈されたものが多かったという認識の下、1958年末に李承晩大統領の指示で国史上の諸問題を検討し、第1集から第6集まで『国史上の諸問題』として発行された²⁴。執筆は古代（檀君朝鮮～新羅）の李弘植、中世（高麗時代）の金庠基、近世前期（朝鮮太祖～宣祖）の申錫鎬、近世後期（光海君～哲宗）の李丙燾、最近世（高宗・8・15解放）の李瑄根である。植民地史観問題を初めて扱った一連の特集である。

しかし、李承晩政権が1960年の政・副大統領選挙を控え野党の言論を制限しようとして、1958年11月に改悪された国家保安法が国会に提出された状態だったという点を考慮すれば、李承晩大統領の植民地史観への問題提起は危機局面を糊塗しようとする政治的な修辞に終わる可能性が高い。当時、野党を代弁した『京郷新聞』は同年12月21日付社説で、新国家保安法闘争について「日本統治の倭政植民政下においても我が民族の自由を回復するために」殺身自殺した愛国憂国之士に従って闘争することを力説した²⁵。また、1950年代末、日本政府が取った在日朝鮮人の帰還の方針とも結びついていた。当時、北朝鮮との体制間競争に突入した李承晩政権としては日本政府のそういった方針を快く思っていなかった²⁶。それでも、李承晩大統領のこのような提案は1950年代の研究成果が乏しく、政治的な雑談に終わってしまった。それでも1965年の韓日国交正常化と前後してこの問題が再び浮上し始めた。

23 이해남, 『고등학교 사회과 세계사』, 1959, 탐구당; 김성근, 『고등 세계사』, 교육사, 1961.

24 국사편찬위원회編, 『諸問題』1, 1959, 1~2頁.

25 「사실「마음의 조국」을 이 땅 위에 성취하자」, 『경향신문』1958.12.21.

26 朴泰均, 「반일을 통한 또 다른 일본되기: 이승만 대통령의 대일인식」 『일본비평』3, 서울대학교 일본연구소, 2010, 106~110頁; 신재준, 「1959년 이승만 정부의 대일통상 중단조치와 미국」 『역사비평』115, 2016, 373~377頁.

4. 韓日関係の新たな模索と韓国史の体系化 問題：1965～1981

1965年の韓日国交正常化は、韓国社会に大きな影響を及ぼした。当時、軍事政権は米国の支持を得て経済開発に必要な資金と技術を誘致することが急務であった。その頃、米国は北方社会主義圏に対抗する親米反共の防波堤を構築するという東北アジア地域の統合戦略を立て、強力な「韓日三角安保体制」を構築しようとした。そのためには韓国に強力な反共政府が必要であり、何より韓日国交正常化が必要だった。米国のこのような北東アジア政策によって日本は東北アジアでの地位が高まり、韓国戦争特需で稼いだ過剰資本を韓日国交正常化で解消することができた。また、軍事政権は米国の支持を得て、経済開発に投入する資金と技術を誘致する機会を得た。軍事政権のこのような対日政策は学界にも影響を及ぼした。

そうして、米国の第3世界への対外政策を支えるロストウの近代化論が大きく影響する一方²⁷、韓国史学界は韓日会談の前後に日本の再登場に警戒心を緩めなかった。1965年7月9日、韓国史学会の代表幹事が中心となって韓日会談反対声明を発表した。それに続き、様々な歴史関連学会で韓日協定の調印を白紙に戻すことを政府に促した。韓日協定は互惠平等の原則に立っていないと釘を刺した²⁸。その結果、民族問題に対する認識が向上し、国文学、国史学の独自性に対する関心が高まった。当時、西洋史中心の世界文化史が大学の教養必修科目に指定され主流を占めている中で、韓国史研究者の養成が緊急課題として提起された²⁹。

特に、歴史教育の現場で第2次教育課程によって韓国史と世界史を合わせて教えることに対する反発も少なくなかった³⁰。統合社会の原理により、社会教科の中で国史と世界史を統合させただけでなく、世界史の分量を大幅に縮小したためである。特に西洋史中心の世界史が国史に加わる形であったため、中国史はもちろん、日本史もそのような影響を免れなかった。「近世世界の生活」は60ページに過ぎない中で、中国と日本はわずか6ページに過ぎなかった³¹。その中では明の興亡、明の文化、清の統一観の発展、清の文化、インドの国内対立、日本の幕府政治、日本の明治維新が含まれた。

一方、韓国史学の主流が依然として植民地史観によって体系化されたという主張が相次いで提起された³²。そして1967年12月、韓国史研究会が発足した。その設立趣旨では「韓国史を科学的に研究し、これをさらに発展させることで韓国史の正しい体系を整え、同時に韓国史が世界史の一員としてその正当な位置を占め

27 朴泰均, 「ロストウ 제3세계 근대화론과 한국」, 『역사비평』 66, 2004, 156~159頁; Michael E. Latham, 권혁은 외, 『근대화라는 이데올로기』, 그린비, 2021, 95~97頁.

28 「역사연구 역사학회 한국사학회 비준반대성명」, 『동아일보』 1965.7.10.

29 金容燮, 『역사의 오솔길을 가면서-해방 세대 학자의 역사연구 역사강의』, 지식산업사, 2011, 578~582頁.

30 康宇哲ほか, 「지상좌담 개정된 교육과정과 역사교육의 제문제」, 『역사교육』 9, 1966, 167~169頁.

31 박성봉ほか, 『새로운 사회』, 홍지사, 1970.

32 金哲埈, 「국사교과서는 바뀌어야 한다」, 『새한신문』 1968.11.11.

るようにすること」とうたわれている³³。続いて1969年12月、李基白、李佑成、韓祐勳、金容燮が文教部に「中・高等学校の国史教育改善のための基本方向」を研究報告書として提出し国史教育の改善を力説した³⁴。これは韓国史が世界史の下位範疇ではなく、独自分野としての自己への模索を始めたことを示している。そして西洋史中心・中国史副中心の世界史とともに独自の韓国史という両軸を中心に成立した。

しかし、歴史叙事の一軸を成した韓国史は1968年12月「国民教育顕彰」の宣布と1972年10月の維新体制の起点を前後に民族主体性の確立を掲げて変質し始めた。韓国史は社会科から独立したが、世界史は依然として社会科に編成された中で、韓国史は政権によって「強要された重視」を受け、国史と世界史の乖離が広がった³⁵。相互連携の余地がますます減ったわけである。

この過程で東洋史研究者を中心に批判の声が高まった。全海宗は、韓日国交正常化を控えて日本史に対する無知と破片化した認識を批判し、1964年に閔斗基とともに『日本史』を出版した。韓国人が初めて著した日本通史であった。全海宗は次のように出版の趣旨を明らかにしている。

古代以来、日本は我が国を通じて大陸の文化を受け入れた。日本との関係で、我々にとって何よりも重要だったのは、壬辰倭乱と韓日合邦以降の日本の植民地政策だろう。しかし、我々は今や苦い過去は過去に戻し、日本を隣国の友好国として新たな関係を築かなければならなくなった。

このように重要な日本の歴史について、我々が何を知っているかを自問する時、常識以上を知っていると答えることはできない。解放されて20年が過ぎたにもかかわらず、まだ日本史を一冊も出していないのは我々の史学界の恥ずかしいことだと言える。もちろん歴史書を著述することは容易なことではないが、日本史を知らなければならないという意欲からこの本を編集するようになった。

最近、韓日国交の問題でいつにも増して日本への関心が高まっている。我々は読者に日本の様々な分野の姿を歴史的に見た上で正しい日本観を持ってもらいたいところだ³⁶。

韓日国交正常化を控え植民地史観の克服問題が提起されているなか、隣国日本の歴史に対する理解が切実であることを力説している。時代区分は「古代日本」～「中世日本」～「近世日本」～「近代日本」～「現代日本」（第一次世界大戦から）で構成されている。日本内部の発展過程に立脚して時代を区分したものである。

さらに、全海宗は「主体性」と「民権性」に対する過度な強調を批判し、東洋

33 韓国史研究會ホームページ <https://www.hanguksa.org/front/introduce/history/view?id=102&page=3>.

34 李基白・李佑成・韓祐勳・金容燮、「중·고등학교 국사교육 개선을 위한 기본방향」, 1969, 문교부연구보고서, 4頁。

35 金泰雄, 『國史教育의 編制와 韓國近代史 探究』, 선인, 2014, 23~25頁。

36 全海宗・閔斗基, 『일본사』, 知文閣, 1964, 1頁。

史と国史の関連性を超え東洋史も一つの知識体系として成り立たなければならないと主張した³⁷。また、閔斗基の場合、東洋社会（中国の場合）の近代化が西欧的衝撃に受動的に引き込まれることで、伝統の断絶を招いた西欧化ではなく、紳士階層が西欧の衝撃と対決し、伝統に基づいて主体的に創造した自生的過程であると主張した³⁸。黄元九の場合、国家政策に呼応する、民族的感情を反映する東洋史学は望ましくなく、日本または中国を偏見なく見ることが出来る歴史的主体性を強調した。しかし、多くの研究者が伝統の断絶ではなく自生的だということに疑問を示した³⁹。

したがって維新体制の下で、歴史叙事は世界史を中心に構成され、世界史は西洋史中心と中国史副中心に固着化した。特に韓国史は、「韓民族の主体的発展史」、「世界史レベルの認識による民族史の特性の把握」など、「民族史観教育」を目指す一般目標とは異なり、学年目標と単元目標では、国難克服の民族精神だけが重視された。そのため、中国史、日本史などの連携性は専ら戦争を題材に行われた⁴⁰。

5. 韓日歴史葛藤と民主化運動の連鎖： 1982～2001

歴史叙事の二元的な構成は1982年、韓日間の歴史問題が起き、新しい局面を迎えた。1986年6月、日本政府が発表した高等学校歴史教科書検定の結果と関連し、韓半島と中国への「侵略」を「進出」に、3・1運動を「暴動」に書き変えるなど、表現が修正され、「3・1運動による韓国人死者が7,000人」という部分が削除されたという内容が日本で報道された⁴¹。

しかし、5・18民主化運動を圧殺しながら政権を掌握した全斗煥政権としては、景気低迷で厳しい状況の中、日本の大規模投資を誘致するため、日本の教科書の歴史歪曲報道を統制した。それは何よりも日本から借款を持ち込まなければならなかったためであった。だが、日本政府は新軍事政権の希望とは異なり、全斗煥政権に「安保経済協力借款」を提供することはできないと通知し、状況が180度変わった。これに対し、新軍部政権は国民の反日感情をテコにし、日本の歴史教科書問題を全面化させた。7月下旬から韓国は中国のマスコミとともに一斉に日本の歴史歪曲問題を批判し始めた。一方で日本政府は、歴史教科書検定は客観的かつ公正に行われ、検定結果が他国との友好関係を害するとは思わないという安易な態度を示した。さらに日本の国土庁長官が「内政干渉」と発言し、事態をさらに悪化させた⁴²。

37 全海宗, 「동양사교육의 문제와 방향」, 『역사교육』 14, 1971.

38 민두기, 「두개의 중국론-역사적 배경과 문제의 초점」, 『세대』 4-7, 1966.7; 金衡鍾, 「故 閔斗基先生の學問的業績」, 『東洋史學研究』 74, 2001; 정문상, 「'中共' 과 '中國' 사이에서 -1950~1970년대 대중매체상의 중국 관계 논설을 통해 보는 한국인의 중국인식」, 『동북아역사논총』 33, 2011, 70頁.

39 「低邊이 없는 東洋史研究「反省과 課題」 심포지움에서」, 『京郷新聞』 1970.3.31.

40 「低邊이 없는 東洋史研究「反省과 課題」 심포지움에서」, 『京郷新聞』 1970.3.31.

41 정재정, 『한일의 역사갈등과 역사대화』, 대한민국역사박물관, 2014, 48頁.

42 「日 교과서 시비는 內政干渉」, 『동아일보』 1982.7.24.

結局、この時期に到来した新冷戦体制によって、米国は韓日間のこのような葛藤が自国の東アジア政策にも悪影響を及ぼすと判断し、米レーガン政権の主導で日本政府は全斗煥政権との密室での妥協を通じて40億ドルの借款を提示した。翌年1月、中曽根首相の訪問時にこの問題に決着をつけた⁴³。これに対し中曽根首相は訪韓中の大統領府での晩餐会（1983年1月11日）で、「韓日両国の間にかつて不幸な歴史があったのは事実であり、我々はこれを厳粛に受け止めなければならない」と述べた。そして全斗煥大統領が1984年9月、日本を訪問した際、中曽根首相は昼食会で、今世紀の一時期に日本が韓国と韓国国民に多大な苦難を与えたことについて深い遺憾を表し、将来このようなことがないよう固く決意する旨、表明した。新軍部政権としては所期の成果を収めたのである。

そして全斗煥政権は中国と違って、反日の旗印を克日の旗印に転換させ、独立記念館はそうして建設された。日本の歴史教科書歪曲と韓国民の反日感情を利用し、自らの政権基盤を強化することができた。日本政府も1982年11月、教科書検定基準に「近隣アジア諸国との近現代史を扱うに当たり、国際理解と国際協力の見地から必要な配慮をすること」という条項を追加した⁴⁴。

さらに新軍部政権は、このように所期の目的を達成するやいなや、日本歴史教科書糾弾討論会を主導した学生たちを反国家団体構成事件に絡めようとした⁴⁵。全斗煥政権が自らの正統性を批判する学生運動を壊滅に追い込もうとしたのだ。しかし、このような妥協は弥縫策に過ぎなかった。したがって、いつでも韓日間の歴史問題は再燃する余地があった。当時、韓国社会は全斗煥政権の弾圧の下で形式上の民主化も実現されていなかったため、国民の要求はまともに表現できなかった。ただし、その後、韓国と日本の間で歴史認識の相違を克服しようとする動きが出るきっかけにはなった。

特に1988年の盧泰愚政権の誕生は、以前の全斗煥政権とは多少異なる局面をもたらした。すなわち、盧政権は新軍部勢力が基盤になっているが、1987年6月の民主化運動で大統領直選制改憲を経て権力を掌握したため、形式上の民主主義への移行を拒否することができなかった。また、冷戦終結に支えられ韓日関係を新たに確立することができた。

1980年代、それまで絶えず提起されてきた日本軍「慰安婦」問題が議論される頃、1990年6月に日本政府が「日本軍は従軍慰安婦問題に関与しなかった」と発表すると、金学順（1924～1997）が1991年8月、女性誌ではなく、新聞やメディアを通じて日本軍慰安婦の実態を暴露した。慰安婦問題は私的な雑談から公共の記憶に浮上したのである。このような暴露は、韓国社会の民主化が相当水準で進められ、人権意識が向上したため可能になった。

これに対し日本政府も1993年、河野洋平官房長官の声明を通じて日本軍が日本軍「慰安婦」募集・配置・移送・管理などに直接・間接的に関与した事実を認

43 차미희, 『한국 중·고등학교의 국사교육-국사과 독립 시기(1974~1894)를 중심으로』, 교육과학사, 2011, 50~52頁.

44 정재정, 『한일의 역사갈등과 역사대화』, 대한민국역사박물관, 2014, 49頁.

45 徐京錫, 『1982년 일본 교과서 四科 공개 토론회를 돌아보며』, 『歷史科 60년사』(서울대학교 사범대학 역사과編), 2007.

めた。このため、金泳三政権は日本軍「慰安婦」の惨状を日本の教科書に記述することで、歴史の教訓にすべきだという考えを明らかにした。このような雰囲気の中で、1997年から日本の全ての中学歴史教科書の記述は1～2行に過ぎないが、日本軍「慰安婦」について記述されるようになった⁴⁶。

もちろん、日本の保守右派勢力は日本軍「慰安婦」の扱いに対し猛烈に反発した。『新しい歴史教科書』はそのように誕生し、韓日間の歴史問題を再燃させる火種となった。それでも2001年10月15日、韓国政府と日本政府は歴史問題に対応する方案の一つとして「韓日歴史共同研究委員会」を設置・運営することに合意した⁴⁷。2002年のサッカー W杯韓日共同開催を控えた時点であった。

6. 韓国の政治的民主化の道程と『東アジア史』の誕生：2002～現在

1998年に金泳三政権が幕を下ろし、金大中政権が発足することにより、南北関係が改善され、韓日関係も新しい局面を迎えた。特に1998年、金大中大統領と小渕恵三首相が発表した「金大中-小渕宣言」は「21世紀新しい韓日パートナーシップ共同宣言」として1965年の韓日関係正常化以後、両国関係を一段と発展させた画期的宣言と評価される。小渕首相は日本の植民地支配で韓国国民に大きな苦痛を与えた事実を受け入れ、「痛切な反省と心からの謝罪」をした。韓日外交史上初めて、歴史に対する日本の反省と謝罪が公式合意文書に明示された。韓国政府はこの宣言を受け、日本の大衆文化の開放に踏み切った。日本映画が輸入されたのもこの時からである。

これに歩調を合わせ、韓日歴史共同委員会は両者間の違いを認識し、相互理解できる論点を絞っていった。特に、自国史を相対化して把握する問題を議論するレベルを越え、韓国と中国、日本で構成される東アジアの歴史を媒介にして自国史と世界史を連結させるレベルへと進んだ⁴⁸。その結果、中国と日本もこのような方向に進めば、共有できる幅が広がるだろうという展望を持つに至った。歴史叙事の再構成問題が前面に浮上したわけである。

その結果、2005年に韓日中共同の東アジア近現代史が誕生した⁴⁹。韓中日3カ国が共同で企画・執筆し、同時に出版する初の東アジア共同の歴史教材である。日本の歴史教科書歪曲に反対する各国の学者、教師、市民運動家らが4年間、膝を突き合わせて単語と文章を綿密に検討し著述したこの本は、19世紀中頃以降、侵略と戦争で染まってきた過去の歴史を深く反省し、平和と人権、民主主義が保障される東アジアの未来を目指す内容になっている。

さらに偏狭な国粹主義から脱皮し、20世紀の侵略と抵抗の歴史に対する東アジア共同の認識を生み出そうとした点が特徴である。特に1930年代に日本が東

46 정재정, 前掲書, 100~111頁。

47 同上, 193~198頁。

48 趙光, 『韓國史學史의 認識과 課題』, 景仁文化社, 2010, 281~283쪽; 정재정, 前掲書, 132~133頁

49 한중일3국공동역사편찬위원회, 『미래를 여는 역사 : 한중일이 함께 만든 동아시아 3국의 근현대사』, 한겨레출판, 2005.

アジアで起こした戦争を扱う章の題名を「日本民衆の加害と被害」、「日本の侵略戦争敗北」などと表記し、このような見地で一貫して歴史を叙述した点が目立つ。終章「東アジアの平和な未来のために」も注目に値する。この章では各国の歴史清算問題、日本軍「慰安婦」問題、日本の政治指導者の靖国神社参拝問題と歴史教科書歪曲問題などを正面から取り上げている。

一方、2003年に中国のいわゆる「東北工程」（訳注：中国が朝鮮半島北部及び東北地域にあった国家の歴史を中国史として編入しようとした政策）をめぐる論争が広がった。2004年、韓国政府は中国政府に公式に抗議したが、中国は東北工程を中断せず、むしろその成果物の大衆化に拍車をかけた⁵⁰。これに対し、韓国政府は2004年3月、高句麗研究財団を設立した。

こうした一連の葛藤は韓日、韓中の関係を越え、東アジア史全体に拡大する結果をもたらした。特に韓国と日本の市民団体が中心となり、自国中心の民族主義的観点から平和と共存という普遍的価値を志向し、議論の外延が広がった。その結果、日本では歴史歪曲教科書の代表として知られた扶桑社教科書の採択率が著しく低くなり、韓国では東アジア史教科書の制作が教育課程改正の中心的なテーマとして浮上した⁵¹。

さらに、盧武鉉政権下でいわゆる「東北アジアバランサー」という概念が提示された。つまり東北アジアを中心に「平和と繁栄の共同体」へと発展していき、その先導的役割を韓国が果たし、不安定かつ不透明なこの地域の葛藤を和解へ、対立を協力へ転化させる過程での韓国の主体的役割を強調したのである。また、脱国家主義に立脚した東アジア言説もともに提示され新たな局面を迎えた⁵²。

また学界でも東アジア史叙述の方法と認識の問題で多くの進展が見られた。1990年代の脱冷戦とポストモダニズムの登場で、国家と民族を越え、ヨーロッパ中心の世界史を相対化させ、省察できる方法及び範疇としての地域史が注目され始めた。東アジア史という地域史が、自国史と世界史の間に位置する中間単位の歴史的思考体系として両者を緊密に結びつけ疎通させることができると判断したためである⁵³。

このような進展は、韓国社会が形式では民主主義を成し遂げ、経済力と軍事力が相当なレベルに達したため、可能になった。特に1965年の韓日国交正常化の時とは異なり、植民地史観を克服するほどの研究の力量が蓄積され、日中の歴史歪曲に対応できたためである。すなわち民主化、経済力、研究成果がこのような東アジア教科書を誕生させた主要因だと言える。このように2007教育課程で東アジア3カ国のうち高校で初めて学習する「東アジア史」科目が誕生した。それは第1次教育課程を経て、いわゆる韓国史-世界史という二分主義が解体され、今や再び三分主義に回帰したことを示している。

しかし、そのような三分主義は民主化の課程で堅持されていた三分主義とは

50 동북아역사재단, 『갈등을 넘어 화해로』, 2006, 34~39頁。

51 지모선, 「<동아시아사> 과목의 신설과 교육과정 개발」, 『역사교육』 128, 2013, 72~73頁。

52 한국동북아지식인연대編, 『동북아공동체를 향하여』, 동아일보사, 2004。

53 白永瑞, 「자국사와 지역사의 소통: 동아시아인의 역사서술의 성향」, 『역사학보』 196, 2007, 105~106頁; 柳鏞泰, 『동아시아사를 보는 눈』, 서울대학교출판문화원, 2017, 68~76頁。

違った。すなわち、後者が既存の植民地史観から脱皮できなかった韓国史、ヨーロッパ中心の西洋史、中国中心の東洋史だったとすれば、前者は植民地史観から脱皮した韓国史、交流と交易中心の世界史、東アジア3国の連携性が強化された東アジア史として確立された。その結果、「東アジア史」科目の教育目標は「東アジア地域で展開された人間活動とそれが残した文化遺産を歴史的に把握し、この地域に対する理解を深め、ひいては地域の共同発展と平和を追求する眼目と姿勢を育む」ことである⁵⁴。特に先史時代から現代まで東アジア人が成し遂げた文化の共通性と相関性を探求し、東アジア地域の発展と平和の定着に能動的に参加できる資質を養うことに主眼が置かれた。もちろん、このような構成方式の世界史教育と東アジア史教育の志向と実際の適用の乖離に対する批判も少なくはない⁵⁵。

それでも韓国の「東アジア史」教科書の出版の前後に、韓国はもちろん中国、日本でも学界と歴史教育の現場レベルでこのような地域史の方法論に基づいて著された多数の東アジア史・韓日関係史の概説書・教材が相次いだ⁵⁶。このような努力は、韓中日三国の歴史叙事の構成から持続的かつ意味のある変化を導き出す基盤になるだろうとみられる。

7. 結 語

現在韓国では、新自由主義の潮流の中で、教育課程が市場の需要によって激しく揺れ動いており、教科目がこれによって明滅するため、「東アジア史」教科書の運命は不透明である。何より、「東アジア史」は「世界史」と共に、学習に投入した時間に比べ、点数が最も低い入試科目としてみなされているため、学生たちから選択されない。これは韓中日三国の将来に暗雲を落とすと言える。相互理解が持続できる制度が確保・維持されない限り、葛藤を越え和解へと進むことは困難である。

何よりも国家間対話を通じた解決が難しい中で、政治が相互理解の幅を広げるどころか狭小になる昨今の事態は非常に憂慮すべきである。したがって、政治的荒波に巻き込まれることなく、近代世界及びグローバル化した世界を主体的に解釈し、相手の歴史を理解するためには、歴史叙事を再構成する作業がそれぞれの国の学界と学界、教育現場と教育現場、市民団体と市民団体の会合と交流、共有を通じて持続的に維持・拡散させる必要がある。そのような努力だけが新しい対話のための踏み台になれるためである⁵⁷。

54 「2007 개정시기 교육과정, 고등학교 동아시아사」, NCIC 국가교육과정 정보센터 홈페이지, 2023. 10.12. 検索。

55 梁豪煥, 「세계사교육 : 변화의 담론과 교과서 서술의 현실」, 『역사교육』 140, 2016; 柳鏞泰, 「동아시아사와 세계사, 왜 무엇을 가르치나? - '농업 패싱' 의 교류사를 묻는다」, 『역사교육』 164, 2022。

56 最近の代表的な成果としては吳炳守編, 『한중 역사교과서 대화 : 근대의 서사와 이데올로기』, 동북아역사재단, 2021; 전국역사교사모임·한국 | 역사교육자협의회·일본, 『마주보는 역사수업 : 한일 교사들의 연대와 교류의 기록』, 휴머니스트, 2023가挙げられる。

57 곤도 다카히로, 박경희 옮김, 『역사교과서의 대화』, 역사비평사, 2006, 7~11頁。

第2セッション
教育

発表 2 (中国)



歴史をめぐる記憶の 戦争と著述の倫理

—20世紀半ばの中国に関する 「歴史の戦い」—

唐 小兵

華東師範大学

[原文は中国語、翻訳：李 恩民（桜美林大学）]

1. 記憶の戦場 — 『大江大海一九四九』を例に—

戦争と革命は20世紀前半の中国の最も重要なテーマであり、戦争と革命の歴史の記述と歴史の記憶は、一つの学術的な命題だけではなく、同時に中国社会がどのように過去の歴史に直面して、さらに記憶領域の紛争と衝突を刺激する導火線となりうる問題である。

歴史の記述には、現実の政治や社会文化への理解が暗に含まれており、歴史の記憶に固有の枠組みを突破しようとする記述は、国民や政府レベルで強い反響や反発を引き起こすことが多い。中国人民解放軍所属作家の張正隆の『雪白血紅』は1980年代末に出版され、ほとんど歴史の中に埋もれていたが、龍應台の『大江大海一九四九』（日本語翻訳版『台湾海峡一九四九』白水社、2012年）などで再び世に知られるようになった。龍應台は作家としての鋭さと文化人としてのアピール力で、半世紀以上前の東北の悲しい過去を、再び現代の華人の感覚の世界に引き戻した。そして、龍應台は次のような疑問を投げかけた。「聞いてほしい。どうしてもわからないことがあるのだ。これほど大規模な戦争暴力でありながら、どうして長春包圍戦は南京大虐殺のように脚光を浴びないのか？ どうして数多くの学術発表がされたり、口述記録が広く残されたり、年に一回は報道キャンペーンがあったり、大小さまざまな記念碑が建ったり、広大で立派な記念館が完成したり、各方面の政治リーダーたちが何かにつけて献花したり、小学生が整列して頭を下げたり、フラッシュを浴びるなか市民が黙禱をささげたり、記念の鐘が毎年鳴り響いたりしないのか？ どうしてこの長春という都市は、レングラードのように国際的知名度のある歴史都市として扱われないのか？ 何度も小説の題材になったり、舞台化されたり、ハリウッドで映画化されたり、あるいはインディーズの監督が記録映画を撮ったり、各国の公共放送が争ってドキュメンタリーを放送したり、結果、ニューヨークやモスクワ、メルボルンの小学生

たちが地名をそらんじるようなことになぜならないのか？ 30万人以上が戦争の名のもとにむざむざ飢死させられたにもかかわらず、どうして長春は海外においてレニングラードほど有名でなく、国内にいたって南京ほど重視されないのか？」¹

これは『大江大海』中のエピソードの一つに過ぎないが、この大ヒット作は主に文献の整理、史跡の探訪、インタビューなどさまざまな形式を通じて、乱世における国軍（訳注：国民党軍）将兵（遠征軍を含む）の運命、特にその後の歴史に意図的に忘れ去られた一面を再現または再構成したものである。

「敗北者」の子（彼女の父・龍槐生は国軍の将兵）として、龍應台は歴史の記述に無視された人々のために、記念すべき位置を取り戻そうとした。「もし誰かが言うように、彼らが戦争の『敗北者』だとするならば、では、時代に踏みつけにされ、汚され、傷つけられたすべての人がそうだ。彼らは『敗北』で教える——本当に追及すべき価値とは何なのか。私の目を見つめて、正直に答えてほしい——戦争に『勝利者』はいるの？ 『敗北者』の子として私は誇りに思う」²。

龍應台は人道主義的な立場と非戦的な立場に立って、すべての戦争の敗北者と被害者に代わって一つの訴えを提起しようとしたが、「本当に求めるべき価値」とは何か、それが現代文明（例えば自由・民主主義・平等などの人権）に基づく普遍的価値なのか、それとも国民国家の独立と富強の追求に参加することによって個人が尊厳を持つという特殊性の内包なのか、龍應台は明確に語っていなかった。さらに、龍應台は内戦時の国共紛争による犠牲と苦難（このような内戦で、戦争の正義と不正義の間に明確な境界線を引くことは難しい）と、抗日戦争期の南京大虐殺、反ファシズム戦争期のレニングラード防衛戦を並置して議論しており、前者の「忘れ去られた」ことを、後者の公共分野や国家レベルの大規模な歴史的記憶に反射させた。このことは異なるタイプの戦争間の差別性を抹消することに等しい。このように「敗北者を誇りに思う」ことは、表面的には「弱者」と「卑怯者」への人道的同情で道徳の頂点に立っているが、実際には家族、血縁、団体のアイデンティティをもって承認の系譜を構築している要素が多く、その中には必ずしも自明ではない思い込みが含まれている。それは、敗北者が自然に正義を代表するということ。

歴史の記憶は親世代のために歴史的「公道」（訳注：公平）を取り返すよう深刻に目指しているようで、世代間の記憶伝達と民族の精神構造を形成している。20世紀半ばの中国の歴史的記憶については、国共双方はともにそれぞれの記憶の宮殿作りに力を入れている。長春包圍戦は、国共双方の記憶の中では、国民党にとっては屈辱的な体験であり、共産党にとっては「無血」の凱旋であるという全く異なる面相を呈している。凱旋には「暗い血の汚れ」が混じっており、歴史の実相を掘り起こすことはできそうにない。

記憶に対応するのは忘却であるが、北京大学歴史学部の羅新教授が言うように、忘却は純粹に「消極的」な心の生活ではない。「忘却の研究が歴史学にもた

1 龍應台『大江大海一九四九』、香港：天地圖書有限公司、2009年版、200頁。日本語翻訳版『台湾海峡一九四九』白水社、2012年、186頁。

2 前掲 龍應台『大江大海一九四九』、扉頁。前掲『台湾海峡一九四九』扉頁。

らす重要な啓示の一つは、新しい目で歴史を見ることである。もともとわれわれが知ることのできる歴史史実は、さまざまな力によって選別され、生き残った断片にすぎず、また膨大な量の史実は、すでにわれわれの記憶庫から遮断され、排斥されている。われわれが知ることのできないものかなりの部分は、先人が後世は知るべきではない、あるいは知るに値しないと考えたものである。われわれが知らない過去は記憶喪失 (amnesia)、あるいは歴史記録の空白と呼ぶこともできるが、この記憶喪失と空白は、ある程度は忘却 (forgetting) によって引き起こされるものであるが、先人たちの積極的な行動の結果でもあり、彼らの期待に沿ったものであるとも言える³。

長春包圍戦、そしてより広範な20世紀半ばの中国の内戦史について、われわれは「記憶」と「忘却」の二重の視点から探知することができる。時には「記憶」と「忘却」は相克的で、一方は強制的に忘却してもう一方は記憶を強化しなければならない。時には「記憶」と「忘却」は相生的で、「不正義の戦争暴力」の忘却を前提に勝利者の記憶を強化する。時には勝者と敗者の両方とも意図的に公共生活の中からいくつかの歴史の痕跡を消して、民衆に「積極的に忘却」させ、一部の歴史の真相を探求させないようにする。当然、民衆と知識人は操り人形ではなく、彼らは時にこの数々の歴史の記憶と忘却によって構築された「存在の網」の中から抜け出し、歴史に対する真実の感覚を復元しようとする。

(1) 高華による評価

龍應台の『大江大海一九四九』は大陸の二人の歴史学者から全く異なる反応を引き起こした。歴史家の高華 (故人) が書いた長編評論は、秀逸な文章で台湾海峡兩岸の1949年前後の大変動を、政治と経済というマクロな視点と歴史上の人物というミクロな視点から分析し、龍應台の記述と結びつけて「悲情の一九四九」の歴史的內包とその後の影響を余すところなく描き出した⁴。高華は、『大江大海一九四九』はイメージが複雑で、場面が壮大である。1949年に200万人の大陸人が海を渡って台湾に移ったころから、第二次世界大戦期の独ソの戦場と南太平洋の戦場に至る。『白色テロ』による『外省人』への残酷な迫害から、『本省人』による『祖国軍』への期待と失望、さらに『アジア孤児』の悲情に至る。家もあり国もあり、個人と家族の変遷によって、時代と国家の大勢が個人の運命に及ぼす影響を反映している。人文的、人道的史観で、壮大な言葉でまとめられた歴史によって、その中から生き生きとした生命を再現し、その意義と価値を求めた」と評価した。高華はさらに、『大江大海』の趣旨は、「普遍的価値観をもって、1949年の国民党政府の大失敗によって引き起こされた国内の一部の人々の大移動、大逃亡を反省し、『時代に踏みにじられ、辱められ、傷つけられたすべての人々に敬意を表する』ことである。龍應台は本書で、イデオロギーの壮大な言葉によって長い間に隠されていた一つ一つの歴史的場面を力強く描写し、

3 羅新「忘却の競争」、『東方早報・上海書評』、2015年3月8日。

4 高華『六十年来の家と国、万千の心配事を誰が訴えるのか——龍應台『大江大海一九四九』を読む』『領導者』総第34巻期、2010年6月。

1949年と結びつく一連の重大な歴史的事件と歴史問題を討論したが、彼女はあの内戦の是非と功罪を直接判断するのではなく、内戦の犠牲者および1949年に台湾に来た人々を重点的に記述し、彼らに深い同情と尊敬を寄せた」と指摘した⁵。高華から見ると、「普遍的価値」がこの本の核心であって、その歴史観は「人文的、人道的史観」である。彼はこのような「小さな人物」の生命物語に焦点を当てた歴史の記述は、政治に主導されたイデオロギー的な記述を解体する有効な方法であることを十分に認めている。

高華によれば、龍應台は「内戦の是非功罪」の価値判断はさておき、ヒューマニズム的な心情をもってすべての戦争の犠牲者と生存者を歴史の記憶の天秤の上に置いて等しく歴史を書いている。しかし、龍應台自身が「敗北者の子供」を誇りにしているとしたら、それはいったい何を意味するのだろうか。龍應台は敗北者の価値、思想、行為を認めているのか、それとも単に戦争の敗北者というだけで同情的な視点を与えられやすいのか。龍應台が言うように、戦争は勝ち負けがないのなら、なぜ彼女が「敗北者の子供」を誇りにするのか。一方で、『大江大海』は人道的な哀れみの感情と「小さな人物」に焦点を当てた歴史叙事の中で歴史の和解を実現しようとしているようだが、他方で、『大江大海』はまたこのように強く切っても切れない家と国の哀しみと国共の両方の中に立ち位置を選んでいる。これでは石を持ち出して自分の足を潰すようなものではなからうか。高華はこの難点について見事な解釈をしている（龍應台本人が同意するかどうかは不明）。「国府は民衆の支持を失い、自分は空中楼阁のようにもろく、最終的には滅亡の運命を免れない。1949年初めに蒋介石の命令で台湾省主席の職を引き継いだ陳誠は、『人民至上、民生第一』を台湾統治の理念とし、『三七五租税引き下げ』（訳注：37.5%の徴税を超えてはいけない）から着手し、社会の基礎を固め、新たな出発を始めた」と宣言した。明らかに、台湾がその後成し遂げた成果と進歩はその失敗と結びついたものであり、龍應台は国民政府の1949年の大逃亡を恥辱に思うことはない。彼女は台湾人が失敗から立ちあがり、また新たな価値を開いたことを誇りに思う」と言う⁶。

（２）楊念群による批判

高華の高い評価と異なり、中国人民大学清史所の楊念群教授は短い文章の中で龍應台の「砲灰の理論」（訳注：大砲の餌食・キャノンダスト、犠牲者となった兵士）という歴史観を厳しく批判した。「1949年の中国内戦を含むすべての戦争は、単なる人道主義の戒めによって理解できるものではない。私は、龍應台という還暦に近い、見識の広い『赤ずきんちゃん』が歴史のジャングルに足を踏み入れた後、彼女と意見が食い違う多くのオオカミおばあちゃんに出会ったに違いないと信じているが、結果的に『赤ずきんちゃん』はあまりにも強すぎて、毎回激しいレトリックでオオカミおばあちゃんをうまく撃ち殺すことができた。そこ

5 注4 (P30) と同じ。

6 同上。

で、南洋島のサンダカン強制収容所で国民党軍の捕虜を虐殺した台湾の監視員や、淮海の戦場で必死に戦って生き残っても飢え死することになる前線の国民党軍、密集的に突撃して死活を顧みなかった解放軍の兵士は、すべて戦争のほこりの中に散った悲しい偶像となり、歴史の偶然によって操作された。民族、境界、海峡をまたぐこれらの壮大な物語は、一世代の人々の『隠忍して口にしない傷』を明らかにし、彼らに血痕を思う存分撒き散らし、そして記憶の血が現代の麻痺した心の中に流し込むようにさせた。踏みにじられ、侮辱されて傷ついた敗北者たちのための武勇伝を書く、もちろん戦争には勝利者などいないという結論になる。交戦という暴力を物事の是非や境界を問わず非難されると、あらゆる戦争の意義が完全に解消され、『砲灰の理論』は人々の涙を一瞬にして引き出し、『正義の理論』で勝敗について書いたものは自然に曖昧になる』⁷。

つまり、楊念群によれば、このような小人物の悲喜離合に訴える歴史の記述は、本質的に無差別な悲しい物語を構築することであり、戦争に身を投じた、あるいは献身した将兵の生命の主体性を完全に解消することであり、戦争に巻き込まれた人たちは全員騙され、あるいは利用された「砲灰」となり、一度戦場で死んだ当事者は、歴史的記憶の領域で「生き返る」形で「生命の意味と価値」の上でもう一度死ぬことになるのである。そして、楊念群は、龍應台が史料を探して歴史の記述を構築する際、「人道的な立場」に反する証拠を自動的に排除し、実際に歴史に入る可能性を失ったのではないかと疑念を提起している。

これは20世紀半ばの中国の歴史が直面する核心的な問題に触れている——各自の意見を主張する個人経験的な記述は果たして歴史の和解を推進するのか、それとも実は歴史の和解を妨げているのか？ 歴史の和解はどうすれば可能になるのか。戦争の傷はどうやって癒すのか。戦争に身を投じた個人の心情や境遇を具体的に理解した上で、個人と時代との出会いを議論できるだろうか。同情的な理解は、批判性や反省力の弱体化を意味するのか。歴史の記憶と歴史の記述は、個人間・各世代間・各政党間の対話と和解の中でどのような役割を果たすべきであり、果たすことができるのだろうか——。

(3) 歴史の記憶の真実性と曖昧性の関係

呉乃徳は二・二八事件を討論した文章で、歴史の記憶の真実性と曖昧性の関係についてこのように言及したことがある——「民族の現在の想像と渴望に共感するために、歴史の記憶は必ず裁断が下されなければならない。そのため『記憶』と『歴史』は常に完全には重ならない。「集団記憶は非歴史的（ahistorical）であり、さらには反歴史的（anti-historical）であり、ある出来事を歴史的に理解することは、その複雑さを理解することであり、離れた立場から、あるいは異なる視角から見ることであり、その道徳の曖昧さを受け入れることである。集団記憶は歴史の中の曖昧さを単純化させ、ひいては消去させる」。

しかし単純化された、ひいては誤った歴史の記憶は、それがどんなに大きな道

7 楊念群「龍應台の砲灰史観の扇情と欠落」、共識網、2013年12月15日。

徳的な教訓と啓発を背負っても明らかに理性的な社会の真実への追求に違反しており、歴史学者、後の世代、特に異なる立場の者からの挑戦を絶えず受けることになるだろう。同時に、曖昧な歴史の記憶は一部の人の情熱に火をつけることはできても、必ず他の人への呼びかけ力を失う。異なる民族群、異なる立場の団体は異なる歴史経験を持っているため、曖昧な歴史は必然的に共通の歴史の記憶を造成することにも成功しない。共通の歴史の記憶は民族形成の重要な条件の一つである。もしかしたら——ただもしかしたら——ある歴史家が強調しているように、『歴史の記憶が学術的な基準に基づいていない限り、記憶に対する私たちの責任はただの抜け殻にすぎない』、と⁸。

龍應台も歴史執筆の限界を意識しているようで、彼女は本の中で告白している。「どんな物事であろうと、その全貌を伝えることは私にはできない……誰も全貌など知ることはできない。ましてや、あれほど大きな国土とあれほど入り組んだ歴史を持ち、好き勝手な解釈と錯綜した真相が溢れ、そしてあまりのスピードに再現もおぼつかない記憶に頼って、何をして『全貌』といえるのか、私にはひどく疑わしい。よしんば『全貌』を知っていたとしても、言葉や文字でどうしたら伝えられるのか。——だから私が伝えられるのは、『以偏概全=ある主観でざっくり掴んだ』歴史の印象だけだ。私の知っている、覚えている、気づいた、感じたこと、これらはどれもひどく個人的な受容でしかなく、また断固として個人的な発信だ」⁹。

呉乃徳が焦点を当てたのは「曖昧な歴史の記憶」と「道徳の曖昧性」で、前者は歴史が裁断され、抑圧され、意図的に誘導され、忘却された後に形成された「漠然とした印象」を指し、後者は人が具体的な歴史の変動の中で実際にはその行動に道徳上の裁断を下すことが難しいことを指している。これに含まれている一つの思い込みは歴史の記述が「全知全能」ではないので、彼自身の道徳、価値と趣味の上で可能な偏向およびこの偏向が招く可能性のある歴史認識と歴史解釈のミスリードに対して、冷静な反省を持つべきであるということである¹⁰。歴史研究の永遠のジレンマは、「すべてを読み解くことができない人間の存在意義の複雑さ」に直面しなければならないと、ベンジャミン・シュウォルツは言った。龍應台は「異なる角度」から歴史を見返そうとし、しかも自分はかなり個人化して「以偏概全、即ちある主観でざっくり掴んだ歴史の印象」を伝送することしかできないことを意識したが、「敗北者」のために痛い歴史を書く気持ちが強すぎ、親世代のための武勇伝を書く気持ちが激しすぎて、彼女は歴史を遡る初心を忘れてしまって、歴史と人間性の複雑さを消してしまった。複雑さへの理解に満ちた文章と記憶ほど、読者を感情的に迅速に巻き込むことは不可能で、大多数の読者は歴史の中から獲得しようとした記憶は往々にして彼の自己投影の共感と感情で、人々が長い歴史の中で獲得しようとしたものは往々にして彼の投影であ

8 呉乃徳『歴史の記憶の中の曖昧と未知』、台北：『思想』第21期、2012年5月。

9 前掲 龍應台『大江大海一九四九』、174頁。前掲『台湾海峡一九四九』、160頁。

10 Timothy Brook 教授も、「歴史研究者は道徳的規範を作ったり、道徳的知識を作ったりすることはできない。歴史研究者の任務は、過去の歴史的参加者や現在の読者を非難するために誤った見解を提示することではなく、ある時とある場所で道徳的規範が生まれた基準や条件を調査して研究することだ」と指摘している。詳しくは Timothy Brook 氏著『秩序の陥落：抗戦初期の江南五城』（潘敏訳）、商務印書館、2015年版、281頁。

る。これが歴史と記憶の間にある永遠の張力である。

呉乃徳が言ったように、「単純化された、ひいては誤った歴史の記憶は、それがどんなに大きな道徳的な教訓と啓発を背負っていても、明らかに理性的な社会の真実への追求に違反しており、歴史学者、後の世代、特に異なる立場の者からの挑戦を絶えず受けることになるだろう。」敗北者である国府軍は、台湾島の本土住民にとっては強い介入者であり、弱者の下に弱者が重ねられ、正義と倫理の線引きが困難になった。前に許績雲らが認めた来台の大陸エリート層が台湾にもたらした積極的な結果は、台湾本土のエリートから見れば、台湾地方の政治と経済エリート層を強く抑圧した政治的圧力である。

筆者はかつて中国大陸の30年前と30年後の「歴史和解」問題を討論した際に、「社会共同体の自己更新と文化伝承にとって、記憶を現すことは必要だが困難なことだ。記憶はもちろん憎しみを扇動するためのものではないが、歴史の記述はさらにそうではない。記憶の多くは一つの民族の自己救済のようなものであり、記述自体も一つの社会集団の傷を絶えず修復する独特な形式になっている」と提起した¹¹。この議題は两岸の知識人、政治家と民衆にとって、似たような重要性と切迫性を持っているので、もっと広く深い視野の中でその価値を掘り下げ、その方法を探り、その効果を反省すべきだと思う。

2. 記憶の倫理 — 『関山奪路』 を例に —

2009年に台湾で出版され（2013年に北京三聯出版から簡体字版が刊行）、知識界と公衆社会で長い間反響を呼んだシリーズ図書である米国に在住する華人作家の王鼎鈞の4部作で構成された回顧録、中でも特に国民党憲兵と解放軍捕虜の視点から1945～1949年の内戦史を描いた『関山奪路』は高華、王奇生ら歴史家から高い評価を得ている。「自分が書いたのは『小さな人物』の回顧録である」と王鼎鈞は強調している。「彼は個人の名利損得ではなく、世事の移り変わりを書いている。彼は激動激変の歴史の時代に、『小さな人物』である自分自身の運命を左右できないことを描こうとした。彼は職業的な鋭敏な観察で、乱世のさまざまな人情世相と一般庶民の日常生活を細かく描写し、具体的な事例をもって自分が数十年間積み重ねてきた経験と悟りを一つ一つ記述し、心を落ち着かせながら話し、扇情も叫びも見せないが、魂に触れている」と王奇生は指摘した¹²。回顧録としての『関山奪路』は歴史の記述の上で何重もの張力を見せて、これらの張力あるいは記述の苦境の存在は、ちょうど著者の記述のレベルを豊かにして、同時にある意味で読者固有の歴史認知の枠組みに対して挑戦している。国共両党の勝敗の原因を探ることから言えば、王鼎鈞は敗北者である国民党とその軍隊に同情していないようで、彼は最も多くの筆を費やして強弱転化の原因を探ろうとした。敗戦した日本と国民党、ソ連軍の三者については、勝利者としての後者に何の意義も認めず、むしろ敗北者の「尊厳」をより多く記憶し、記述することを意

11 唐小兵「歴史の記憶で未来を照らす」、『読書』、2014年第2期。

12 王奇生「真実の歴史は小説よりすばらしい——王鼎鈞回顧録を読む」、『新京報・書評週刊』、2013年3月29日。

図したのではないだろうか。したがって、王鼎鈞の歴史的記憶の価値の基点は、単なる人道主義の論理ではなく（もちろん、全巻を見渡すと、彼は常に弱者・敗北者に対して同情している）、勝利者は王、敗北者は寇（即ち賊）のための覇道の論理ではなく、20世紀半ばの戦争の記憶に直面して、われわれの足場はいったいどこに置くべきなのかという意義ある挑戦を提起している。この戦争は正義と不正義で敵味方を峻別することができるのだろうか。道徳の曖昧さと感情の強さが、こんなにも奇抜に混ざり合って、私たちの理性の堤防を突いているのか。例えば、本の第1部に描かれた抗戦勝利後の「日本の捕虜と居留民」という一節は、敗北者である日本軍がその体面と尊厳を維持し、清潔と秩序を保ち、悲鳴を上げることなければ哀れみを乞うこともない。著者は「いずれにせよ、日本軍人の品性は優秀であり、日本政府は彼らを浪費した」と言うほどだった¹³。それと対照的に、王鼎鈞は国民党軍を否定的に評価した。「戦場の将校は軍権が非常に強い。現地の司令官は敵に協力したとか、作戦に力を尽くさなかったとか、などの名義で多くの人を殺した。にもかかわらず、高級将校は千万人の兵士の投降を自身の手柄として、新しい官位に鞍替えることができた。その部下たちは改編・訓練を経て、銃口の向きを変え、この戦場で死んだか、あの戦場で死んだか、どちらにしても、このような軍人があのような軍人より『優れている』と認めることはできない」¹⁴。敗北者の家族として、日本人女性は物を売ったり、食べ物を売ったりして生活を維持して日本に帰る旅費を稼ぎ、ブローカーの言いなりになって中国軍の将校に性的サービスを提供して日本人男性の尊厳を維持した。

王鼎鈞の歴史の記憶は歴史に直面する時の人の感情の複雑さを十分に示している。侵略と反侵略戦争から言えば、中国の抗戦は当然正義であるが、この正義はその下での中国の軍民のふるまいが正義や倫理にかなったものであることを保証するものではない。敗北者である日本軍とその家族はこの戦争の記憶の中で、同情される弱者ではなく、「弱者の尊厳」を勝利者側に尊重されるべき対象者となったのである。勝利は正義を象徴するものではなく、敗北は屈辱を意味するものではない。王鼎鈞は私たちに問い詰めるべき質問を投げかけた。人に対する理解、態度、感情は民族国家の枠を超えられるのか。私たちは、個を消された国家的アイデンティティの身分で、歴史の中の個々の具体的な個人と真剣に向き合うことができるだろうか。戦争の歴史的記憶は私たちとその時代との間に内在する連帯感を構築することができるだろうか。訴えの史学や「成王敗寇」（勝利者は王となり、敗北者は寇＝賊となる）的な史学を超えられるなら、史学はどのような意味を持つだろうか。敗北者をよく理解し、さらには尊重するこの論理に順応した後、反省と批判は揺らぐ空中楼阁になってしまうのではないか。言い換えれば、交戦双方の当事者の記憶にたどり着くことができる歴史的な目標と道徳的な目標は一体何であるべきなのか。

13 王鼎鈞『関山奪路』、三聯書店、2013年版、78頁。

14 同上。

おわりに

人類学者の王明珂はかつて次のように指摘している。「歴史は一つの声だけではない。多くの異なる時代、異なる社会の人々は、自分の過去を語り、自分の過去を一般化、普遍化させ、現代社会の記憶とし、他人の記憶を抹殺することを競っている。自叙伝、伝記と口述の歴史の中で、私たちが見ることができるよう、一部の人は社会に自分の過去を宣伝することができ、一部の人の過去は社会によって意図的に発掘され、再建されている。これは過去に対する解釈権の争いであり、アイデンティティの争いであり、権力の争いでもある」¹⁵。

20世紀半ばの中国の歴史の記憶に対して、政府主導の歴史の記憶であれ、民間の自発的な回顧録、口述史であれ、あるいは作家・学者の歴史の記述であれ、すべて自身の20世紀半ばの中国に対する歴史理解と認知の枠組みを「一般化、普遍化」させようとしている。しかし、このような記述と記憶の感情的な動機は往々にして人道主義の価値の立場に基づいて、あるいは歴史の成否に対する理性的な反省に基づいて行われたのである。前者は往々にして同情が理性を遮ったとして批判され、後者は理性化された反省が歴史の構造と行動の中で命を失った個人を無にするという理由で非難される。さらに、一部の学者は、この時期についてより多くの個人的な歴史の記憶（例えば、ここ数年大量に出版された回顧録、口述史など）の出現は、個人間・各政党間・各世代間の和解を推進できないばかりか、かえって中国社会をさらに引き裂き、歴史の記憶の価値の共通認識を構築することも困難にさせるだろうと考えている¹⁶。20世紀半ばの中国の歴史的苦難に対する認知と記憶にとって、私たちは政治と戦争の悲劇に対する訴えのレベルに留まることがなく、歴史の深層を深く掘り下げ、波乱万丈の歴史の流れの裏にある潜在的かつ構造的な要素を掘り起こさなければならない。これこそ歴史の記憶と歴史の記述のより高い境地である。歴史の記憶あるいは歴史の記述は、目の不自由な者が群盲象を撫でることと同じ、触ったのはただ「一面的な局部」だけであるが、深刻さと具体性を有する。各歴史の回想者と記述者は自分が「目の不自由な者」（個人の偏見、知識と情報の制限、表現能力と記憶能力の欠如などがある）であることを意識している時、しかも象の全身は1度に完全に撫でることができない時、彼は比較的慎重に、謙虚に自分の歴史の記述に直面することになる。20世紀半ばの中国の歴史の記憶に対して、龍應台の歴史の記述にしても、王鼎鈞の歴史の記憶にしても、現代中国の公共生活の中で歴史資源を導入することによって啓蒙する原動力は確かにあった。ここで特に深く考えるべき課題が挙げられる——価値の啓蒙は歴史の真実を尊重することを前提としなければならないのか？ 歴史と現実を推し量ると、我々は啓蒙と歴史の間に永久的な張力が存在していることに気が付き、この張力と苦境が引き起こした争いひいては衝突もよく現代中国の公共生活の中で大きな波を起こし、人心をかき乱す。おそらく、これこそが私たちがこの時期の歴史を遡って、検討かつ記述する際に注意を扱わなければならない根本的な原因であるだろう。

15 王明珂「自伝、伝記と口述歴史の社会記憶の本質」、台北：『思与言』、34巻第3期、1996年。

16 この部分のヒントは中国社会科学院近代史研究所の李志敏博士との深い討論の中で得たもので謹んで謝意を表す。



日本の歴史教育は 戦争と植民地支配を どう伝えてきたか

—教科書と教育現場から考える—

塩出浩之

京都大学

はじめに

20世紀前半に日本が近隣諸国に対しておこなった戦争と植民地支配が、その後の日本でどう認識されているのかが問われるとき、しばしば歴史教科書が議論の焦点となってきた。1982年には、日本政府による高校日本史教科書の検定について中国・韓国が抗議し、最初の「歴史教科書問題」が発生した¹。また1997年に設立された「新しい歴史教科書をつくる会」（通称「つくる会」）は、従来の歴史教科書が「自虐的」な歴史観を教えていると批判し、みずから歴史教科書を制作して大きな関心を集めた²。

しかし、戦争と植民地支配を歴史教育がどう伝えてきたかと問うならば、歴史教科書を分析するだけでは不十分である。学校教育は教科書だけで成り立つものではなく、教育現場で教員が何をどのように教えているか、子どもたちが何を学ぶかがより重要だからである。歴史教科書には政府の基準（学習指導要領）や検定があるとはいえ、教科書の主な執筆者は歴史学者だが、教育現場には教育者や子供たちの親をはじめ、社会の意向が強い影響を与える。

教科書の次元と教育現場の次元を区別することで、日本の歴史教育の重要な特徴が明らかになる。すなわち、教育現場で近現代史、特に戦争や植民地支配について教えることを回避する傾向が近年まで強かったことである。2022年度から高校で、世界と日本の近現代史を教える「歴史総合」が必修科目として新設されたのは、こうした状況を変える試みといえるが、なお様々な課題を抱えている。

本報告では、まず日本の歴史教科書について、検定などの制度を確認したうえで、近現代史における戦争・植民地支配の記述について概観する。次に日本の歴

1 波多野澄雄『国家と歴史』中央公論新社、2011年。

2 三谷博「日本の歴史教科書の制度と論争構図」（劉傑ほか編『国境を越える歴史認識』東京大学出版会、2006年）。

史教育の現場について、教員が近現代史をどう教えてきたか、子どもたちがそれをどう受けとめてきたかについて、限られた資料からではあるが分析を試みる。最後に、高校の新設科目「歴史総合」について、その意義と課題に触れる。

1. 歴史教科書は戦争と植民地支配をどう伝えてきたか

(1) 教科書検定制度はどう変わってきたか

日本の学校教科書は1903年に国定制度とされたが、敗戦直後の1947年、GHQの占領下で定められた学校教育法で検定制度に改められた。その仕組みは、①民間企業が教科書を制作する、②文部科学省（2001年以前は文部省）がそれらの教科書を検定する、③合格した教科書の中から、学校が用いる教科書が採択される、というものである。①は民間の複数の出版社が、それぞれ大学の歴史学者や中学・高校の教員に執筆を依頼して教科書を製作することを意味する。また③では、一般の公立中学校の場合は複数の自治体ごとに採択地区協議会が組織され、教員などによる調査・研究を経て教科書が採択される³。高校は義務教育課程ではないため、学校ごとに教科書が採択される。

②の検定は、歴史教科書については戦後から今日までの間に運用の仕方がかなり変化してきた。

まず最初の変化は、「家永裁判」を通じて起こった。歴史学者の家永三郎が執筆した高校日本史教科書は、初めて検定を受けた1952年から不合格が続き、1964年には多数の修正を条件に初めて合格とされた。争点の一つは第二次世界大戦であり、家永は教科書で、日本の「無謀な戦争」や「戦場での残虐行為」を批判した。これに対して文部省は、「第二次世界大戦におけるわが国の立場や行為を一方的に批判する」のは「史実を実証的、科学的に理解する」という目標に適さないとの意見を呈した⁴。しかし、当時の検定が「史実」か否かにとどまらず、歴史観や学説、解釈にも及んだことは明白だった⁵。家永は1965年以降、教科書検定は日本国憲法が禁ずる検閲にあたるとして、長期間にわたって法廷で闘った。裁判所は文部省の検定権を認めた上で、個々の検定には恣意性がみられると指摘した。文部省も1977年には、検定への異議申し立て権などを認めた⁶。

検定制度の運用が次に大きく変化したのは、1982年の「歴史教科書問題」による。高校日本史教科書の検定で、日本軍の中国に対する「侵略」という記述が「進出」への書き換えを指示されたという日本マスコミの報道をうけて、中国と韓国は日本に抗議した。中韓両国との関係悪化を懸念した自民党政権は、教科書検定基準に「近隣諸国条項」を追加した。「近隣のアジア諸国との間の近現代の

3 三谷「日本の歴史教科書の制度と論争構図」。

4 家永三郎『一歴史学者の歩み』岩波書店、2003年、教科書検定訴訟を支援する全国連絡会編『家永・教科書裁判 第1部 準備書面編』総合図書、1967年、465～466頁。

5 大槻健・尾山宏・徳武敏夫編『教科書黒書』労働旬報社、1969年、豊田武「歴史教育のあり方」『読売新聞』1960年5月16日（夕刊）。

6 三谷「日本の歴史教科書の制度と論争構図」、波多野『国家と歴史』132～136頁。

歴史的事象の扱いに国際理解と国際協調の見地から必要な配慮がなされていること」を基準の一つとしたのである⁷。

家永裁判と歴史教科書問題は、教科書検定制度に透明化をもたらした。近年では、検定のほとんどは記述内容の裏付けに関する文献調査など、歴史記述の正確さに関する確認であり、歴史観に立ち入らないよう、検定の範囲が意識的に限定されている⁸。

ただし近年では、第三の変化として、教科書の検定基準に「近隣諸国条項」とは異なる趣旨の変更が加えられている。まず2014年には、「近現代の歴史的事象のうち、通説的な見解がない数字などの事項」について、「通説的な見解がないこと」を明示すること、また「誤解」を招く表現を用いないことが定められた⁹。さらに2021年には、「従軍慰安婦」という用語が、朝鮮人慰安婦が日本軍によって「強制連行」されたという「誤解」を招くとされ、「客観的事実」に基づき「慰安婦」が「適切」な用語とされた。また徴用による朝鮮人労働者の動員は、「強制連行」「強制労働」ではなく「徴用」とのみ表記することとされた¹⁰。

このような近年の検定基準の変更も自民党政権下で行われたが、自国の過去を肯定的に描きたいという、日本社会の一部に根強くみられる願望を反映している。ただし、こうした動きも、検定基準の明示的な変更を通じてのみ、そして客観性というレトリックを用いることでのみ、教科書記述への介入が可能になっている。これは家永裁判や歴史教科書問題を経て、教科書検定制度が透明化されたことによるといえる。

(2) 歴史教科書には何が書かれてきたか

歴史教科書は日本の戦争や植民地支配をどのように捉えてきたのだろうか。この報告では主に中学校の教科書について、戦後から近年までの論調を概観する。以下で扱うのは全て、文部省（文科省）の検定に合格した教科書である。

中学校を取り上げる理由は、何よりも、戦後から現在までほとんどの日本人が受けてきた義務教育だからである。高等学校は、戦後当初は進学率が低かった上¹¹、後述するように歴史教育の構成が1994年に大きく変わったため、一貫した

7 文部省は、実際には「侵略」から「進出」への書き換えを強制したわけではなかったが、「侵略」という言葉を避けるよう勧告したことは事実だった。三谷「日本の歴史教科書の制度と論争構図」、波多野『国家と歴史』136～147頁。

8 三谷「日本の歴史教科書の制度と論争構図」、三谷芳幸「歴史教科書と検定の論理」『歴史学研究』第1032号、2023年2月。

9 「教科用図書検定基準の改正」2014年1月（「教科書検定の改善等について」文科省ウェブサイト）。<https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/gaiyou/04060901/1338839.htm>

10 「従軍慰安婦は慰安婦に 教科書検定、閣議決定で出版社が修正 「負の部分の薄める」現場から懸念」『東京新聞』2022年3月30日。
<<https://www.tokyo-np.co.jp/article/168575>>

この変更は以下の二件の閣議決定に基づく。「衆議院議員馬場伸幸君提出「従軍慰安婦」等の表現に関する質問に対する答弁書」2021年4月27日、「衆議院議員馬場伸幸君提出「強制連行」「強制労働」という表現に関する質問に対する答弁書」2021年4月27日。

<https://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_shitsumon.nsf/html/shitsumon/b204097.htm>

<https://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_shitsumon.nsf/html/shitsumon/b204098.htm>

なお徴用とは、国民徴用令（1939年）に基づく強制労働を指す。

11 「学校基本調査 年次統計 進学率（1948年～）」（e-Stat）。

<<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003147040>>

分析が難しい。一方、中学校で教える「歴史」は、原始・古代から現代までの歴史について、世界史を織り交ぜながら主として日本史を学ぶというスタイルが、戦後から今日までほとんど変わっていない。

① 1955年前後

まず、歴史教科書の検定が始まってから間もない1955年前後の教科書を見よう¹²。早くもこの時期には、満洲事変から日中戦争、さらに太平洋戦争への過程とその結果としての敗戦を、全体として過ちとみなす論調が確立していた。

かなりの数の教科書が、満洲事変と日中戦争をはっきり侵略とみなした。また、満洲事変や日中戦争を明確に侵略と記さないものも含めて、多くの教科書は日中戦争が日米の対立をもたらし、太平洋戦争の開戦に至った経緯を分かりやすく説明していた¹³。それは恐らく、日本が敗戦に至った原因を子どもたちに理解させるためだった。ある教科書は「第二次世界大戦と日本」という章の冒頭で、以下のように記した。

1945年8月6日、私たち日本人は、人類がいまだかつて経験したことがないおそろしいめにあった。広島に原子爆弾が投下され、たくさんの罪のない人々がまたたくまに地獄の底へつき落とされた。(中略)二度と同じおそろかなことをくり返さないために、わたしたちは戦争の起ったわけをつきとめ、そのもたらしたものをじっくり考えよう。¹⁴

敗戦から10年前後しか経っていない当時の日本社会にとって、子どもたちも含めて、戦争がもたらした被害は生々しい共通体験であった。教科書の執筆者たちはこの共通体験を前提として、日本が侵略戦争という過ちを犯した結果、敗戦という被害がもたらされたのだと説いたのである¹⁵。ただし、当時の教科書が触れた戦争の被害とは、日本人の被害だけだった。これと対応するように、中国への侵略や太平洋戦争を始めた責任を、教科書はほぼ軍部にのみ負わせた¹⁶。

また1955年前後の教科書は、中国侵略や太平洋戦争を過ちとみなす一方、日本が行った植民地支配についてはほとんど何も触れなかった。例外的に、「植民地(台湾・朝鮮)の人々の自由は、常におさえられがちであった」と一言だけ触れた教科書もあるが¹⁷、むしろ韓国併合を「大陸への発展」などと肯定的に評価

12 中学校社会科の歴史分野で検定教科書の使用が始まったのは1952年である。小山常実『歴史教科書の歴史』草思社、2001年、40～41頁。

13 森克己・竹内理三・藤木邦彦編『中学社会 日本と世界 歴史的内容を主とするもの』下、帝国書院、1955年、歴史教育研究会編『世界の動きと日本の歩み』日本書院、1955年、坂本太郎ほか編『中学校社会(歴史的内容を主とするもの)』下、学校図書、1955年、有沢広巳ほか監修『新編新しい社会④』東京書籍、1955年、豊田武ほか監修『中学校の社会科 近代の世界と日本(改訂版)』中教出版、1956年。

14 豊田武ほか監修『中学校の社会科 近代の世界と日本(改訂版)』114頁。

15 1960年代には、こうした記述は生徒が戦後生まれになったことを理由に、文部省の教科書調査官による指示で削除された。大久保佑香里「1946～55年におけるアジア・太平洋戦争の認識と記述」『三田学会雑誌』第108巻第1号、2015年4月、162～163頁。

16 吉田裕は、戦後日本人の戦争観における「被害者意識」と「指導者責任観」の結びつきを指摘している。吉田裕『日本人の戦争観』岩波書店、2005年、56～66頁。

17 小西四郎・家永三郎『社会科 中等歴史』下、三省堂、1954年、150頁。

する教科書が主流だった¹⁸。さらに、ある教科書は次のように述べた。

これまでの領土の四十六パーセントと、海外におけるいろいろの權益を失い、残りのこの狭い領土に、八千万以上の人口が閉じこめられたわが国が、戦争で損害をかけた諸国への賠償の責任を果たしながら、暮らしを立てていかなければならないのですから、わたしたちの将来には、まだまだたくさんの困難が残されているわけです。¹⁹

つまり当時の日本社会は、植民地の放棄を、敗戦がもたらした被害の一部として捉えていた。植民地支配への批判的な見方は、歴史学者にも乏しかったのである。

②1970年前後

次に、日本が高度経済成長を達成しつつあった1970年前後の教科書を見よう。中国侵略や太平洋戦争に関する記述に大きな変化はなく、戦争中の日本人の苦難や被害を大きく扱う点も以前と同様である²⁰。しかし、この時期にはかなりの教科書が、第二次世界大戦で世界各国が受けた被害にも触れるようになった²¹。また、ある教科書が、満洲事変以後に「軍部のやり方を支持する人々も多くなった」ことを指摘したのは、軍部のみに責任を負わせる見方からの変化といえる²²。

この時期の教科書が以前と異なるのは、日本の朝鮮支配に対する扱いである。大多数の教科書は、韓国併合に対する激しい抵抗に触れたり²³、三・一独立運動について触れたりするようになった²⁴。また例外的ではあるが、日本の朝鮮支配に経済的な搾取という面があったことを指摘した教科書²⁵や、戦中の朝鮮人徴用に触れた教科書²⁶もある。こうした変化の背景には、1965年の日韓国交正常化があったとも考えられる。

③1987年

1983年に教科書検定基準に近隣諸国条項が設けられた後の、1987年の教科書

18 歴史教育研究会編『世界の動きと日本の歩み』284～285頁、坂本ほか編『中学校社会(歴史的内容)』下、79頁。

19 森・竹内・藤木編『中学社会 日本と世界』下、256～257頁。「狭くなった日本」という見方は、坂本ほか編『中学校社会(歴史的内容)』下、139～140頁や、有沢ほか監修『新編新しい社会④』158頁にもみられる。

20 川崎庸之ほか『新版 標準中学社会II 歴史』教育出版、1969年、笠原一男ほか『中学校社会 歴史的分野』学校図書、1972年、井上智勇ほか『中学社会(歴史的分野)』大阪書籍、1972年、および次の注に示す教科書。

21 小葉田淳ほか『日本の歴史と世界』清水書院、1971年、281～283頁、竹内理三ほか『中学校社会 歴史最新版』帝国書院、1972年、280～281頁、見玉幸多ほか『中学社会 歴史的分野』日本書籍、1972年、316頁、鵜飼信成ほか『新しい社会 歴史的分野』東京書籍、1972年、276頁。

22 鵜飼ほか『新しい社会 歴史的分野』269頁。

23 鵜飼ほか『新しい社会 歴史的分野』234頁、川崎ほか『新版 標準中学社会II 歴史』248頁、小葉田ほか『日本の歴史と世界』237頁、笠原ほか『中学社会 歴史的分野』213頁、見玉ほか『中学社会 歴史的分野』260頁。

24 川崎ほか『新版 標準中学社会II 歴史』278～279頁、小葉田ほか『日本の歴史と世界』261頁、竹内ほか『中学校社会 歴史最新版』262頁、笠原ほか『中学社会 歴史的分野』234頁、井上ほか『中学社会(歴史的分野)』274頁、見玉ほか『中学社会 歴史的分野』289頁(脚注)。

25 笠原ほか『中学社会 歴史的分野』213頁。

26 見玉ほか『中学社会 歴史的分野』315頁。

をみよう。ほとんどの教科書は、日中戦争・太平洋戦争について日本人の被害だけでなく、アジアへの加害という側面をはっきり記すようになった²⁷。南京事件（南京大虐殺）や朝鮮人・中国人強制連行についてほとんどの教科書が触れ²⁸、また多くの教科書は東南アジア占領による現地の被害と抵抗や²⁹、台湾人・朝鮮人の徴兵³⁰にも触れた。このように戦時下の加害には植民地における動員が含まれるが、植民地支配それ自体についても説明が増えた。特に植民地支配下の朝鮮における同化政策や民族差別、さらに戦時下での創氏改名や神社参拝などいわゆる皇民化政策について、多くの教科書が触れるようになった³¹。

以上の変化は、単に近隣諸国条項の影響というだけではないだろう。日本と近隣諸国との交流が深まる中で、歴史研究の進展と相まって、日本人の戦争被害にのみ目を向けさせるような教科書叙述が見直され、よりバランスの取れた叙述に変わってきたのだと考えられる。

④ 2000年代以降

近年の教科書記述に関しては、特にシェアの大きい二冊のみを取り上げる。第一に満洲事変以降の中国侵略、および日中戦争と太平洋戦争の関係について分かりやすく説明している点、第二に日本人の戦争被害だけでなくアジアにおける加害にも力点を置いている点、第三に植民地への同化や差別、皇民化政策について触れている点など、二冊の教科書は1987年の時点で多くの教科書にみられた論調の延長上にある³²。

27 報告者と視点は異なるが、小山『歴史教科書の歴史』も中学歴史教科書の時系列的分析から同様の見解を示している。

28 川田侃ほか『新編 新しい社会(歴史)』東京書籍、1987年、時野谷勝ほか『中学社会(歴史的分野)』大阪書籍、1987年、石川忠雄ほか『中学校社会 歴史的分野』学校図書、1987年、護雅夫ほか『日本の歴史と世界』清水書院、1987年、児玉幸多ほか『中学社会 歴史的分野』日本書籍、1987年、野村正七ほか『新訂 中学社会 歴史的分野』教育出版、1987年。

29 川田ほか編『新編 新しい社会(歴史)』、時野谷ほか『中学社会(歴史的分野)』、護ほか『日本の歴史と世界』、児玉ほか『中学社会 歴史的分野』、野村ほか『新訂 中学社会 歴史的分野』。

30 時野谷ほか『中学社会(歴史的分野)』、石川ほか『中学校社会 歴史的分野』、児玉ほか『中学社会 歴史的分野』、野村ほか『新訂 中学社会 歴史的分野』。

31 川田ほか編『新編 新しい社会(歴史)』、時野谷ほか『中学社会(歴史的分野)』、護ほか『日本の歴史と世界』、野村ほか『新訂 中学社会 歴史的分野』。

32 五味文彦ほか『新編新しい社会 歴史』東京書籍、2006年、坂上康俊ほか編『新編新しい社会 歴史』東京書籍、2017年、矢ヶ崎典隆ほか『新しい社会 歴史』東京書籍、2021年、黒田日出男ほか『社会科 中学生の歴史』帝国書院、2004年、同2017年、同2021年。2021年には東京書籍が52.5%、帝国書院が25.2%のシェアを占め、3位の教育出版は11.4%である(「21年度中学校教科書採択状況」『内外教育』2021年2月2日)。

なお、ここで「新しい歴史教科書をつくる会」の教科書や同様の立場をとる教科書を取り上げないのは、シェアが極めて小さいからである。「つくる会」が執筆した扶桑社の歴史教科書は検定に合格した2001年から最終版の2010年まで、採択率は1%に達しなかった。その後、「つくる会」を退会したメンバーが執筆した育鵬社の歴史教科書は、2010年代に3~6%台の採択率を有したが、2021年以降は1.0~1.1%に激減した。現在の「つくる会」が執筆する自由社の歴史教科書の年間需要数は数百部で、採択率は0.0%である。三谷「日本の歴史教科書の制度と論争構図」、「扶桑社歴史教科書シェア0.4%」『朝日新聞』2005年10月6日(朝刊)、「育鵬社の教科書、シェア伸ばす」『朝日新聞』2011年11月2日(朝刊)、「歴史の教科書、育鵬社が増加」『朝日新聞』2015年10月31日(朝刊)、「19年度中学校教科書採択状況」『内外教育』2019年1月29日、「21年度中学校教科書採択状況」『内外教育』2021年2月2日、「22年度中学校教科書需要数」『内外教育』2022年2月1日、「23年度中学校教科書需要数」『内外教育』2023年1月24日。

2. 教育現場は戦争と植民地支配を どう伝えてきたか

(1) 戦後～1990年前後

教育現場に焦点をあてると、日本の歴史教育は教科書記述とは全く異なる様相が見えてくる。1962年、ある高校生は新聞への投書で、中学でも高校でも歴史の授業は「古代や中世ばかりくわしく」、第一次世界大戦以降のことは習わないと指摘し、「与えられた教科書は完全に終えるべきだ」と不満を述べた。これに対して、ある中学校の教員は、授業時間が足りないので現代史を教えられないのだと答え、また「日本の教師は小学、中学、高校、大学を通じて、現代史教育をほとんどうけていないことにもよる」と説明した³³。驚くべきことに、1990年頃にも、この傾向はほとんど変わっていなかった³⁴。

つまり歴史の授業は、原始・古代から始まって近現代は時間切れで終わるといふ傾向が戦後、長らく続いてきた。戦争や植民地支配について歴史教科書に何が書いてあろうと、教育現場ではほとんど扱われないことが一般的だったのである。

前近代史にける時間を減らしたり、近現代史を先に教えたりすることも不可能ではないので、授業時間が足りないという事情は一面に過ぎない。むしろ教科書の順序や時間切れという正当化しやすい理由があったため、近現代史、特に戦争や植民地支配に関する歴史が半ば無自覚に回避されたのである。その大きな要因は恐らく日本社会、特に親の世代の歴史認識にあった。

1971年、中学校教員の本多公栄は歴史の授業で太平洋戦争を取りあげた。その最後に、本多は「アジアの各国の教科書で太平洋戦争がどう書かれているか」を紹介した資料を生徒に読ませ、「アジアの中学生の友への手紙」を書かせた。生徒たちは「日本が戦争中にアジアの国々で犯した残虐行為」に衝撃をうけ、「私たちの使用している教科書とまったくちがう」ことにも驚いた。しかし、生徒たちの「手紙」をまとめた文集を読んだ親たちは、異なる反応を示した。

(母親 A) 攻めていって、ひどいことをしたという話だけでは片手落ち（不公平）じゃないかしら。この本（文集）には、私たちのことが書かれてないわね。

(母親 B) 戦争において多くの犠牲者がでている。私の家でも戦死者を出し

33 近藤克栄「中途半端な歴史の授業」『読売新聞』1962年4月6日（朝刊）、青木幸寿「現代史教育を充実させよう」『読売新聞』1962年4月16日（朝刊）、小野ワキ「現代歴史もくわしく教えて」『読売新聞』1967年4月3日（朝刊）や、三谷博「歴史教科書問題 序論」（同編『リーディングス日本の教育と社会6 歴史教科書問題』日本図書センター、2007年）10頁にある1960年代後半の回想も同様。

34 那須隆志「歴史の授業は、まず現代から（声）」『朝日新聞』1988年12月11日（朝刊）、「不幸な時期」どう伝える？ 注目集まる日韓歴史教育」『朝日新聞』1990年6月2日（朝刊）、森田定治「近現代史」は教師自身が苦手 歴史をどう学ぶか（声）」『朝日新聞』1990年6月9日（朝刊）、古宮紀子「近・現代史の授業増やして」『読売新聞』1990年12月13日（朝刊）、「高校の日本史教育は今 近現代に重点置けず」『朝日新聞』1991年2月10日（朝刊）、荒川理英「高校の「歴史」、近代から始めては（声）」『朝日新聞』1994年7月15日（朝刊）、「50年目のはちがつ」知るごと、こそ...戦争を教える授業、まだ不十分/愛知」『朝日新聞』1995年8月29日。

ている。あの本からすると、本当の犬死のようで心外である。

(母親 C) なに事も目かくしさせられ、よい事だけを聞かされていた私たちの同年代の時を身ぶるいする思いで考えさせられました。

(父親 A) 軍隊において命令一下（ひとたび命令が出たら）命をはって^(犠)あげんできたことが、ばかげたこと、残酷なことの^(言)一こと^(犠)でかたづけられてしまっているのは、非常に心外である。

(父親 B) 悪いのは軍閥・財閥であって、決して日本兵が全部悪者ということはありません。召集された平凡な一市民が現地人に悪いことをする訳がありません。一言弁解を。

(父親 C) 戦争という事じたいは悪いことだから、今の若い世代達が当時の者達を非難するのもわかるが、その当時、戦争に追い込まれていった若者たちの気持ちも考えてもらいたいと同時に、戦争に追い込まれて行った時代の経過をもうすこし考えてもらいたい。³⁵

当時の親の世代は、兵士としてアジア太平洋の各地で戦った者やその家族、また戦争末期にアメリカ軍の空襲などで被害を受けた人々が中心だった。中国侵略や太平洋戦争を正当化する主張はほとんどみられず、戦争は悪だという共通認識はあった。しかし彼らが抱いていた戦争観は、戦争で日本は被害を受けた、また戦争は国家権力に強いられたいというものだった。元兵士たちも軍上層部や軍隊組織への反発を通じて、被害者意識をもっていた。日本が侵略者であり加害者だったこと、そして一般の兵士たちが戦地や占領地で加害や残虐行為に加担したことは、当時の親世代にとっては向き合いたくない過去だったのである³⁶。

もちろん教員たちも親と同じ世代だったため、本多のような教員は例外だった。本多の授業について学んだ教員たちは、自分の学校では「(戦争に) ^(犠)ふれないうムード」があるので、同じように教えたくても難しいとコメントした。本多によれば、戦争の被害は「親の体験」なので教えやすいが、加害の側面は「生々しい」ので教えにくく、また最も難しいのは戦争の原因を教えることだった。多くの学校では、戦争について教える場合も、親や教員の被害体験に基づいて戦争はしてはならないと教えるにとどまった³⁷。

このため子どもたちも、家族との会話や学校教育、あるいはメディアなどを通じて、被害者としての戦争観を継承した。1980年代末、ある高校教員が日本史の授業で、日本の戦争や植民地支配について生徒に発表させたところ、「今までは第二次世界大戦で日本が一番被害をうけたと思っていたけれど」、あるいは「原爆の被害でかわいそうな国なんだと日本のことを思っていました」といった

35 本多公栄『ぼくらの太平洋戦争』1973年(岩本努ほか編『本多公栄著作集』第1巻、ルック、1994年)。本多は1933年生まれ。

36 橋本明子(山岡由美訳)『日本の長い戦後』みすず書房、2017年、第2章、吉田裕『兵士たちの戦後史』岩波書店、2020年。なお1972年の世論調査によれば、日中戦争は「やむを得なかった」との回答が46.6%で、「悪いことをしたと思う」は26.4%にとどまった(吉田『兵士たちの戦後史』210～211頁)。

37 「敗戦三十年座談会・戦争と社会科教育」1975年(岩本ほか編『本多公栄著作集』第1巻)321～327、342～343頁。

反応が続々と現れたという³⁸。

植民地支配の歴史も、やはり教育現場ではほとんど教えられなかった。1990年にテレビのあるニュース番組では、中学生や高校生にインタビューして、「あなたは、過去に日本が朝鮮に対してなにをしたのか知っていますか」と尋ねた。これに対して、一部には「知らない」と答える者もいたが、多くは「戦争中に、朝鮮人に対してひどい事をした」と答えた。ただし、具体的に何をしたのかと尋ねると「わからない」と答えたという。既に述べたように、1980年代後半には歴史教科書に植民地支配に関する記述が盛り込まれていたが、子どもたちの理解は、戦争中に植民地に対する何らかの加害があったらしいという程度にとどまったのである。このニュースを見た教員も、中学・高校では近現代史をほとんど習わなかったため、大学で学ぶまでは彼らと全く同じだったと告白した³⁹。

ただし、学校教員が近現代史を回避した要因を、すべて親の世代の歴史認識だけに帰することはできない。1984年、ある高校教員は歴史教育に「権威主義的な構造」があると指摘した。歴史教科書の一行の記述の背後には「膨大な史料と研究史」があるが、自分の専門分野以外でそれを把握するのは困難である。ゆえに「数学の教師が教材を理解するようには対象を理解できないまま、学問の権威に依存して結果を伝達する形でしか教えられない」。だから歴史は暗記科目にならざるを得ないと述べたのである。これは、歴史学と歴史教育の間にある断絶を指摘した発言といえよう。この教員は、自身が「戦中から戦後にかけて教育の立つ価値観の大きな転換を経験」したため、「(歴史教育において) 価値観に責任をもつ」のが難しいとも吐露した⁴⁰。

ここから考えると、社会の中に近現代史、特に戦争や植民地支配に関する認識の対立がある中で、教員も生徒も（あるいは親も）納得できるように教育を行うには、歴史教科書に書いてあるというだけでは難しかったのではないだろうか。

(2) 1990年前後～2020年前後

1990年前後には、学校で近現代史を教える気運が高まった。その背景には、中国・韓国との交流の深まりを含むグローバル化の進展、そして冷戦の終結があった。またこの頃には、戦争経験を持たない人々が日本社会の大多数を占めるようになったため、戦争や植民地支配の歴史は学校教育やメディアを通じてでない限り、ほとんど知りえないものとなった⁴¹。

第一に、1987年に原案が作成され、1994年から実施された高校の教育課程では、歴史教育の位置づけが変わった。従来、高校では日本史も世界史も選択科目だったが、グローバル化を意識して世界史が必修科目とされた。また日本史・世

38 波多野淑子「生徒の戦争観をめぐって」『日本史教育研究』第109号、1989年5月。

39 井上岳史「近・現代史を学ぶには」『日本史教育研究』第113号、1990年7月。

40 この教員は近現代史については時間の不足を理由に授業で扱わず、年表形式の資料を配布するにとどめていた。村瀬克己「問題提起 納得して学ぶこと」(日本史教育研究会編『入門・日本史教育』山川出版社、1989年) 66～70頁、渋谷新二「村瀬氏発表・討議報告」同71～75頁。

41 成田龍一『増補「戦争経験」の戦後史』岩波書店、2020年、275頁。

界史とも、近現代中心のA科目と全時代を扱うB科目が設けられた⁴²。ただしA科目を学ぶのは、一般的には大学に進学しない生徒（約半数）か、大学入試に日本史や世界史が要らない生徒だった。

しかし第二に、大学入試でも1990年ごろから、近現代史に関する出題が増え始めた。以前は入試で近現代史の出題が乏しいことが、高校で近現代史を教えない口実に使われてきたが、もはやそれは通用しなくなったのである⁴³。

また第三に、新聞などでも学校教育で近現代史を重視すべきだとする世論が高まった。1990年5月に韓国の盧泰愚大統領が訪日した際、天皇（現・上皇）が宮中での晩餐会で「わが国によって（朝鮮半島に）もたらされた……不幸な時期」に言及したことも、その一つのきっかけとなった⁴⁴。

こうして1990年代半ばにはようやく、戦争や植民地支配を含む近現代史が教育現場で教えられるようになった。そこで教育者は、近現代史をどう「語る」かという難題に直面した。この時期の教員や親にとって、戦争や植民地支配はもはや実際に自らが経験したことではなかったが、他方で既に述べたように、彼ら自身も歴史教育で20世紀の歴史をほとんど学んでいなかった。もちろん「戦争中のこと、戦後の食糧難、父親世代の戦争体験談等ごく自然に聞かされて育った」教員⁴⁵もいたが、そうした継承された記憶は被害者としての戦争観を形成した可能性が高く、歴史教科書とのギャップが大きかった。

ここでは、報告者が2005年と2022年に大学生の協力を得て行ったアンケート調査から、近年の高校での日本近現代史教育について考察する⁴⁶。

まず、高校で日本近現代史をどこまで学んだか聞いた。2005年は、近現代史をほとんど教わっていない学生が16%いた。1920年代までが9%、1930年代までが13%、1945年までが16%、戦後（1950年）までが22%、1990年代までが22%だった。2022年は、近現代を全く教わっていないのは2%のみで、1945年までが9%、戦後（1969年）までが16%、1990年代かそれ以降までが73%だった。この数字からは、高校では近現代史を学ぶように変わってきたように見える。

しかし日本史の授業に対する感想を聞くと、近現代史を教える主な目的が大学入試にあることが分かる。「覚えるだけ」、つまり試験のための暗記科目だったという回答が2005年には33%、2022年には23%を占めた。暗記とは「知識の積みこみ」、言い換えれば「ストーリー」の欠如であった（2022年）。それ以外にも、「入試に必要な範囲を終わらせるために早い進度で授業がされる」という感想や（2022年）、「基本的な知識を勉強したけれどその出来事を論理的に記述する授業が少なかった」という感想もあった（2022年）。原始・古代から始まり、近現代

42 「教育課程の基準の改善について 昭和62年12月29日教育課程審議会最終答申」『教育情報研究』第3巻第4号、1987年。<https://doi.org/10.20694/jjsei.3.4_64>

43 「大学入試、近・現代史の出題が増えてます 歴史の変動反映か」『朝日新聞』1993年2月26日（朝刊）。

44 「「不幸な時期」どう伝える？ 注目集まる日韓歴史教育」『朝日新聞』1990年6月2日（朝刊）。当時の天皇の発言は宮内庁ウェブサイト「主な式典におけるおことば（平成2年）」を参照。<<https://www.kunaicho.go.jp/okotoba/01/okotoba/okotoba-h02e.html>>

45 松本馨「「story日本の歴史 近現代史編」編集中間報告」『日本史教育研究』第146号、1999年7月。

46 2005年は法政大学文学部で「日本現代史」を受講した45名、2022年は関西大学法学部で「日本政治史」を受講した64名の回答である。アンケートへの回答から、これらの学生は高校で「日本史B」を選択したと推定される。

に十分に時間を割かない構成が変わらない中、試験のため暗記事項を列挙することに終始し、「語る」ことは回避しがちなのである。

もちろん近現代史を積極的に「語る」教員もいたが、そうした授業は時に、客観性を欠くと受けとめられた。これをよく示すのが、「近現代史になると、なるべく深く取り上げない授業と先生の思想を強く出した授業へ二極化した印象」だという感想である（2022年）。この背景に戦争や植民地支配をめぐる歴史認識の問題があることは、「日本の良いところも悪いところも教えて自分の国を好きになれるように教えて欲しかった」という感想から推測できる（2005年）⁴⁷。

ただし、教育現場で戦争や植民地支配の歴史について「語る」ことがいまだに難しい一因は、前述した歴史教育の「権威主義的な構造」にもあるだろう。「アイヌのことや沖縄のことや戦争のこともみんなで授業でしらべ……考えることもたくさんあった」という学生は、高校での日本史の授業を「恵まれていた」と振り返った（2005年）。戦争や植民地支配のように歴史認識に関わる問題では、生徒が論理的に納得できるような教え方が特に求められるのではないか。

3. 「歴史総合」の試み

2016年に原案が作成され、2018年に告示された学習指導要領によって、2022年に高校で必修科目「歴史総合」が新設され、日本史と世界史を統合し、近現代史を中心に教える科目を、全ての高校生が学ぶことになった⁴⁸。その基礎となった日本学術会議の提言（2014年）によれば、歴史総合の狙いは「若い世代に世界で活躍するのに必要な基礎的素養を与える」こと、特に「近代に日本と近隣との間に生じた問題」について日本人が「ほとんど無知」であるという現状の改善にあった⁴⁹。グローバル化が深まる中、近現代史教育を回避する傾向を是正することが喫緊の課題と認識されたのである。

歴史総合のもう一つの特徴は、資料から情報を読み取ること、そして問いを立て、資料に基づいて考察・議論することを重視する点である。その狙いは、「講義」と「記憶」からなる歴史教育から、「なぜ、どうして」という問いに生徒自身が取り組むことで深い理解を導く歴史教育への転換にある⁵⁰。これは歴史教育の「権威主義的な構造」の是正を図ったものとみることができる。

現在刊行されている歴史総合の教科書の多くは、日本を含む世界の近現代史を扱い、戦争や植民地支配についても様々な国家や民族の視点から捉えている。従来とは異なる歴史教育の理念に忠実に、問いや資料を活用した授業を積極的に促

47 世界史教員の小川幸司は、「もつとも対話が必要な歴史認識問題、つまり慰安婦問題、戦争責任問題、領土問題といったものに対して、教師は教室で扱うことを避けがち」と指摘する。その要因は、こうした問題について授業で「歴史対話をしたとしても、生徒の世界観・価値観がダイレクトに表現され、互いの感情が衝突し合うのではないかと恐れている」ことにあるという。井野瀬久美恵・小川幸司・成田龍一（討議）「転換期の歴史教育/歴史教育の転換」『思想』第1188号、2023年4月、18頁。

48 文部科学省「【地理歴史編】高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説」2018年。<https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2019/11/22/1407073_03_2_2.pdf>

49 日本学術会議史学委員会高校歴史教育に関する分科会「提言 再び高校歴史教育のあり方について」2014年。<<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-22-t193-4.pdf>>

50 文部科学省「【地理歴史編】高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説」、日本学術会議史学委員会高校歴史教育に関する分科会「提言 再び高校歴史教育のあり方について」。

している教科書もある⁵¹。

ただし、教育現場で歴史総合がどう受けとめられるかは、まだ未知数の部分が多い。従来、高校では日本史と世界史の担当教員は別だったため、双方を統合して教えるためには教員側の努力が欠かせない⁵²。問いや資料を活用した歴史教育への転換も、また同様である。加えて、歴史総合は1年間に週2回の授業で18世紀から現代まで扱うため、時間不足が懸念されるが、教育現場からは18世紀や19世紀の記述を充実させて欲しいという要望もあると聞く。つまり近現代史回避の傾向が、いまだに尾を引いている可能性が懸念される。

前途は多難であるが、少なくとも近現代史、特に戦争や植民地支配という過去について日本人が最低限の認識を共有するという方向に向かって、日本の歴史教育は変わってきている。このことは長い目でみれば、歴史研究にも変化をもたらしていくと期待したい。

51 一例として、報告者が執筆に参加した久保文明ほか『現代の歴史総合』（山川出版社）を挙げる。塩出浩之「『現代の歴史総合 みる・読みとく・考える』三つのねらい」『山川歴史PRESS』第3号、2021年8月。
<<https://ywl.jp/view/JVwwE>>

なお歴史総合にも「つくる会」の関係者による明成社の教科書があるが、そのシェアは0.5～0.6%である。「22年度高校教科書採択状況」『内外教育』2022年2月15日、「23年度高等学校教科書採択状況」『内外教育』2023年2月7日。

52 「日本史も世界史も、手探りの教員」『朝日新聞』2022年6月5日（朝刊）、矢野慎一「私の視点 新科目「歴史総合」 教師の意識改革に課題」『朝日新聞』2022年9月2日（朝刊）。

【討論・質疑応答】第2セッション

パネリスト同士の討論・参加者との質疑応答

| | |
|------------|---------------|
| 司会：南 基正 | ソウル大学 |
| 発言：川島啓一 | 同志社中学校・高等学校 |
| (発言順) 田巻 慶 | 芝浦工業大学柏中学高等学校 |
| 金 澁 | ソウル大学 |
| 塩出浩之 | 京都大学 |
| 唐 小兵 | 華東師範大学 |
| 金 泰雄 | ソウル大学 |

[発言は母国語、翻訳：尹在彦（韓国語）、于寧（中国語）]



南基正 第2セッションでは、教育に関して、韓中日それぞれの現在に至るまでの経緯、現状の問題点、こういったことを全て取り上げていただきました。

これから質疑及び討論を行います。思ったより時間にそれほど余裕があるわけではありません。それで本日の発表で簡単には解決されなかった問題、簡単な質問からいくつか受けてみます。ここで問題を解決するのではなく、我々が問題意識として共有していることは何か、本日の内容では扱われていなくても、一度考えてみなければならないことは何か、このような補足的な問題を投げかけると良いでしょう。そして手短にお話しいただければと思います。やはり通訳を介して行われる会話だからです。

要点をどのように正確に述べるかということも、このような討論会を通じて備えるべき品性として、皆さんに考えていただきたいと思います。必ずハンドマイクを使用して母国語でお話しいただき、ご自身の名前と使用言語について先にご説明いただいた上で質問してください。人の名前や地名、または特別にご本人が使う概念などがあれば、漢字でチャットを通じて書いていただければと思います。お一人のご質問は1分以内、コメントは2分以内に制限します。それでは挙

手してお話してください。

実際に教育現場でどんなことを感じたのか、今感じていることや、あるいは本日の発表を聞きながら、ご本人の感想やもう少し一緒に議論してほしいことがあればおっしゃってください。先ほど私とご挨拶を交わされたお二人にマイクをお渡ししたいのですが、まず、川島先生、お願いいたします。

■ 川島啓一 同志社高校の川島啓一と申します。「世界史B」と新しく始まりました「歴史総合」を担当しております。コメントでもよろしいでしょうか。

三谷先生もご指摘されましたように、教科書にはたくさんの歴史的事実が書いてあります。けれども、生徒がそれを知り、「どんな意味を持っているのか」というところまで認識するには、私自身もなかなか実践が難しく、どのようにすべきかと悩んでいるところでもあります。

これまでの歴史科目が全て廃止され、2022年度から新しく「歴史総合」、「世界史探究」、「日本史探究」へとすべてが一新しまして、現場では非常に混乱しております。

ちょうど2～3日前に、私と三谷先生も活動されております高大連携歴史教育研究会で大会がありましたが、私たちも歴史総合をどのように進めていくべきかという悩みを、ちょうど語り合ったところです。やはり加害の歴史、被害の歴史を重層的に、たくさんの声を聞きながら学習するのは非常に難しい現状だと感じております。また、そのような議論をさせてもらえたらありがたいと思っております。短いですが以上です。

■ 田巻慶 芝浦工業大学柏中学高等学校から参りました田巻慶と申します。本日は貴重なご報告ありがとうございます。私も「歴史総合」という新しい科目を指導して一年が経ちました。そのことで少しコメントさせていただきます。

以前は古代から現代までという時代区分、通史で区切られていましたが、「歴史総合」に変わって主題で区切られるようになったというのが非常に画期的だと思っております。具体的に申しますと近代化というテーマ、また大衆化というテーマ、そしてグローバル化というテーマなどです。一応時代として17、18世紀ごろから現代まで、少し時系列は意識しているのですが、主題で区切られることにより、非常に対話をしやすくなったように思います。

ただ、一方で、主題で区切られているために、同じ時代の話が何回か出てきます。行きつ戻りつしながら学ぶこととなりますので、生徒からすると、今どの時代のどの地域のことを勉強しているのか、少し混乱するという声も聞こえます。その辺はこれから指導する側が勉強するところかと思えます。

また、「歴史総合」は非常に史料を意識していて、先生が何を話すかではなく、生徒が史料から何かを読み取って教師と対話したり、生徒同士で対話したりするところが重視されています。今回のフォーラムではいろいろな史料、しかも外国語を翻訳した史料も提供していただいて、教材を作る視点をたくさんいただきました。そういったものがこれからも蓄積されていくでしょうし、自分はそれを教材化する形で還元したいと考えています。

■ 南基正 私が発表者の皆さんに申し上げたいことは、今現場では史料を中心に教育が行われているということでしたが、韓国や中国の場合は、それがどのように行われているのか、もしご存知でしたらご説明ください。もう一つは、韓国での東アジア史の試みというのも、この「歴史総合」と発想が似ている部分があったのではないかと思います。2000年代に入って1990年代以降、韓国での東アジア史というのも当時の韓国で流行した言葉で、「グローバル化」、「地球化」といった脱冷戦以後、韓国人にとって非常に広がった世界に適應する一つの過程でもあったと思われま

す。そういう発想からこういうものが出てくることにはポジティブな意味もありますが、韓国の場合は若干否定的な意味も確認できるかもしれないということも考えていただき、中国の場合はそういう試みや発想があったのか、教育現場で本日の発表者でなくてもこの点についてご存じの方がいらっしゃれば、紹介していただければと思います。

質問やコメント、または問題提起があれば、もう一名程度発言していただければと思います。お二人いらっしゃいますね。それではお二人から質問していただいて、最後に発表者の三人に発言の機会を差し上げるということで、このセッションは終わりにします。最初に後ろで手を挙げてくださった方、お話しください。

■ フロア1 こんにちは。現在、所属はない状態ですが、韓南大学歴史教育科を卒業して正式な教師ではありませんが、任期付きの教員として高校、中学校、特性化学校（訳注：職業教育中心の高等学校）など、いろいろな学校で歴史を教えてきました。その後、歴史の教育観について懐疑的になり、それを克服できないかと思い、日本の大学院に入学するために去年渡日しました。

こういう話と私の悩みにはある程度一致するところがありますので私の考えを話してみますと、学生たちを教える時に感じる点として、韓国社会には理解を促すより知識を注入する傾向があるようです。試験のために勉強しているので、学生たちはなぜそうなるのかという観点について考えるより何も考えずに受け入れて覚えてしまうことが多くあります。代表的な例をあげれば、「江華島条約」（訳注：1876年、日本と朝鮮間で結ばれた条約）を見ますと、第1条に「朝鮮は独立国だ」というのが出てきますよね。なぜ独立国だと述べられているのか学生たちは理解できないまま受け入れるので、その後継続して発生する「壬午軍乱」や「甲申政変」、「清日戦争」まで、その過程を完全に理解することができず「ただ載っているから重要なんだな」というように考えて進んでしまう場合が多くあります。

そこで、私が申し上げたいのは、大学に入学して歴史を勉強する時によくE・H・カーの話も出て、歴史に関する観点やさまざまな方法について考えることとなりますが、韓国の教育界にとって高校までは内容を理解してもらうことがとても難しく、その過程自体も大変です。教師たちと話す度に出てくることですが、そこまで教えることが現実的には不可能ではないかという話をよくします。

これについて、教育現場に関する日本の話を聞きながら、ほぼ同じような形式で教育をするんだと感じました。そこから抜け出す方法は何があるのか、それを教師たちが真剣に考えて努力して現実に反映しなければならないと思います。

南基正 はい、教育というのが詰め込み式で行われる問題は、もしかしたら東アジア共通の問題のような気がします。ですから、教育の内容よりも方法から出てくる問題というか、それを共有する必要があるという問題提起だと思います。それをどう克服するかという質問をしてくださったようです。では次に金澁先生、お願いします。

金澁 ソウル大学の金澁です。韓国語で質問させていただきます。私は明日も機会がありますが、焦りもあり、先に質問せざるを得ませんでした。本日の唐小兵先生の発表を伺って質問させていただきたいと思います。特に教育に関する問題と関係があります。

私は歴史教育にも関心が高く、日本の総合歴史の方法論についても韓国にいながら、非常に興味深く見ており、実は日本がかなり新しい実験をしていると拍手を送りたいのですが、この実験が成功するためにどうすれば良いかという問題が私には宿題でした。それで今日、現場にいらっしゃる先生方の声を全部聞いていろいろと考えさせられました。唐先生の文章の末尾にあった「価値的啓蒙が必ず歴史的真実性を前提にしなければならないのか」という質問を逆転させ、「歴史的真実性は必ず価値的啓蒙を前提にしなければならないのか」と質問を変えてみたいのです。このように変えると、やはり先生がおっしゃったように歴史と現実を照らし合わせてみると啓蒙と歴史の間には変わらない緊張感があり、この緊張感とジレンマのせいで常に中国、日本、韓国の公共的生活に問題を起こします。

それで、特定の歴史のページを振り返り、再評価して記録する時には必ず慎重に扱わなければならないとおっしゃいましたが、この慎重さは直ぐに歴史教育にも反映されなければならないと思います。もし先生が学生たちと対話する時、この慎重な方法をどのように模索し、教育に適用しようとしているのが気になりましたので、明日もう少し発展した議論をするための前提として質問したいと思います。

南基正 ありがとうございます。おそらくこれも先ほど少しお話したように、教育現場で史料をどのように読むかという問題と繋がっているようです。どれだけ慎重に本人が判断できるように残してくれるかという問題だと思います。

それではここまでフロア参加者からお話をいただきましたので、発表者の3名から最後に2分程、お話を伺いたと思います。少し時間が伸びますが、追加のお時間を差し上げます。金泰雄先生とは明日はご一緒できませんので、3～4分程追加で差し上げますので、最後にお話してください。まず、塩出先生から2分程ずつお話をまとめていただく形で進めたいと思います。

塩出浩之 ありがとうございます。現場の先生方から「歴史総合」をやることの難しさを教えていただきまして、大変参考になりました。私からは報告者2名に対して、感想というか、コメントをしたいと思います。

まず金泰雄先生のご報告について、非常に私と関心が近く、とくに教育現場にも関心をもたれていて、政治や社会と教育の関係ということも非常によくわかっ

て、大変勉強になりました。特にうかがいたいのは、最後に受験の話がありましたけれども、韓国社会の歴史に対するニーズが歴史教育あるいは教科書にどう影響を与えているか、教えていただければと思います。

それから唐小兵先生に対しての質問です。ご報告に非常に感銘を受けました。いくつか印象的なところがあったのですが、なかでもご報告論文の中にあった「傷を癒やす者としての記憶」という言葉が非常に印象的でした。日本でも、私が先ほどお話ししたようにそういう面があるわけです。つまり、記憶というのは、まさに傷を癒やすような形で使われていて、それが教育にもインパクトを与えてきた面があったと思うのです。唐先生には、それが中国での歴史教育にどう影響を及ぼしているかについて教えていただければと思います。

■ 南基正 ありがとうございます。それでは唐先生が反応もしてくださいました。お話しください。

■ 唐小兵 先生方や聴衆の皆さまからご意見をいただき、誠にありがとうございます。まずは金滸先生による価値の啓蒙と歴史の真相の関係に関する質問、つまり歴史の真実が価値の啓蒙の前提なのか、それとも逆なのかという質問にお答えします。啓蒙と歴史の関係という問題について論文を書こうとずっと考えていますが、いろいろあってまだ書けていません。中国本土ではここ20年間、歴史を書き直す、特に民間人が歴史を書くというトレンドが続いています。このトレンドには清末の歴史や民国史に対する再構築などがあります。この再構築には多くの体制外(訳注：大学や研究機関などの国家機構に属しないこと。前述の「民間」ともいう)の歴史学者が存在し、彼らには民主化や普遍的価値への強烈な自主的賛同が見られます。このプロセスで生まれた多くの歴史著述は完全に歴史の真相、つまり多様な史料に基づいた全体的なものではなく、価値への肯定をより重視していることが分かります。この傾向によって、歴史的出来事に対する選出に偏りが生まれやすくなり、このような偏った歴史著述はかえって公共領域で広げようとした前述のような価値を損なう結果になってしまいます。そのため、歴史著述というのは、歴史の真実や真相への持続的な接近であります。完全な形で歴史を伝えることは不可能であるものの、あらゆる手段を通じて伝える努力を尽くさなければなりません。それを踏まえて、複雑な異なる側面が伝えられることが可能になります。そこで、自身が持つ既存の価値観や知識構造、認識の枠組みに対する挑戦も自然に生まれますが、理解や解釈における作用力が形成されることによって、思考や調整が行われ、閉じこもることなく持続的に開放的な状態が保たれます。

これに関連する問題として、先ほど日本の研究者が質問してくれた歴史教育と歴史研究の関係という問題も非常に価値と意義のあるもので、私自身もそれについてずっと考えています。実は2018年初めにアメリカで王鼎鈞先生を訪れた時に、同じ質問をされたのです。歴史研究には先端研究が多く存在するため、このような先端研究による最新の研究成果を直ちに歴史教科書に取り入れ、歴史教育に導入すべきか、それとも歴史研究の成果と教科書の歴史叙述の間にワンクッションを置くべきかという質問でした。後者については、ワンクッションを置か

ないと、歴史研究が進むことに伴い、歴史に対する固有の認識枠組みが常に置き換えられることで、世代によって歴史が全く異なるものになり、常に歴史教科書を書き直さなければならない可能性が生まれます。その結果、民族の文化や文化的共同体の内的安定性や持続性が脅かされることになってしまうかもしれません。

これは非常に重要な問題です。日本の高校で教えている先生から教え方に関する質問がありましたが、それに非常に考えさせられました。私は中国で歴史を教えています。その中では、先に観点を述べることなく、回想録やオーラルヒストリー、日記、手紙、アーカイブ、または民国時代の新聞や雑誌などの多様な史料だけを学生たちに提示し、歴史世界の基本事実に直接に向き合わせようとしています。これについて、日本の溝口雄三教授がご存命の時に歴史の客観性と意図に関する講演を行ったことがあります。その見方に非常に賛同します。歴史研究者や学生が歴史世界に向き合う際に、まずは偏見や偏向といった「杖」を手放すべきで、歴史の海に身を投じて、湧いてきたさまざまなものに触れあうことを通じて、具体的な感覚と理解が生まれ、それによって徐々に形成された歴史認識こそ自分自身のものになると溝口教授が述べました。この意味では、教員として、学生たちが自身の歴史知識の地図を形成できるように、学生たちに歴史を認識・理解する方法を教えることは非常に重要でしょう。

これについて、私もいろいろ考えさせられましたが、特に皆さんのご発言を聞いて、今まで持ってきた歴史認識に関する一つの固定観念を覆しました。中国本土では、私たちが主流言説による制限を受けており、研究成果などのすべてではなく、一部しか公表できない場合があります。一つの国と社会が民主化を実現したら、中国本土の状況とは異なり、その歴史教育にはより高度な柔軟性や多様な空間ができると思っていました。しかし、民主化を実現した韓国と日本の社会においても、過去の歴史の記憶や戦争の記憶に対して、歴史教育は実はまだ同様にさまざまな問題に直面しています。これは単一の次元で解決できるような問題ではありません。そのため、「日本・中国・韓国における国史たちの対話」のような対話形式が絶えず必要となります。ある社会で民主化が実現したからといって、これらの問題が徹底的に解決され、このような対話が必要なくなるということにはなりません。この点は私にとって非常に啓発的で、とても意義があります。

最後に、先ほど日本の高校の歴史の先生たちが言及した日本での「歴史総合」に関する改革について話してみたいと思います。「歴史総合」にはあまり詳しくないのですが、大衆化や東西文化の交流、文明の進化などのテーマで歴史を教えるやり方に、とても興味があります。20年前の出来事ですが、上海の大学院に進学したばかりの時に、上海でも歴史教科書を改革する試みがありました。この教材を作ったのが上海師範大学歴史学部の先生たちで、比較文明と文化や、交流の歴史などの認識枠組みで歴史を記述し、当時はまだ新しかった日常生活史や新文化史なども取り入れました。しかし、この教材は導入されてからたった数年で却下されてしまいました。それは、この教材ではビル・ゲイツが取り上げられる回数が毛沢東より多いというふうに当時の西側のメディアに報道されましたが、この歴史叙述は20世紀の中国歴史の総体的な真実と相違しているだけでなく、中国が革命に別れを告げるようにも暗示していたからです。中国の20世紀は革

命の世紀であり、ビル・ゲイツの世紀ではありません。ここから分かるように、学術研究と政治的言説の間に永久的な緊張関係が存在します。それによって歴史研究者が存在する永久的な意義も表されています。民主化を実現した国家においても、主流の政治的言説と歴史研究の記述の間に緊張関係が依然として存在し続けるからです。

私からの回答は以上となります。

南基正 ありがとうございます。最後に金泰雄先生、お願いします。

金泰雄 まず史料中心の探求学習に関する問題ですが、私も正統な歴史教育研究者や教師ではありませんが、師範大学（訳注：教育学部）を出て、また師範大学に在職しているうちにこの問題に関心を持つようになりました。実際、史料探求学習についての議論はかなり古いです。1950年代、60年代に既に出た議論であり、それを通じて歴史的思考、「ヒストリカル・ソースド・シンキング（historical sourced thinking）」は既に出ていたのですが、依然としてまともに具現化されていないのは入学試験出題方式のためです。なぜなら出題方式が五肢選択型で、一つの正解だけが要求されます。

フランスのようにバカロレア（Baccalauréat）で学生を選抜せずに、一つの正解を要求する現在の五肢選択型の出題方式を固守する限り、史料探求学習は現場では役に立たないわけです。従って、多くの歴史教師が探求授業を実施しても、現実ではその効果が制限されています。もちろん、大学の大多数の教授が現行の歴史教科書を1970年代の国定教科書と似ていると認識していますが、そうではありません。史料探求学習に対する研究が深化し、現場の教師たちの努力で2000年代初めに第7次教育課程が適用されて以来、教科書は大幅に改善されました。しかし、大学入学試験の出題方式が変わらない限り、このような努力も「徒勞無功」です。

それでも、私は師範大学に在職しているので、入学試験だけを責めるわけにはいきません。学生たちが教科書から学ぶことができなくても、教師たちが活用できるよう探求資料を提供し続けています。例えば、文学作品を用いてどのように探求活動をするのか、ポスターをどのように活用するか、また絵画作品と統計資料をどのように歴史教育に適用するのかなどです。そこで弟子たちと一緒に国史探求学習の手引きのような単行本を執筆しました。ところが、この本は一般の学生と教師が広範囲に活用するよりも、ソウル江南区大峙洞の塾街（訳注：塾が密集している地域）でいわゆる「キラー（killer、超高難度）問題」を解く案内書として活用されているそうです。ですから、依然として大学入試が正常な歴史教育を妨げる要因として作用しているのですね。

しかし、大学受験制度を根本的に改善する必要がある一方で、教師や生徒たちに対し絶えずに意味のある学習資料、動機を誘発する読書資料を作り、自己主導的に学習できるように整備しなければなりません。自ら複数の先生が言及する歴史の曖昧性、複雑性を理解し、歴史において扇動のスローガンや政治的手段を探して利用するのではなく、世界の人類と共存する方法を学べるよう、慎重かつ複

雑に思考する能力を育てることに重点を置くべきです。さらに、このような努力はここで終わるのではなく、生涯教育につながるべきだと思います。

もう一つ申し上げたいことは東アジア史の問題です。私は日本の歴史教育の現場で活用されている「歴史総合」の誕生を、非常にポジティブな現象と判断しています。日本の課題がどこにあるかという点、グローバル時代に日本だけが一人孤立するわけにはいかない、隣人と一緒に生きていこうとするならば、学生たちと共に正面から考えるべきではないかという問題意識から始まったと思います。そういう点で、韓国で「東アジア史」の教科書が誕生する文脈に似ていると思います。

しかし、これに対する批判も少なくはありません。明白に批判してはいませんが、韓国の場合、「東アジア史」教科書の叙述の基調が国民国家の形成過程に帰一しているのではないかと、そしてその過程で看過している代表的なケースがマイノリティー、少数民族、移民問題、多文化共生問題ではないかと思います。なぜなら、韓国が近代主権国家へ進む過程や、中国の国民国家の形成過程で、結局これに合致しない多数の要素が排除されているからです。こうした批判は日本の場合にも同様に当てはまると思います。その点で、私がこのような問題を考えながら執筆したのが、最近発表した日帝下の朝鮮に居住していた華僑労働者に関する単行本です。そして、この問題は日本統治下の朝鮮に限らず、今年100周年となる関東大地震問題とも結びついています。この災害を収束させる過程で、朝鮮人虐殺と中国人虐殺が行われたからです。ところが、ここには民族問題だけでなく、階級問題、移民問題も含まれています。そしてこの問題は現在進行中です。

最近では災害問題に関心を持って本を書いています。私の関心と専攻分野が非常に多様なせいで、「あなたの専攻が何か分からない」という方が多いです。私も同意します。しかし、歴史家は自分の専攻の世界に没頭すべきではありませんが、一方では常に世の中と繋がろうと努力しなければならないと思います。移民や災害史の問題に関心を持つ理由がここにあります。特に災害史研究が過度に人類と気候、自然と人類という二項対立の構図に埋没したあまり、歴史的、社会的文脈が見過ごされていると思います。今『サピエンス』を執筆したユヴァル・ノア・ハラリ (Yuval Noah Harari) のアプローチも重要です。歴史的、社会的文脈からアプローチする方法も重視しなければならないと思います。歴史学、歴史教育がそのような役割を果たすだろうと思います。

このような視点から、日本では早くから災害史と災害史教育に関心を持って研究されてきた軌跡を見ながら、私も大学院でこのテーマで講義をしました。今後の災害史教育も韓国と中国、日本と一緒に考えるべきテーマだと思います。現在、中国北京が洪水で沈水し、東京も同様に地震、原発問題などで悩まされていることから、東アジア史の災害史教育を通じてこの問題を解決すべきだと思います。

次に、三つ目の問題が先ほど唐先生が言及されたテーマです。「多重視角」、つまり「multiple perspective」または「multiple point of view」の問題ですが、私はこの問題を国民国家の限界を克服する上で非常に重要な問題だと思います。私自身もそのようなやり方を試みてきました。韓国の場合ではありますが、大韓

帝国評説を執筆しながら、これまで研究者中心の全知的観点に基づいて当時を解釈するのではなく、尹致昊のような開化派（訳注：朝鮮王朝末期、開港に賛成した一派）だけでなく、黄玟などの保守派、外国人、商人など、当代のさまざまな人々の視点を盛り込んだ資料を活用して、当代の視点と多様な視点で物語（narrative）を作りたいと思います。

そのため、読者は歴史家が過去に過度に介入することや、それを現実に召喚して下す過度な解釈や国家主導の解釈から脱し、多様な視点と資料を通じて当時を主体的に眺めることができるよう協力する必要があります。それは結局、読者が政治的扇動に振り回されたり、単純な論理で歴史を裁断したりせず、事実に基づいて、歴史的な文脈を慎重かつ細密に把握しながら、現在の問題を批判的に顧みることです。多重視覚は今後、有効な議論の種になると思います。

さらに、このようなアプローチが歴史教科書にも反映される必要があります。多様な性格と視点を盛り込んだ史料が教科書に収録されれば、学生たちは「aの視点」から「zの視点」まで考慮しながら、史料間の衝突の理由とその地点、歴史的な文脈を考えるでしょう。今日の歴史教育問題だけでなく、教育的、社会的関心にも広がると思います。長々と意見を述べてしまいました。以上です。ありがとうございました。

南基正

ありがとうございます。大学入試が歴史教育の最大の妨げだという発言が印象に残りました。韓国だけでなく、皆そうだと思います。

皆さん、本当に品性を発揮してくださったにもかかわらず、今、昼休みなのに13時近くになってしまいました。本当に申し訳ありません。お話がとても面白くて聞いているうちに、時間管理ができなかったのですが、この時間は問題を解決するより、お互いの話を取り出して距離を確認し、重なっている部分があればその面積を確認しその距離を縮めていく、またはその重なったところから離反していく、そんな瞬間で接点がどこにあるかを確認する時間だったと思われそうです。それを確認した上でこの対話の重要性は何かと申しますと、この場ではなくこの場以外の時間をもっと重要です。

食事の時間または夕食の時間にお互いに接点を確認しながら話を交わすことができる、そんな時間をもっと重要です。これから食事をされながら対話する時間を過ごしていただきたいと思います。お食事を済ませてまたこの会場でお会いしましょう。お疲れ様でした。

第3セッション
メディア

発表 4 (中国)



保身、愛国と屈服

—ある偽満州国の「協力者」の心理状態に対する考察—

江 沛

南開大学

[原文は中国語、翻訳：劉 怡臻（東京語文学院）]

1931年の九・一八事件後、中国東北三省は陥落、偽満州国が成立した。偽軍（傀儡軍）下士官の施明儒は、1937年から1945年までの間に、日記『轍印深深——一個偽満軍官的日記』（ある「満州国」軍官の日記）¹を残している。この日記は、偽満州国において、偽軍将校として裏では抗日の運動をしながらも、大局を変えることができなかつたことに対して、怒り、屈辱、後悔を交えながら、不安から受容、服従へと変容していく過程を示しており、中国東北被占領地区の民衆の心理状態を代表するものである。これは東北被占領地区の民衆の心理状態において代表的な特徴を持っているというのが本論文の主張である。本論文は、歴史心理学の手法を通じて、日本軍の強権下での偽満州国「協力者」の生活・生存状況を十分に考慮したうえで、戦争の圧力による人間性の歪みを解釈するとともに、人間性の脆さと複雑さを強調し、これまで民族国家とされてきた立場から被占領地区の歴史を解釈するという単一の認識パターンを打破しようとするものである。

日中戦争は、中国人にとって間違いなく深い災厄の時代だった。日本軍は14年間にわたって東北地方を占領し、偽満州国を樹立した。外国からの侵略者と新体制を前にして、「関東へ進出」した移民を中心とする東北の人々は、民族感情と現実の生存の狭間におかれたジレンマの中で、心理的矛盾、混乱と疑念など表現しがたい複雑な心境に陥った。

日中戦争に関するいくつかの史実が未だに論争を呼んでいる今日、「協力者」、すなわち売国奴の話題は非常に敏感であり、偽満州の売国奴・偽軍人集団のテーマ研究は、現在の日中戦争史研究の弱点の一つとなっている。本論文の主要な論点は、『轍印深深——一個偽満軍官的日記』（ある「満州国」軍官の日記）は偽満州下級将校の稀有な日記である。それらを歴史心理学と生活史の観点から分

1 施明儒《轍印深深——一個偽満軍官的日記》（1-4巻），吉林省政協文史資料委員会、吉林市データ保管所2011年版，日記の記入は1938年1月1日より始まり、1945年12月31日までとする。（このうち、1944年のデータは散逸している）。

類・整理することで、「協力者」や占領地の人々の日常生活や、当時の民族主義感情、生存欲求、混乱、同調意識などが複雑に絡み合っただけでなく、変化する感情の揺らぎを理解し、日本の中国侵略戦争が占領地の人々に与えた心理的外傷や複雑な影響を考察する。

1. 偽軍将校の姿 —施明儒について—

1931年の九・一八事件後、日本関東軍は中国東北地方の全領土を占領し、東北地方の国民党政府の行政管理組織を破壊し、1932年3月、抵抗戦争が終結する1945年8月まで、擬満州国の樹立を計画した。日本統治時代の14年間、東北地方全体を戦略的な支援地域とするため、日本軍は現地の人々を利用して社会秩序と経済生産を速やかに回復させた。これによって、人民の抵抗を効果的に抑え、アイデンティティ意識を高めるだけでなく、占領軍への軍事供給を保証し、占領の政治的・経済的コストを削減することができた。日本軍はさらに、「協力者」というもう一つの種類の人間の存在も必要としていた。

抵抗戦争の勃発時、抵抗戦争の中期、そして戦後に売国奴問題が扱われた時期によって意味が異なっていた「協力者」、「売国奴」といった用語の具体的な意味合いや拡張について論じるつもりはない。抵抗戦争勃発時、抵抗戦争中期、そして売国奴問題が扱われた戦後において、これらの用語の意味は異なっていた。戦争勃発期と戦後の売国奴問題が扱われた時期では、政治的立場だけでなく、国民感情や道徳的感情の判断も混在しており、非常に複雑である。イギリスの学者であるアンドルー・リグビーは、占領軍に奉仕する動機、目的、精神性によって、協力者を4つのカテゴリーに分類した²。私利私欲のために無条件で協力した裏切り者、占領者のために協力した愛国的裏切り者、自分や家族の生存のために協力した順応者、より広い社会に奉仕するために条件付きで協力した者という4種類である。「協力者」という言葉を定義するならば、彼らは「占領当局の監督と圧力の下で権力を行使し続ける」人々である。政治的な観点から、彼らを典型的な「反逆」の代表と指摘することは誇張だと考えられる。東北陥落の際、完全な反逆者となったのはごく少数の偽満州国の官僚だけで、他の3つのカテゴリーに属する者もいたが、大多数の人々は協力者と抵抗者の中間に位置し、自分たちの生活環境の方を重視していた。

日記の筆者である施明儒は、後者の3つのカテゴリーの代表者の一人と言えるかもしれない。彼は吉林省梨樹出身で、偽満州国の下士官でありながら、自発的に抗日運動に参加している。「1935年、施明儒は22歳のとき、故郷の吉林省麗州から敦化県に渡り、満州国通信隊に参加し、その間に3、4人の親しい友人と連絡を取り、抗日活動の予備組織を立ち上げ始め、『国民党東北亡命抗日救国社』と名付けた。施明儒は国民党の党員ではなく、同会と国民党との間に組織的なつながりはなかった。1937年、組織の同志が2人殺されて亡くなり、救国社

2 安德魯・瑞格比『暴力之后的正义与和解』（アンドルー・リグビー『正義と和解：政治的暴力のあとに』の中文訳）刘成訳、译林出版社（2003）、P23。

は名目だけで存在した。その後、経済的な安定を求めて施明儒は1938年に奉天（瀋陽）の偽満州国士官学校に入学し、愛国青年たちと出会い、1941年に士官学校を卒業した後、吉林市に戻り、偽満州軍の吉林独立通信隊副隊長を務めた。同年5月、4人の若者とともに密かに救国社を復活させ、組織基盤を整え、100人以上の組織に成長させた。1942年、禁じられた満州軍に参加し、吉林市に連絡事務所を設置した。吉林市を拠点に、出未、九台、和田、磐石、敦化、焦河、奉天、鞍山、ハルビンなどに連絡事務所を設置した。施明儒と組織のメンバーは、偽満州軍第一、第二戦隊の艦船を破壊したり、鞍山の昭和製鉄所を爆破したりする計画を立てていたが、「情報漏洩のため失敗に終わった」³という。彼の反日行動は、ほとんどが計画段階でほとんど実行に移されることはなく、日記で日本人や偽善者への不満を吐露するのみである。日常生活では、友人や親戚を訪ねたり、本を買ったり映画を観たり、デートに出かけたりすることに熱心で、抑圧、混乱、従順といった態度が明らかに被占領地青年の特徴である。

施明儒の言動を分析することで、銃声の下での生存脅威が、被占領地の人々のメンタリティ、言動にどのように影響を与えるか、人生の真実は想像以上に複雑である。

2. 生存の苦境 —偽軍になる背景—

第二次世界大戦中のデンマーク史の研究者であるヘンリク・デトレフセンは、占領状態では社会全体が既存の政治環境に適応しなければならず、権力者への融和は「どのような歴史的時代にも常に存在した習慣的な社会行動」⁴であると述べている。国民の大多数は銃撃の脅威のもとでは抵抗する力もなく、生産手段の特殊性から移転は困難であり、生存の危機は沈黙と協力につながった。戦況の圧力の下、中国東北部陥落の際の日本の「協力者」たちを研究することで、私たちは関係者の独特な葛藤、躊躇、混乱、服従を理解することができる。

民族主義的な感情を抱いていた施明儒は、日本軍に協力する道を選ばざるを得なかった。日本人は祖国の支配者であり、戦争は庶民を政治的な変化だけでなく経済的にも苦しめた。明確な抗日、反侵略と愛国心を持っていた施明儒は、1938年に新京（＝長春）に留学し、南嶺に戦果を見に行ったときのことを記録している。途中、九・一八事件でここに駐屯していた兵士たちが、「国賊の過ち」によって、無為に犠牲になり、ふるさとが占領されたことを思い出し、悲劇に嘆いたという。25年間にわたって採掘されてきて、埋蔵量も豊富だった撫順炭鉱が「日本の亡霊の手のひらの上で操られている」のを見て、胸が痛くなった。内モンゴル西県官地鎮に到着した彼は、商店の半分が閉鎖され、生気がない状態を目の当たりにし、なじみがある商店は残っていることについて、「景色が依然としてあるが、周りの人やものが全部変わってしまった」⁵と嘆いた。北部の要塞・

3 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第1巻、P 1

4 Henrik Dethlefsen, Denmark and the German Occupation: Cooperation, Negotiation, or Collaboration? *Scandinavian Journal of History*, 15:3 (1990), pp.198-199

5 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第1巻、P70、P89、P188

佳木斯は「飛躍的に」発展していたが、「日本人と強盗団に圧迫され、人々の生活はうめき声を上げている」⁶状態だという。九・一八事件以前、丙午の街は「市政発展の初期にあり、秩序があり、対岸のソ連と自由に交易し、習慣や文化を交流し、農産物が豊かで、人々は仕事に満足していた」が、今は「街は死んだような静寂に包まれ、シャッターの閉まった店や空き家がある」状態であり、町の荒廃ぶりに悲しみを覚えている⁷。

アンドリュー・リグビーは、「裏切り者は少なくともその犯罪の代価をある程度は支払うべきであり、苦しむ被害者は何らかの補償を受けるに値する」⁸という共通認識があると指摘する。戦争は人々を苦しめる。ナショナリズムによって非難される「協力者」ですら、ある意味では戦争の「犠牲者」なのだ。

経済不況に直面し、施明儒は生きるために仕事を見つける必要があった。東北陥落から数年後、経済は回復したが、人々は依然として悲惨な生活を強いられていた。例えば、スイス時計の部品は貿易の鎖国により交換できなかった。秋林集団に次いでハルビンで2番目に大きい同済ショッピングセンターでは品物が不足していた⁹。結婚写真の撮影をした際に、吉林のすべての写真館が「尺二の板と閃光粉」を1年以上も品切れにしていた¹⁰。その上、価格も高騰しており、トンユールの店では2キロにも満たない冬服の小袋が70元以上もした。同游店では2ポンド以下の冬服の小袋が70元以上、正陽街の満洲書店では馮友蘭の『中国哲学史』が10元だった。交通は一時混乱し、出張中の職員は軍のトップが発行する旅行許可証を取得しなければならなかったという状態だった¹¹。

施明儒が偽軍になることを選んだのは、便利で有利な生活を重視したからだ。日本軍にいじめられ、屈辱を味わった彼は、「父と母の糧」¹²を求めて「この不必要な怒り」を我慢したと告白している。『日記』には結婚式の準備の様子が描かれており、結婚式の基本予算だけでも1000元に上り、その中には「色とりどりの車、音楽、チャペルでの宴会、ドレス、写真撮影」¹³が含まれていた。物質的に困窮している中、「彼の家には恒久的な資産はなく、決して裕福ではなかった」¹⁴と主張する施明儒が、豪華な結婚式を準備できたのは、偽軍としての立場から得られる収入のおかげだった。加えて、人的資源も多くの便宜を与えてくれた。たとえば、彼は軍隊のトップに結婚式のための「白酒特別配給請求証明書」を要求することに成功し、自動車が不足していた吉林でも友人に頼んで2台の自動車を注文することができた¹⁵。

施明儒は、自分の対日合作にはもう一つの理由として、それが「抗日協会」の

6 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第2巻、P347

7 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第3巻、P11

8 アンデュー・リグビー『暴力之后的正义与和解』（アンドルー・リグビー『正義と和解：政治的暴力のあとに』の中文訳）刘成訳、译林出版社（2003）、中文版序文P6

9 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第2巻、P73、P290

10 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第3巻、P218

11 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第2巻、P159、P336、P67

12 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第1巻、P56

13 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第3巻、P259

14 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第2巻、P75

15 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第3巻、P223、P259

活動に隠れ蓑を提供するためだったと明言した。施明儒は「士官候補生試験」の前に、自分は「偽満州国の功利」のために偽政府に参加したのではなく、「自分の理想を実現し、国の荒廃を繕う」ことを目的とする「別の意図」があり、偽軍への参加を抗日協会の隠れ蓑と支援に利用したのだと強調した¹⁶。そのため、東北抗日連合軍と擬軍の戦闘情報を入手し、動く機会を待つこと、擬軍の反満州・反日思想への対抗策を知り、慎重に行動できるようになること¹⁷、スパイ活動を簡単に理解すること¹⁸、偽軍校の新しい同志と連絡を取り、抗日社に加入してもらうこと¹⁹など、擬軍の活動に参加することで、密かな抗日を隠蔽・支援できるからである。

施明儒の日記から、被占領地域の「協力者」が生きる姿が徐々に浮かび上がってくる。民衆の大半は民族感情を抱いているが、占領された現状を変える力はなく、自分たちを守り、最も現実的な方法で生きる屈辱に耐えるしかない。彼らの喜びや悲しみは、道徳的な物差しひとつで測れるものではないだろう。

3. 「白皮（白い面）」の多面性 —愛国者か裏切者か—

ナショナリズム側の宣伝モードは、しばしば裏切り者が協力者かという両者択一の先入観がある。どんな理由があろうとも、占領軍や偽政権に仕えたり命令を受けたりする者は、常に生と死に貪欲であり、彼らを許すことは難しい。民族の大義の前では、自分の命に対する権利など取るに足らない。しかし、日本占領地の1億人以上の人々が「亡国奴」になるしかないと考えると、この説明に無力さが深く感じられる。施明儒は日本の占領を憎み、抵抗行為も行ったが、彼の行動を見ると、冷静であるが同時に混乱しており、感情と実益が混在している。表面的には偽満州国政府に仕える「白皮（白い面）」の人間でありながら、「赤い心」が見え隠れているため、単純に「反逆」や「謀反」と定義することは難しい。

全体として、施明儒は公然と偽満州国に仕えていたが、内心では彼らに抵抗していた。10数年間にわたって、彼は抗日救国社の秘密仕事を務めながら、偽満州国の仕事を並行して行っている。偽満州国の職は彼らの抵抗にとって最高の隠れ蓑である。入隊途中、偽満州人将校として同胞の保護に全力を尽くし、女性教官が兵士に侮辱された際には、真相を突き止めて上官に報告し、厳重な処罰を受けさせた。関東軍が「八路軍の家族を除外する」という口実で、30人以上の脱走女性を連行して臨時慰安所を組織したとき、彼は「密かに情報班長に命じて、車でここに連行してきた女性たちを全員解放させた」²⁰。彼のアイデンティティと行動における光と闇の組み合わせは、通常の意味での敵国人労働者のそれではないし、これまでの日本人「協力者」の記述とまったく同じに扱うことはできな

16 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第1巻、P6、P61、P181

17 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第2巻、P129

18 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第1巻、P48

19 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第4巻、P247

20 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第4巻、P187、P188、P189

い。

質が比較的に高くない偽軍の集団はしばしば、生き残るための無力感、ふるさとの誇示、権力の応酬、さらには暴力による地位の誇示といった矛盾した感情を見せた。捕虜になった民兵を拷問する偽軍を見た時、施明儒は「胸が痛む」と感じ、「同じ中国人なのに、この国難の時に、なぜこんなに冷酷で狂気じみたことをしなければならぬのか」と率直に言った。「最近、兵士たちは捕虜になった民兵を殴っている。最近、兵士たちは街頭で山賊のように振る舞い、拉致して金を脅し取り、陵辱し、悪の限りを尽くしている」と聞いて、「まるで獣や禽獣のようで、言語道断である」と罵り、「駐屯地が襲撃されたとき、上官たちは恐れて無計画に支援に行かず、それどころか、士官2人と共に、娼婦を呼び部屋で酒を飲み、みだりに情欲にふけり、兵士たちもそれにマネした」とき、彼は深く悲しみ、「東北人は生まれながらにして人間の心を持っていないというのは本当なのか？」と問い返したという²¹。

「協力者」の多面性が必ずしも政治的抵抗につながるとは限らず、1940年代初頭に東北抵抗運動が鎮圧された後、武装抵抗者は日本軍と直接戦闘できる立場にあることはほとんどなく、地下抵抗に頼らざるを得なかった。施明儒は偽軍の身分であったため、状況を常に把握することができ、秘密工作を円滑に進めるための技術的、財政的、人的支援を提供していた。それでも、施明儒が率いる小さな組織は、10年の間に大小の作戦を何度か行ったが、そのほとんどは夜間にビラを撒いたりスローガンを掲げたりするもので、効果には限度があり、3人のメンバーが犠牲になったことさえあった。

日本統治下という揺るぎない事実を目の前にして、施明儒に代表されるように、愛国心はあるが家を破壊させたくなく、落ち込んで混乱しているが、混沌とした世の中で利益を上げたいジレンマに陥っている人々がいた。そのような心理の背景には、自己保存と利益追求という人間の本性があった。これまでのイデオロギーによる判断や知識構造では、支援も組織もない被占領地区の民衆が反乱に立ち上がる条件を備えていないこと、被占領地域の民衆が客観的に日本の統治を支持しているとは考えることができないこと、「白皮（白い面）」のすべてが心の中で進んで国家の利益を売り渡したわけではないこと、といった前提を見落とすのが常であった。同胞いじめや武力による収奪は、原始的な劣等感と利益追求の行動の結果に過ぎないのかもしれない。

4. 人間性の変化 —屈辱と都合主義?—

被占領の際、国家の大義と人民の苦しみを前にして、裕福な生活を送り、保身に努めた施明儒は、決して常に心理的抑圧を受けていたわけではなく、情勢や利害に左右されて、その気持ちも時々刻々と変化していった。

1938年3月、施明儒は軍官としての合格通知を受け取ったが、「偽満州国の名声狩り」をして「大失敗を犯した」と自責の念を禁じえなかった。彼は、ただ

21 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第4巻、P17、P220、P228

の「職場の付き合い」であるが、途中で立場が変わったと同胞に誤解されることを心配していた。同時に彼は、この仕事が本当に秘密の反日行動にとって有益なのかどうか疑っていた。「馬を失ったときに、不幸と幸福の区別をつけるのは難しい」。「それなのに、なぜわざわざそんなことをするのだろう」と考えていた。1940年8月、施明儒が行軍中、途中のところどころで「木の皮が大きくはがされ、宣伝のスローガンや訓示が書かれている」のを発見した彼は、「これは生き残っている満州人に見せるためにおくものだ」と考え、同時に彼は、東北抗日連合軍の友人たちに、「偽軍に対する同情と理解は不可欠だが、決して簡単に信用してはならない。彼らは決して信用できないからだ」²²。

偽満州軍人として、施明儒は国家と民族の行く末を案じていた。偽満州国建国6周年を迎えた初春の月、寒々とした吉林大埔彩河に突然雨が降り、施明儒は天が中国に「同情の涙を流している」²³と感じた。九・一八事件10周年の日、施明儒は「血塗られた中国」の沈黙を嘆き、「臥薪嘗胆」しか「悲しみと憎しみの虚しさを埋めることはできない」と考えた。臥薪嘗胆してこそ、「悲しみと憎しみの空虚を埋める」ことができると考えたのだ。双十節（国慶日）の夜、彼は「革命の精神は決して死なない」とささやいた。時代劇の映画「紅石山」は施明儒の繊細な神経に触れ、登場人物の一人一人が現代の偉人を反映しているのではないかと思った。この映画は「愛国運動の真っ盛りにある『秘密結社』を描いたもの」であり、映画の中のセリフには「革命殉教者の精神」が滲み出ており、「盗人を父と認め、富と栄光を享受するもの」を見て、「汪の謀反と偽満州政府の当局」を思い起こさせ、「小人が位にあり、君子が野にあり」という現実に警鐘を鳴らした²⁴が、自分自身が偽政府の仕事に参加しているということには一切触れていない。

時が経つにつれ、彼の心情はより複雑に変化していった。1942年9月、些細なことで侮辱された彼は、「征服された人民は常に征服者に抑圧される」と嘆き、自分は「征服者の権利を本当に認めているわけではない」と主張したが、10年間にわたる苦闘の経験と置かれた状況を通して「自分の人格を扱う上で、状況に応じて取るべき態度」を理解することができたと主張した。著者は、「青年の事業」のために「人間としての義務を妥協」し、「理不尽な侮辱や不当な扱いを最大限忍耐強く受け入れる」ことができた。彼が沈黙を選んだのは、人生という戦場で得た「唯一の戦場」のためだけだった。しかし、「私の血管を流れる血は、今も頑固の血である」²⁵。

このようなことは何回も経験されている。1943年8月、施明儒は日本人が経営する木材工場に赴き、「安く買って高く売る」ことを恐れて満州人には木材を売らないと言われた。彼は日記の中で、「軍人がそんな卑劣なことができるのか？」と怒ることしかできなかった。1945年8月、彼は足が腫んで動くことが困難になり、戦闘の命令を遂行することができなくなった。日本軍に休暇を認め

22 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第1巻、P28、P184

23 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第1巻、P20

24 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第2巻、P70、P129、P51

25 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第3巻、P71

てもらえなかった彼は、本当に「無価値な血と汗を流し、裏切り者の悪名を背負っている」と怒り、痛みに耐えて戦争に参加した。1945年末、日本の敗戦後、施明儒は戦勝を振り返り、冷ややかで寂しい気持ちになり、平凡な一年がまた無駄になったと感じ、戦争に参加するために後方に逃げなかったことを悔やんだが、「戦争での功績もなく、将校の友人や親戚もいない」ため、「顔を見せる」ことができず、「裏切り者」のままであったことを悔やんだ。“偽善者”のまま、“奴隸”の帽子をかぶっている²⁶。

施明儒の偽軍での仕事は、不安から徐々に自分に受け入れられるまで、不満、憤り、屈辱が従順さと無力感の中に混在している。強い矛盾感に彩られてもいた。入隊した1938年から1941年末まで、彼は中国の抗日戦争を確信していた。しかし、太平洋戦争への誤った認識のため、1942年以降、施明儒は悲観主義に陥り、民族の正義を忘れて酔いしれ、日本人と偽満州国に追従し、生き残りと保身を図るようになる。ここには、心の中に抵抗心を持ち、屈辱を厭わなかったように見えた戦士が、慰安を追い求め、正義感を失った臆病者へと変貌していく姿がある。国家の正義と生存欲の本質が絡み合うことは、決して矛盾することではなく、一人の男がさまざまな顔を持っているのは、銃の下にある命の本質に近いのかもしれない。

施明儒の複雑な心理には、被占領地の典型的なものがある。権力を前にして、ある者は反旗を翻し、ある者は国を裏切って栄光を求め、また多くの者は施しのように従順を強いられ、抑圧され、次第に麻痺していった。抗日学校を卒業した若者たちは、ゲリラ戦線で敵を殺戮する勇気を持っていた。偽満州国が英米に宣戦布告したとき、かつての同級生たちは日本のために戦ってくれと手紙を書いたが、それは恥ずべきことだった！²⁷ハルビンの市民は街に残された死体の山に対して麻痺している²⁸。「商女は知らず亡国の恨み」（注：杜牧「秦淮に泊す」より。歌姫たちがかつての王朝の亡国の悲哀歌であるとは知らぬであろうに酒樓で歌われていた）といった古典詩句を思い起こさせた²⁹。施明儒の描く占領地での生活では、被占領地での最初の悩みから1940年代半ばにかけて、人々の意識は徐々に乖離していった。『大義』と『責任』のために積極的に日本軍に抵抗する人々がいた一方で、「母親が家にいて、危険を冒したくない」という理由から、「命および家族を大切にす」人々もいた³⁰。権力に支配された植民地時代の光景に話を戻すと、国民が示す愛国心のレベルには差があるものの、それはやはり社会的な表現であり、戦争という混沌のもとでの人間の複雑な本性を反映している。

果てしなく続く日中戦争の社会的圧力は、「侵略が空間的にどこまで広がるのか、時間的にいつまで続くのか、中国と日本の利害がどれほど複雑に絡み合うのか、誰も知らなかった」³¹。「民衆が多く従順になった背後には、自己保身と利己

26 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第4巻、P57、P225、P298。

27 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第1巻、P111-112、P124

28 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第2巻、P334

29 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第4巻、P205

30 施明儒『轍印深深——一个伪满军官的日记』（「ある満州国軍官の日記」）第2巻、P47、P11

31 卜正民『秩序的沦陷：抗战初期的江南五城』潘敏訳、商务印书馆2016年版、P38

主義が根本の理由である」³²。彼らの多くは、占領されたことは一時的なものであり、国家主権はいずれ返還されるため、生き残るしかないと考えている。中国人に内在する公利私欲の概念は、日常生活では自分の家の玄関前の雪を掃くように現れ、国家レベルでは英雄を待つように表現されることが多い。権力と対峙する人間の複雑な本性を前に、ナショナリズムはしばしば、語られるだけのレベルになり、実現されないままの苦境とみなされる。

結論

戦時中、中国の陥落地域は東部各省に広がり、人口は1億人を超えた。日本の占領期間は50年（台湾）、14年（東北部）と長く続き、7、8年、あるいは数年と短かったところもある。日本統治が人々にもたらしたものは何だったのか。日本政権が労働者を拉致し、慰安婦を強制連行し、戦地を焼き払い略奪し、国民の経済生活を抑圧したことは反論の余地のない事実である。問題は、それが被占領地のある一場面でしかなく、裏の日常生活が本体であることだ。今までの研究では、占領期の歴史について、「日本の侵略者は被占領地でできる限りのことをし、金をゆすり、罪のない人々を殺し、あらゆる種類の悪事を働いた」という、かなり一般的な印象しか与えていない。しかし、感情的なニュアンスの強いこれらの言葉は、日帝支配の実態や、占領地の草の根の人々が暮らす社会の状況を理解する上で、何の役にも立たない」³³。占領地の下層階級の人々がナショナリズムの「原罪」の烙印を押されたのは明らかに不当である。政治的高圧的な態度のもとでの大多数の人民の存在状態と精神状態の変遷を理解してこそ、人間を殺傷した野蛮な侵略と政治的高圧的な態度によって引き起こされた苦しみの大きさについて、より深い理解を得ることができるのである。

侵略に直面し、被占領地の一部の人々は立ち去るか抵抗する道を選んだが、大多数は逃げることもできず、急遽変えられた日常生活の継続として沈黙を守った。暴力の最初の時期が過ぎると、住民たちは、散発的な侵入が日常的な支配になると錯覚し、気づかぬうちに時が過ぎ、住民たちは次第に新体制の支配に順応し、屈服していく。生きたいという欲望が、受け継がれてきたイデオロギーや道徳規範の束縛を乗り越えたとき、民族や国家に対する人々の立場は徐々に変化し、「協力者」が生まれた。多くの場合、日本偽政権体制への直接的な奉仕と生存のための労働は別物であり、前者は公的な発言や行動という「政治的正当性」によって、利権の喪失を回避したり、利権と生存を交換したりすることを期待して日本偽政権体制のプロパガンダを鸚鵡返しすることであり、後者は行政サービス、経済サービス、運輸・郵便サービス、新聞・定期刊行物の発行、出店など、生存のための規範であった。これらは社会運営に不可欠な分野であり、それなくしては国民が生計を立てることができない。ある状況における人々の選択を、道徳的基準に基づいて推定することができないのは、人間性の立場に基づくだけ

32 劉照明『偽軍——強権竟逐下の卒子』台北稻香出版社2002年版、P108

33 潘敏『江苏日伪基层政权研究1937—1945』上海人民出版社2006年版、P1-2

でなく、歴史的状況の理解に対する反省を欠くことは無意味であり、有害でさえあるからである。

近年、中国では徐々にナショナリズムが広まりつつある。外国からの侵略に対抗して人民の士気を高めるためには、国民国家の立場に基づいた主流の物語を展開する必要がある、人民の生存権も感情的に軽視される。問題は、このような立場判断が日常生活の論理的な力にはかなわないことが多いことだ。毛沢東はかつて「遼海燕冀，漢奸何多！以地事敵，敵欲豈足？人執笞繩，我為奴辱」³⁴（東北三区には売国奴が極めて多い。土地を割譲して敵と和解するが敵は満足できない。人は鞭を手にとり、私は支配される奴隷にならざるをえない）と嘆いたことがある。私たちがずっと民族精神と死への抵抗を称賛し、「協力」を国の隷属とみなしてきた一方で、国難のたびに裏切り者が湧き上がるという奇妙な現象をどう考えたらいいのだろうか。

日中戦争の歴史は、侵略と抵抗の歴史であると同時に、ある意味で「協力」の歴史でもある。いままでの研究では、「権力下での生存」はしばしば裏切り者や「協力者」と結びつけられ、そこに含まれる立場的・道徳的判断がしばしば私たちの思考を導き、制限してきた。東北陥落地区における日本人「協力者」の心理を、権力下での生存という観点から考察するとき、私たちは、これまで私たちが知らなかったより暗い物語と、より複雑で困難な選択を見ることができ、それは、私たちが日中戦争史の俯瞰を試みるための前提条件となる。

34 毛沢東《祭黄帝文》（1937年4月5日）、《新中华报》（1937年4月6日 1版）。

第3セッション
メディア

発表 5 (日本)



戦後日本のメディア文化と 「戦争の語り」の変容

福間良明

立命館大学

1. 「わだつみ」の大ヒット

1949年、戦没学徒遺稿集『きけわだつみのこえ』（東京大学協同組合出版部）が刊行された。戦死した大学生・旧制専門学校生75名の日記・書簡等を抜粋して編纂されたものなので、小説のようなストーリーがあるわけではない。にもかかわらず、この書物は1950年の年間ベストセラー第4位になる大ヒットを記録した。

この遺稿集の基調にあったのは、「戦争遂行への反感」だった。哲学や自由主義に惹かれ、学問への思い入れが強かったにもかかわらず、意に沿わない戦争に駆り出されなければならない。こうした「反戦」への共感が、この遺稿集の記録的な売れ行きを支えていた。東京裁判などを通して、すでに旧日本軍の組織病理や戦地での蛮行は広く知られていた。何より、「聖戦」の美名を語りながら、国民の生活や言動を圧迫し、完膚なきまでの敗戦を招いた軍部への怨嗟の念は大きかった。こうした「戦争批判」「反戦」の広がりから、この遺稿集に涙する多くの読者を生み出していた。

1950年には、この遺稿集をもとに映画『日本戦歿学生の手記きけ、わだつみの声』が製作された。「悪虐非道な職業軍人」対「理性的で反戦志向の学徒兵」という対立図式を基調としたこの映画は、原作同様、大ヒットを記録し、経営難に陥っていた映画会社（東横映画）が、このおかげで息を吹き返すことができた。

だが、この映画・遺稿集が国民的な共感を得たことは、考えてみれば奇妙なことではある。昭和初期の高等教育（大学・旧制高校・旧制専門学校等）への進学率は、世代人口の3パーセント程度でしかなかった。同書に手記を収められた戦没学徒たちは、社会的にごく限られた学歴エリートであり、一般国民とは明らかに異なる存在だった。にもかかわらず、なぜ「わだつみ」に多くの日本国民は涙したのか。

そこには「教養」への憧れがあった。大正期（1912～1926）から1960年代にかけて、大学・旧制高等学校では、教養主義が広がりを見せていた。エリートであるからには、哲学・思想・文学・歴史などの古典に親しみ、人格を陶冶しなければならないという規範文化である。だが、それは必ずしも学歴エリートに閉じるものではなかった。ことに戦後の初期には、義務教育より上に進むことができなかった勤労青年たちのあいだでも、その悔しさを埋め合わせるかのように、読書や生き方、社会批判を扱う「人生雑誌」が広く読まれ、青年団・青年学級ではしばしば読書会が開かれていた¹。かつての戦争への疑問から、生き方や社会を彼らなりに考えようとするむきもあった。そこには「教養」（的なるもの）への社会的な憧憬があった。

戦没したエリート学生たちを扱った「わだつみ」（遺稿集・映画）は、そうした「教養」のシンボルでもあった。遺稿集や映画における哲学・思想への言及は、オーディエンスの「教養」への憧憬を再確認させ、「教養」を奪われた学徒たち、ひいては国民の悲哀と、こうした事態を招いた軍・政治の指導者への憤りを掻き立てた。

（1）戦前派知識人への違和感

もっとも、「わだつみ」ブームへの違和感も見られないではなかった。とくに、年長の知識人たちは、戦没学徒の記述について、その教養の「浅さ」をしばしば指摘していた。今日の眼からすれば、『きけわだつみのこえ』での記述はとも「無教養」には見えないし、むしろ、田辺元やカントといった哲学者への深い関心が感じられる。しかし、当時の年長知識人には、そうは見えなかった。

彼らは世代区分としては、戦時期より前の時代に精神形成を果たした戦前派に属しており、大正デモクラシーの時期に、西洋の自由主義・社会主義・マルクス主義にも広く親しんでいた。それに対し、終戦を20歳前半で迎えた戦没学徒たち（戦中派）は、物心ついた頃には満州事変が勃発しており、中等教育を受ける頃にはすでに日中戦争が始まっていた。戦時体制下で青春を過ごした彼らには、自由主義や社会主義にふれる機会はほとんどなく、年長世代に比べれば西洋の古典を手取る機会は限られた。こうした教養体験の相違を、戦前派知識人は「わだつみ」に感じ取っていた。折しも朝鮮戦争が勃発し、日本でも再軍備や憲法改正、徴兵制復活が議論されつつあったなか、「センチメンタルで浅い教養に止まるのではなく、そこからどのように反戦を導くのか」「それを構想するための社会科学的な素養に欠けるのではないか」という思いが、年長知識人には見られた²。

だが、そもそも戦後になって「反戦」を語ることは、戦時期の自らの言動を覆い隠そうとするものでもあった。学生たちはもちろんのこと、知識人・文化人であっても、戦時期に戦争賛美の文章を綴ったり、日本主義の運動に肩入れする者

1 福間良明『「勤労青年」の教養文化史』岩波新書、2020年。

2 福間良明『「戦争体験」の戦後史-世代・教養・イデオロギー』中公新書、2009年。

は少なくなかった。一般国民も、町内会や婦人会、青年団等を通して、戦争遂行に積極的に協力していた。にもかかわらず、戦後になって彼らは、これらの過去がなかったかのように「反戦」を叫びがちだった。撃沈された戦艦大和に乗り組み、奇跡的に生還した元学徒将校の吉田満は、こうした状況への批判を以下のように記している。

戦争中のわが言動の実態を吐き出すのではなく、逆に戦争にかかわる一切のものを否定し、自分を戦争の被害者、あるいはひそやかな反戦家の立場に仕立てることによって、戦争との絶縁をはかろうとする風潮が、戦後の長い期間、われわれの周囲には支配的であった。³

それは、戦後日本の「反戦の正しさ」の問題点を鋭く衝く指摘だった。「反戦」はときに、「聖戦の正しさ」を叫んだ往時の言動から目を背けさせ、責任の自覚から遠ざけるものでもあった。

(2) 「反戦の正しさ」への懐疑

この種の「反戦」への違和感は、1950年代前半のメディア文化にも投影されていた。1952年6月には、白鷗遺族会編『雲ながるる果てに 戦歿飛行予備学生の手記』が刊行され、翌年には、これを原作にとった同名映画が公開された。「わだつみ」ほどではないにせよ、この遺稿集・映画はともに話題になったが、そこに通底していたのは、学徒兵たちの「純粹さ」だった。学業を断ち切り、恋人と別れ、自らの命が奪われることに苦悶しながらも、戦友とともに死地に赴くことを潔く受け入れる。こうした人物像が、それらには浮かび上がっていた。それは、戦争への憤りが強調された「わだつみ」とは異質だった。

こうした戦争描写が可能になるうえでは、GHQの占領終結が大きかった。サンフランシスコ講和条約が1952年4月に発効し、占領統治が終了すると、それまで抑え込まれていた旧軍懐古やアメリカ批判、東京裁判批判の言説が噴出した。学徒兵や特攻隊員の「純粹さ」が見出されたのも、一面ではこうした流れによるものであった。

とはいえ、それは「なぜ人々は戦争に反対しなかったのか」について、思考を促すものでもあった。「わだつみ」では、高等教育を受けた学生たちの「反戦」の心情が描かれていたが、実際には必ずしもそうだったわけではなく、旧制高等学校や帝国大学に通うトップエリート学生のあいだでも、日本主義的な学生運動は盛り上がりを見せていた⁴。漢口陥落（1939年）や真珠湾攻撃（1941年）の際には、人々は「戦果」に歓喜し、その後も戦争協力を積極的に拒む姿勢はさほど見られなかった。

映画『雲ながるる果てに』の監督を務めた家城巳代治は、「私は特攻隊のはる

3 吉田満『「戦艦大和」と戦後 吉田満文集』ちくま学芸文庫、2005年、195頁。

4 井上義和『日本主義と東京大学 - 昭和期学生思想運動の系譜』柏書房、2008年。

かうしろで、彼らに拍手をおくった人間の一人だ」「私は少なくとも反協力者ではなかった。寧ろ協力者のつもりだった」と語ったうえで、「われわれはだまされていた」という見方への拒否感を綴っていた。「だまされたとは何という恥ずかしい言葉であろう。もし私がだまされたとするならば、私はだました人間に何等の憎悪もない。唯々だまされた自分への嫌悪があるだけである」という記述には、戦争遂行を支えた自分自身、ひいては国民そのものを問いただそうとする意志が浮かび当たっていた⁵。「純粹さ」への着目は、一面では、「反戦の正しさ」に肩入れすることで見過ごされがちな、戦時期の国民の「責任」を問おうとするものでもあった。

(3) 世代間の断絶

しかしながら、こうした視角はその後のメディア文化のなかで、さほど深められることはなかった。むしろ1960年代に入って表面化したのは、戦争体験をめぐる世代間の断絶だった。

最も多く戦場に駆り出された戦中派世代は、「戦争体験の語りがたさ」にこだわる傾向があった。軍隊内の暴力にさらされたことに由来する憎悪や恥辱の念ばかりではなく、戦地での蛮行をなした日本軍の一員であったことや戦友を見捨てて逃避行したことへの自責・悔恨・鬱屈も大きかった。こうした整理しがたく、また言語化困難な情念のゆえに、戦争体験をわかりやすく、あるいは心地よく語ることに激しい抵抗感を抱きがちだった。

1960年代の社会状況は、その思いをいっそう強固にした。1960年には日米安保条約改定への反対運動が盛り上がり、批准前日の6月22日には全国で620万人がデモに参加するなど、戦後最大の市民運動となった。岸信介政権の強権的な国会運営への反感に加えて、日本が再び戦争に巻き込まれるかもしれないという懸念が、運動の高揚を生み出していた。当然ながら、かつての戦争体験は60年安保闘争に結びつけて語られがちだった。しかし、戦中派世代は、その時々政治状況に戦争体験を流用するかのような議論のあり方に、不満を募らせていた。それは、戦争体験のある部分を都合よく利用し、それ以外の部分を切り捨てることにほかならなかった。その後、ベトナム反戦運動や沖縄返還問題、70年安保闘争が盛り上がりを見せたときにも、戦中派文化人は同様の反応を示していた。

それに対し、若い世代は反感を抱きがちだった。学生政治運動にコミットしていた彼らにしてみれば、戦中派世代の言動は、若い世代の運動の意義を否認するものであった。また、「語り難さ」にこだわる戦中派の姿勢は、戦場体験を振りかざしているように思われた。戦争体験を持たない若い世代は、体験者である戦中派世代に対して、どうしても劣位に置かれてしまう。そのことへの苛立ちを、若い世代は募らせていた。

それは、教養主義の論理にも通じるものがあつた。教養主義が「古典の読書を

5 家城巳代治「弱者の勇氣」『教育』第186号、1965年、64頁。同「映画芸術家の反省と自己革新に就て」『映画製作』第1号、1946年（南博編『戦後資料・文化』日本評論社、1973年、123頁所収）。

通じた人格陶冶」であるだけに、そこでは古今東西の古典を多く読み込んできた年長知識人が、若者たちに対して圧倒的に優位に立っていた。前述の戦前派知識人が戦没学徒の「教養の欠如」を指摘したのも、そのゆえである。それと同じく、「戦争」が話題になる場においては、厚い体験を有する戦中派は、体験を持たない若者に対して優越的な位置にあった。

若い世代が、こうした戦中派の態度に不満を募らせたのは、当然だった。彼らは、戦中派世代を交えた会合などのなかで、しばしば、往時の体験に閉じこもるかのような戦中派の姿勢を不毛なものとして批判した。1969年のわだつみ像破壊事件（『きけわだつみのこえ』の刊行を記念して、立命館大学に建立された像を、学生たちが引きずり倒した事件）は、そのことを象徴していた。

もっとも、それでも戦争大作映画はしばしば大ヒットし、若い観衆も少なくはなかった。だが、そのなかには、兵士の壮烈さや悲壮美から距離を取る作品も少なくなかった。たとえば、1968年の年間興行成績（日本映画）第7位を記録した特攻隊映画『あゝ同期の桜』は、製作・配給映画会社である東映の意向もあって、任侠やくざ映画のスター俳優を多く起用せざるを得なかったものの、ラストは、米軍の艦砲射撃で特攻機が次々に撃ち落されるシーンで締めくくっていた。戦中派の下の世代にあたる監督・中島貞夫も、「ゾロっとした戦中派ののろけ話が、大手をふってまかり通るようになった」状況への反感として、「死」を飾り立てるのではなく、その「無意味さ」（および、そうした状況を生み出した社会への批判）を強調していた⁶。

2. 「被害者意識批判」

戦中派に対する不快感の延長で見出されたのが、「被害者意識批判」だった。若い世代は、戦中派世代の「被害者意識」をしばしば批判し、戦中の「加害」を直視しない姿勢を問いただした。日本戦没学生記念会（『きけわだつみのこえ』刊行を契機に1950年に設立された反戦運動団体）のシンポジウムでも、戦中派文化人が糾弾されることは珍しくなかった。

戦中派世代が戦場体験を有するということは、直接的に手を下したかどうかはさておき、さまざまな「加害」をなした日本軍の一員であったことを意味した。それに対して、戦場体験を持たない若い世代は、必然的に戦場での「加害」の経験を持たなかった。「被害者意識批判」という論点は、戦争体験をめぐる戦中派と若い世代のヒエラルヒーを反転させ、戦中派に対する優位を導くロジックでもあった。

もっとも、この社会背景として、ベトナム戦争のインパクトを見過すべきではない。米軍による北部ベトナム空爆の様子は、新聞やテレビで大々的に報じられたが、その米軍は沖縄や佐世保から多く出撃していた。そのことは、ベトナム

6 中島貞夫「あゝ同期の桜」『映画芸術』1967年5月号。特攻隊を扱った映画・遺稿集など、「特攻」の語りの戦後史については、福岡良明『殉国と反逆——「特攻」の語りの戦後史』（青弓社、2007年）参照。

戦争をめぐる日本の「加害」を意味した。また、ベトナムでの空爆は、太平洋戦争末期の日本の空襲体験を連想させたのと同時に、旧日本軍による東アジア地域への侵攻をも思い起させた。その意味で、ベトナム戦争は戦時期および戦後の日本の「加害」を、人々に突き付けるものとなった。戦中派世代の「被害者意識」や「加害」に対する批判も、一面では、こうした文脈から見出されたものだった。

ちなみに、戦後日本映画のなかで、それまで「加害」への着目がなかったわけではない。市川崑監督『野火』（1959年）では、フィリピン戦線下、食糧を探していた日本兵が現地住民を射殺するシーンが描かれていたほか、現地女性兵士の日本兵に対する凄まじい憎悪も映し出されていた。だが、それを除けば、映画における「加害」の直接的な描写は少なかった。むしろ、その問題を回避するかのように、日本海軍の海戦や特攻作戦が多く扱われた。陸戦とは異なり、海戦や空戦であれば、「人」（敵兵・現地住民）への暴力を直接的に描く必要はなく、あくまで軍艦・戦闘機といった「機械」の描写を中心に据えることができる。『連合艦隊司令長官 山本五十六』（1968年）をはじめ、1960年代に大ヒットした戦記映画は少なくないが、その多くは日本海軍による海戦や空戦を扱っていた。こうした主題は、「加害」「暴力」にふれずにすむ（ように見える）ものだった⁷。だが、時を同じくして、「加害」から目を背けるかのような議論のあり方が、問われるようになっていた。それは、先にも述べたように、戦争体験をめぐる世代間の断絶とベトナム戦争のインパクトによるものでもあった。

（1）自己への問いと顕彰の拒絶

「加害」「責任」をめぐる問いは、若い世代ばかりではなく、戦中派世代の議論のなかにもしばしば見られた。レイテ海戦で沈んだ戦艦武蔵に乗り組んでいた渡辺清は、終戦後、天皇がマッカーサーと並ぶ新聞写真を見て、死んだ戦友を裏切ったかのような天皇の振る舞いに激しい憎悪を抱いた。そのことが、1960年代以降、渡辺が天皇の戦争責任を追及する契機となった。だが、渡辺は天皇を問責するばかりではなく、天皇への崇拜の念から海軍を志願し、進んで戦争に協力した自分自身をも問いただした⁸。天皇をはじめとする国家指導者のみを指弾して自らを免責するのではなく、彼らの言動を信じ、率先して戦争に参加した末端の個々の国民の責任が、そこでは問われていた。

さらに言えば、渡辺の議論は「自らが犯したかもしれない罪」をも問うものであった。渡辺は自伝的なエッセイ『砕かれた神－ある復員兵の手記』（1983年）⁹のなかで、復員した地元の農民が占領地での暴虐を誇らしげに語っていたことを批判しつつ、「同じ場に居合わせたら自分自身も同じ暴力を振るわなかったと言

7 吉田裕『日本人の戦争観－戦後史のなかの変容』岩波現代文庫、2005年。戦後日本の戦争映画のなかで海軍が多く扱われたとはいえ、日本海軍による重慶爆撃などは、ほとんど焦点化されなかった。福岡良明『殉国と反逆』（前掲）参照。

8 渡辺清『砕かれた神－ある復員兵の手記』岩波現代文庫、2004年。福岡良明『「戦争体験」の戦後史』前掲。

9 朝日選書（朝日新聞社）の一書として出された同書は、2004年に岩波現代文庫版として再刊されている。

い切れるのか」を自問自答していた。渡辺の議論は、自らの直接的な行為をめぐる責任ばかりではなく、状況次第では自らも犯したであろう暴力にまで及んでいた。

このことは、暴力を生み出す構造そのものへの問いにもつながる。そもそも、兵士たちにしてみれば、「悪虐」という認識を抱いて暴力を振るったというよりは、むしろ、暴力が「悪虐」なものに見えない、さらに言えば「正しさ」さえ帯びる状況があったのではないか。兵站を無視した作戦遂行、戦果にはやる上官たちの出世欲、合理的な判断よりも攻撃的な姿勢を尊ぶ軍上層部——こうした軍の組織風土が、末端の兵士たちに無謀な行軍を強制し、彼らを自暴自棄に追い込むことは少なくなかった。戦車兵として動員された作家・司馬遼太郎は、戦国期や幕末・明治期を扱った歴史小説のなかで、昭和陸軍の歪みをたびたび物語に重ね合わせていた¹⁰。「自らが犯したかもしれない罪」を自問した渡辺清の議論も、それを突き詰めれば、暴力と破綻を招いた軍や政治の組織病理の問題に行き着くものでもあった。

こうした問題意識は、死者の顕彰への拒絶にもつながった。

1960年代半ばから1970年代前半にかけて、靖国神社を国営化し、国が公的に戦没者を顕彰することをめざす動きが、日本遺族会や自民党保守派を中心に広がりを見せていた。これに対し、メディアや宗教界・教育界は、政教分離が担保されないことや国家神道の再来につながりかねないことから、つよく反発し、結果的に国会で法案が成立することはなかった（靖国国家護持問題）。

戦中派文化人の多くも、この動きに反対したが、その論拠はやや異なるものであった。安田武や橋川文三らは、むしろ、死者を褒め称え、持ち上げることが、軍や国家に対する彼らの憤りを覆い隠し、結果的に死者の口を封じることが懸念した。安田はすでに『戦争体験 一九七〇年への遺書』（1963年）のなかで、『他人の死から深い感銘を受ける』というのは、生者の傲岸な頹廢¹¹であると語っていた¹¹。それは、顕彰を通して死者の怨念から目を背ける戦後の「生者」の欲望を問いただすものであった。

（2）「顕彰」と「加害」の二項対立

だが、こうした入り組んだ議論は、1980年代以降、あまり見られなくなり、むしろ、「加害（責任）」と「顕彰」の二項対立が前景化するようになった。

靖国国家護持問題が沈静化したのち、日本遺族会や自民党保守派は、首相・閣僚の靖国神社公式参拝に重きを置くようになった。1979年にはA級戦犯合祀の事実が知られるようになっただけに、「戦後40年」にあたる1985年8月15日に中曽根康弘が戦後首相として初めて靖国神社に公式参拝を行うと、国内外からの激しい非難にさらされた。1982年には、日本の大陸侵出に関する歴史記述をめぐって教科書問題が過熱し、外交問題にまで発展した。

こうしたなか、往時の戦争への評価は、「死者の顕彰」に重きを置く議論と

10 福間良明『司馬遼太郎の時代』中公新書、2022年。

11 安田武『戦争体験 一九七〇年への遺書』未来社、1963年、142頁。

「加害責任」を直視しようとする議論と二分するようになった。「被害」と「加害」ではなく、「加害」と「顕彰」の二項対立が、そこでは見られた。

かつてであれば、「加害」の問題は「自己への問い」とも結び付き、特定の個人の責任ではなく、暴力を生み出す構造を捉え返そうとする（かすかな）契機も見られた。死者を顕彰する議論に対しては、死者の憤りが覆い隠されることへの懸念も語られていた。さらに言えば、「反戦」「平和」の政治主義が死者や体験者の複雑な心情から目を背けさせ、体験を都合よく利用しかねないことが問われることもあった。だが、これらの論点は1980年代以降にもなると、総じてかすみがちとなり、「顕彰」と「加害」の二項対立ばかりが再生産されるようになった。

時を同じくして、「戦争体験の断絶」も目立たなくなった。戦中派よりも下の世代が、社会的な発言力を有する年代となり、また、戦中派文化人も下の世代からの突き上げに嫌気がさしたのか、戦争体験をめぐる発言はかつてに比べれば目立たなくなった。そもそも、安田武や渡辺清など、1980年代に他界した戦中派も少なくなかった。必然的に、体験をめぐる世代間のぶつかり合いは、ほとんど見られなくなった。

1990年代初頭に冷戦が終結すると、東アジア諸地域では、それまで親米独裁政権に抑え込まれがちだった個人賠償問題が先鋭化し、「戦後50年」という節目も相俟って、日本の戦争責任・植民地責任が従来以上に焦点化された¹²。日本国内では、それに真摯に向き合おうとするメディア言説や市民運動が多く見られた一方で、これらの動きに反発し、戦争責任を否認するばかりではなく、日本の戦争遂行を肯定的に捉えようとする「歴史修正主義」も広く見られた。それは、小林よしのりのマンガ『新・ゴーマニズム宣言SPECIAL 戦争論』（1998年）などを通して、ポピュラー・カルチャーのなかにも浸透していった¹³。

歴史認識問題は以前にも増してメディアで多く扱われ、書籍も多く刊行された。だが、それでもって「顕彰」と「加害（責任）」の二項対立が解消されるのではなく、むしろそれが強固にされたのが実状である。「加害」の問題を考えようとする者は、「顕彰」を謳う言説にふれることはなく、その逆もまた同様だった。多くの議論が出されれば出されるほど、異なる立場の間でのコミュニケーションが加速されるのではなく、むしろ、両者の相容れなさばかりが拡大再生産される。こうした状況が、冷戦終結以降の日本社会のなかでは際立っていた。

3. 「継承」という断絶

今日の日本でも「戦争の記憶の継承」は多く語られる。ことに、「終戦記念日」の8月のジャーナリズムでは、その傾向が際立っている。戦争体験者の多くが他

12 この社会的背景については、浅野豊美編『和解学の試み—記憶・感情・価値（和解学叢書1）』（明石書店、2021年）参照。

13 こうしたなか、遺稿集『きけわだつみのこえ』を原作とする映画『きけ、わだつみの声』（新版）が1995年に公開された。ここでは、日本軍兵士によるフィリピン住民の虐殺や、「従軍慰安婦」をめぐる問題も扱われるなど、「加害」の論点が織り込まれていた。ただ、暴力への批判的な視座の一方で、渡辺清が提起した「自らが暴力を犯す当事者になるかもしれない」ことへの危惧が描き込まれていたとは言い難い。そのことは、暴力を正当化（自明視）した社会構造への問いが後景化していることを暗示していた。福岡良明『「戦争体験」の戦後史』前掲。

界し、聞き取りが困難になりつつある焦燥感が、その背景にはある。だが、そこで「継承」しようとしているものは何なのか。そのことを一歩引いて考えてみてもいいだろう。

90年代に見られた歴史認識の二項対立は、その後も消え失せたわけではない。東アジア諸国との緊張関係のなかで、同様の議論の過熱はしばしば見られる。とくにネットメディアでは、その傾向が著しい。歴史認識をめぐるネット言説は膨大な量に及ぶが、それが異なる立場相互のコミュニケーションを促すのではなく、むしろ自らが好む言説ばかりに接触し、異論を受け付けられない状況が再生産されている。これは一面では、「検索」「履歴」に基づく情報接触を促すネットメディアの特性によるものではあるが、1990年代以降の言説空間との連続性も見落とすべきではない。

むしろ、歴史認識問題はつねに焦点化されるわけでもない。むしろ、マスメディアでは、「炎上」を避けるかのような当たり障りのない議論も、多く見られる。「顕彰」や「加害」の問題に深入りせず、誰も否認することのない「記憶の継承の大切さ」が謳われることは、このことを暗示している。

だが、そこで「継承」されようとしているものは、さまざまな断絶や忘却を経た上澄みのようなものでもある。「死者の感銘」への抗い、「自己への問い」としての「加害」、暴力を生み出す社会構造への関心——今日のメディア言説において、これらが顧みられることは少ない。むしろ、ある種の「わかりやすさ」が前景化している¹⁴。

しかし、過去の言説に目を向けてみるならば、また異なる議論の存在に気付くことができる。かつて「継承」よりも「断絶」が際立っていた時期もあったが、そこではむしろ、戦争体験や記憶をめぐる多様な論点が浮かび上がっていた。「反戦の正しさ」がときに何を見えにくくしたのか。「加害」を論じることが果たして「他人事」になってはいないか。それはいかなる欲望に支えられているのか。さらに言えば、「加害」を生み出すメカニズムにどう向き合うか。こうした論点は、往時のメディア言説やメディア文化のなかで、しばしば見られた。

むしろ、そのことが、歴史認識をめぐる日本と東アジアの「和解」に直結するものではないだろう。だが、今日の議論のありようは、いかなるプロセスを経て生み出されたのか。そこには、いかなる社会背景が関わっていたのか。いかなる論点が失われてきたのか。これらの問いに向き合うことは、今日に自明視されている歴史認識を捉え直すための基礎作業でもある。「継承の歴史」ではなく、「断絶の歴史」「忘却の歴史」に向き合うことで見えてくるものも、あるのではないだろうか。

14 「継承」の無難さが内包する問題性については、福間良明『戦後日本、記憶の力学—「継承という断絶」と無難さの政治学』（作品社、2020年）参照。



現代韓国メディアの植民地、 戦争経験の形象化と その影響

—映画、ドラマを中心に—

李基勳

延世大学

[原文は韓国語、翻訳：ノジュウン]

1. はじめに

この研究は、日本による植民地支配からの解放から2000年代まで韓国の映画とドラマがどのように植民地と戦争の経験を形象化し、それが大衆の歴史認識にどのような影響を与えたかを考察することを目的とする。時代別に分けて分析し、どんな素材を介して過去にアプローチしていたか、また同じ素材にどのように異なるアプローチをしてきたか、その歴史的变化を通してメディアを支配する歴史認識とその影響を追跡する。まず、映画やドラマが「民族」を表象し、過去を活用するやり方を見る。それは、国民/民族のイメージを形象化する過程で何が否定され排除されるか、あるいは新たに包摂されるのは何かを探求することでもある。それは非常に劇的な過程である。人類の敵であり、共存できない悪として描かれた北朝鮮軍あるいは左翼は、50年後、再び私のために犠牲になった兄弟の顔として戻ってきた。どのような変化があったのか。各時代におけるメディアの中で「歴史」はどのような意味を持っていたかを考察しようとするものである。

2. 1950～1960年代冷戦民族主義の植民地、 戦争の記憶

(1) 「純潔」と「意志」の具現化としての「民族」づくり

植民地支配からの解放直後、独立の政治的熱風が吹き荒れた朝鮮半島で、植民地期はたちまち民族解放闘争を描く時期となった。映画人は新しい民族国家建設に対する使命感を高揚させる啓蒙映画を多数制作し、主に独立闘士の抗日運動を

描いた映画を、後世の韓国では「光復映画」という用語で呼んだ¹。1946年の崔寅奎監督、全昌根脚本・主演の「自由万歳」が代表的な映画である。

主人公ハンジュンは、死を恐れず民族独立の課題を遂行する男性革命家である。映画は主人公ハンジュンが日本警察の銃撃を受けて逃げるシーンから始まる。以後の独立運動を扱った映画でよく登場する最初のシーンである²。抵抗組織に加わったハンジュンは、同志たちと武装蜂起を準備する途中警察に追われ、偶然日本警察の恋人であるミヒャンの家に逃げ込む³。ハンジュンに教化されたミヒャンは彼の潜伏と脱出を手伝うが、日本警察に追われる口実を与えることになって抵抗組織のアジトでミヒャンは射殺され、負傷したハンジュンは逮捕される。だが、彼を愛していた看護師ヘジャの助けを借りて脱出する。

ハンジュンは民族の蜂起と反動の処罰、武装闘争を準備して直接闘う革命家であり、不屈の意志で最後の瞬間まで戦う男性ヒーローである。闘士たちは互いに同志と呼ぶが、同志の中に女性はいない。映画の中の女性は彼らを「先生」と呼びながら尊敬・恋慕し、彼らの闘争のために犠牲を払う。

ミヒャンは反逆者の恋人である自分の境遇に絶望して泣き叫ぶ。「人には再び生きる権利と努力はないのでしょうか？」と。ハンジュンは断固として答える。「もちろん人には再び生きる権利があり、私たちは民族が再び生きるために、爆弾を背負って倭寇の巢窟へ向かうのである。ただし、それは自分の感性ではなく、鋼のような意志と火山のような情熱が必要なのだ」⁴。

逮捕されたハンジュンを助けたのは、隠れ家の娘でもある看護師ヘジャである。墮落したミヒャンが救いを訴え叫ぶのとは異なり、純潔な処女であるヘジャは危機に陥ったハンジュンを救う新しいヒロインとして描かれる。

映画の中で民族は無条件で絶対的な献身の対象である。日本警察に追われていたハンジュンは、面識のないミヒャンの家に侵入して要求する。「あなたが韓国人なら、私を救ってくれ」と⁵。ヘジャが母にハンジュンを救おうと宣言したら、母は「私が止めても、あなたはどうしても先生を救おうとするのね」と娘の命がけの冒険を止めない⁶。

1959年、民族独立運動を扱った映画が急に多く登場した。この年は3・1運動の40周年であり、その前年の1958年には朝鮮総聯の帰国運動が本格化して「北送」が日韓間の最大の争点となった時期である。また、翌年の選挙を控え李承晩政権の危機感が高まっていた時期でもあった。この時期に上映された一連の映画

1 韓国영상자료원『한국영화의 풍경 1945-1959』문학사상사, 2003, 23頁。

2 当初のシナリオでは夜のシーンに設定されていたが、フィルムと機材が不足したため、昼間の撮影に変更された。김러실『『자유만세』의 탈정전화를 위한 시론-현존 시나리오와 영화의 차이를 중심으로』『한국문예비평연구』28, 2009, 294頁。

3 この役を演じた俳優の独銀麒が脱北したため、1975年に復元された映像には親日警察の南部(訳註:独銀麒が演じた役)が登場するシーンが削除されており、映画の展開を理解するのは容易ではない。また、元の映画には日本警察のセリフは日本語で録音されていたが、その後、吹き替えですべて韓国語に変わった。

4 現在の復元版は脱出するシーンで終わるが、元の映画では、ハンジュンが山の中で日本警察との銃撃戦の末、命を失うという結末になっている。김러실, 前掲, 289-290頁。

5 元のセリフには「朝鮮」とあったが、その後、吹き替えですべて「韓国」に変わった。김러실, 前掲。

6 ところが、このように積極的な抗日闘争を強調した「自由万歳」の製作陣は、代表的な親日映画を作った主役たちであった。監督崔寅奎は、支援兵に出ることを強要する「太陽の子供達」(1944)、「愛の誓」(1945)を監督し、撮影監督の韓濤模も「太陽の子供達」などに参加した。한국영화100년기념사업추진위원회 역음『한국영화100년100경』돌베개, 2019, 51頁。

は、(李承晩を含む) 救国ヒーローの典型を作り出すことに注力した⁷。

その中で、尹逢春監督、都琴峰主演の「柳寛順」に注目しなければならない。抗日運動の象徴である柳寛順は、1948年、1959年、1966年、1974年、2019年の5回に渡って劇映画化されたが、そのうち1948年、1959年、1966年の作品はすべて尹逢春が演出した。1959年の「柳寛順」は1948年の作品に比べてはるかに豊かな内容を含んでおり、1966年や1974年の「柳寛順」よりも積極的な女性ヒーローの姿を示している⁸。

3・1運動後、故郷に下った柳寛順は、父の学校が閉鎖され、万歳示威運動を主導した兄が逮捕される状況に直面する。柳寛順は友達と一緒に万歳示威運動を積極的に準備して導いていく。神に闘争を導く力を与えてほしいと祈る柳寛順の姿は、ジャンヌ・ダルクのような献身の象徴である。

万歳示威運動の最中に両親を亡くした柳寛順は獄中で拷問を受けながらも闘争を続ける。柳寛順は獄中で、梨花女子大の在学時代に慶州に修学旅行で行った仏国寺、石窟庵などを回想する。民族の文化と歴史への愛着、民族意識が彼女を民族のヒーローにした原動力であった。

一方、この映画は以後の韓国映画における日本人を表現するクリシェを示している。口ひげ、乱暴な口調、冷笑と軽蔑などが日本の警察や官僚に共通して現れる。

官僚や警察、軍人ではなく、日本人の典型的なキャラクターも登場した。喜劇俳優の金喜甲が演じた日本人高利貸しは朝鮮人を搾取する悪役であるが、卑屈でどこか愚かな人物である。酒席で朝鮮人が怖がるのは裸で踊る日本人だという冗談を聞き、ユ・ジュングォンの家に借金を取りに行き裸で踊って追い出される。不自然な韓国語発音、小柄な体格、無礼で下品な行動など、以後の韓国メディアに登場する植民地時代の日本人のステレオタイプである。

一方、日本人を描かなければならないのに、日本語が使えないのは韓国の映画やドラマの悩みでもあった。「国語」としての韓国語を確立しなければならなかった韓国のメディアは、「倭色一掃」を時代的課題として捉えた。以前輸入したヨーロッパ映画の中にあつた、日本語字幕を使った映画が1949年7月1日より上映が禁止されたほどである⁹。国語を使う民族共同体が確立された際、過去の「国語」であった帝国の言語は完全にタブー視され、日本人は歪んだ言語を使う民族として描かれた。

他方、「民族」の言語は正確な標準語のみで表現された。抗日運動に参加する民族構成員は「標準語」で統一されていなければならなかった。故郷の忠清南道アウネに帰っても、寛順と愛徳は全く方言を使わない。寛順の家族が話し合うときも、寛順が親戚のおじいさんを説得して話をするときも、誰も方言を使わな

7 「独立協会と青年李承晩」(申相玉監督)、「三一独立運動」(全昌根監督)、「高宗皇帝と義士安重根」(全昌根監督)、「韓末風雲と閔忠正公」(尹逢春監督)などが代表的である。정상우, 「해방 이후 1950년대 독립운동의 영화적 재현」『한국사연구』183, 2018.

8 1960、70年代の「柳寛順」は、権威主義体制下で提示された理想的な女性性をさらに強調している。김가을 『『유관순 영화』 연구: 저항의 재현과 여성』 延世大学校修士学位論文, 2022, 37頁.

9 『京郷新聞』1948年10月26日付(3); 『東亜日報』1949年3月10日付; 『朝鮮日報』1949年3月12日(1)「社説」.

い¹⁰。方言は民族闘争の言語になれなかったのである。

あえて方言で表現できない民族という観念を劇的に示す映画が「名前のない星たち」（金剛潤監督、1959）である。1929年に起きた光州学生運動を題材にしたこの映画は、撮影も光州と羅州現地で光州地域の学生を大規模に動員して完成した。しかし、映画の登場人物は皆標準語で会話をしている。朝鮮で耐えられなくなって満州に出る農民でさえ方言を使わない。民族の純粋性、単一性を方言が侵犯してはいけないことであった。

一方、神聖な抗日運動の大義は血統でつながった。主人公サンフン兄妹の父は3・1運動を主導し、大韓民国臨時政府で活躍した独立志士である。彼が妻に預けていった太極旗は、10年後の1929年に光州学生運動の先頭で再び輝きを放つ。他方、親日派高等係刑事の妹ヨンエは、抗日学生組織である醒進会に参加するが、結局兄のせいでの犠牲になる。最後の万歳のシーンでは、サンフンの家族が先頭に立つ。「自由万歳」のミヒャンと同様、ヨンエの席はなかった。

（2）朝鮮半島外での植民地時代の記憶づくり

①「学兵」の経験と記憶

図式的なヒーロー物語で植民地を記憶するには限界がある。大衆の関心を引くためには、別の方法で植民地物語を構成しなければならなかった。1961年に公開された映画「玄海灘は知っている」（金綺泳監督）は、以前とは異なる文脈から植民地を回想する。「学兵」という語り手を通して朝鮮半島の外から植民地末期を語り始めた。

学兵として連行された朝鮮人青年阿魯雲は日本の名古屋で兵営生活を送りながら、日本軍の上官や先輩から様々ないじめを受ける。その中で、阿魯雲の学校先輩である中村は、自分の従兄弟である秀子（在日朝鮮人孔美都里が演じた役）を紹介し、阿魯雲と秀子は愛を育んでいく。秀子は阿魯雲との愛を通して民族的偏見から解放され、「恥ずかしいのは人種ではなく人格だ」という認識に至る。アメリカ軍の大空襲直前に脱走した阿魯雲は爆撃が降り注ぐ街を彷徨う。爆撃が終わった後、日本軍は遺族が遺体を探すことも禁止し鉄条網を張って集団火葬を試みるが、その炎の中から阿魯雲が歩いてくる。それを目撃した群衆は鉄条網を壊して押し寄せ、阿魯雲と秀子は再会する。

この映画で朝鮮人阿魯雲を苦しめるのは日本人一般ではなく日本軍部であり、ラストシーンで日本民衆の抵抗が阿魯雲を救い出す。日本人に対する一方的な憎悪の代わりに、権力と軍部が問題の根源となり、良心的な日本人は連帯の対象となる。

このような体験ができたのは、阿魯雲が「学兵」だったからである。朝鮮人学兵は当時最高の教育を受けた知識人エリートであった。また、中国、太平洋、東南アジアなど様々な地域で戦争を経験した学兵の中には、脱走して光復軍や朝鮮

10 さらに、柳寛順役を演じた都琴峰は、当時、最も方言をうまく生かして演じる俳優で、ある時は方言を使う役しか来ないと言われるほどだった。『東亜日報』1962年12月21日付(5)；『朝鮮日報』1962年12月9日付。

義勇軍などの抗日軍事組織に参加するなど多様な政治的経験をした者もいた¹¹。したがって、学兵を主人公とする作品は、解放直前の植民地体験を扱っているが、当時朝鮮半島内で起きていた出来事は直接扱わなくても問題はなかった。朝鮮半島内へ目を向ければ、戦時体制下の朝鮮人の協力問題を扱わずに真面目な話を作る方法はなかったはずである。学兵とその恋人たちの物語を描いた金来成の人気小説「青春劇場」が1959年、1967年、1975年の3回にわたって映画化されたのもそのためであった。しかし、「青春劇場」は主人公の青春男女の複雑に絡み合った愛憎と逃亡、追跡に焦点を当てた映画であり、植民地時代の歴史そのものには背景以上の意味を与えなかった。「学兵」の歴史的経験を強制動員や帝国主義戦争への反対、解放後の歴史的課題などの問題に結びつけて形象化するためには長い時間を待たなければならなかった。

②アクション空間満州と無意味な時／空間

1960年代の韓国では、1920～30年代の満州を舞台にしたアクション映画が流行した。西部劇、特に1960年代半ば以降、マカロニ・ウェスタン (Spaghetti Western) の影響を多く受けた映画は、後日「満州ウエスタン」と別に系列化されるが¹²、「豆満江よさらば」(林権沢監督、1962)、「馬賊」(申相玉監督、1967)、「無宿者」(申相玉監督、1968)、「One-eyed Park」(林権沢監督、1970)、「Break Up the Chain」(李晩熙監督、1971)などの作品がある。「無宿者」は「オリエンタル・ウエスタン」というキャッチフレーズで宣伝された¹³。

満州ウエスタンに分類されたものの、「豆満江よさらば」は独立軍の根拠地である満州に脱出する独立団員が国内で繰り広げる闘争の物語である。独立運動家の息子ヨンウは、西大門刑務所を爆破した後、武装し脱出して日本軍と交戦しながら満州に渡ろうとする。映画はこの過程で、恋人と愛、日本軍警の追跡と戦闘、同志の犠牲と救いなどを扱う。映画の中で独立団員は大量の弾薬や銃器、爆発物を持って日本軍と激しい銃撃戦を繰り広げる。映画の舞台は満州ではないが、新聞広告では「豆満江と満州原野を揺るがした独立軍と日本憲兵隊の壮絶な闘争像」であり、「息をのむような追跡と脱走、連続する緊迫の中で痛快な復讐」を描いた「スリルとサスペンス」の「大パノラマ」と宣伝した¹⁴。映画に必要なだったのは、日本軍という罪悪感を感じない敵と「銃撃連発の大パノラマ」を演出できる場所であった。どのように飾っても内戦である朝鮮戦争を「痛快な」アクション映画にするのは、誰もが不快なことであった。「満州」は、この罪悪感から解放されたアクションや暴力の映画を作ることができる背景となった¹⁵。満州

11 解放後、学兵たちは学兵同盟など独自の組織を作り活動するなど、「学兵世代」としてのアイデンティティを保ちながら現実に対応した。손혜숙 「학병의 글쓰기에 나타난 내면의식 연구—한운사, 이가형, 이병주의 소설을 중심으로」 『어문논집』 75, 2018. 作家の韓雲史も日本で大学予科に在学中に連行された学兵出身であった。

12 2008年に韓国映像資料院の「満州ウエスタン特別展」で14本の映画が上映されて広く知られるようになった。김대근 「만주웨스턴 영화의 담론 분석」 『인문사회21』 12 - 6, 2021, 240 - 241頁。

13 이영재 『아시아적 신체 : 냉전 한국 홍콩 일본의 트랜스/내셔널 액션영화』 소명출판, 2020, 60 - 61頁。

14 『京郷新聞』 1961年12月13日付(4)の広告

15 이영재, 前掲, 2020, 80頁。

は実在する空間ではなく、空白の記号として想像上の空間であり¹⁶、場所と時間の歴史性は考慮の対象ではなかった。

以後の満州ウエスタン映画では、満州は西部劇と同様にアクション映画の背景としての意味のみを持つようになる。「豆満江よさらば」は数多くのエキストラと弾薬を消費してスペクタクルな独立軍の戦闘シーンを作り上げたが、その後、抗日闘争の苦難と悲惨さはほとんどなくなり、小英雄たちが活躍するアクションシーンだけが続いた。多くの満州ウエスタン映画が西部劇の名作や当時人気のあった作品の典型的なシーンを変形して使用し、しかもプロットをそのまま利用した模倣作品が出ることもあった。

独立軍はクリシェとして一瞬だけ登場し、独立の大義を強調しながら韓国人の民族意識を訴えるが、映画の展開とは無関係であった¹⁷。キャラクターはますますコミカルになり、典型的なB級映画が量産された。図式的に国家や民族を強調するシーンが挿入されたが、映画を作る人にとっても見る人にとっても何の意味もない慣習に過ぎなかった。

作品性を重視した映画も大きな違いはなかった。この頃、韓国文学の有名な作品を脚色して作った映画はよく「文芸映画」と呼ばれたが、植民地時代の作品が多かった。代表的な作品が金東仁原作（1925）の「ジャガイモ」である。金承鉦監督の「ジャガイモ」（1968）は、無能な夫のせいで売春に追いやられる主人公福女が受ける苦難に焦点を当てている¹⁸。ところが、原作が示した下層民の道徳的な墮落に対する冷静な視線は消えた。原作では福女は中国人王書房と固定的な売春関係を結んでいたが、夫はそれを黙認する。王書房が結婚することになって嫉妬に満ちた福女は王書房を襲撃したが、その過程で命を落とす。福女の夫と王書房は彼女の死体をめぐって事件を闇に葬ることで取引をした。だが、1968年の映画「ジャガイモ」では、福女は道徳的に墮落した者ではなく犠牲者として描かれた。福女は貧困と夫の無能により絶えず苦しむが、それは別に地主も資本家も総督府の権力も登場しない抽象的な貧困に過ぎなかった。映画は家父長制の権力と暴力の問題を現すが、それすらも夫が最後に戻ってきて彼女の墓で泣くという結末で、帰ってきたどら息子の後悔だけが描かれている。原作でも明らかにされなかった階級とジェンダー、植民地収奪構造の問題はほとんど抜け落ちた。無能な家長と不運な女性犠牲者の悲劇だけが残った映画から時代の歴史性に対する鋭い感覚を見つけるのは難しい。

16 최수용 「한국영화에 나타난 『만주』 표상의 가치와 활용방법 연구」 『순천향인문과학연구』 34 - 4, 순천향대 인문과학연구소, 177頁; 조혜정, 「『만주웨스턴』에서의 장르 수용양상 및 변안 연구」 『한민족문화연구』 60, 2017, 251頁.

17 김대근 「만주웨스턴 영화의 담론 분석」 『인문사회21』 12 - 6, 2021.

18 「ジャガイモ」は映画(金承鉦監督、1968; 베·ジャンホ監督、1988)はもちろん、ドラマ(TV文学館、1984)としてもよく作られた。

3. 敵、しかし、民族 —1950～60年代冷戦民族主義の戦争物語の矛盾—

冷戦陣営の論理と「敵」づくり

朝鮮戦争中に制作された宣伝映画で、戦争は単純な善悪の構図で規定された。正義は国連軍、特に米軍と同一視され、「自由陣営対共産陣営」の陣営間の闘争であった。平和を愛する独立国として国連に認められている「大韓民国」はアメリカと共に自由陣営の一員であり、戦争は人類の自由と地球の平和を守るための戦いであった¹⁹。1950年代の反共映画で、左翼は人類の敵であり、罪悪そのものである。人民と民主を挙げるが自己欲望の充足だけに没頭する者であり、典型的な左翼（人民軍、パルチザン）は道徳意識どころか、最低限の仲間意識さえない悪魔的な存在にならなければならなかった。したがって、たとえその後、悔悟する者が現れたとしても、まず善と悪、自由と共産の対立がはっきりした構図が先に設定されなければならなかった。「自由戦線」（金鴻監督、1955）、「私は告発する」（金黙監督、1959）などが代表的な例である。

しかし、このような非現実的な陣営論理の代わりに、ヒューマニズムと愛を強調した方が良いと考える人もいるはずである。ここに着目した監督は、敵の内部における「人間対非人間」の対立を見せようとした。1955年の映画「ピアゴル」（李康天監督）が代表的である。「アガリ」という大将が率いるパルチザンは虐殺、略奪、性的暴行などあらゆる蛮行と卑劣な行為を行い、それを見ていた知識人出身のチョルスは懐疑と幻滅を感じる。結局、チョルスと彼を愛したパルチザンのエランは帰順を決意するが、発覚し、エランだけが生き残って下山する。映画でのパルチザンはほとんど目的のために手段と方法を問わない冷血で利己的卑劣な人間である。同僚を反動者の親戚だという理由で処刑し、負傷した同僚も性的暴行し死に至らしめる。チョルスを愛するエランさえ、民間人に反共人物の虐殺を強要する無慈悲な行為をためらわない。

しかし、自由-共産陣営の論理はすべての敵を非人間的に描くことを求めた。当時国防政訓局長であった金宗文は、「ピアゴル」にパルチザンだけが登場することが「自由と反自由という相反する二つの世界が対峙する様子を故意的に排除」させる結果をもたらし、「パルチザンをヒーロー化」したと非難した。結局、「ピアゴル」はエランが下山するシーンに太極旗を挿入することでようやく再公開ができた²⁰。映画はパルチザン内部の「人間性」を持つ存在が抱える葛藤と矛盾をあらわにしようとしたが、それすら許されなかった。

この映画で印象的なのは、地元で入山したパルチザン少年の運命を描くやり方である。パルチザン部隊が少年の住んでいた村を襲撃したが、ある隊員が少年の母だと分かっているながらも母を狙撃した。少年は死にかけている母を見つけて泣きながら最後の会話を交わすが、瀕死の母は息子を叱る。「あなたがママを撃つ

19 이명자 「전쟁 경험의 재구성을 통한 국가 만들기」 『통일문제연구』 56, 2011, 22頁.

20 이영재, 前掲, 2020, 73 - 74頁.

たんだろ。」「違うよママ。」母は息子が否定しても「この野郎」といいながら胸ぐらをとろうとしたところで息を引き取る。半死の母と息子の最後の会話とは思えない内容である。左翼の悪魔性は母性も許せないものであり、少年は結局叔父が反動分子であったことを隠した罪で殺される。

驚くべきことに、この最後の会話がすべて標準語で行われている。少年の故郷という設定が繰り返し強調されているが、少年と母、叔父、そして、村から連行された人々まで、全員が標準語で話している。智異山という村の方言を使うこと自体が、この厳粛な反共民族の物語に合わないという強迫が働いたのである。日常的なドラマや映画の中で方言が様々な性格を表す素材として使われているにもかかわらず、戦争や民族の物語で方言はタブー視されていた。軍隊や戦争を扱った映画で方言を使うのは大変な勇気が必要な決断であり、1961年の映画「5人の海兵」で初めて全羅道の方言を使う隊員一人が登場した²¹。

しかし、観客の支持を得るためには、朝鮮戦争の映画はスペクタクルなアクション映画にならなければいけなかった。政府と軍の積極的な支援を受けた大規模な戦争映画が制作された。代表的な作品に「帰らざる海兵」(李晩熙監督、1963)がある。この作品のラストシーンを撮影するに1日あたり海兵隊員3000人、タンク10台、戦闘機12台が支援され、膨大な量の弾薬を消費した。広告のポイントも「映画史上空前のスケールで再現する人類最大の作戦」であった²²。映画はイデオロギー的な対峙の構図より、砲火中の軍人の姿に焦点を当てる。様々な階層と地域出身の軍人が海兵隊の一分隊に所属し、激しい戦闘と試練を一緒に経験しながら結束を固める。彼らは最終的に中国軍の大規模な侵攻に立ち向かって戦い最後を迎える。

ここで具体的な韓国軍人の経験という側面から戦争を眺めると、韓国軍の戦争、「大韓民国」国民の戦争はまさに「内戦」であるという事実を避けることはできなかった。人類の敵として追いやった敵が実は「民族」の一員であるという矛盾を自覚せざるを得なかった。映画の中でもこの問題は再現された。仲間の妹を殺害したのが自分の兄であることを知った海兵隊員は苦悩する。兄に会ったら私は撃てるのか？ これは以後の朝鮮戦争映画で繰り返される問いであり、根本的な危機でもあった。また、観客を不快にさせるこの問いには、スペクタクルなアクション映画の可能性を崩壊させる危険もあった。監督は、敵は人民軍ではなく「中共軍」だというイメージを作り出すことでこの危機から免れる。最も激しい戦闘シーンは、尾根を埋め尽くす「中共軍」は人間ではなく「人海」として物体化された表象である²³。これによって兄弟が戦い殺しあう相残を回避し、物体

21 「田舎者」役を演じた全羅南道順天出身の朴魯植が全羅道の方言を使うことを提案し、金基憲監督が勇気を出してこの提案を受け入れたという。이영재「1960년대 한국전쟁 영화의 세 국면, 국민·반북강박·공중의 관점」『상허학보』62, 2021, 216 - 217頁。1988年に製作された『南部軍』で初めて方言を使うパルチザンが登場した。

22 『東亜日報』1963年3月20日付(5)の広告。

23 映画でゾンビの群れが登場したのは1968年(ジョージ・ロメロ「ナイト・オブ・ザ・リビングデッド」)であるが、朝鮮戦争映画で「人海戦術」として代表される中共軍のイメージは最近のゾンビと大きく変わらない。이영재, 前掲, 224 - 225頁。

化された蛮夷（「オランケ」）という表象の敵と戦うことになる²⁴。以後、「共産オランケ」という表現が定着し、共産党を民族から除外する効果をもたらした²⁵。

しかし、「中共軍」のイメージがすべてを解決してくれるわけではなかった。むしろ、中共軍と北朝鮮軍を区別しようとする試みは、反共の基準を強化していた政権に悪材料を与えることになった。「帰らざる海兵」の李晩熙監督は、「七人の女捕虜」という映画を演出し始めた。1964年12月に映画検閲を通して上映許可を得たが、すぐに韓国の中央情報部が直接介入して上映不可の決定を下し、翌年監督を拘束した。映画の筋書きは単純であった。移動中の看護隊の女性軍人と民間人が北朝鮮軍に捕らえられた。北朝鮮軍の搜索隊が彼らを護送していたところ、中共軍が女性たちを強姦しようとしたので、激怒した北朝鮮軍が中共軍と交戦して彼女らを救出し、韓国に帰順するという内容である。何が問題だったのか？ 検察は反共法違反で監督を起訴し、「感性的な民族主義を掲げて国軍を無力な軍として描写し、北朝鮮の傀儡軍を賛美し、米軍に虐待される洋公主の惨状を誇張して描写するなど、外勢排斥の風潮を高めた」と主張した²⁶。

4. 1970～80年代「歴史」の崩壊と再構成

(1) 反共主義の極端化

1970年代に入ると、文化公報部傘下の機関と言ってもよい映画振興公社が朝鮮戦争を描いた反共映画を制作した。当時の有名監督も政策的な要求を拒否できず、「野菊は咲いた」（李晩熙監督、1974）、「証言」（林権沢監督、1973）などの映画を製作した。林権沢の回顧によれば、映画振興公社が要求する国策映画製作を拒否しようとする、北朝鮮に亡命した親戚に言及されながら圧力が加かったという。「証言」は徹底的に政権の要求によって作られた。平和な1950年6月25日、パク・スンアは恋人のチャン・ウク少尉とデートを楽しんでいたが、すぐにチャン・ウクは戦場に召集され、パク・スンアは避難の道に出る。映画は避難した彼女が洛東江戦線を越えて国連軍地域に至るまでの過程で遭遇する良民虐殺、拷問と殺害など、人民軍のあらゆる蛮行を見せることに注力する。映画のタイトルが「証言」であるのも、数多くの惨状のシーンとそれに対するパク・スンアの説明で成り立っているからである²⁷。映画は物語すら消え、共産主義の「蛮行」に対する証言録になってしまった。

反共映画の図式化はアニメーション「トリ将軍」で最高潮に達した。1978年の「トリ将軍」は朝鮮戦争を題材にしていなが、主人公「トリ」が北朝鮮の人民軍と戦うシーンを通じて、実際朝鮮戦争映画と変わらないイメージを創出

24 中国人民支援軍が朝鮮戦争に介入すると、韓国のメディアは「中共軍」を「オランケ」と表現し始めた。『朝鮮日報』1950年12月16日付(2)。

25 「打ち破ろう、オランケは何百万か…」と始まる軍歌「勝利の歌」は、当時の「共産オランケ」のイメージを端的に示している。

26 박유희 『한국 영화 표상의 지도』 책과 함께, 2019, 198 - 199頁。

27 정성일 「증언 Testimony 임권택 1973」 <https://www.kmdb.or.kr/story/5/1344>

した。「トリ将軍」のモチーフは、映画やドラマで広く人気を集めた「ターザン (Tarzan)」から出発した。森の中の動物と一緒に自由に暮らしていたトリは共産党の強要で山蔘 (天然の高麗人参) を探しに行ったとき、怪我しているスクを助ける。スクとともに社会に出たトリは、人々を強制的に酷使して横穴を掘りながら侵略を準備していた共産党を倒し、自由を手に入れる。この過程でトリが戦う人民軍はウルフとキツネであり、最後の瞬間にマスクを外して正体を見せる「赤い首領」は巨大な豚である。俳優が演じる実写映画では不可能な「敵」のイメージを創出したのである。

(2) 消えた歴史—意味のない植民地

強迫的な反共イデオロギーと民族主義が支配する中で、映画やドラマが時代の歴史的意味を具現化することは現実的に不可能であった。植民地を取り上げたドラマといっても、時代は単なる背景としてのみ存在した。1970年代によく作られた、いわば「俠客物」というB級アクション映画が代表的であるが、1980年代に入ってからエロティシズム映画がその代わりになった。映画「桑の葉」(李斗鏞監督、1985)が代表的な作品である。「桑の葉」の原作は羅福香が1925年に発表した小説である。原作小説で作品に現実性を与えたのは、アンヒョプとサムボ夫妻の墮落と非道徳性である。夫サムボはギャンブラーでアヘン中毒者、暴力家であり、妻のアンヒョプは暮らしのために自分の美貌を利用して生活している。一方、映画では、夫は独立運動家であり、妻の生きるための苦闘を理解して受け入れる寛大な人物として登場する²⁸。アンヒョプも皆に寛容であるが、日本巡査にへつらう作男サムドルとの性的接触は断固として拒否する。賭博のために家にあまり帰らないサムボは妻の不貞を暴露するサムドルを懲らしめる。村は民族共同体の象徴²⁹であり、夫の不在はこの空間を守るための必須の過程である。しかし、このような民族主義的な設定は時代の歴史性を意識したものではなく、植民地時代という過去を形象化するために作られた意味のない装置に過ぎない。映画は土俗的なエロティシズムと気軽なコメディに満ちており、民族主義的で家父長制的な設定は観客にさらに安定感を与える役割を果たす。植民地時代でも、朝鮮時代でも、どんな過去でも大きな違いはなかった。忠実な民族主義はむしろ時間と空間の違いを消滅させた。「桑の葉」の時空の中に朝鮮人だけがいるとき、ある種のユートピア的な共同体を形成する。この空間を侵犯する存在が親日派とその手先のサムドルであり、ユートピアを離れるしかない夫は志士的存在である。「桑の葉」の時空は、民族内部での葛藤と差別、家父長制の抑圧さえも消えた非歴史的な空間となった。

28 김지미 「문학과 영화의 재매개-서사적 제휴와 변용의 이론과 실제」 『한국현대문학연구』 45, 2015.

29 映画の中で村はカーニバルの場であり、繰り返される祭りを通して共同体意識を鼓舞し賛美する。맹수진 「희생양, 그리고 민족적 알레고리로서 여성이미지 분석-이두용 감독의 『뽕』을 중심으로」 『영화연구』 24, 2004, 112頁.

(3) 犠牲と絶望の戦争物語

映画の中の歴史の意味は1970年代末～80年代初めから変化していた。何よりも朝鮮戦争を捉える視線が変わった。官制的な反共映画では歴史が共産主義の悪行を証言する資料であったとしたら、新しい映画の中では戦争はこれまで続く傷と苦痛の出発点であった。歴史が現実的な意味を獲得し始めた。また、もはや左右の陣営が善悪を決定することもなくなった。悪は権力であり、観客は被害者の視点から戦後の歴史を見るようになった。

1980年に上映された映画「Mismatched Nose」(林権沢監督)、「最後の証人」(李斗鏞監督)がこの傾向を代表する作品である³⁰。「最後の証人」では、相変わらずパルチザンは犯罪者であるが、右翼の方がより悪質である。少女チへはパルチザンに性的暴行を受け妊娠するが、純朴な作男ファンバウが彼女を救い、彼女と結婚する。しかし、彼女の父の遺産を狙う青年団長と検事、そして裏切ったパルチザンが結託してファンバウに不当な殺人の濡れ衣を着せ、チへは愛人と酒場を転々とする。この事実を知ったチへの息子は精神錯乱の中に復讐する。刑事は殺人事件の背後には陰謀と裏切り、長年にわたる犯罪があったことを突き止める。しかし、ファンバウは息子のために自分が罪を犯したと言いながら自殺し、チへもその葬儀場で命を絶つ。映画は、事件を追っていた刑事までもが自ら引き金を引くという結末を迎える。ファンバウとチへは戦争と冷戦秩序、そして、その中で形成された権力の犠牲になった弱者を象徴する。今や左翼と右翼という区分はあまり意味がない。ところが、犠牲と被害は進行形であるが、権力は確固たるものである。刑事の自殺は、当時の知識人の無力さと挫折を象徴するものであった。

5. 民衆と現実 — 「歴史」の再現：1990年代以降—

(1) 「歴史」と「民衆」の再発見

1987年6月民主化運動と治安当局の抗争以降、民主化が進み、朝鮮戦争に対するイデオロギーの壁も弱まった。特に、パルチザンの体験を直接記録した手記や小説がベストセラーになった。代表的な作品が「南部軍」、「太白山脈」、「智異山」などであり、これらの作品は映画としても製作された。最初に映画化されたのは「南部軍」(鄭智泳監督、1990)である。ヒューマニズムと人間愛に基づいて戦争を批判するという点では「ピアゴル」の延長線上にあるが、具体的な人間としてパルチザンを描写しているという点では大きな進歩を見せた作品でもあった。「あの島へ行きたい」(朴光洙監督、1993)や「太白山脈」(林権沢監督、1994)もイデオロギーの対立から離れ、苦しむ民族あるいは民衆の傷をあらわにして和解を試みる作品であった。「Mismatched Nose」や「最後の証人」が個人の罪悪と被害を扱ったのに対し、1990年代の一連の作品は、個人の意図を超

30 박유희, 前掲, 208頁。

えた世界史的、構造的対立の構図の中で起こる民族の犠牲を再現することに焦点を当てていた。

「歴史」を理解する観点の変化を最も顕著に示したのは、MBCが創立30周年記念特集ドラマとして製作したミニシリーズ「黎明の瞳」（金鍾学演出、金聖鍾原作、宋智娜脚本）である。1991年から1992年まで36部作で放映されたこのドラマは、当時としては驚くべきレベルの製作、テーマ、50%を超える高い視聴率などでテレビドラマの里程標を打ち立てたと評価された。ドラマはデチとハリム、二人の「学兵」が戦争に動員されて経験する物語である。二人とも苦難の中、学兵を脱出して闘争の道に入るが、左と右に分かれて別々の道を歩む。この二人をつなぐのは、日本軍の「慰安婦」として連行された女性「ヨオク」である。彼らが経験する日本帝国主義軍の暴圧と戦争の苦しみ、解放された祖国での希望と挫折、左右の対立と戦争、そして愛と死の物語がドラマの主軸をなす。もともと1970年代にスポーツ新聞に連載されたこの作品の原作小説は、刺激的な性と暴力の描写に重きを置いた反共小説の典型であった³¹。しかし、ドラマへの脚色にあたり、「黎明の瞳」は冷戦の対立ではなく、実際人間の歴史を再現しようと試みられた。主人公たちの変化を正当な動機と理由をもって説明し始め、親日派清算の失敗や済州4・3抗争など、これまで韓国で扱われなかった問題を題材として取り上げ始めた。「学兵」と「慰安婦」を帝国主義の強制動員という文脈で描写し始め、大韓民国の国家成立を批判的に理解する視点を導入した。冷戦の国家主義を超えて「歴史」の実際をドラマで具現化しようとしたという点で大きな変化であった³²。

このような変化は、1980年代以降民主化運動の成長、特に「民衆」イデオロギーの拡散と密接に関連していた。もともと曖昧な感性的主体であった「民衆」は、次第に歴史的課題を解決する主体として具体化され、下層民の階級連合という点も強調され始めた。2000年以降は、左翼あるいは人民軍を主人公とする物語も登場し始めた。

一方、帝国主義戦争の被害者であり、生きている歴史として日本軍「慰安婦」が1990年代に再認識され始めた。1960年代から知られ小説や映画に登場することもあったが、その実体が明らかにされなかった日本軍「慰安婦」問題を扱ったドキュメンタリー「低い声」（邊永姝監督、1995、1997、1999）が製作された。以後、多くのドキュメンタリーや劇映画「鬼郷」（趙正萊監督、2017）、「雪道」（イ・ナジョン監督、2017）、「アイ・キャン・スピーク」（キム・ヒョンソク監督、2017）、「ハー・ストーリー」（閔奎東監督、2018）などが公開された。特に2000年代以降の映画は、被害を受けた少女の物語ではなく、戦争犯罪の責任と賠償を求める女性の物語を扱ったという点で、「民族」の枠を超えて「植民地」経験の現在性を示した。

31 장수희「단절과 고립의 냉전서사로서의 일본군『위안부』 서사 연구—1970~80년대 일본군『위안부』 서사를 중심으로」『감성연구』22, 114頁。

32 백두산「민주화 이행기 텔레비전 드라마의 분단 재현 방식 :『여명의 눈동자』를 중심으로」『스토리엔이미지텔링』15, 2018。

(2) 冷戦後の「民族」

2004年に製作された映画「太極旗を翻して」(日本題「ブラザーフード」、姜帝圭監督)は、韓国メディアが朝鮮戦争を捉える観点の変化を端的に示している。戦争が起きて避難した主人公ジンは、弟ジンソクと共に徴兵され、弟を助けるために全力を尽くす。戦功を立てれば弟を家に送ってくれるという言葉信じて命がけで戦闘に臨む。だが、韓国軍司令官の命令で弟が犠牲になり(実際弟は九死に一生を得る)、捕虜となったジンは人民軍の一員として参加し復讐の化身となる。ジンソクは激しい戦闘が繰り返される現場へ兄を探しに行く。

主人公ジンは韓国軍と北朝鮮軍を行き来して戦争の英雄になるが、その動機は思想ではなく、弟を救うためであった。弟も兄を救うために命を賭けて戦場を再び訪れる。映画は戦争を家族の視線で解釈し、同じ民族の悲劇として形象化する。ジンは陣営を行き来するのは、機会主義ではなく家族のための献身であった。だが、傷がないはずがなく、人民軍になったジンの顔には深い傷跡が刻まれる³³。映画は「犠牲者」と家族中心の物語を構築する。弟を救おうと奔走するジンは、家父長としての義務を果たそうと奮闘するものであり、命を捨てる兄弟愛とは別に、映画の中で葛藤の原因ともなる。人間愛と家族を掲げた映画であるが、相変わらず人民軍や中共軍は人間ではない物体として「敵」以上の意味を持たない。

劇的な変化は「トンマッコルへようこそ」(パク・クァンヒョン監督、2005)で現れる。あまりにも深い山奥なので戦争を避けてきたドンマッコルで、人民軍敗残兵と韓国軍脱走兵が出会う。対立していた彼らは平和なドンマッコルの住民に同化し、いつの間にか共存するようになる。ドンマッコルは民族共同体そのものを象徴するのである。「敵」は民族の外から登場する。ドンマッコルがアメリカ空軍の爆撃対象になり、人民軍と韓国軍の兵士はドンマッコルを守るために対空火器で爆撃機に抵抗し村を守って死ぬ。純粋な民衆で構成された民族共同体が外国勢力によって危機に陥り、それを守る若者たちが登場する構図を形成する。

朝鮮戦争を取り上げた映画やドラマが依然としてヒューマニズムと民族主義から脱却することが難しかったように、植民地を扱った映画も脱民族化の試みは多かったが成功はしなかった。「ラヂオ・デイズ」、「モダンボーイ」、「1942奇談」、「青燕」(ユン・ジョンチャン監督、2005)、「爆烈野球団」、「アナーキスト」など、多くの映画が植民地の生活を画一的な抗日の図式から脱して再構成しようとしたが、観客の反応は熱烈ではなかった。むしろ相変わらず抗日闘争を扱った映画が興行的に成功した。「暗殺」、「密偵」、「抗拒」などが代表的である。「国史」の力は依然として強いといえる。しかし、抵抗は以前の厳粛な男性中心の物語から脱却した。「暗殺」と「抗拒」がいずれも女性の物語であるという点で、歴史の可能性を新たに示した。

33 以後、朝鮮戦争や南北関係を扱った映画で「北朝鮮軍」の顔に刻まれた傷跡は、ある種のクリシェとして定着する(박유리, 前掲, 2019, 221 - 223)。民族の歴史的苦痛を象徴するものであり、同時にまだ「敵」であることを示す標識でもある。

【討論・質疑応答】第3セッション

パネリスト同士の討論・参加者との質疑応答

司会：李 恩民 桜美林大学

発言：袁 慶豊
 (発言順) 唐 小兵
 張 暁剛
 三谷 博
 福間良明
 李 基勳
 江 沛

中国伝媒大学
 華東師範大学
 長春師範大学
 東京大学名誉教授
 立命館大学
 延世大学
 南開大学

[発言は母国語、翻訳：尹在彦(韓国語)、于寧(中国語)]



李 恩民

第3セッションのメディアに関する議論を始めたいと思います。先ほどの1時間では、日中韓3カ国からの3名の研究者に素晴らしいご発表をいただきました。第二次世界大戦から現在までの各国における社会変動及びその国民の20世紀の歴史に対する認識に対して、メディアがいかなる解釈を行ったかについて具体的な分析を行いました。それは非常に啓発的で、大変勉強になりました。また、その同じ時期に対して、中国は「抗日戦争」、日本は「日中戦争」、韓国は「植民地時期」と、3カ国がそれぞれ異なる言葉を用いて表現しているのも興味深かったです。映画やドラマにおける日本人に対する表象について、中国と韓国で似ているところがありますが、全く異なるところもあると思いました。これからディスカッションに入りたいと思います。国史対話の慣例になりますが、コメントや質問をする際は、まずは他の両国の発表者からにしてください。具体的に言うと、日本の研究者の発表に対して、まずは中国と韓国の研究者からコメントや質問をしていただきます。中国の研究者と韓国の研究者に対しても、それぞれまずは日本と韓国の研究者から、中国と日本の研究者からコメントや質問をしていただき

ます。発言したい方はネームプレートを挙げるか、挙手してください。オンライン参加の皆さんはチャット欄に質問をご入力ください。時間があれば取り上げます。まずは中国伝媒大学の袁慶豊先生からコメントや質問をいただきます。

袁慶豊

まずは中国の研究者のご発表について、コメントしたいと思います。それはとても重要な問題だと思います。先ほど南開大学の江沛先生のご発表を拝聴して、とても感銘を受けました。江先生は非常に重要な問題を取り上げてくれましたが、その重要性に中国の多くの研究者が気づいていないと思います。江先生のご発表で取り上げられたその研究対象も研究時期も過去のもので、それに対して、我々研究者は現在にいます。ですから、私たちが抗日戦争を議論する際は、現在に立って歴史を振り返ることになるのです。多くの研究者はこれを意識していません。発展中の歴史に置かれている人々は後の歴史の結果が分かるはずがありません。この重要な事実を忘れてはいけません。要するに、日中戦争が勃発した当初、戦争がいつ終わり、誰が勝利するかについて、蒋介石や毛沢東、フランクリン・ルーズベルトなどの最高指導者にも分からなかったのです。一般の民衆たちはもっと分からなかったでしょう。彼らは将来の結果が分からない状況の中、決断していたのです。当初占領者に協力するという決断を下した人を悪者だと容易く批判できたのは、現在にいる我々がすでに歴史の結果を分かっていたからです。しかし当時では、誰が占領者で、誰が勝利者になるかは分からなかったのです。当時においては支配者に従うのが普通の状態なのです。また、パンデミックの3年間がありました。私たちは生き延びましたが、当初から3年間も続くと分かった人はいたのでしょうか。現時点に立って、当初の人の行動を責めるのは簡単ですが、当時の未知の状況においては、そういう行動をとるしかなかったのです。研究者として、過去にいる研究対象の行動を現在の基準で判断してはいけません。

私の専門は映画研究で、ここ20年は主に1949年までの中国映画史について研究しています。この歴史は日本と韓国、そして北朝鮮とも深く関わっています。江先生の論点に賛成しますので、その論拠となる一つの事実を紹介します。多くの研究者はこの事実を知らないと思いますが、日中戦争の8年間では、中国映画産業がとても栄えていました。上海が陥落した1937年11月12日から真珠湾攻撃があった1941年の年末までの4年間に、孤島となった上海では250本の映画が制作されたと統計されています。その後日本軍に占領された4年間にもまた250本の映画が制作されました。戦争の8年間で合計500本の映画が制作されたのです。中国映画が誕生した1905年から全面抗戦が始まる直前の1937年7月までに制作された中国映画の数は1086本でした。激しい抗戦の真っ最中、中国のほとんどの地域が陥落した時期に、中国の映画市場がとても繁栄していたのです。

韓国の研究者のご発表についてもコメントいたします。先月、私の大学では博士論文研究計画審査会が行われ、一人の韓国人留学生が「中国における韓国の映画人たち」をテーマとした計画書を提出しました。彼は1949年以前の中国映画と韓国映画を扱う予定ですが、大韓民国が成立した1948年以前の時期についても、「大韓民国」や「韓国」という言葉を使用しました。私はそれに違和感がありましたので、彼に指摘しました。今日も韓国の研究者のご発表では1948年以

前の朝鮮が「韓国」という言葉で表現されたようですが、これについてご教授をお願い致します。

私の発言は以上です。ご指摘いただければ幸いです。

李恩民 ありがとうございます。二つ目のコメントは李基勳先生に対するものですね。他に発言したい方いらっしゃいますか。唐小兵先生、どうぞ。

唐小兵 まずは日本の福間先生の発表に対して質問させてください。発表では、教養などについてとても興味深い問題に言及されました。戦没学徒たちは当時の日本においては、高等教育を受けたごく限られた少数派ですが、彼らの人生経験を描いた映画『日本戦歿学生の手記 きけ、わだつみの声』を観た日本国民のほとんどは涙しました。これについて、日本ではその時代、例えば1930～1940年代以降、一般国民が知識人エリートに対して複雑な態度があったかどうかという質問をしたいです。近年私は上海における左翼文化を研究しており、日本の左翼文化の中国、特に上海の左翼文化に対する影響が関わります。日本では、当時の一般国民が明らかに知識人エリートに同意したように聞こえましたが、それは合っていますか。これについて「教養」という言葉が使われましたが、とても関心のあるところです。同じ時期の中国では、革命の勃興に伴い、非常に強烈な反エリート主義の社会感情が生まれたのです。それに対して、日本では左翼の勃興に伴ったポピュリズムや反エリート主義というのは基本的には存在しなかったという理解で合っているでしょうか。これは福間先生への質問です。

そして、江沛先生の発表にも一つ質問があります。江先生が取り上げた本は私も購入しました。まだ読み終えていませんが、とても興味があります。江先生の論文は日本に統治された時期に、中国の一般人や地方エリートが日本人に協力したことを取り上げ、彼らの日常生活や人生の選択をどう理解すべきかという重要な問題を提起しました。これに関して、歴史記述や歴史研究を行うには、道徳という次元が必要かどうかという根本的な問題が潜んでいると思います。中国の伝統的な史学は、「知人論世（人物の善悪を識別したり世事の得失を議論したりすること）」を主張しており、道徳史学は非常に重要で、歴史人物に対する道徳的評価と道徳的判定は歴史記述の最も中心的な内容になります。それに対して、近代的な歴史学が発展してから、我々が追求するのは歴史の真実や真相を提示することになりました。江先生が言及したティモシー・ブルック教授の著作『秩序的淪陥：抗戦初期的江南五城（Collaboration：Japanese Agents and Local Elites in Wartime China）』には、「歴史研究は道徳的知識を生産しない」という非常に印象深い一文があり、それを鮮明に覚えています。しかし、中国の伝統社会における歴史研究においては、宗教的伝統があまりない中国儒教文化にとって、歴史というのは道徳性を養う非常に重要なソースの一つになります。これについて江先生のご意見を伺いたいのですが、中国のこのような伝統文化、つまり道徳的判定と歴史記述の間の関連性を完全に断ち切って、完全なる近代的な歴史学にすべきか、それとも両者のバランスの取れた中間路線を取るべきでしょうか。

以上二つの質問をさせていただきます。よろしく申し上げます。

■ 李恩民 ありがとうございます。唐先生から福間先生と江先生に一つずつ質問をいただきました。李基勳先生のご発表に質問したい方いらっしゃいますか。中国あるいは日本の研究者から質問をお願いします。

■ 張暁剛 長春師範大学の張暁剛です。李基勳先生の発表に対して、コメントさせていただきます。私の専門は日本史で、韓国の近現代史の問題に関心もありますが、あまり詳しくありません。李基勳先生は学術研究の分析対象に映画を取り扱い、私にとって斬新です。私はそんなに韓国映画をたくさん観ていませんが、少年時代(1970年代)に朝鮮映画を観た経験があり、中には朝鮮人民の抗日闘争を描いたものもありました。そのため、李先生のご意見をお聞きしたいと思います。東アジアの近代史および日中韓近代史に関しては、明治維新以降、日本は日清戦争を起こし、徐々に清の地位に取って代わり、朝鮮半島で統監府を設置し、韓国を管理するようになりました。皆さんがご存知のように、韓国は中国と日本と同じような地位を得ようとする目的で、国号を朝鮮王朝から大韓帝国に変更しました。しかし大韓帝国が成立した後、日本は朝鮮半島に対する管理を放棄することなく、ますます植民地支配と侵略を加速したのです。この歴史において、朝鮮半島の人民は反日独立闘争を長く続け、反日義兵運動や安重根による伊藤博文暗殺事件など代表的な出来事がありました。1910年に、日本が朝鮮を合併した「日韓合邦」と呼ばれる歴史的出来事がありました。私がここでいう「朝鮮」は朝鮮半島全体を指しますが、当時は朝鮮半島の各地で激しい反日闘争が行われ、これは午前中に言及された当時の中国東北の状況とは異なります。例えば、私が生活し仕事をしたことのある大連(当時の名称は「閔東州」である)では、日本がロシアに取って代わって植民地支配を行った時期において、「放火団」や大連の中心から遠く離れた莊河市で組織された「大刀隊」などによる反日闘争以外、市内で組織的に行われた抵抗闘争の事例は多くありませんでした。旅順も同じ状況でした。一方、私の知る限りでは、朝鮮半島はそれと異なって、当時の反日闘争は活発に行われ、1919年に三・一運動もありました。しかし、日本の植民地政府による残虐な鎮圧で反抗闘争が徐々に減っていきました。鎮圧以外に、日本が朝鮮半島で実施した植民地教育の影響もあったのでしょうか。これについて、韓国の研究者たちにご意見を伺えればと思います。韓国併合で朝鮮と日本は一つの国になり、日本が始めた太平洋戦争に参戦した朝鮮人もいました。韓国ではこの時期の歴史を描いた映画作品はあるのでしょうか。この歴史について、韓国の研究者はどのように考えているのでしょうか。以上です。

■ 李恩民 ありがとうございます。オンライン参加の長春師範大学の張暁剛先生から質問をいただきました。次の質問者どうぞ。

■ フロア2 まず、福間先生に対する質問です。先生の今日のご講演は主に太平洋戦争を扱っておられましたが、韓国と中国からすると、おそらく日本との戦争は、すでに日清戦争の時代から始まっているかもしれません。日清戦争がどのように語られたのかお伺いしたいと思います。

それから、李基勳先生には、韓国独立運動における上海の位置づけについてお伺いしたいと思います。

李恩民 最後の質問は三谷先生をお願いします。

三谷博 江先生にお伺いします。このセッションは、各国の歴史の中でのメディアの比較をするということでした。江先生は直接にはメディアを扱っていらっしゃらない。しかし、歴史家としては、このかなり問題を含んだ日記が出版されるに至った契機を知りたい。出版するということは、メディアの活動の重要な部分です。吉林省政協文史資料委員会という組織が出版しているわけですが、これは一体どんな方々だったんだろうか。この日記を書いた人の親族がこの中にいたんだろうかとか、あるいはこの日記を書いた方は民族的には一体何族なんだろうか、漢族なのか満族なのか朝鮮族なのか。そういったことも知りたい。なぜこういうものを出版したんだろうか、誰がなぜ出版したんだろうか。こういうことを考えればメディアの役割を論ずる核になっていくだろうと思います。

李恩民 ありがとうございます。時間の関係で、質問の募集はここまでにしたいと思います。これからは3名の発表者にご回答をいただきたいと思います。まとめて答えていただいても構いません。一人3分くらいをお願いします。まずは福間先生にお伺いしたいと思います。

福間良明 まず、知識人や教養に関するご質問をいただきましたが、戦後初期の日本での議論のされ方としては、戦時期に知識人を含むリベラリズムだとか、左翼の思想だとか、そういったものが弾圧された。そういうことがあったから戦争になったのだといった見方がメディアだとか、一般の人々の間に広くあったように思います。

教養が弾圧された、自由主義的あるいはマルクス主義的な教養が弾圧されたことと、戦争になっていったことは、必ずしも直接的に結びつかないのですが、ただ結びつかないものが結び付けて解釈され、それに伴って知識人あるいは高等教育を受けた学生たちが可哀想な存在、悲哀の対象として位置づけられた。そして、『きけ わだつみのこえ』のような教養人への憧れみたいなものがより強まっていったところはあったように思います。

あともう一つ、日清戦争の語られ方ですが、映画などを含むポピュラーカルチャーの中では、1894年に始まる日清戦争などはあまり扱われないように思います。ただ、満洲事変以降、特に日中戦争以降の中国戦争は、決して扱われないことはないと思いますが、どちらかと言うと扱いが少ないのと、日本の戦争映画の特徴としては、敵の顔あるいは現地住民の顔があまり映されないところがあると思います。『きけ わだつみのこえ』のビルマ戦線の話でも現地住民などはほとんど出ていません。兵士たちの悲哀であったり、あるいは別の映画では男同士のきずなであったり、そういうところにフォーカスされて、逆に敵の存在があまり浮かび上がってこないところがあるのかなと思います。日本の戦後の映画の大枠

は海戦や航空戦を扱うことが多いのですが、それはある意味敵を映さなくても良いというところはあると思います。もちろん例外はいろいろあるわけですが、全体としてはそういう傾向かと思います。ひとまずこれで終わりにさせていただきます。

■ 李恩民 ありがとうございます。次は李基勳先生をお願いします。江先生への質問は最後でしたので、少し考える時間を差し上げたいと思います。

■ 李基勳 私がわざわざ説明できることは多くはないと思いますが、李恩民先生のお話しに対して私の立場というより、その学生がなぜそのように書いたのかを説明しますと、韓国の公教育において「韓国」または「大韓民国」という表現は1919年の大韓民国臨時政府発足から使われます。そういう教科書的な立場からすると、1919年以降は韓中、中韓とも言えるのですよね。特に大学で歴史を専攻していない学生の場合は、習慣的に身についた表現だと思います。多分それで使っていたのだと思います。

日本の植民地支配下での抵抗を取り上げた映画は結構ありますが、扱いにくい素材なので思うより多くはありません。帝国主義に対する抵抗を扱うと、親日協力の問題も必ず扱わなければならない、そうしてこそもっともらしい話になりますが、親日協力を形象化させることが非常に難しいからです。また、抵抗を取り上げると社会主義も必ず取り上げないといけないのですが、韓国では社会主義は非常にデリケートな問題なので、映画化することは容易ではありません。そこで、このようなデリケートな問題を避ける方法を考えて映画化しなければなりません。実際にそのような映画がいくつかあります。代表的な映画が「空と風と星の詩人～尹東柱の生涯～」です。

私のプレゼンテーションでは時間がなくて外した最後の映画がそれですが、韓国の抵抗詩人 尹東柱がどのように抗日作品の執筆と運動を行い、死に至るかを描いた映画です。全体を白黒で撮影した映画ですが、個人的に大好きな映画です。

■ 李恩民 質問ではなく、コメントでしたね。最後は江先生にご回答をお願いします。

■ 江沛 私の発表について、先生方からコメントやご指摘をいただき、誠にありがとうございます。まずは三谷先生の質問にお答えします。厳密にいうと、私の発表のテーマはメディアではないのですが、プログラムではこのセッションに入れていただきました。この日記が出版された経緯を紹介します。この日記は吉林省档案馆に収蔵されたもので、1950年代に資料として当アーカイブに渡されたようです。アーカイブに収蔵されなかったら焼却されたでしょう。2011年に吉林省档案馆と吉林政協文史委員会のコラボレーションで、正式出版ではなく、内部出版という形でこの日記を出版しました。中国では、偽軍（傀儡軍）に所属していた人の日記を正式に出版することは適切ではないため、内部出版という形式を取りましたが、資料としては利用できます。主人公は漢民族です。

唐先生の質問は占領地区の民衆に対する道徳的判断をどう理解すべきかという

とても大きな問題です。私の問題意識は主に中国における歴史認識に基づいています。中国の歴史学は、古い時代から宗教や哲学、政治の役割を担ってきました。中国では、厳密に言えば宗教は存在しないため、歴史に対する判断と評価が政治的合法性を担保する非常に重要な根拠になります。同時に社会的道徳観念を形成する重要な依拠でもあります。そのため、中国の歴史学においては、道徳判断は大きな比重を占めていますが、もちろんその基準は上層階級あるいは政治的エリートの理念に基づいて定められるのです。昔の中国における歴史学というのは、価値判断を行うより国務を助けることがその最も重要な機能でした。ですから、中国の二十五史は帝王たちの家譜に過ぎず、帝王の統治のためにあるものだと梁啓超が主張したわけです。20世紀以降、大衆文化の隆興につれ、民衆の価値も上がり、歴史において、民衆の価値をどう位置付けるかということが重要な問題となりました。この時代の流れに応じて、梁啓超は新史学を提唱したわけです。しかし、その理念は長い間あまり徹底的に実行されませんでした。私が提示したい問題は、今日の歴史判断においても、どの国も民族国家の立場から完全に離れることができず、国務を助けるという機能を避けることもできないということです。同時に、歴史を造ったのが民衆なので、民族国家の立場に立ちながらも、人間性、あるいは民衆という立場を有する可能性を探りたいと思います。そうすれば、歴史に対して更に分析を深めることが可能になります。歴史における民衆に注目することで、歴史をより豊かにすることができるでしょう。

以上私の感想を述べさせていただきました。

■ 李恩民 3名の発表者からご回答をいただき、誠にありがとうございます。少し延びてしまいましたが、本セッションは無事に終了いたしました。部屋がどんどん暑くなってきましたが、私たちの議論も熱くなってきました。後1時間あっても熱く議論し続けることになるだろうと思います。次のセッションもありますので、ディスカッションはここまでにしたいと思います。

第4セッション
研究

発表 7 (日本)



「わたし」の歴史、 「わたしたち」の歴史

—色川大吉の「自分史」論を手がかりに—

安岡健一

大阪大学

はじめに

20世紀の戦争・植民地支配と和解はどのように語られてきたのか。膨大な蓄積があるこの問題を考えるにあたって、前回のフォーラムで討論された「歴史の大衆化」問題との接点を意識して議論してみたい。

今回の開催趣旨にもあるように、専門家のレベルでは、20世紀東アジア歴史の大筋について、認識に大きな齟齬は存在しない。それでも、東アジアでは歴史認識がなお問題であり続けている。そこには国家の存在が大きく作用しているが、国家にどのような歴史認識が可能かという幅には、それぞれの国における歴史学のあり方だけでなく、そこに生きる一人一人の市民が育む歴史意識も無縁ではありえない。

だからこそ、社会の歴史認識に大きく作用する学校での歴史教育をはじめとして、市民の歴史認識に歴史学者は大きな関心を払ってきた。しかし、見落とされてきた点はないだろうか。「相手の『歴史認識』への認識」が不十分だという趣旨文の提起に全面的に同意すると同時に、自らの社会で共に生きる市民の『歴史認識』への認識も探求する余地が大いにあると筆者は考えている。

ここでは、筆者の経験も交えつつ、市民が書く自分自身の歴史の意義を重んじる立場から現代日本の市民の歴史意識の一端を取り上げて議論してみたい。その際、歴史という言葉を広く解釈し、伝統的な意味での歴史研究の「外部」に注目する事になる。そこで、議論をすすめる前に、まず1990年代以後に「経験」という領域に関心が高まっていった過程を現在の歴史研究につながる転換点として捉えることを通じて、問題の限定をおこないたい。

1. 20世紀の戦争・植民地支配と 和解をめぐる

20世紀末に冷戦が終結したことによる変動はさまざまな面に及んだ。日本では自民党による長期政権が終わりを迎え、首相が植民地支配へのおわびを表明す

るなど、戦争と植民地支配の歴史の捉え方に変化の兆しが見られた。戦後50年を前に、それまで語られてこなかった個人の戦争経験も数多く語られるようになる。

1990年代の日本では、戦争責任をめぐって哲学者や文学者なども参加し、活発な議論が行われた¹。韓国社会からの日本軍慰安婦制度の犠牲となった当事者による証言のインパクトは大きく、さらなる証言と資料の掘り起こしがすすめられ、良心的な歴史学者や活動家によって、システム化された戦時性暴力の存在が解明されていった。こうした状況はマスメディアとも共振しており、この時代のテレビが、戦時期における加害の問題をその前後の時代と比べて多く取り上げたことが明らかにされている²。

時代の変化は歴史研究のあり方全体の変化とも連動していた。この時期における、戦後歴史学の転換期の議論に大きな影響を及ぼした一つは、西川長夫による国民国家（批判）論であろう³。当時も現在も西川の議論に対する批判はあるが、個別細分化が進む研究を、それまでとは別のかたちで批判的研究として結びつけ、新たな論点をたてたのは、大きな功績である。

また、国民国家批判の高まりも一つの契機として、国民の外側に置かれてきた人々への関心が高まり、その歴史の探求が進んだ。実際に、在日朝鮮人、琉球・沖縄史、アイヌ民族史の研究が進展し、それと並行するように「帝国の歴史」「植民地の歴史」の検討が盛んになされたことは、研究分野の景観を劇的に変化させた⁴。

植民地研究の進展は、歴史教科書における記述も変化させてきた。日本軍慰安婦制度の扱いなど、象徴的な問題についてしばしば論点とされるが、それ以外の部分で変化してきている点が見過ごされていることも少なくない。研究者・学生が国境を越えて行き来し、学び、意見交換をすることで、それまで国民国家の枠組みで議論された状況は大きく変化してきた。専門家同士の見解の齟齬が著しく減少してきたのも、この間の大きな達成であろう。

しかし、社会自体が変化していくことで、歴史学がこれまで重視してきた学問と社会とのつながりもまた変質した面がある。もちろん個別には、自らの歴史研究を通じて、戦争犠牲に関する和解に研究が貢献できた例もある。たとえば、戦時中の強制労働をめぐり、西松建設（旧西松組）と中国人労働者およびその遺族との間の和解である⁵。労働現場の現在の管理者である中国電力も交えて、和解が育まれてきた歴史はみのがしてはならない。だが、総じてみれば、多忙化・規律化する大学の中で行われる学問と流動化する社会との良い関係とは何か、模索が続いているのが現状であろう。

こうした状況への反応として、新たな統合的アプローチをうみだすことよりも、確実に共有しうるものとして、東日本大震災、コロナ禍といった「出来事」

1 小森陽一、高橋哲哉編『ナショナル・ヒストリーを超えて』東京大学出版会、1998年。

2 米倉律『「八月ジャーナリズム」と戦後日本：戦争の記憶はどう作られてきたのか』花伝社、2021年。

3 西川の著作は多いが例えば、『国民国家論の射程 -あるいは“国民”という怪物について』柏書房、1998年。

4 植民地研究の蓄積については日本植民地研究会編『日本植民地研究の現状と課題』アテネ社、2008年、同『日本植民地研究の論点』岩波書店、2018年を参照。

5 内田雅敏『元徴用工 和解への道 -戦時被害と個人請求権』筑摩書房、2020年。

やそこでの「経験」への回帰が見られる。「経験」が歴史研究に大きな位置を占めるようになってきた背景には、敗戦から長い時間が経過し、直接的経験を有する世代も交代して「なぜ戦争経験を継承するのか」という、これまでは自明であった問いも改めて問い直されるに至った状況があるだろう⁶。戦争や植民地支配の研究も、これまでと同じようには進められない現状がある。

このように「経験」への関心は高まっているにも関わらず、専門家ではない個人がみずからの「経験」を記す行為、とくに自らの歴史について書く行為の現在についての学問的関心は、歴史学において決して強くはない。

国際的にみれば、記憶への学問的関心の高まりと相互補完的に、自伝に関する関心は高まっている。オーラルヒストリーの代表的研究者である、ポール・トンプソンはナラティブNarrativeという点でオーラルヒストリーと共通する自伝研究の経緯を簡潔に整理している⁷。

トンプソンによると、1990年代以後、自伝と、手紙や日記など個人の書いた記録(Life writing)への学問的関心が高まってきたとする。1999年に中国・北京大学の文学研究者趙白生(Zhao Baisheng)が呼びかけてInternational Autobiography Associationが結成された。Life Writingは自伝も含む極めて広いカテゴリーであるが、最近になってオックスフォード大学出版会から7巻本からなる通史的な研究成果が出されている。その最も新しい巻は、1945年から2020年までを対象とするものだ⁸。

もちろん、日本でも過去に書かれた自伝や手記についての歴史研究は多くある。近年では個人の残した記録を「エゴ・ドキュメント」という名称で捉えようとする研究動向がある⁹。それでも、繰り返すが、現在進行形で生み出されている個人レベルの歴史叙述と歴史学との関わりは極めて薄いのである。だが、私は、この点に、戦争と植民地支配の歴史も含めた相互理解のための重要な手掛かりが残されていると考えており、以下では市民が自分の「経験」を表現する事例について論じていきたい。

2. 歴史の「現場」

この問題は、「歴史の大衆化」と関連しているというのが筆者の見立てである。念のために確認しておく、歴史学そのものへの世間的な関心は低調だとしても、歴史研究者の専門的な知識が求められていないわけではなさそうだ。専門的な歴史学者(たとえば、磯田道史、呉座勇一そして吉田裕)が執筆した書籍は数十万部も読まれた。これは日本の読書市場においては大きなことである。また、前回フォーラムで指摘されたような、地域史研究を担う「準専門家」との交

6 蘭信三、小倉康嗣、今野日出晴『なぜ戦争体験を継承するのか：ポスト体験時代の歴史実践』みづき書林、2021年。

7 Thompson, Paul, Joanna Bornat (2017) "The Voice of the Past: Oral History" 4th edition, Oxford University Press.

8 Hayes, Patrick ed. (2022) "The Oxford History of Life-Writing: Volume 7: Postwar to Contemporary, 1945-2020" Oxford University Press.

9 長谷川貴彦『エゴ・ドキュメントの歴史学』岩波書店、2020年。

流も、高齢化という課題に直面してはいるものの維持はされている。

しかし、私が着目したいのは、こういった、これまで存在してきた歴史学と人びとの結びつきかたの延長には無い領域である。この領域では、歴史学と人びとの活動は乖離していて、伝統的な関心とまた別に存在する広義の歴史への関心と研究がつながっていないのが現状である。この新たな関心が現れる場を、私は「歴史の『現場』」と呼びたい。

大衆化を捉える際には、各種コンテンツ産業に現れるような、歴史の商品化やその消費という面を考察することも重要である。しかし、私がここでとり上げたいのは、市民が生きていくうえで感じる切実な必要性に基づく、広い意味での「歴史」に寄せられる関心と、それを表現した作品である。

最初に事例としてとり上げたいのは「闘病記文庫」である。近年、各地の図書館で、闘病記を集めたコーナーが作られている。闘病記とは、病気にかかると向き合ったのか、その経験をふりかえってまとめた作品である。その意味で、当人の歴史である。なぜ、このような作品が求められるのだろうか。病気についての標準的な知見であれば、学会や専門家の監修した「科学的」知見が最重要である。しかし、それだけでは人びとは納得できない。ある治療を受けたとき何が起こるかを確率としては説明できるが、そのことが患者自身にもたらす「意味」は、標準化できない。それぞれの文脈を持つ個人が出来事を解釈するには、また別の個人の経験に触れ、学ぶことが必要となることも少なくないのである。

第二に、過去を思い出すことが認知症予防という健康上の効果があるとして、積極的に人びとの回想をバックアップしている自治体がある。日本の中部地方・愛知県の北名古屋市では「昭和日常博物館」として、20世紀の庶民生活に深く結びつくモノを収集し、それを地域での集まりに提供して、回想法プログラムを支援している。高齢者が収集された過去のモノを手がかりに語り、また耳を傾ける。そうした活動は、地域活動への意欲を高める面があるという。

最後に、孤独や孤立は社会問題となっているが、関西の京都市では、高齢者の孤独・孤立対策として、地域の集まりで自分の歴史を語る場を設ける市民活動が、行政から高く評価されている。

こうした取り組みにかかわっている人々は、歴史を専門的に学んだ人ばかりではない。シンプルに、人を支える専門職の観点から、人が他の個人の歴史に触れ、自らの歴史を表現することが持つ「効用」に着目し、活用しているのである。この新たに現れた、個別化する歴史意識をめぐる実践的ニーズと歴史学の距離は断絶というよりほかない状況にある。

歴史学は、どのようにすればこの新たな必要性和結びつくことができるだろうか。その際に、戦争や植民地主義の問題はどのように考えられるのか。この問いについて考える際の参照項として、1985年に開催されたユネスコ国際成人教育会議で採択された学習権宣言を参照したい。

その冒頭で、次のように学習権について規定している。

学習権とは、読み書きの権利であり、問い続け、深く考える権利であり、想像し、創造する権利であり、自分自身の世界を読みとり、歴史をつづる権

利であり、あらゆる教育の手だてを得る権利であり、個人的・集団的力量を発達させる権利である。(国民教育研究所記)

自分自身の世界を読みとり、歴史をつづることが、学習者としての一人ひとりの権利なのだとされている。関東地方の神奈川県川崎市に暮らした一人の在日朝鮮人女性が、地域の識字学級で文字を習得して書いた印象的な言葉は、彼女らの綴り方をまとめた本のタイトルになった。——「わたしもじだいのいちぶです」¹⁰。

民族的マイノリティの集住するこの地域では、ヘイトスピーチの被害が相次ぎ、全国初の規制条例が定められた。生存が危ぶまれる場面すらある地域で書かれたこの言明は、人々の権利と歴史認識との結びつきを、私たちに問いかけているのではないだろうか。

3. 色川大吉と自分史

歴史を綴る権利といったとき、その書き手をどう考えるかが重要だろう。これまでこの問題を誰も指摘しなかったわけではない。歴史学者の色川大吉(1925～2021)は1970年代に「自分史」という言葉を造語した。自分史という言葉は、その後多くの人々に受け入れられるようになった。なぜそれは多くの人に参加する意思を芽生えさせたのだろうか。色川の主張には今日検討に値する重要な示唆が含まれている。まず、色川の歴史学の足跡をたどりながら、その歴史研究の展開と、さらに歴史の書き手について考えてみたい。

色川大吉の『明治精神史』をはじめとする歴史学者としての研究は、現在でも日本研究の古典として重要な位置にある。民衆史と呼ばれる歴史的な観点は、社会と向き合うなかで作られてきた。特に、1960年の安保闘争が大きなきっかけである。すでに韓国では学生革命が起きていたが、日米安保条約の改定をめぐって日本では最大級の大衆的抗議行動が起きていた。中国における大衆動員を伴う日米安保改定への抗議もまた、この出来事の歴史的意味をかたちづいている。色川はこの一連の動きに、歴史学者として参加し、自らの過去の見方を練磨してきた。当時自明視されていた前衛による指導と大衆(とその行動)という枠組みを問い直す視座は、この時がなければなりたなかったと本人は述べている¹¹。

こうした確信に基づいて彼は東京都の八王子地域でフィールドワークを続け、民衆自身が憲法を構想していた事実を解明した。1968年の同地域での五日市憲法草案の発見は、日本の地域社会に暮らす民衆が当時の政治状況のなかで、いかに民主主義を構想し、次の社会を展望していたのかを示す代表的な事例となった。

色川は、学生や市民と共にフィールドワークを実施する中でこの稀有な資料にであうが、もちろん歴史家がフィールドで出会うのは資料だけではない。多くの人びととの出会いのなかに、橋本義夫(1902-1985)との出会いがあった。

10 康潤伊、鈴木宏子、丹野清人編『わたしもじだいのいちぶです 川崎桜本・ハルモ二たちがつづった生活史』日本評論社、2019年。

11 色川大吉『自分史：その理念と試み』講談社、1992年所収の「六月には重い霖雨^{りんう}が降る」参照。

橋本は戦前に生まれ、こよなく書籍と歴史を愛し、書店を営みながら地域文化活動を志した人物である。大正デモクラシーの影響をうけつつも、戦時期には戦争協力の旗を振ったことについて、戦後「戦争責任自己調書」を作成し、自らの罪状を書き上げるなど深い自己との向き合い方をする人であった¹²。

この橋本義夫という人物は、地元に関係する記念碑をたてる活動などと並行して1950年代から地域の人々に自分の経験や日々の実感を書き記すことをすすめた。関係者も増え、1960年代後半にはいよいよ冊子が作られる。色川はこの橋本の実践を見て、「現代の常民：橋本義夫論」を執筆する¹³。

その後、1970年、自らが生きた時代の一人の視点から捉える試みとして、自分史という言葉で冠した「ある昭和史：「自分史」の試み」を執筆した。橋本の呼びかけに応答するかたちで、歴史学者である自身も歴史に生きた経験を執筆し、他の人々にも呼びかけたのである。この本は、この年の毎日出版文化賞を受賞し、広い読者を得た。今日では日本においては自分史という言葉が一般化しているが、それは色川大吉という個性的な歴史学者が発明したからである。それは人々を「代表」したり、「指導」をおこなったりする専門家としてではなく、一人の市民として時代に向き合う実践を遂行するという点で、彼の安保経験と重なっている。

色川の動機は昭和戦前期を経験した世代として、戦争を遂行した国家と自分自身のかかわり方をとらえ返そうという提起であった。その後、沖縄や北海道を含め全国の各地に自分史の集まりは広がってゆき、自分史を対象とする自費出版が地域の出版社によって支援され普及していった。色川自身も各地の催しには積極的に足を運び、自分史について論じた。

その後、1980年代以後には自分史産業とも呼べる広がりを持つようになり、さまざまなセミナーが開催され、2010年代になると、大手新聞社が自分史を作成するための年表を売り出したり、記者が取材して自分史を書いたりするなどの事業に乗り出してきた¹⁴。また就職活動や、学校教育のなかで自分史という言葉が用いられる場面も増加している。

4. 自分史と地域史

私は、「自分史」を書くという実践は、つきつめていけばいくほど、地域や別の他者とのつながりが明らかになってゆく探求であり、そうして個人と地域や国家の歴史がつながってゆくからこそ、歴史学と交差する面があると認識している。

その例として、ここでは自分自身も深く関与している長野県南部の下伊那地方の歴史に注目したい。とくに1970年代から自分史の問題提起を地域史の探求と自覚的に結びつけて捉えた、民俗学者後藤総一郎（1933-2003）の実践からはじ

12 橋本鋼二編、橋本義夫『暴風雨の中で』私家版、1996年。

13 色川大吉『ある昭和史-自分史の試み』中央公論社、1975年所収。

14 小林多寿子『物語られる「人生」-自分史を書くということ』学陽書房、1997年、釋七月子『「自分史」は語る-戦争の記憶、自分史における虚構、台湾日本語世代の自分史-』晃洋書房、2020年を参照。

めて、満洲移民の歴史を明らかにしてきた市民活動につなげていく。

後藤総一郎は明治大学で学生運動にかかわったのち安保闘争後には研究者としての道を歩み、柳田国男（1875-1962）の研究をすすめ、地域と向き合う学問として民俗学を捉えなおそうとしてきた。

後藤は自らの故郷である長野県南部遠山地域において、住民と協力して地域史編纂に取り組んだ。後藤は出身地ならではのつながりを活かして、地域住民とともに地域史編纂をすすめた。それはムラの自分史ともいえるものだ。

そして後藤と地域住民との連携は歴史書の刊行で終わることなく、書き記された村の歴史を住民自身のものにするために、村誌の学習を継続するために遠山常民大学が結成された¹⁵。後藤の提唱した常民大学運動は多くの共感を呼び、その後、全国に複数のつながりが生まれ、後藤は各地の人びとと積極的に関与していった。常民大学の実践は地元の隣接する市町村にも広がり、飯田歴史大学という学習団体の結成につながった。後藤はそこで行った講座で地域の歴史と自分自身の歴史を結びつけることの重要性を繰り返し強調している。

ここで目指された自己理解としての地域史は、負の歴史も含めて自分たち自身の歴史を明らかにしようとする動きにつながっていった。飯田歴史大学の講座では、戦前に中国に開拓団として渡った経験を持つ受講生の証言が行われ、他の参加者はそれに耳を傾けた。こうして、長い間触れられてこなかった、この地域から送出されていった数多くの満洲移民の歴史の究明につながっていく。1980年代から90年代にかけて、地域住民が自分たちの地域の満洲移民の歴史を掘りおこしはじめたことを基盤として、戦争の歴史について聞き取りをする営みが2000年代から本格化していった。

この動きが、飯田市歴史研究所という自治体単位の歴史研究専門機関が作られることと連動した¹⁶。人口10万人の飯田市は、地域の歴史を編纂するために、大学院で歴史学を学んだ研究者を任期付き研究員として雇用し、地域の歴史研究を推進している。この歴史研究所と市民による聞き取り活動は共に歩みをすすめ、多くの人の証言を記録してきた。

市民たちが結成した満蒙開拓を語り継ぐ会のなかには、集団自決を生き残り帰国してきた当事者もいた。傷ついた歴史を当事者が語るのは容易なことではない。少しずつ時間をかけて、信頼が育まれ地域が歴史を語ることのできる場になっていったのである。

この地域では戦後の日中友好運動も活発であった。また、中国残留邦人の父として、また支援者として全国に問題を訴え続けてきた僧侶がいたことなど、さまざまな関係者による膨大な蓄積が総合的に結びつき、2010年代には満蒙開拓平和記念館が設立されるに至った¹⁷。日中再不戦の碑を持つ記念館は地域住民の様々な記憶と経験をまとめ、継承するための施設である。

地域の歴史が書かれるとき、それをいかにして自分事にするか、そこで住民自

15 地域文化研究会編『地域に根ざす民衆文化の創造』藤原書店、2016年。

16 飯田市歴史研究所について、飯田市歴史研究所ウェブサイト参照。<https://www.city.iida.lg.jp/soshiki/39/>

17 満蒙開拓平和記念館（阿智村）ウェブサイト参照。<https://www.manmoukinenkan.com/>

身の学習と調査・研究がもつ重要性を、下伊那地方の実例は示唆している。

おわりに

筆者は2013年から2015年にかけて、飯田市歴史研究所で研究員として勤務した。そこで地域住民の参加するゼミナールを担当することになるのだが、そこでかねてより関心を寄せてきた自分史を書く場を設けた¹⁸。

ここで書かれた、中国にルーツをもつ一人の女性の自分史をとりあげたい¹⁹。自分史を書くためにゼミに集まった相沢莉依さんは、母が中国残留婦人であった。戦後の中国に生まれた相沢さんは、同地で育ち、大学職員の職も得ていたが1990年代に母のルーツをたどり来日することを決意した。以後、日本へと移動し、働きながら日本語も習得した。

彼女が執筆した『幸－幸運幸福に恵まれた平凡な人生』（2016年）という自分史は、自らの半生をたどったもので、日本と中国をまたいで生きた女性がどのように暮らしてきたか、その経験を綴った記録である。この地域の歴史研究がどれほど盛んであっても、彼女自身が書くことが無ければ、半分は中国の歴史、半分は日本の歴史という本が生まれることはなかっただろう。聞き取りが行われても、聞く側が両方の歴史に精通していなければ、その経験の全貌は聞き取れないだろう。このユニークな経路を包括的にたどることができるのは、まず当事者である相沢さん自身だった。本書が2021年に「女性文化賞」を受賞したことは象徴的で、地域の歴史文化が、さまざまなルーツを持つ当事者によって描かれることでより豊かになる可能性を物語っている²⁰。

ゼミの場を共有した人びともまた、顔の見える存在として中国帰国者である相沢さんに出会いなおしていくことになった。相沢さんの例が示唆しているのは、歴史を背負った主体として私たちが語り合う場が公的に構成されることで、実際に多数の越境を組み込んだグローバル化する現在の市民に相応しい歴史意識が構成できるのではないか、ということである。地域で共に暮らす「わたしたち」の中には、数多くの歴史が流れ込み組み込まれている。「わたし」の歴史が書かれ、共有されることを通じて「わたしたち」が作られていく。

グローバル・ヒストリーの問題提起は、国民国家の枠組みを固定化し、そのなかを均質化する想像力に対して批判的な再検討を求めるものだった²¹。具体的な手がかりはどこにあるのだろうか？歴史学がこれまで積み重ねてきた過去自体の探求だけでなく、戦争と植民地支配の歴史につながる人生を生きてきた一人ひとりの自分を理解したいという願いに伴走し、それを形にする「歴史の『現場』」

18 ゼミナールの記録として、安岡健一「「個」の歴史から地域を見る：「自分史」が問い直すもの」『飯田市歴史研究所年報』16号、2019年参照。

19 安岡健一「ある自分史にみる満洲の記憶と地域史研究の可能性」佐藤量、菅野智博、湯川真樹江編『戦後日本の満洲記憶』東方書店、2020年。東方書店（発売）2020年4月

20 「女性文化賞に飯田の中国残留日本人2世相沢さん 平和への思い 日本語で紡ぐ」『信濃毎日新聞』2021年10月19日。

21 ゼバステアンのコンラート（小田原琳訳）『グローバル・ヒストリー：批判的歴史叙述のために』岩波書店、2021年。

を創るという関与もできるのではないだろうか。

これまでの歴史学が問題点を指摘する検察官や、審判をくだす裁判官の役割に集中してきたのに加えて、人びとの権利の実現を支援する弁護士のような役割も新たに果たすべきではないかというのが私の主張である。この役割を果たしていくことで可能になる、他の専門家、あるいは多くの非専門家との連携や、次の時代の、より拡張された歴史研究の担い手育成がありえるように思う。

それぞれの国の若者たちが、歴史学者とともに、家族史も含めた自分史を共に書くワークショップなど、「現場」の形態は多様なものが考えられる。こうして個々人の歴史をつづる権利の実現に貢献することが、歴史学の時期区分でいえばとくに今現在と接点を持つ現代史の担う職能の一つとして付け加わるならば、国境を超えた対話も促進され、今よりもいっそう歴史学の市民への貢献度が高められるのではないだろうか。それぞれが生きる社会の「いま、ここ」における歴史意識のあり方に向き合うことは、私たちのこれからの対話をより豊かにする一助となるに違いない。

第4セッション
研究

発表 8 (韓国)



「発展」を越える、 新しい歴史叙述の可能性

—韓国における植民地期経済史研究の行方—

梁 知恵

東北亜歴史財団

[原文は韓国語、翻訳：関 東暉（都留文科大学）]

1. 2011.3.11.

こんにちは。梁知恵と申します。貴重な場にご招待いただきまことにありがとうございます。ここが新しい「文」を発表する場というよりも、新しい「話」を作っていくための場だと思いましたので、文（文語）ではなく、言葉（口語）で発表文を作成しました。

「20世紀の戦争・植民地支配と和解はどのように語られてきたのか」という重いテーマを前にして、まず、2011.3.11.という7つの数字を出してみたいと思います。東日本大震災が起きた日です。おそらくこの場に参加されている方々にもこの日は特別に記憶されるのではないかと思います。私もそうです。だからこそ、もし研究者に世代性のようなものを付与することができるのなら、私は自らをポスト2011年3月11日世代だと考えてきました。

今日私は大震災から10年余りの間、私、そして同時代を生きてきた韓国の研究者たちがこの悲劇を目の当たりにし、どんなことを悩んできたのかをみなさんにお伝えしたいと思います。

2. 3.11と人新世、そして韓国の 近代経済史研究

東アジアの国々にとって2021年はどんな年だったのか気になります。3.11から10周年の2021年、韓国の知識界においてこの事件はほとんど忘れ去られていました。韓国最大の研究検索システムであるRiss.krによれば、この年に韓国で発表された東日本大震災関連研究は5編にも及びませんでした。一方で、生態環境（ecological environment）に対する関心は「人新世（Anthropocene）」とい

う新しいキーワードを中心に急激に拡大されはじめました。2020年、世界的なパンデミックの流行をきっかけに、韓国社会で浮上したこの概念は、言論、出版、学術などの知識界全般において最も影響力のあるキーワードの一つとして浮上しました。一方で、近代韓国経済史研究は「経済」と「発展」という共通分母を持ちながらも、上で言及した「忘却」と「浮上」の波に幾分か距離を置いて進行してきました。その流れを、ざっくりと、いくつかの基点を中心に簡略にまとめてみたいのです。

まず、1990年代以前に展開された「収奪論」と「近代化論」の対立です¹。解放後、植民史学²からの脱皮を掲げて提起された「収奪論」は、初期には日本帝国主義が強制力を利用し土地と米穀を奪ったという点に重きを置きました。「とにかく奪った」と主張するこのような「原始的収奪論」は、その後研究が深化し「構造的収奪論」へと転換しました。資本主義化を通じた開発が進んだが、その開発の目的は土地、米、地下資源、労働力などを収奪するところにあったとする議論です。これと同時に、1980年代半ば以降は、経済学者が中心となって植民地支配下の経済成長の肯定的な側面を強調する視点も提示されました。いわゆる「植民地近代化論」と呼ばれる議論です。彼らは日本が鉄道や港湾などの社会間接資本を建設し経済開発を促進したのであり、その過程において朝鮮人資本家や労働者も、また成長を図った。その施設とマンパワー（manpower）が、植民地遺産として解放後の高度成長に重要な影響を及ぼしたと主張しました。

このような「収奪論」と「近代化論」の二項対立的な構図は、2000年代以降に「植民地近代性論」が提起されたことで新しい変化を迎えました。近代性論は既存の議論が「近代」を直ちに「善」と捉える点を指摘するところに焦点を置きました。その後、「近代主義」の単線的な発展主義と民族を中心とする大きな物語から離れ、実に多様な研究成果が発表されました³。特に経済史研究においては、「抵抗」と「協力」の間の二者択一的な対立の視点を越え、水道や電気など、社会間接資本の開発において民族を横断する協力の事例などが注目されてきました⁴。

1 解放後、韓国の近代経済史研究の史学史的な整理については次の研究を参照。정태현『한국의 식민지적 근대성찰』선인, 2007.; 이승일『일본의 식민지 지배와 식민지적 근대』동북아역사재단, 2009.; 박찬승『21세기 한국사학의 진로』한양대출판부, 2019.; とくに、植民地支配下に展開された重工業化を中心とした経済企画であった「朝鮮工業化」に関する最近の研究史の整理については、류상운『한국 근현대 경제사 연구에서 제시된 역사상』『경제사학』55, 2013.; 배석만『일제강점기 공업사 연구의 쟁점과 과제』『역사와세계』48, 2015.; 배성준『한국 근대 공업사 1876~1945』푸른역사, 2022を参照。

2 訳注①：日本帝国主義による朝鮮侵略および植民地支配を正当化するために朝鮮の歴史の他律性・停滞性等を強調する史観を「植民史観」と言い、それに基づく研究成果を「植民史学」と呼ぶ。

3 植民地近代性論の意義と限界については「(대담) 식민지근대성론의 역사와 현재」『역사비평』136, 2021を参照。

4 윤해동編『식민지 공공성, 실체와 은유의 거리』책과함께, 2013に収録された研究を参照。

3. 発展を越えて—「生態－経済史」というアプローチ—

東日本大震災という分岐点の後の「覚醒」を記憶しようとする動き、それをきっかけとして「発展」と「成長」を新しい視点でながめようとする多様な試みが登場しはじめました。これらの研究は、一方で「収奪論」の再登場と批判され、他方でポストモダニズム以降の「破片化」を意味すると批判されていますが、まだその研究の具体的な様相がきちんと整理されたことはありません。また、すでに高い水準で公害史や環境史研究が行われている中国や日本の学界に比べ（西洋の Asian studies を含む）、まだ韓国においては環境史的な視点やアプローチが学問的な発言権を十分得ているとは言えないような状況です。よって、私は、最近発表されている研究の中で発展や成長に対して批判的な視点から生態－経済をつなげる歴史研究（ecology-economy history）の特徴や、いくつかの関連事例を紹介することで初歩的な議論を始めたいと思います（スライド1）。

よく知られているように、経済発展に関する研究は帝国主義時代の「植民地学」にその起源があります。第2次世界大戦後は「近代化理論」の成立をきっかけに、世界的な経済成長のための論議へと流れが続いてきました。しかし、1960～70年代を経て、経済と環境の衝突に関する議論が本格化し、1990年代以降、世界的なエネルギー・気候・環境・金融危機を経験しながら経済成長を強調する単線的なアプローチから離れ、それについて省察する生態－経済学の方法論が徐々に拡大されています。ここで紹介する歴史研究もまた、学問的にはこのような流れの影響を受けていると思われます。すなわち、「開発」を人間誰もが本質的に追及するという既存の経済史のアプローチから脱し、「開発」を歴史的構成物として見つめなおす視点です。人間の本性は発展欲望の他にも協同・相互性などの多様な要素が含まれていて、経済成長を重視する「開発」概念は帝国主義下の植民地支配や冷戦期の体制競争の中で統治のために作られたとする立場です。

また、このような観点から、既存のエリートを中心とする分析対象が、地域住民や労働者のような「開発」の利害当事者へと広がっています。また、人間の概

| 区分 | 既存の経済史 | 生態－経済史 |
|--------|------------------|----------------------|
| 開発の定義 | 競争的欲望による自然発生的な概念 | 統治のために作られた歴史的概念 |
| 分析対象 | 専門家（官僚・企業・知識人）中心 | 利害当事者（地域住民、労働者など）を含む |
| 人間の概念 | 孤立した個人 | 多様なスケールの関係網の中の個人 |
| 研究方向 | 下向式 | 上向式 |
| 研究方法 | 貨幣的指標・量的分析 | 物理的・生物学的指標、脱指標・質的分析 |
| | 経済学中心 | 学際的 |
| 追求するもの | 効率と最適の成長・配分・厚生 | 持続可能性と必要充足 |
| 評価 | 費用便益分析 | 多次的な価値の測定 |
| 理念 | 成長主義、功利主義、機能主義 | 持続可能主義、生態環境主義 |
| 論点 | 経済成長の経路 | 経済成長の多面性 |

※ 出典：Arturo Escobar, *Encountering Development*, Princeton University Press, 1994.; Robert Potter et al., *Geographies of Development*, Prentice Hall, 1999.; 김베르 리스트, 신혜경訳『발전은 영원할 것이라는 환상』봄날의책, 2013.; 김병권『기후를 위한 경제학』착한책가게, 2023.

スライド1 既存の経済史と生態－経済史の比較

念も既存の経済史では利害関係を重視する孤立した個人として定義されてきましたが、オルタナティブな流れでは、世界、国家、地域、村、家族のように、多様なスケールのネットワークの中に置かれた関係的な存在として定義しています。

その分析方法においても、これまでのやり方がGDP・GNPのような貨幣的指標を設定し、それに従って量的分析を重視してきたのであれば、オルタナティブな視点では、貨幣的指標に換算できない物理的で生物学的指標や、指標中心のアプローチから脱した質的アプローチを優先しています。これによって、伝統的なアプローチにおいては効率的な経済成長のモデルを発見するところに焦点をあててきたのに対し、オルタナティブなアプローチではそれぞれの開発現場における固有の政治・歴史・文化・社会・空間・生態的特性などの総合の中からその固有性を分析するところに重点を置いています。すなわち、経済成長の成果とともにその過程において特定の空間・階層・環境に転嫁してきた不平等や被害を明らかにし、それを通じて経済成長中心の開発に対するアプローチを省察しながらそれに代わるオルタナティブなパラダイムを用意する必要があるという認識です。

4. 植民地朝鮮の「生態－経済史」 —いくつかの事例—

以下、このような観点から、日帝下の植民地朝鮮における開発の問題について、生態－経済史の観点からアプローチしたいいくつかの事例を紹介してみたいと思います。

(1) 開発と「無知」の悲劇

下の写真（スライド2）は2023年に発表されたカン・ジョンウォンの研究に収録されたもので⁵、王子製紙工場の廃水を温泉のような「薬水」だと誤解した民

| | |
|---|--|
|  |  |
| <p>〈写真1〉 朝鮮工場の温泉プール</p> | <p>〈写真2〉 下水道で病気を治すという群衆</p> |
| <p>※ 出典： 〈写真1〉は成田潔英『王子製紙社史3』（1958）、〈写真2〉は『朝鮮日報』1933.8.29.; 강정원「일제시기 펄프제지 산업의 확장과 '개발재난'—王子製紙를 중심으로—」『해항도시문화교섭학』28、2023から再引用。</p> | |

スライド2

5 강정원「일제시기 펄프제지 산업의 확장과 '개발재난' -王子製紙를 중심으로-」『해항도시문화교섭학』28、2023。

衆が廃水の出てくる下水口に集まっている様子を写しています。廃水には製紙の原料である原木を溶かすために混合された硫黄や灰汁、その他有害薬品が含まれていました。にもかかわらず、木材を蒸した後の廃水が「温泉」のように放流されると、その有害性を知らない民衆たちがこれを薬水だと誤解したのです。この研究によると、すでに王子製紙は日本本土で1911年から漁民たちの抗議を受け、住民たちに何度も慰労金を支払ったり訴訟を起こされたりしていました。しかし、朝鮮ではここが「朝鮮であるため」、「とても大変で」「めんどろな」廃液処理が必要ないと主張しました。公害に⁶対する植民地人の無知、そして無知であったがゆえに汚染水を自分の体にかけている、この悲劇的な場面から、植民地の民衆にとって「開発」とは何であったかについてももう一度考えさせられます。また、すでに廃水の危険性や有害性を認識していたにもかかわらず、植民地では「規制がない」という理由で汚染物の放流を経済的に利用する企業の姿を通じて、植民地の経済構造が持つ極端な一面を垣間見ることができます。

(2) 開発と災難

一方で、開発に対するロマンチックな構想がもたらした悲劇を扱う事例も注目されています。日帝下における朝鮮の大型ダムの開発や北部の山林地帯の中の開拓村の造成を扱った梁知恵の研究がそれです。

まず、電力開発事業の事例を見てみましょう⁷。スライド3の描写⁸のように、植民地期に日本の企業は朝鮮北部、すなわち今の北韓⁹地域で「流域変更式技術」



スライド3

6 訳注②: 「公害」という言葉が現在のような意味合いで広く使われるのは戦後になってからであるが、ここでは、発表文の原文表記に従い、「공해」を「公害」と訳す(以下同様)。

7 양지혜『일제하 대형 댐의 건설과 개발재난』: 일본질소의 부전강수력발전소 건설 사례를 중심으로』『한국 문화』89、2020。

8 訳注③: 「⑤本文(抜粋)」は、訳者が原文(日本語文)を確認し、該当箇所を原文に従って記した。なお、引用に際し、旧漢字を新漢字に直した。

9 訳注④: 朝鮮民主主義人民共和国

という最新の工法を利用し大型ダムを相次いで建設しました。これに基づいて、いわゆる「朝鮮の工業化」と呼ばれる重工業化の動力が形成されました。既存の研究では電力と重工業化の展開という「生産力増加の指標」に関心が集中していました。しかしこの研究はダム建設後に急激に地域環境の再編が行われたが、その過程においてずさんな建設が行われ、堤防の崩壊、春の飢饉や夏の洪水が頻繁に起こったという点に注目しました。また、同時期の日本本土では水力電力の開発に先立ち、水利権の利用料を企業に強制し河川整備事業を同時に推進しましたが、朝鮮では企業のそのような費用が免除されていたことに注目しました。先ほど取り上げた王子製紙の事例と同様に、「植民地における規制の空白」の問題です。この研究では、逆説的に、開発それ自体が地域社会にとって一つの大きな災難であったと分析しています。

続いて、朝鮮総督府とさまざまな企業が朝鮮北部の山林地帯で実施した開拓村事業についてみてみましょう¹⁰。総督府とこの事業に参加した企業は日本帝国内の人口過剰、とくに朝鮮半島内の火田民¹¹・貧農・罹災民・開発難民などを朝鮮北部の山林に入植させ人口問題を解決すると同時に新しい沃土を作ることができると構想しました。企画者たちは北海道など、日本帝国内の最新の高地の農学技術と種子を導入する一方で、商品の流通網を拡張し、開拓村において科学・効率・発展を成し遂げることができると宣伝しました。その結果、咸鏡南道や咸鏡北道をはじめ、いろいろな地域の山林に火田民、貧農、罹災民などが収容されました。しかし、やせている高地の土壌や極端な気候変化による被害が続き、事業は全面的に失敗しました。結局、これらの地域では飢饉が発生し飢えに苦しむ人々が続出し、総督府は「開拓村」という定着型農村ではなく、各種建設工事現場への労働移民として貧民人口収容政策を転換せざるを得ませんでした。開発現場についての具体的な理解なしに推進された開発政策が、またもや新しい災難に終わってしまったことを見せてくれる代表的な事例です。

(3) 戦争中の暴動

次に日中戦争以降の戦時下に注目してみたいと思います。2014年に発表された加藤圭木の研究には¹²、1938年、黄海道鳳山郡の浅野セメント工場に抗議した住民運動の事例が取り上げられています。それによると、浅野セメント工場の排煙、粉塵による被害を受けた住民たちは工場側に数回にわたって「防塵設備」などの公害対策を要求しました。「浅野セメント工場といえば、全国各地に多くの工場があり（…）防塵機械がなければ近隣住民の生活に重大な問題をもたらすことを知らなかったはずはない」という主張でした。実際、日本本土において浅野セメントは早くから公害問題を起こしていたし、それに対する訴訟や損害賠償の前例がありました。植民地の朝鮮人もこの点を的確に指摘したことがわかりま

10 양지혜 「탁상 위의 유토피아: 일제하 조선 북부의 개척촌 조성과 실패」 『사람』 81, 2022.

11 訳注⑥: 主に朝鮮北部の山岳地帯で焼畑耕作を営む農民を指す。

12 加藤圭木 「朝鮮植民地支配と公害-戦時期黄海道鳳山郡を中心に-」 『史海』 61, 2014.

す。にもかかわらず、地域当局の規制や工場の対策は行われませんでした。加藤の研究では、憤怒した地域住民2、3千人余りが工場を襲撃し設備を破壊した事件に注目しています。既存の研究が日中戦争以降の朝鮮半島の重工業化それ自体に関心を持ち、「植民地における工業投資」という側面に集中していたとすれば、この研究は急激な軍需工業化やそれによる副作用が民衆の「暴力」や、企業と民衆の間の「衝突」として現れたことに着目します。結局、この事件は「公害」ではなく「暴力」のみが注目され、公害についてはこれといった解決策を得ないまま終わってしまいました。

「このような大きな会社の近くで生活するなら、煤煙を吸うのは覚悟しなければならないのではないか」。当時の会社側の担当者が発したこの発言は、戦時下植民地朝鮮の工業化をどのようにとらえればよいか、について多くの問いを投げかけています。

(4) 公害、植民地の遺産？

このような問いは解放後に植民地が遺した遺産についての問いにもつながります。既存の研究において、植民地遺産は主に鉄道・港湾などの物的遺産や植民地下において育成された技術・労働者などの人的遺産を意味していました¹³。しかし、最近の研究では1965年の韓日国交正常化をきっかけに展開された日本からの公害輸出問題について多くの関心が集まっています¹⁴。こうした研究では、1970年代の重化学工業化後の韓国の目まぐるしい経済成長について、スピード戦方式の経済発展のために（農薬などによる各種）公害が輸出された、朝鮮半島の南東海沿岸（日本と向かいあう海岸地域で、1970年に矢次構想に基づいて建設された）の工業地帯に産業公害汚染を転嫁した、また、「援助」あるいは「投資」という名目で日本帝国の歴史から始まった物資・知識・技術などの intra-Asia network が1970年代に復活した¹⁵という注目すべき事実が共通して指摘されています。真の、植民地遺産とは何でしょうか。これらの研究は、植民地期の無分別な開発後にきちんと管理されないまま現在まで放置されてきた廢鉱山¹⁶、また公害による被害で病気を患う身体こそ、植民地から続いた「遅い暴力」であ

13 関連する論争については、허수열「11장. 공업화유산」『식민지 유산, 국가 형성, 한국 민주주의 2』책세상, 2012; 이대근『귀속재산연구』이숲, 2015を参照。

14 신재준「1970년 전후 공해의 일상화와 환경권 인식의 씨앗」『역사문제연구』45, 2021; 고태우「1970년대 한국의 공해 상황과 재난 인식」『개념과 소통』28, 2021; 이슬기「농약을 중심으로 본 녹색혁명: 1970년대 중산과 공해에 가려진 농약 중독」『한국과학사학회지』43-1, 2021; KANG Yeonsil, "Transnational Hazard: A History of Asbestos in South Korea, 1938-1993", The Korean Journal for the History of Science 43-2, 2021; 양지혜「1970년대 한일 간 '발전' 과 '환경' 의 뒤얽힌 정치: 중화학공업화 전환과 일본 공해산업수입을 중심으로」(forthcoming).

15 戦後日本の東アジアを対象とするODAや日本の植民地・占領下東アジアの「経済/環境」支配の連続性については、Aaron Moore, Constructing East Asia: Technology, Ideology, and Empire in Japan's Wartime Era, 1931-1945, Stanford Univ Press, 2013; Mizuno, Hiromi, et al., eds. Engineering Asia: Technology, Colonial Development, and the Cold War Order. Bloomsbury Publishing, 2020; David Fedman, Seeds of Control: Japan's Empire of Forestry in Colonial Korea, Seattle: University of Washington Press, 2020を参照。

16 양지혜「근현대 한국의 광업 개발과 '공해(公害)' 라는 느린 폭력」『역사비평』134, 2021.

り、「清算されなかった遺産」であると主張しています¹⁷。

5. 発展の先の歴史学、限界と可能性

韓国は依然として「経済成長優先主義」が圧倒的に影響力を発揮する社会です。一方で、2015年の朴槿恵政府の国定教科書事態¹⁸、2019年の『反日種族主義』の刊行以降、本格化した歴史否定論の強化¹⁹などにより、現実の政治と学問が対峙しなければならない状況が続いています。この過程の中で、長い間歴史問題の対象になっていた韓国近現代史は「陣営の論理」の枠の中に簡単に還元されてしまうような構造になっています。

しかし、にもかかわらず、2011年という一つの分岐点から新しい歴史像が現れている点にもっと注目していただきたい。人々が生きるための「手段」としての世界ではなく、共に生きていく「場所」としての世界を、万物を貨幣で測定できるという自信ではなく、膨張に限界が存在するという点を明瞭に認識することができる新しい歴史観がそれです。そうした試みには多くの可能性と限界があります。この場を借りて、そうした研究がより意義のある成果へと拡張されるための知恵をご教示願いたいと思います。

17 양지혜 「개발」의 한계선상에서: 그림자 사람들이 말하는 '개발' 과 '개발 너머'] 『내일을 여는 역사』 79、2020。

18 極右の学者たちが中心となって既存の韓国近現代史の教科書が左派に偏向していると主張したところから始まった問題であり、2015年当時、朴槿恵政権が「バランスの取れた正しい教科書を作ろう」と指示し、歴史教科書を単一の国定教科書にすると決定を下したことから本格化した。その後、2016年12月9日に朴槿恵大統領の職務が停止されたことにより、その動力を失うことになったが、歴史教育に対する政治の外圧を感じさせる象徴的な事件として多くの懸念を生んだ。

19 日本軍「慰安婦」や戦時下の朝鮮人強制動員の被害を全面否定する歴史観として、日本の歴史認識問題研究所、韓国の落星堡経済研究所、アメリカのJ・マーク・ラムザイヤーなど、国際的な連帯を形成していることが知られている。

第4セッション
研究

発表 9 (中国)



民国期の中国人は 「日本軍閥」という概念を どのように認識したか

陳 紅民

浙江大学

[原文は中国語、翻訳：江 永博（早稲田大学）]

日本軍人は、近代日中関係において侵略の先駆けとなった。中国人は甚大な被害を受け、身に染みる苦しみを経験した。それ故に、「日本軍閥」という言葉は広く使われていて、中国人が日本を理解するための重要な概念の一つでもあった。現在、中国の歴史学界における「日本軍閥」に関する先行研究は多くないため、なお研究の余地がある¹。本論は概念史の手法を用い、中華民国時期（1912年～1949年）における「日本軍閥」に対する中国人の認識と批判について、簡単に紹介・分析する。近代日中関係史の研究に少しでも役に立てばと願っている。

1. 「軍閥」から「日本軍閥」へ

中国の古典に「軍閥」という言葉があり、その多くは戦争で功績を立てた軍人の経歴を指し、軍功を讃えるポジティブな言葉であった²。近代における「軍閥」の概念は、1880年代（明治初期）の日本に遡ることができる。また、明らかにマイナスの意味が含まれている。日本人学者松下芳男は「軍閥」を下記のように定義した。「軍閥」は軍隊において、軍制の特権を利用し、私利を図るため国政に対して、違法な干渉をする派閥集団であり、政治に干渉し、権利を弄ぶことがそ

1 「中国知網」(cnki.net)の検索結果によると、中国の学者によって関連研究の中でよく使われているのは、「日本軍国主義」、「日本帝国主義」、「日本侵略者」など、「日本軍閥」という言葉を使う文章は多くない。具体例として、下記の研究を上げる。

徐勇「近代中日両国軍閥政治現象及びその政治文化の比較」(《近代中日两国军閥政治现象及其政治文化比较》)『思想理論戦線』(《思想理论战线》)2022年第3期、徐勇「日本の軍部の政治化とファシズムの確立」(《日本の軍部政治化与法西斯主义的的确立》)『歴史研究』(《历史研究》)1988年第4期、陶海洋「近代日本軍閥による国内政党政治の破壊—『東方雑誌』の評論に基づく」(近代日本軍閥破壊国内政党政治——基于《东方杂志》的述评)『江蘇師範大学学报(社会科学版)』(《江苏师范大学学报(社会科学版)》)2017年第4期、趙慶雲(趙庆云)「『日本人民』と『軍閥政府』の分析—濟南事件以後中国新聞雜誌の世論より見た日本認識の一側面」(《“日本人民”与“军閥政府”的辨析——济南惨案后中国报刊舆论对日认识的一个侧面》)『五邑大学学报(社会科学版)』(《五邑大学学报(社会科学版)》)2007年第3期など。

2 謝蔚(謝蔚)「『軍閥』古義形成の分析」(《试析“军閥”古义的形成》)『歴史教学(高校版)』(《历史教学(高校版)》)2009年第1期。

の基本的な特徴である³。1916年袁世凱が亡くなった後、中国は軍人の派閥紛争に陥ったため、一部の知識人は日本の「軍閥」の概念を用い、国内の混乱を批判した。徐勇の研究によると、「軍閥」という言葉の使用は、五四運動以後明らかに増加し、1920年代に入るとさらに普及・流行していた⁴。また、当時の中国の状況は日本と異なって、「軍閥」という概念が中国で普及する過程において、さらに対外的に帝国主義にすぎり付いて、対内的に規律を乱し、民衆を苦しめるなどの新しい要素が付け加えられ、マイナス的な意味しか残っていない言葉に成り果てた。

一方、「日本軍閥」という言葉もほぼ同じ時期に中国に導入され、中国の新聞・雑誌で見掛けるようになった。「全国新聞・雑誌索引サイト」（全国报刊网索引网）の検索結果によると、1919年から1949年までの中国新聞・雑誌に掲載された文章の中で、タイトルに「日本軍閥」が使われた文章は851件に及んだ。最初の2件は、1919年2月11日『民国日報』に掲載された楚倫（楚倫）の「日本軍閥派に問う」と3月21日『時報』に掲載された「日本、軍閥の廃除を実行」であった。1919年から1949年までの30年間に、中国の新聞・雑誌のタイトルに「日本軍閥」がある文章の統計は図1（p116）の通りである。

図1の集合縦棒グラフによると、民国期新聞・雑誌記事のタイトルに、比較的「日本軍閥」の頻度の高い時期は5つあり、いずれも中国に対する日本の軍事侵略の過程との関わりがある。第1、1919～1920年の間、第一次世界大戦終結の後に日中両国は山東問題をめぐり、緊張が高まった。第2、1928年に日本は北伐軍を掃討するため、済南事件を起こした。第3、1931～1933年に日本は満州事変を起こし、東北地方の占領に加え、戦場を華北までに広げた。第4、1937～1941年の間、日本は中国全土に対して侵略戦争を始めたが、日本の侵略に対して中国は孤軍奮闘した。第5、1945年に日本は降伏し、敗戦した。日本の戦争責任に対して、追求と清算が行われた。注目すべきは、1937～1941年の5年間、平均として毎年80件を超えた記事が数えられたが、1942年は前の年の65件から2件に急減し、1943年には15件あったが、1944年にまた2件しかなかった。換言すれば、3年間の平均として、毎年7件に至らず、同じ日中全面戦争期にもかかわらず、「日本軍閥」の使われ方は何故これ程の差があるのだろうか。考えられる原因の一つは、1941年末の太平洋戦争の勃発であり、中国戦場も連合軍と共に戦うことで、日本に勝つ見込みが立ったため、中国人はもはや「日本軍閥」のような感情的な言葉を日本の軍隊に対する恨みと恐れの手掛かりにする必要がなくなったことである。

一方、民国期の書籍の場合、「日本軍閥」が書名または章・節のタイトルとして取り入れられた時期は新聞・雑誌と比べて、明らかに遅れていた。何故なら、新聞・雑誌は常に時効性のある「新しさ」を追求し、それに対して書籍のような出版物は滞留的な側面を持つからである。復旦大学図書館の竜向洋（竜向洋）

3 徐勇「近現代に於ける軍閥現象の政治文化についての分析-軍閥という概念が中国に輸入された原因を考えることを兼ねて」(《近現代軍閥現象の政治文化分析——兼考軍閥概念輸入中国之成因》)『北京大學學法(哲學社會科學版)』(《北京大學學報(哲學社會科學版)》) 1999年第5期、66頁。

4 徐勇「近現代に於ける軍閥現象の政治文化についての分析-軍閥という概念が中国に輸入された原因を考えることを兼ねて」(《近現代軍閥現象の政治文化分析——兼考軍閥概念輸入中国之成因》)『北京大學學法(哲學社會科學版)』(《北京大學學報(哲學社會科學版)》) 1999年第5期、62頁。

民国期中国新聞・雑誌文章の標題に「日本軍閥」が含まれる統計図

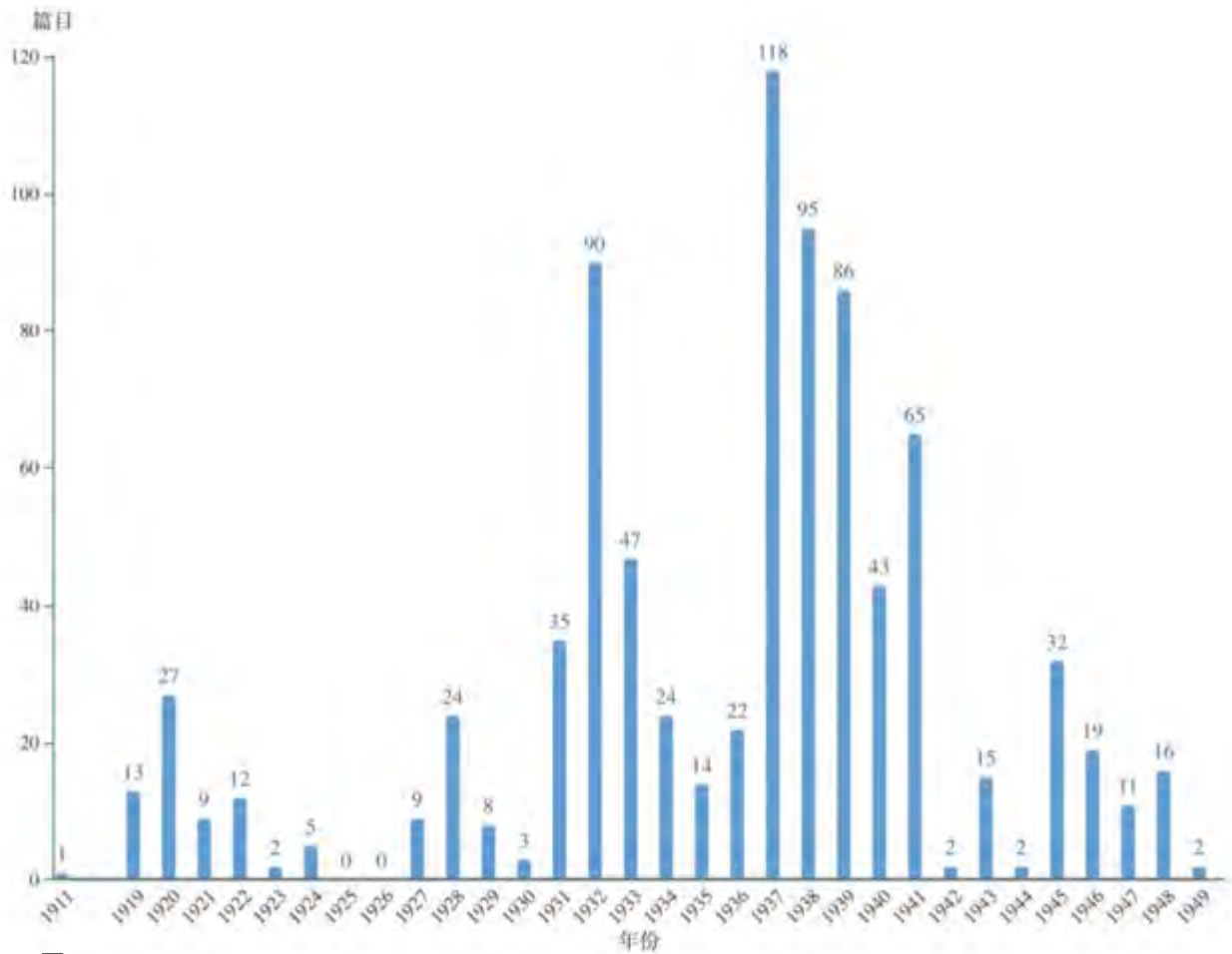


図 1

出典：「全国新聞・雑誌索引サイト」（全国报刊索引網）

研究員が主導する教育部人文社科規画項目（教育部人文社科規則項目）「民国時期図書目録データベース」（民国时期图书目录资料库、中国の主な図書館及び一部の海外図書館の中国語目録を収録している）の検索では⁵、民国期に出版された「日本軍閥」関連の著作は28冊（書名に「日本軍閥」があるのはそのうち9冊）であった。その中で、最も古いのは曹重三が書き1932年5月に萃斌閣から出版された『軍閥による政治干渉及びファシズム運動－対華強硬策（近時日本政治状況の変化）』（《对华硬化之军阀干政与法西斯运动（日本最近政情之演变）》）である。同年8月に、上海時事編訳社は日本人佐藤清勝著の『東北問題と日本軍閥の大陸政策』の中国語訳を出版した。1932年に出版された両書の書名に「日本軍閥」があった理由は、その前の年に日本は中国東北を侵略・占領したことと関わりがあると考えられる。また、1932～1933年に8冊、1938～1939年に6冊それぞれ「日本軍閥」に関する著作があり、ほかの時期と比べて、その数は明らかに

5 現在、技術上では民国期全ての書籍に対し、全文検索を行なうことができず、一部の書籍を対象に書名から章・節などの目録まで検索することができる。

民国期標題に「日本軍閥」と関連のある書籍統計図

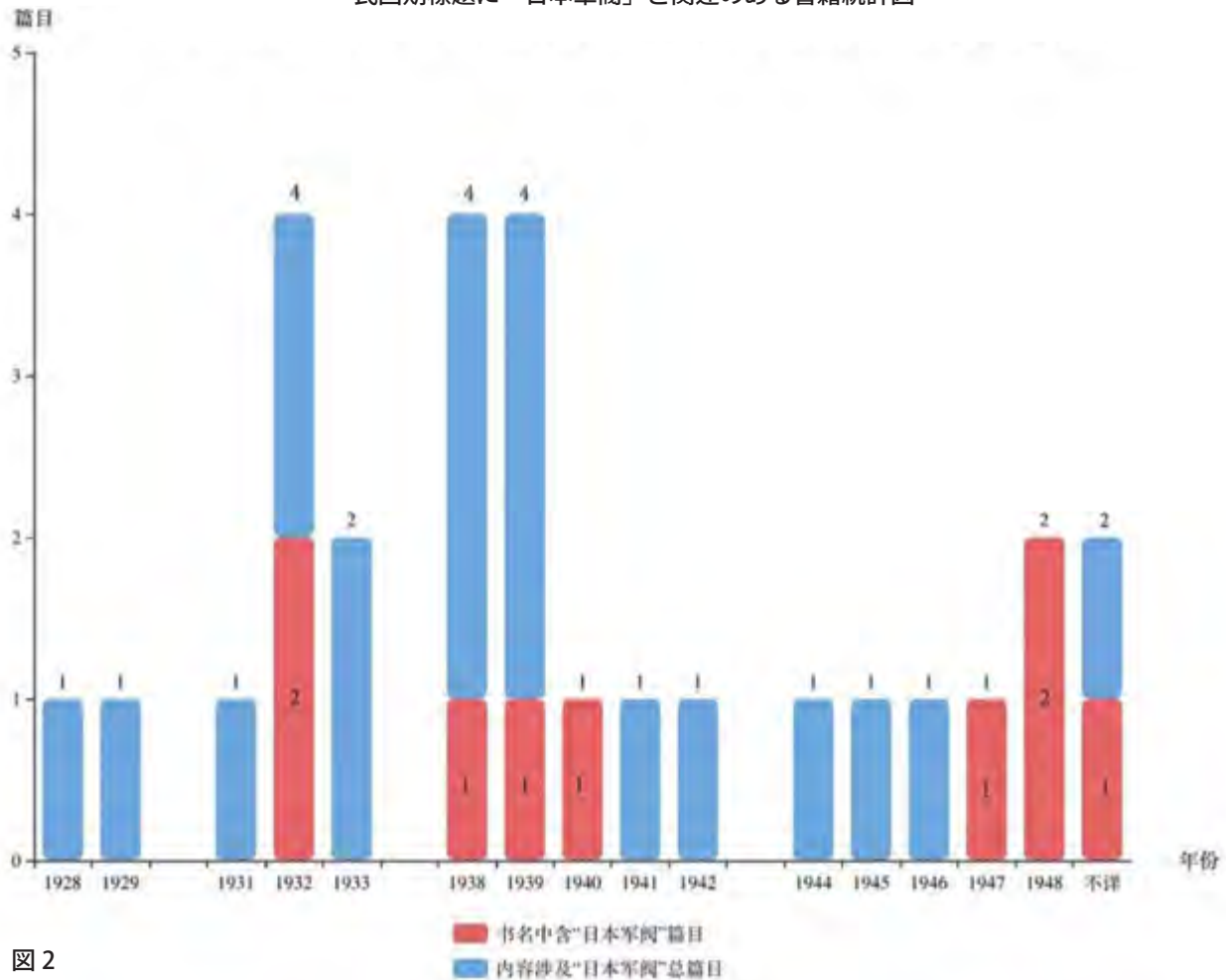


図 2

出典：竜向洋（龍向洋）主導「民国時期図書目録データベース」（民国时期图书目录资料库）

多かった。こうした傾向は、基本的に新聞・雑誌と一致し、いずれも日本が中国侵略を拡大した後であった。

2. 「日本軍閥」に対する中国人の認識とその運用

民国期、中国人が使っていた「日本軍閥」という言葉の意味合いは、現在より広義的であり、一般的には日本軍部・中国を侵略する日本軍またはより具体的に日本軍人・特に高い階級の軍人を指した。例えば、1927年上海の『時事新報』は「日本軍閥青島に到る」という見出しで、中国における日本軍の山梨半蔵大将のスケジュールを報道した。このマイナスのイメージしかない言葉を使った理由は、中国に対する日本の侵略の不当性を批判し、侵略が必ず失敗に終わると主張し、日本軍の暴挙などを暴露するためである。その中では、日本の社会構造に対し、学理的な検討も行われたが、その目的は、常に交錯しながら混合している。以下、簡単な例をいくつか取り上げたい。

(1) 日本軍閥の形成史及びその現状・派閥と人物などの研究を通し、敵を知り己（中国人）を知る

1922年劉馥（刘馥）は著作「日本軍閥論」（《日本军阀论》）の執筆動機を説明した時に、次のように述べた。「日本軍閥は何故全国を支配できたか、如何なる方策を用い、内部に如何なる派閥があるか、その指導者が如何なる人物であろうか。吾輩は大いに研究したいところであり、我が国民は研究せざるを得ないところでもあるなり」⁶。「日本軍閥論」は序論をはじめ、4章構成で、その内容に日本軍閥の由来（文化、憲法、官制、国防などの側面より観察）、日本軍閥の現状（陸海軍、政治、外交、元老、官僚、財閥、政党などとの関係）、日本軍閥の内容（陸軍閥、海軍閥、陸海軍閥の内外政略など）、日本軍閥の行く末などが含まれる。

7年後の1929年に、繆鳳林（缪凤林）が書いた同名の「日本軍閥論」（《日本军阀论》）というタイトルの文章は南京『史学雑誌』（《史学杂志》）に掲載された。繆の文章は序言・結論のほか、八節構成で、第2節から第6節は日本側の資料をまとめ、第7節から第9節は日本の資料に基づいて、整理・統合を試みた。⁷ 実際、当時中国のメディアによって、発表された日本軍閥の歴史及び特徴に関する分析の多くは、日本人の研究成果を参考にしている。

1935年『汗血週刊』（《汗血周刊》）に掲載された「日本軍閥と日本政治」（《日本军阀与日本政治》）は、日本軍閥が日本政治の中で特殊な勢力に成長した理由について、下記の五つの原因があると指摘した。①「憲法上所謂軍部と謂う者は、内閣と対立的な立場にあるから」、②「軍部の大臣は武官制であるから」、③「日本の内閣は天皇に対して責任があるが、国会に対してはない」から、④日本の制度上の慣習として、何回も大臣を担当したことのある経験者でなければ、首相にはなれないため、軍人が組閣する機会が多いから、⑤日本軍閥は「根強い基盤を築き上げた」から。1901年以後、20回を数える日本の内閣の中に、軍人が組閣した回数は10回に及ぶ。世界恐慌が発生してから、「日本の統治階層、有産階級及び地主たちは、日本帝国主義に於ける経済恐慌を打破するために、戦争が唯一の方法だと信じていた。彼らはもはや政党に対する信頼を失い、軍閥を信じ、軍閥こそがこの難しい任務を果たしてくれる存在であった」、それ故に、日本軍閥は日本政治に於ける絶対的な支配権を手に入れた。そして、文章の最後に、日本軍閥に対する中国人の認識が描かれた。

日本軍閥の政治的勢力は日に日に増長し、それに対し、我が中華民族は前途暗澹である。民族の復興、国難を打破するため、我々は強力な政治統治のもとで、国防の強化に努め、日本軍閥の暴力に抵抗するしかない⁸。

6 劉馥（刘馥）「日本軍閥論」（《日本军阀论》）『国民外交雑誌』（《国民外交杂志》）第1巻第2期、6頁。

7 繆鳳林（缪凤林）「日本軍閥論」（《日本军阀论》）『史学雑誌』（南京）（《史学杂志》（南京））1929年第1巻第2期、2頁。

8 白鷗（白鸥）「日本軍閥と日本政治」（《日本军阀与日本政治》）『汗血週刊』（《汗血周刊》）1935年第4巻第11期、168～170頁。

この類の学術研究は穏やかな筆致で著され、文章も一般的に長文が多く、新聞・雑誌で連載する必要がある。また、その多くは1937年の盧溝橋事件・日中全面戦争前あるいは初期に発表されたものである。何故なら、日中関係が緊張していたものの、ある程度関係維持は可能であり、メディアもまだ理性的な情報伝達が可能だったからである。

(2) 日本軍閥とその他の派閥・民衆との間の矛盾を摘発し、間接的に抗日軍民に肩を入れた

満州事件直後、すでに日本軍閥と政府の間に矛盾があると分析した中国人がいた。日本軍閥は四面楚歌の局面に立ち、その立場は日々危うくなりつつあったため、対外戦争を策動し、中国の東北を侵略した。このような動きは、長い間対立している軍閥と政府との軋轢をさらに「深刻化」させ、中国東北の侵略をめぐる方針の相違が見られた⁹。

1937年8月、日中は全面戦争に突入し、中国の新聞は対華方針をめぐる日本軍閥と日本政府の甚だしい矛盾を暴露し、「満州事変以来、日本の対華政策は軍閥の手の内に入れられた。盧溝橋事件勃発後、少壮派軍人の気焰は益々昂まった」。政府はただ既成事実を承認する以外為す術がなく、事前に自らの主張を出すこともできなかった。「この度、華北を蹂躪したことも、上海に増兵したことも、いずれも此輩の軍人の仕業で、彼らは個人の昇進または一攫千金の機会を図る。しかし、罪のない民衆は徴兵されたため、不平が満ち溢れている。膨大な軍事費の支出のせいで、破綻するのは時間の問題であり、日本に於けるかつてない危機が引き起こされた。また、日本政府の内部にすでに重大な亀裂があり、元老重臣はいずれも（海外進出・侵略を）を抑えて、経済の発展に重点を置くべしと主張した」¹⁰。

日本軍閥と政府との矛盾が指摘されると同時に、「日本軍閥－民衆」の二分法もよく中国のメディアに取り上げられた。余協中（余協中）は「日本軍閥と国民に告ぐ」（《向日本军阀和国民说几句话》）の中で、中国が徹底抗戦の決意を表明しながら、日本国民に対して中国を侵略している日本軍の残虐さを指摘し、軍閥に欺瞞されないよう訴えた。「もっとも望ましいのは日本国民が最大の努力を用い、軍閥の侵略行為を阻止することである」、中国の民衆と手を携え、「速やかに日本軍閥を打倒しよう」¹¹。

(3) 日本軍閥に対して警鐘を鳴らし、踏みとどまることを促す

中国のメディアも論理を通して日本軍閥集団に悟らせ、中国に対する侵略を中止してほしかった。

9 岩白「倭軍の東北侵略の動機」（《倭军阀侵略东北之动机》）『日本評論』1931年第1期、8頁。

10 「日本軍閥横暴、日本政府内部に重大な亀裂」（《日本军阀专横，日本政府内部发生重大裂痕》）『錫報』（《錫報》）1937年8月14日、第3版。

11 余協中（余協中）「日本軍閥と国民に告ぐ」（《向日本军阀和国民说几句话》）『経世』1938年戦時特別号（戦時特刊）13、第9期。

王芸生は日本が中国に対して全面戦争を仕掛けた直後に「日本軍閥を誡める」を発表し、次の3点において日本軍閥が行動を改めるよう真摯に警告した。①日本盛衰の歴史を振り返り、明治時代に至って、軍人はやっと「忠君愛国」の美德を取り戻し、大政奉還を成し遂げたため、「明治維新の基礎を築いた」。しかし、現在日本軍閥の行動は、まるで過去一千年間旧権力が犯した罪悪と禍害を繰り返したようで、さらに「個人の罪悪と国家に対する禍害は、旧幕府時代を越えるであろう」と指摘した¹²。②日本の国家利益にとって、中国に対する全面的な侵略は「中国に否応なく闘う道を歩ませた」、またワシントン体制を破ったため、各国は「日本を仮想敵として」軍備を増強させた。日本軍閥は「必ず外に対して軽侮の端を發し、内に対しては崩壊の禍の如し」である¹³。③世界の大勢から言えば、近来世界的な危機の大半は日本軍閥が「引き起こした」ものであり、日本軍閥はこのまま突っ走ったら、世界人類がいずれその災禍を受けることになる。また、最も先に滅ぶのは日本に間違いない。そして、文末で日本軍閥に一つの選択肢を与えている。

日本軍閥よ！貴殿達は国の乱臣賊子・世界の公敵になることを甘受すれば、倒行逆施の行動を続けてください。貴殿達の国家及び世界人類は公道を以て懲罰を与えるであろう。假令（たとえ）、貴方達はまだ少しの理性・感情を保っていれば、軍の先人達の歴史の為、国家国民の利益の為、世界人類の幸福の為、明治神宮の神祇の前で跪（ひざまず）き、貴方達が犯した罪を切に懺悔せよ！¹⁴

また、中国のメディアは海外有名人の言葉を借り、日本軍閥の中国侵略が支持されていないことを掲げた。1938年の『文摘』は「タゴール、日本軍閥を痛斥」（《泰戈尔痛斥日本军阀》）というタイトルの記事を掲載し、日本の中国侵略に対し、ノーベル賞受賞者のインド詩人タゴール（Rabindranath Tagore）の考え方を紹介した。タゴール曰く、曾て日本人を賞賛していたが、日本は完全に変わってしまった。「東方の無抵抗な民衆を酷く迫害し、その経済的な拡張及び領土的な野心よりも劣悪なのは、日々行っている惨殺などの暴行に対して、恥知らずに粉飾しようとしているところである」¹⁵。注目すべきは、本来、日本製品不買運動に反対するように求められたタゴールは、日本の中国に対する侵略行為に強い不満を抱いていることを理由として断ったという話だったにも関わらず、中国語のメディアは「日本軍閥を痛斥」というタイトルを用い、更に日本の不義を強調した。その他、中国の新聞・雑誌はノーベル文学賞受賞者のパール・S・バック（Pearl S. Buck）がアメリカで発表した文章「日本軍閥の心理」も訳し、日本軍閥が無防備の中国都市及び民衆を襲撃したことを批判した。パール・S・バックは、日本軍閥の心理を蔑視し、日本軍閥の行為に反対し、「私は現在日本が中国

12 王芸生「日本軍閥を誡める」（《誠日本军阀》）『救亡文輯』（《救亡文輯》）1937年、38頁。

13 王芸生「日本軍閥を誡める」（《誠日本军阀》）『救亡文輯』（《救亡文輯》）1937年、40頁。

14 王芸生「日本軍閥を誡める」（《誠日本军阀》）『救亡文輯』（《救亡文輯》）1937年、40頁。

15 「タゴール、日本軍閥を痛斥」（《泰戈尔痛斥日本军阀》）『文摘』1938年第12期、299頁。

で行なった行為を容認することを厳に拒否する」と主張した¹⁶。

(4) 中国を侵略した日本の暴行を曝露するため

中国人が「日本軍閥」を使った主な目的は、中国に於ける日本軍の暴行を暴露するためである。日本軍が中国侵略のような悪事を働いたのは、「日本軍閥」の主導に起因すると認識された。1928年7月『申報』は「日本軍閥は又乱を起こしに来た」というタイトルで、「日本政府は中国東北部の利益を維持するため、中国の統一に干渉し、中国に於ける軍事力を増強することを堅持した」¹⁷。太平洋戦争勃発後、国民政府は日本に対して宣戦布告し、その冒頭に次のように書いている。「日本軍閥は夙に亜細亜を征服すること、太平洋地域に君臨することを国策としている」。「日本軍閥」を侵略戦争の起源と見なした¹⁸。

「中国に於ける日本軍閥の罪悪記録」は、中国に対する日本の侵略を暴露する典型的な記事である。記事の中で、「ファシズムを掲げた日本賊軍は、中国で血腥い烙印を押し、彼等は自らの血を用いても洗い流すことはできない」と指摘し、日本軍統治下の中国経済が破綻したことを例として、「中国で最も栄えていた地域は悉く日本の占領下にあり、これらの地域はどのような変化があったか。国民の生計全体から見ても、農村経済に焦点を絞っても、いずれも大きな変化がもたらされ、状況は悪くなる一方であり、半植民地より完全なる植民地に成り下がった。このような変化は、純然たる日本式の政策によるものであり、大規模な虐殺と略奪、迷信及びアヘン吸引の提唱・土地の没収・五穀及び労働力の徴用・煩雑且つ過重な税収及び役畜の労働力の破壊などの政策によるものであった」¹⁹。このような侵略及び略奪の前では、中国人は唯、侵略者である日本に対し、確固とした意思で対抗するしかない。

3. 「日本軍閥」という概念について蒋介石の運用²⁰

蒋介石はよく「軍閥」という概念を利用したが、彼の軍閥に関する言説の中に「日本軍閥」はとりわけ特殊且つ重要な存在である。筆者は蒋介石の言説を比較的にまとめた国民党の公式的な出版物『先總統蔣公思想言論總集』（《先总统蒋公思想言论总集》／計40卷）及びスタンフォード大学フーパー研究所図書館・文書館所蔵の「蒋介石日記」を比較分析し、「軍閥」という言葉の利用頻度のピークは日中全面戦争期（1937～1945年）であり、その多くは「日本」と関係している。管見の限り、蔣が初めて「日本軍閥」という概念に言及したのは1928年5

16 パール・S・バック著、蔣学楷訳「日本軍閥の心理」（《日本军閥的心理》）『新文摘旬刊』1938年第1巻第4期、112頁。

17 「日本軍閥は又乱を起こしに来た」（《日本军閥又来捣乱》）『申報』（《申报》）1928年7月13日、2頁。

18 「日本に対する国民党の宣戦布告原文」（《国民政府对日宣战原文》）『党员知識』（《党员知识》）1941年第1巻、2頁。

19 陶澤（陶泽）訳「中国に於ける日本軍閥の罪悪記録」（《日本军閥在中国的罪恶记录》）『読者』（《读者》）1945年（号数及び刊行日に関する情報なし）

20 筆者は「軍閥」という概念に対する蒋介石の認識を研究し、その成果を2022年の『軍事歴史研究』（《军事历史研究》）第4期で発表した。

「蒋介石日記」中、「軍閥」と「日本軍閥」の使用頻度（1928～1945年）

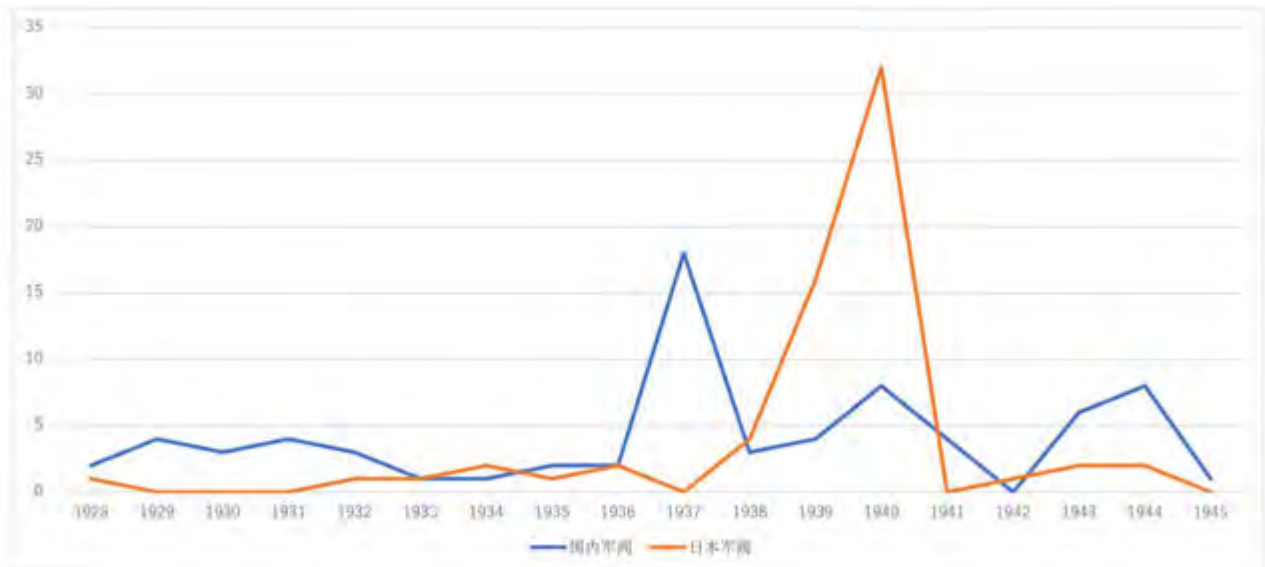


図3

注：「日本軍閥」には「日閥」「敵閥」「倭閥」等の同義語も含む。

月「済南事件」の時であり、「軍閥」という概念より9年遅れた²¹。この時、日本軍はあらゆる手段を講じ、(国民政府の)北伐を阻止しようとしていたため、蔣は極めて大きな挫折を感じ、「これ以上日中の仇を忘れることができず、其の軍閥の害は中国の軍閥よりも甚だしいもの也」と嘆いた²²。

若き頃の蒋介石は幾度の困難を乗り越え、日本留学が叶い、軍事に関する知識を習ったため、日本軍人の地位及びその軍事組織の訓練に対し、非常に憧れていた。しかし、日本の中国侵略は中華民族の利益に損害を与え、蒋介石の統治に対しても脅威を与えた。それ故に、蒋介石は内政に干渉し、対外的には侵略政策を実践している日本軍部とマイナスイメージの強い「軍閥」という言葉とを連結し、「日本軍閥」という用語を用い、日本の軍部勢力及び中国を侵略している日本軍のことを蔑称した。

図3の通り、蔣が「日本軍閥」を一番頻繁に使ったのは1938～1940年であり、当時国民政府は最も繁栄している東部地域を失い、西南に撤退した。日本の侵略に対し、中国が孤軍奮闘していた最も困難な時期であった。蒋介石は「日本軍閥」という言葉を用い、侵略者への軍民の敵愾心を呼び起こし、抗日の士気を鼓舞した。一方、蔣は鬱憤ばらしに日記の中で中国を侵略している日本軍を罵倒した。これも中国メディアが「日本軍閥」を使用した頃合と一致している。

蒋介石は敵愾心を喚起するため、国内の軍民に対して宣伝した時に「日本軍閥」を痛罵した。満州事変の後、蒋介石は講演の時に「日本が東三省を占領したのは、東亜の平和を破壊する行為そのものであり、日本軍閥はそれを理解せず、

21 蒋介石が初めて「軍閥」という言葉を使ったのは、1919年2月に「廢督裁兵議」(《廢督裁兵議》)を題とした孫文への建議書の時であった。

22 「蒋介石日記」(手稿本)1928年5月12日。

自ら世界との関係を断つのと違わない」²³。中国軍民は最後まで日本軍閥に対抗せねばならぬ、「かの日本侵略者軍閥は東亜共栄圏をスローガンにし、亜細亜の併呑を実行し、太平洋地域に君臨する野望を持っている。正に我々が徹底的に対抗・排除しなければならない公敵である」²⁴。中国に於いて「軍閥」はマイナスかつ必ず失敗するというイメージを持っている。蔣は「日本軍閥」を利用し、国民の「軍閥」に対するさまざまな嫌悪感を、直接または間接的に日本の侵略者に付け加えようとした。

また、「二分法」を用い、「日本軍閥－国民」に対し、対立的な区別を行なうことは、蔣介石が強調した「日本軍閥」という概念の基本的な論理である。蔣から見れば、日本軍閥と民衆との関係は、「圧迫」と「圧迫される」ものであり、侵略を主張している軍閥は民衆の支持を得られず、果ては日本民衆が蹶起し、軍閥を覆すことさえある。それ故に、「特に注目すべきは、軍閥に対する（日本の）一般民衆の嫌悪感の程度である」と蔣は明確に指摘した²⁵。蔣介石が中国を侵略している日本軍の多くは軍閥に欺かれた一般民衆であり、教育を用いて日本軍捕虜を感化するように主張した。「特に一般の日本捕虜に対し、徹底的に覚悟させて、心より納得することができれば、本国の軍閥に対しても反対できるようになる」²⁶。日本国民と軍閥との対立を強調したほか、蔣は日本政界に「文－武の対立」が存在していて、軍閥に対して文官も牽制効果があると主張した。「更に注目すべきは、日本内部に於ける文武両派の争いの勝者が誰かという問題である。文官を台頭させることによって、軍閥を牽制する。軍閥の横行を抑止することによって、その孤立を促す」²⁷。また、蔣は日本軍閥の内部にも分岐および闘争があると考え、米内光政の組閣後「陸海両軍の暗闘は必ず深刻になり、文武新旧などの衝突も、必ず益々甚しくなり、帝国内部からの崩壊をもたらす」²⁸。日本軍閥が民衆に反対され、内外ともに抵抗に遭うのであれば、中国は持ちこたえ、日本と対抗し、日本軍閥を追いつめ、失敗に終わらせるのは必然の選択である²⁹。

更に、蔣介石は「日本軍閥」という概念を日本の民衆に宣伝した時にも運用し、日本民衆が軍閥を覆すことに奮起してほしいと激励し期待した。1938年、蔣は対日全面戦争一周年の時に、「中国の敵は日本軍閥のみ」（《中国只向日本军閥打击》）というタイトルの「日本国民に告ぐ書」の中で、まず、日中両国は「兄弟之邦」（兄弟のような国）であり、本来「互いに親しく接し、睦み合い、共栄共存」すべきであったが、日本軍閥が中国に対し、侵略戦争を起こし、中国で行なった劣悪な暴行は、中国の民衆に甚大な被害をもたらしたと同時に、日本国

23 蔣介石「公理を擁護し、強権に対抗する」（《拥护公理抗御强权》）1931年10月12日、『思想言論総集』（《思想言论总集》）10巻、472頁。

24 蔣介石「国民参政員に対する期待」（《对于国民参政员的期望》）1942年10月31日、『思想言論総集』（《思想言论总集》）19巻、354頁。

25 「蔣介石日記」（手稿本）1933年3月17日。

26 蔣介石「今日の教育及び体育に於ける注意すべき要点」（《今日教育与体育应注重之要点》）『思想言論総集』（《思想言论总集》）17巻、1940年10月13日、483頁。

27 「蔣介石日記」（手稿本）1934年11月27日。

28 「蔣介石日記」（手稿本）1940年1月20日、「先週の反省録」（上星 期反省録）。

29 蔣介石「抗戦建国三周年記念米国民衆に告ぐ書」（《抗战建国三周年纪念告美国民众书》）1940年7月8日、『思想言論総集』（《思想言论总集》）31巻、188頁。

民に対しても損失を与えた。膨大な軍事費用の負担のみならず、青壮年の兵士が中国で戦死し、帰らぬ人となり、夫の帰還を待つ若き妻が終に未亡人になる。これらの責任の所在は、狂妄な日本軍閥にあり、中国の抗戦は、固より自らを救うことであり、「亦、即ち諸君（日本）を救う所以」でもある。蒋介石は文書の末尾に下記のように述べた。

中国の抗戦は、唯自衛生存の為のみならず、実は日中両国の国民の未来永久の福祉を実現する為なのである。貴国の残虐な軍部は、唯中国の敵のみならず、実は亦た日本国民諸君の公敵でもある。中国は抗戦してから本日に至り、只日本軍閥のみを敵と見做し、日本国民諸君を以て敵と見做さず。……諸君は早く両国安危の至計を察することを切に望み、一致団結し、強暴な軍部によるあらゆる所為を反対し、貴国国民の正義なる意思及び力量を発揮し、侵略政策の変更を促し、平和秩序を回復し、日中互いの親睦の深めあいを実現し、東亜に於ける永久の平和の基礎を築き上げよう³⁰。

一年後、蔣は一万六千字にも及ぶ「抗戦建国二周年記念日本民衆に告ぐ書」を発表した。この文章は四つの部分に分かれている。「日本軍閥の欺瞞的宣伝を暴く」「日本軍閥の東アジア民族奴隷の罪悪を宣言する」「中国が抗戦必勝、建国必成の理由を説明する」と「結論」で、日本軍閥のさまざまな罪悪を詳しく述べている。蔣氏は文章の結末に、日本の民衆が自覚・団結し、正義の意志と力を発揮し、日本軍閥のあらゆる行為に反対する、という前年の願いを重ねて表明した³¹。

戦時中、世界各国に援助してもらうための国際宣伝の中、蒋介石はまた同じ「日本軍閥」という概念を用い、日本の侵略行為に対する各国の嫌悪及び中国の抗戦に対する同情と支援を喚起し、侵略の野望を抱いている日本軍閥は世界各国の共通の敵と強調し、日本の軍閥が中国を侵略する行為は、その「世界を征服するのは先に中国を征服しなければならない」の第一歩に過ぎない。もしそれが実現すれば、世界が必然的に災難に遭う。「日本の侵略が一日続けば、極東と世界の平和は一日も維持できない」³²。

「軍閥」という言葉に対し、日中両国の国民は、一般的にマイナス的なイメージを持っている。即ち軍閥は国家と民衆に災いをもたらす存在であり、蒋介石は日本軍部のことを「軍閥」と定義し、日本に向けた宣伝の時にも「軍閥」反対の旗印を掲げ、(中国)国内と同じ効果を得られると期待した。然るに、日本軍部の勢力は蔣が予想していたような急速な崩壊も、蔣が理解・期待していた日本国民との対立もなく、日本国民が蔣の宣伝に応え、自発的に「軍閥」に対して革命を起こすこともなかった。但し、彼が「日本軍閥」という概念を用い、内外に対

30 蒋介石「蔣委員長が日本国民に告ぐ書」(《蔣委員長告日本国民書》)、『申報』(《申報》)1938年7月7日、第2版。

31 蒋介石「抗戦建国二周年記念日本民衆に告ぐ書」(《抗战建国二周年纪念告日本民众书》)1939年7月7日、『思想言論総集』(《思想言论总集》)卷31、77-101頁。

32 蒋介石「蔣委員長が世界友邦国に告ぐ書」(《蔣委員長告世界友邦书》)、『申報』(《申報》)1938年7月7日、第2版。

して宣伝したような策略及びその方向性は正しいと言えよう。

4. 「日本軍閥」という概念に対する 孫文・毛沢東の運用

孫文の革命人生に於いて日本は重要な影響力を持ち、彼が率いた中国同盟会の成立と活躍の舞台は日本であり、多くの日本の友人を持ち、宋慶齡との結婚も日本で行われた。孫文が生きていた時に、日中関係は緊迫していたが、決裂までには至らなかった。また、日本軍人は中国に対する野心を常に剥き出していたため、孫文が日中友好を強調すると同時に、よく日本軍人の跋扈や中国を侵略することを批判し、その時、偶然ながら「日本軍閥」という言葉を使ったことがある。仏云（佛云）は1940年11月孫文生誕記念日に「総理、日本軍閥を論ず」（《总理论日本军阀》）というタイトルの短文を発表し、中に孫文が「日本軍閥」を使った二箇所の文書を取り上げた。孫文は宮崎滔天宛ての手紙に「今後吾が党の思いは、依然日本の軍閥政策にあり」と書いた。また、「実業計画」（《实业计划》）の中に、「日本は各戦争に於ける結果として、常に最も厚き報酬を手に入れた。それ故に、日本軍閥は戦事を最も利益のある事業と見做すのも無理がない。今、中国は既に覚醒し、日本が其の侵略政策を告げたくとも、中国人も亦た必ず其れを拒絶する」と記した。著者はこの短文を書いた目的として、「日本軍閥の打倒は、総理が一向に主張したこと」であり、此の際に革命精神を發揚し、日本軍閥を打倒することは、孫文生誕に対して最も良い記念であることを説明した³³。

中国共産党の指導者毛沢東も「日本軍閥」という概念を少し運用したことがある。1991年版の人民出版社『毛沢東選集』（四巻本）の全文検索によると、1949年10月前に、毛沢東は計五本の記事の中で、「日本軍閥」を9回使った。初出は1938年5月の「抗日ゲリラ戦争の戦略問題」（《抗日游击战争的战略问题》）という記事で2回使われた。そして、同月に発表された「持久戦を論ず」（《论持久战》）でも2回使われた。それから、1939年9月の「ソ連の利益と人類の利益は一致」（《苏联利益和人类利益的一致》）に1回、1944年4月の「学習と時局」（《学习和时局》）に3回、最後は日中戦争後の1946年8月の「米国記者アンナ・ルーズ・ストロングとの談話」（《和美国记者安娜·路易斯·斯特朗的谈话》）に1回と数えられる。その他、1949年1月の「国民党反動政府に改めて中国地域侵略軍総司令官岡村寧次及び国民党内戦犯罪者の逮捕を命ずる件に関する中国共産党發言人の談話」（《中共发言人关于命令国民党反动政府重新逮捕前日本侵华军总司令冈村宁次和逮捕国民党内战罪犯的谈话》）の中で、毛沢東は「日本ファシズム軍閥」という言葉を使った。毛沢東が初めて「日本軍閥」を使った文書は次の通りである。

33 仏云（佛云）「総理、日本軍閥を論ず」（《总理论日本军阀》）『勝利』（《胜利》）1940年第31期（第104号）、1940年11月9日。文中の「白波滔天」は、「宮崎滔天」と思われる。

日本帝国は基本的に二つの弱点を抱えていて、即ち兵力の不足及び異国との作戦である。更に、中国の実力に対する誤算及び日本軍閥内部の矛盾によって、誤った采配も数多くあった。例えば、漸進的な兵力の追加、戦略的な協同の欠如、進攻方向が明確ではない時期、作戦の遂行または包囲殲滅の好機を逸するなどは、三つ目の弱点とも言えよう。こうした兵力の不足（小国寡民、資源不足及び封建的帝国主義など）、異国との作戦（戦争の帝国主義性及び野蛮性など）、采配の不手際によって、日本軍閥は進攻戦及び外線作戦に於いては有利な立場に立ったが、その主導権は日々弱ってきた³⁴。

毛沢東が文章の中で日本の主張及び中国侵略を実行した組織・軍隊・将校に言及した時に、「日本軍閥」のほかに、よく使ったのは「日本帝国主義」「日本帝国主義者」「日本ファシズム」「日本侵略軍」「日本侵略者」など、中でも（多く使われたのは）「日本帝国主義」と「日本侵略者」の二つであった。また、注意すべきは、時期によって、毛沢東が使った用語は異なり、1935年12月の「日本帝国主義反対策略を論ず」（《论反对日本帝国主义的策略》）には、「日本帝国主義」が23箇所、「日本帝国主義者」が6箇所あった。一方、彼は10年後の1945年日中戦争勝利の前夜に発表した「連合政府を論ず」（《论联合政府》）の中には、「日本侵略者」が75箇所あったのに対し、「日本帝国主義」は登場しなかった。

中国に対する日本の侵略は甚大な被害をもたらしたため、人々はそれを思い出す度に、心の痛みが収まらない。それ故に、1945年日中戦争に戦勝し、日本が武装解除されてからも、中国人は比較的「日本軍閥」という言葉をよく使っていた。前述した図1の統計によると、中国の新聞などの媒体に掲載された記事名の中に「日本軍閥」が含まれているのは、1946年に19件、1947年に11件、1948年に16件、1949年に2件が数えられる。これらの記事の内容は、大まかに3種類に分けることができる。①日本軍閥の中国侵略責任を追求し、日本の侵略罪を清算させるもの、例えば「日本軍閥が犯した罪業」（《日本军阀所造罪孽》）（『新聞報』（《新闻报》）1945年12月19日）、「日本軍閥、中国を奴役」（《日本军阀奴役中国》）（重慶『益世報』（重慶版）1946年8月21日）など。②日本軍閥の懲罰を求めるもの、例えば「日本軍閥の末路 また新たな戦犯たちの入獄」（《日本军阀的末日 又一批新战犯入狱》）（『江蘇民報』（《江苏民报》）1945年12月4日）、「日本好戦軍閥の清算、昨日起訴書を正式的に提出」（《清算日本黠武军阀起诉书昨正式提出》）（『前線日報』（《前线日报》）1946年4月30日）。③日本軍閥の復活を防止するためのもの、例えば、「日本軍閥再起の予防」（《预防日本军阀复起》）（重慶『中央日報』（《中央日报》）1945年9月3日）、「旧日本軍閥、再起を図る」（《旧日本军阀图再起》）（『中央日報』（《中央日报》）1947年10月23日）などがある。

34 『毛沢東選集』（《毛泽东选集》）第二卷、人民出版社（北京）、1991年版、410～411頁。

【討論・質疑応答】第4セッション

パネリスト同士の討論・参加者との質疑応答

司会：宋志勇 南開大学

発言：陳紅民

浙江大学

(発言順)

唐小兵

華東師範大学

安岡健一

大阪大学

福間良明

立命館大学

金滯

ソウル大学

梁知恵

東北亜歴史財団

論点整理：劉傑 早稲田大学

[発言は母国語、翻訳：于寧（中国語）、尹在彦（韓国語）]



宋志勇 ディスカッションに入りたいと思います。ルールについては李恩民先生がすでに説明してくれましたので、繰り返しません。同じルールに従って進めていきたいです。質問を募集します。まずは陳紅民先生をお願いします。

陳紅民 このセッションの若手研究者の研究はよくできていて、その論文をじっくりと読ませていただきました。特に韓国の研究者である梁知恵氏の論文について意見を述べさせてください。植民地の歴史研究と環境史研究は比較的新しい研究分野ですが、この論文の両者を接合した視点は非常に斬新です。今までの植民地研究は、植民地の経済遺産や文化遺産、あるいは教育遺産を重視してきましたが、彼女の研究は更に環境遺産の問題を取り入れました。植民地の支配者は植民地の経済を発展させるために、本国で反対された産業を植民地に移すなど、植民地の環境を破壊することに躊躇しませんでした。論文に挙げられたいくつかの例も適切で、論理的一貫性もあり、植民地主義を強く批判することもできて、とてもよくできています。

しかし、梁先生に注意を払ってほしいところがあります。環境問題は工業化が進んだ後に出現した問題で、つまり、それは経済が発展していくうちに生まれた

問題で、最初からあった問題ではありません。論文の中でも言及されたように、工業化が進む中、世界、国家そして地域においては段階的な開発が生まれることによって、産業のグレードアップや産業移転、また産業の地域間分業という問題が発生します。また、資本はもともと利益追求主義という本質を持っています。そのため、植民地の支配者が植民地支配の中で引き起こした植民地の環境の破壊という問題の発生はちょうど今述べた二点のプロセスと重なり合ったのです。グローバル化が進む中、発展途上国への産業移転も推進されました。例えば、昔日本は中国に産業を移転していましたが、中国経済が成長した後、その産業を再び東南アジアに移転するようになりました。この産業移転の過程において、移転するのは大体労働集約型産業や環境汚染産業です。移転先は最初はそれを歓迎しますが、経済が発展してから徐々に産業移転がもたらした諸問題に注目するようになります。植民国家の産業化は植民地より進んでいますので、植民地への産業移転は労働集約型産業の移転と関連して行われたのです。植民地の支配者が植民地を占領する際には、もともと産業の国際分業という目的があります。例えば、日本が台湾を占領した後に、「農業は台湾、工業は日本」というスローガンが掲げられました。植民地の支配者が産業の国際分業を推進するにはこのような内的な論理が存在します。これが考えるべき一点目です。

また、植民地が存在しなくなったとしても、環境汚染産業がほかの国に移転する現象は引き続き存在します。しかも、移転先になる国の多くは、少なくともその政府はそれに反対しません。また、植民地主義や海外からの強力な資本介入がなくても、本国の資本家や官僚などが経済目的を達成するために環境汚染産業を強く推進することがあります。これは本国の資本家のなす行為で、植民地主義は存在しません。これが二点目です。

以上の二点から見ると、植民地での経済開発の過程において生じた環境問題を理解するには、植民地支配だけではなく、産業の国際分業や資本の利益追求についても考えるべきではないでしょうか。論文は非常に一貫性がありますが、この研究をより広い分野に位置づけて考えた方がいい気がします。私のコメントは以上です。

宋志勇 陳先生、コメントありがとうございます。次はどなたですか。

唐小兵 安岡先生のご発表に二つの質問をさせていただきます。自分史（中国では回想録や自伝と呼ぶ）という歴史を記述する形式の日本での推進は非常に興味深い事象で、とても関心があります。発表で論じられたのは歴史大衆化と消費化の問題かと思います。日本でのこのような歴史大衆化はどういうものかについてお聞きしたいです。それは、大衆が歴史記述の主体、あるいは記述される対象として重視されることなのか、それとも、歴史学者がその著作を大衆に届けることを重視することでしょうか。もし後者でしたら、歴史学の大衆化が歴史学の商品化との関係性をいかに対処すべきかについて知りたいです。中国本土では、売れ行きがよい歴史学の著作の著者は、必ずしもプロの歴史学者ではありません。例えば、中国本土では馬伯庸という大衆向けに歴史小説を創作するとともに有名な若い小説家

がいますが、彼は中国の古代史をテーマにした歴史作品を多く創作しました。例えば、『長安十二时辰』などはよく売れただけではなく、歴史ドラマに映像化もされました。彼は多くの専門的な歴史著作を読んで、唐や明、清の歴史を研究する専門家の著作から知識を吸収し、それを大衆が理解しやすい通俗的な歴史記述に転化させます。これはとても興味深い事象だと思います。日本にはこれと似たような作家たち、つまり今会場にいる皆さんのような大学で教えている歴史学者の専門的な作品を大衆が理解できるような通俗的な歴史作品に転化させる作家グループが存在するのでしょうか。ある程度の客観性と正確性を保ちつつも、大衆が理解できるような、いわゆる大衆史学的な作品が日本に存在すかどうかについて、一つ目の質問とさせていただきます。

二つ目の質問です。安岡先生は「わたし」の歴史から「わたしたち」の歴史へという個人のアイデンティティからコミュニティ、あるいは集団的アイデンティティに発展することを論じましたが、これは中国本土でも実現できたらと私も非常に望んでいることです。例えば、政治家や、経済エリート、知識人の歴史だけではなく、底辺層の一般人による歴史の著述や表現もより増やしてほしいです。しかし、「わたし」から「わたしたち」への発展は、簡単で理想主義的な道筋ではない可能性があります。家族の過去の歴史に関する記憶ですら、家族内に衝突が発生する場合があります。そのため、「わたし」の歴史は「かれ」の歴史と衝突してしまうという問題が発生する可能性があります。このような衝突が発生した場合、どう対処・調和すべきでしょうか。「わたし」の歴史から「わたしたち」の歴史へと実現させるために、歴史学者としてどのような知恵を提供すべきでしょうか。お互いの最大公約数となる共通認識を見つけるかどうかというのは、いわゆる大衆史学にとってとても挑戦的な問題ではないかと思います。安岡先生に対する質問は以上です。

浙江大学の陳紅民先生のご発表にも私はとても関心があります。陳先生は蒋介石研究の第一人者となる非常に重要な専門家です。陳先生が論じたこの「日本軍閥」の問題に私も関心を持っています。ご発表の最後に、当時は日本に対して、日本の軍閥と日本の民衆を区別した上で、民衆は軍閥や青年将校のやり方に同意しないなどの予測や推測があったが、結局その多くは実際には起らなかったということが論じられました。これについて、民国時代の知日派の影響をお聞きしたいです。1895年日清戦争が終わってから、多くの中国人が続々と日本に留学しました。戴季陶や蔣百里、王芸生、張季鸞、汪兆銘、周作人、そして蒋介石本人も日本留学の経験を持っており、彼らは日本の社会や文化精神、歴史の沿革、文学と芸術などを含めた当時の日本のあらゆる側面を深く理解しており、そのレベルは現在の中国の権力者の日本に対する理解を越えていると思います。彼らの多くは当時の国民党政府の高級官僚でしたが、なぜ彼らは蒋介石の日本認識に正しい影響を与えることができなかつたのでしょうか。

私の質問は以上です。よろしく申し上げます。

宋志勇 唐先生、ありがとうございます。唐先生の質問はちょっと多いですが、まずは安岡先生からご回答をお願いします。

■ 安岡健一 はい、ありがとうございます。二つの質問があると理解しました。後の方の質問から答えたと思います。個人の歴史を語っていく中で、対立する個人の歴史記憶があったときにどうするのかについてです。もちろん歴史の専門家、長期的構造的な把握に努めてきた歴史学者ならば調停できる、介入して理解を促進することができる問題もあると思います。

しかし、私がまずここで述べておきたいのは、「まず記録することが重要なのだ」というところです。受け入れがたい見解であったとしても、その本人が何をどのように理解して、何をどのように感じているのかをまず記録化し、それを史料としてのちの歴史家につないでいくことも、今の歴史学者たちの仕事ではないかということです。歴史学者が史料に基づいて考えなければならない、というルールが変わることはこれからもないと思います。そうだとするならば、その史料がどうやって残るのか、どう作られていくのかという部分に対して、私たちはただ残った史料に対して受動的にそれを研究するのではなくて、能動的にいかん史料が作られるのかというプロセスそのものに公正に介入して行くべきだと私は思うのです。

ですので、今すぐに解決できない問題が生じることがあったとしても、まずはそれを形にすることが大切で、代弁して直ちに問題を解決しようとするのは、実は記録の妨げになる時もあると思っています。そうしたところがまず一つです。

もう一つのご質問は文学作品との関係だったと思います。日本でも多くの歴史小説が生み出されており、例えば村上春樹の作品などでも日中戦争の物語が重要なモチーフとして取り上げられるなど、歴史文学に扱われない物の中に組み込まれている歴史というものがあると思うのです。私たちは歴史と文学をめぐって、いろいろな語りをしているのですが、ここで議論していることは、現在の中にどう過去があるのかも含めて、広い意味での歴史を巡って、歴史学者がいろいろな分野の表現と議論することが必要なのだということです。

すみません、歴史小説の事については話を振って申し訳ないのですが、最近も司馬遼太郎について書かれておられた福間先生に、ぜひお話しただけたらと思います。

■ 宋志勇 では、福間先生よろしく申し上げます。

■ 福間良明 まず日本の場合、司馬遼太郎という作家の日露戦争や幕末維新期を描いた作品などが広く読まれていたと思います。彼はそれこそ年齢的には戦中世代、戦争体験があり、たくさんの史料を見ている人ではあるのですが、歴史学の手続きは違うところもありますし、その点で歴史学からの批判も多々ありました。別に司馬自身が加害責任の問題を見過ごしていたわけでは必ずしもないと思うのですが、それでもやはり植民地の問題への記述が薄いか、そういうことは指摘されてはいました。

ただ、なぜ司馬が読まれたのかを考えると、先ほど私がお話しした教養主義的なものの一つの変種のように思います。彼の作品が一番読まれたのが文庫化さ

れた1970年代後半以降です。この時期からより多くの読者を獲得していきました。中年サラリーマンによく読まれたのですが、少し変質した教養主義だというのは、若い頃に教養主義に触れた人たちが中年期になって改めて歴史的なるものに触れようとする側面と同時に、労働意識の問題もあるからです。その頃は一つの会社にとどまってさまざまな仕事に従事するのが一般的でした。営業に行ったり、経理に行ったり、工場に行ったりいろいろな仕事をしながら、一つの会社の中で役職をステップアップして行くというロードモデルが出来上がっていました。その中で歴史に学びながら、人格を磨いていこうとしたわけです。経理の仕事のスペシャリストになることよりも、いろいろな仕事をかじりながら、リーダーとしての人格を高めて行くのだという教養主義の亜種みたいな流れとシンクロしていたように思います。

■ 宋志勇 福間先生、ありがとうございます。安岡先生は一つの質問を福間先生に譲りましたね。それでは私から安岡先生に一つ質問させてください。安岡先生のご発表は色川大吉を代表人物として取り上げました。色川大吉は2021年に亡くなられて、日本だけではなく、中国の日本史研究界でも話題になりました。彼の研究は中国の日本史研究界においても非常に影響力を持っているからです。次は私の質問となります。色川先生は1960、70年代に大衆史や個人史を提唱しましたが、その時代ではマルクス主義歴史学が主流だったと思います。そうすると、彼が提唱した個人史と大衆史はマルクス主義歴史学とはどういう関係性だったのでしょうか。大衆史研究は1960、70年代に盛んに行われましたが、1980、90年代にその勢いが弱まりました。最近は大衆史と個人史に対する新しい認識が生まれて、大衆史と個人史が再び注目されるようになりました。なぜこのような状況が発生したのでしょうか。大衆史と個人史に対する認識にどのような変化があったのでしょうか。そして大衆史と個人史はどのような関係を持っているのでしょうか。安岡先生にご回答をお願いします。

■ 安岡健一 はい、ありがとうございます。もちろん、1960年代以来のいわゆる民衆史、民衆思想史とも言われるような彼、色川だけではないのですが、彼らが提唱した研究学問のあり方が学問のあり方を変えてきた部分があると思います。もちろん、そこには時代ごとの変遷があって、特に日本では先ほどの梁先生のお話で戦前の運動史の研究が盛んだというお話がありましたが、日本での社会運動史の研究などを見てみると、時代によって多い少ないが分かります。ある時期にはとても盛んに研究される動向であったものがしばらく研究されなくなる。しかし2000年代以降でしょうか。日本の中で格差社会というものが現実にさまざまな形で議論されるようになり、研究者の世代交代が進む中で、もう一度社会的なものへの関心というものが一層強まっているところが、学問の歴史の変化としてあると思います。

しかし、私がここで注目したのは、研究史という形で現れてくるような学問の歴史そのものではなくて、学問の外部にあった歴史のことになるろうかと思えます。色川はその接点というか、学問と人々との間の境界のような場所を行ったり

来たりしていたのだと思います。個人に関する学問研究は、いわゆるエゴ・ドキュメント研究のような形で、学者の中でも盛んになりつつあると思うのですが、やはりアマチュアが書いた歴史、普通の市民が書いた歴史をどう考えるのかについては、まだまだ議論が少ないのが現状ではないでしょうか。その点は色川自身も詳しく展開したわけではありません。しかし、重大な問題提起を改めて、歴史が個人の手によって書かれる状況が現実には現れている今、どの時代よりも個人が自分の歴史を書いている今、考え直してみてもうどうだろうかというのが私の問題提起です。

金 瀬 もう少し整理したいのですが、まず安岡先生に質問したいと思います。

私が先週読んだ、2021年に亡くなった米国の歴史学者ジュリアス・スコット (Julius Sherrod Scott III) のカリブの奴隷たちに関する歴史書です。英語のタイトルは「The Common Wind」という本ですが、カリブ海にいた沢山の奴隷たちの物語を、スコットという歴史学者は数多くの新聞や古文書を探して彼らを単に「スレイブ (slave)」と呼ばず、一人ひとり全ての人を名前呼びます。彼らの名前を復元させる、それで歴史のない人々に歴史を与えた歴史学者として非常に名の高い人物です。彼の博士論文は死後、とても立派な歴史家の範となった本です。

ところで、私が知りたいのは、歴史家が歴史のない人々に歴史をどのように与えるのか、また歴史のない人々はどのように自分の歴史を書くのか、ヘーゲルが言ったように国家がないと歴史もありません。国民国家の想像力のせいで、数多くの人々が歴史から排除されましたが、今日特に歴史が書きたいと思う数多くの民衆の物語が水面上に上がってきています。私が思うには自分の歴史、「自分史」という形で登場したようですが、このように数多くの人々が各自の物語を書いている一方で、その根底には自ら考えられなかった国民国家の想像力を自分の物語の中に盛り込む可能性もまた存在します。

それで、やはりジュリアス・スコットのようにかなり長い間の訓練を経て歴史のない人々に歴史を与える方式がより良いのか、それとも多くの民衆が自分の歴史を書けるようにサポートする方が良いのかという問題です。

ここでまたインドの歴史学者グハ (Ranajit Guha) が提起した、「歴史のない人々に、サバルタンにどのように歴史を与えるのか」という問題について、日本の先生方はどのように互いの共通点と相違点を比較しながら新しい歴史学の動向を作っているのかが気になります。安岡先生は野心的な若手の学者で、そういう部分に関するアイデアを持って研究をされているように思いますが、計画や考えについて聞きたいと思います。

安岡健一 ありがとうございます。確かに歴史なき人々、people without history、そういう方々は、常に歴史学者にとって重要な存在であり続けてきたと思います。それをどのように書くのか、どうアプローチするのか、考え続けた議論に影響を受けて、自分自身もいわゆる実証研究といいますか、どのようにしたら史料の中からそういう存在を明らかにできるのかということに取り組んできました。

今回、このような形で研究の外部に注目しようと思ったのは、自分自身の経験も影響しています。最初に興味があったものが戦争の歴史だったのですが、お話を伺いに行くと「あと5年早かったらね」、「もう10年早かったらね」と言われるわけです。つまりみんなもう亡くなってしまっているのです。もう死んでしまった人に話を聞くことはできません。こうした人が生きている間に少しでも記録を残してくれていたなら、どれほど助けになったかと思うことが本当に何度もありました。

私が今回書くこと、自分が書くということにフォーカスを当てたのは、今の社会の私達にその力があるからだということが大きいと思います。それができない時代には、言葉で話してもらうことが非常に重要ですし、その重要性は今も変わらないと思います。質問されることに考えて答える。その中で初めて創造される自分自身のストーリーとか、オルタナティブがあると思うのです。

私はオーラルヒストリーを重ねていくうちに、しかし、聞く側の限界というか、聞きたいことを持っている人間が聞くために、語り手が本当に語りたことが語られてないのではないかと思うことがありました。聞く人の希望と語りた人の希望が合わないときがあるのです。であるならば、やはり書きたいこと、自分が本当に人に伝えたいことを書くことをサポートするプロセスがむしろ必要なのではないか。そこには本当にいろいろな種類の経験があると思いますが、私はそうした中から先生に挙げていただいた「語られざる奴隷の歴史」であるとか、その重要性はあとから見出されていった歴史もあると思うのですが、のちの時代の人たちが本当に重要な歴史として汲み取ることができるような記録が生まれていくのではないか。その機会をできるだけたくさん確保すること。それを支えることが一つの人文学、人間をより深く理解しようとする営みの役割であろうと思っているのです。

この半年、私は大学で数人の新入生を相手に自分の歴史を考えてみるという試みを行ってきました。海外からの留学生、日本の学生、それぞれ自分がどう生きてきたのかを話し合ううちに、自分が背負ってきたさまざまな歴史や共通点、違いを語る様子に触れることができました。彼らは誰も歴史学をやっているわけではないのですが、自分が歴史の一部であることをわかってくれた学生も何人かいたと思います。そうしたところから歴史の重要性というものが、より幅広く伝えられることがあるように思っています。それが歴史教育の一つの役割ではないかと思えます。

■ 梁知恵 陳先生がおっしゃってくださった部分について簡単にお答えしたいのですが、お時間よろしいでしょうか。私が少し先に陳先生がコメントしてくださった部分についてお話ししたいのですが、よろしいでしょうか。

■ フロア3 私の質問を含め二つを同時に答えていただければ、その方が効率的だと思って途中で割り込んでしまいました。申し訳ありません。本日のテーマは「戦争・植民地支配と和解はどのように語られてきたのか」ですが、書かれた環境との関連よりも最後の脚注14を見ますと、『反日種族主義』の出版以来、本格化した歴

史否定論の強化等により、現実の政治と学問が対峙しなければならない状況が続いている」としながら、日本軍慰安婦の問題などが書いてあります。さて、本日塩出先生がご発表された内容を見ますと、そこでも2021年に誤解を招くということで慰安婦が適切な用語として採択され、強制労働ではなく徴用と表記するようになったと書いてありますが、そうすると2022年の「歴史総合」はある意味、日本側では近隣諸国条項によって、結果的にそれを認識して変えたのが「歴史総合」です。

第一に、気になるのは日本の学校内で慰安婦問題をどのように取り上げているかで、第二にもし同じように述べられているならば、本日の発表及び討論を通じ梁先生は日本の努力についてどう思っているのか聞きたいです。その次に他国が主張することと国内で歴史を勉強する人々が主張することとの差があると見ておられるのか気になります。

宋志勇 すみません、時間の関係で、このセッションをそろそろ終わりにしたいと思えます。梁先生、もし簡潔に答えられるのであればぜひお願いします。もしもっと時間が必要であれば、明日の全体討議の際に更なる議論をいただければと思います。梁先生、簡潔にご回答をお願いします。

梁知恵 お二人の先生方がおっしゃってくださったところは全て重要だと思います。特に陳先生がおっしゃってくださった点に関しては、植民地の経済発展過程で現れた環境問題を全て植民地性の問題に置き換えてはならないとおっしゃった点はとても重要だと思います。そして開発を利用しようとする人がとても多かったという点も明確に認識しなければならない重要な問題だと思います。韓国にも関連事例は多くあります。廃鉱地域で放射性物質廃棄施設を誘致しようとする運動が1980年代に行われました。このように、生命を担保としても開発を優先するところは、一見矛盾にも見えますが、実は開発の多面性、複雑性を示す非常に本質的なところかと思えます。

それでも、私は苦痛の独自性または唯一性について考えなければならないと思います、我々が共に考えていきたいと申し上げたいです。植民地性と開発の段階性については、非常に気を付けて考えるべきだと思います。それでも、苦痛を受けていた地域の立場から、そして苦痛を訴える過程にあった人々の立場の資料を見ると、国家レベルで見る経済発展の程度を指す「開発の平均率」も慰めにはなりません。

日帝時代の特定の地域、特に韓半島北部地域や満州地域では非常に高度な経済開発が集中していました。世界的にも注目すべき経済開発でした。この時、開発による苦痛は独自の特殊な方法で各地域に転嫁されました。そのため、このようなことを国家的な平均率、例えばGDPやGNPのような指標に置き換えて話す前に、どのようにその独自の苦痛を語るかについて考えなければなりません。

第二に、フロアでおっしゃってくださったところに対する回答です。実は、それは私が答える程の問題ではないと思います。関連して明日の討論を通じて、重要なお話をたくさんしてくださると思います。それでも、一言だけ付け加えたい

と思います。

植民地支配を語る時、環境や生態問題を取り上げることは他のどんなテーマに比べても重要な課題だという点です。『反日種族主義』や歴史否定論に対し多くの批判がなされてきました。このようなテーマで大衆を対象に制作されたYouTubeコンテンツも沢山あります。ところが、「歴史が発展していた」、「経済が発展していた」というその最も根幹的な考え、つまり「発展」というもっと本質的な問題そのものに対する議論が学界で、そしてさまざまなメディアでどれほど扱われたのかについて少し悩まされます。今こそ「発展」に対する本質的な議論が必要です。そうした議論が再び後に回されると、経済発展を至上命題としている歴史否定論についての議論もやはり、結局今のような水準の議論で繰り返されるしかないと思います。

私の説明が十分ではなかったらと思います。先生が質問してくださったところについては、明日また多くの先生方からお話しただけると期待しています。

■ 宋志勇

梁先生、ありがとうございます。このテーマについてはみんなが関心を持っていますので、明日全体討論の時に、みんなで更なる議論ができればと思います。そのために、梁先生にもぜひ準備しておいていただきたいと思います。

三名の発表者にご協力をいただいたおかげで、ほぼ予定通りに本セッションの発表と討論を行いました。「研究」セッションは先ほどの「教育」セッションと「メディア」セッションにも啓発を与えたと思います。ただこれではまだ不十分で、引き続き「20世紀の戦争・植民地支配と和解はどのように語られてきたのか」という課題に貢献するためには、更なる研究と努力が必要だと思います。

発表者と討論者の皆さんに感謝いたします。本セッションはここで終了いたします。これからは論点整理に入りたいと思います。劉傑先生、お願いします。

■ 論点整理

■ 劉傑

今日は発表者の先生方からたくさん大変貴重な指摘が行われました。私の役割は論点整理ということになっていますが、すべての論点をきれいに整理するのは難しいですし、明日は議論の前に三谷先生からもさらに論点についていろいろご指摘があると思いますので、私からは今日の議論の一つの総括として、少し感想的なことをお話ししてみたいと思います。

今回のテーマは「20世紀の戦争、植民地支配と和解はどのように語られてきたのか」ですが、今日の議論を考えますと、20世紀の戦争の話を戦後に研究し、あるいは議論する中で、東アジアのこの3カ国は、歴史上の再構築の過程を経験してきたと捉えようと思います。つまり、この歴史がどのように語られてきたのかです。各国の政治や社会やあるいは歴史の文脈は違いますので、戦後新たに20世紀の歴史像を作るときに、それぞれの国に違う歴史像の作り方があったということ、まず確認してみたいと思います。

韓国について言いますと、一つはまず解放から。それから冷戦を経て、そして民主化を達成するという社会の大きな変化がありました。まず脱植民地の課題から始まって、さらに冷戦下、中国と台湾との関係など、東アジアの国際関係をどう処理するのかという中で歴史像が新たに作られていきます。そしてその一つの到達点として、現在は東アジア史という考え方が強く打ち出されていて、これはもちろん民主化の進展と経済の成長などとも密接な関係があるわけです。このように近代史の歴史像を再構築するという韓国の文脈があると理解できます。

一方で中国はどのように戦後の歴史を再構築してきているのかなのですが、私は、特に80年代以降、中国にいわゆる主流の歴史像への挑戦という形で新たな歴史像を作ろうとする知識階級（と中国はいいます）の動きがあるのではないかと思います。例えば、本日講演をなさった陳紅民先生は、いわゆる「民国史観」を打ち出したのを私は覚えています。「革命史観」とか「近代化史観」という歴史観がある中で、陳先生はそうではない、「民国史観」も必要だと主張されました。つまり、中華民国の歴史を再構築する中で、戦後の中国の新たな歴史像、これを作っていかなければならないと言うような事をリードしてこられたのは、まさに陳先生です。そして、個人の日記の出版の話もありましたが、これも同じようにやはり主流の歴史観に対抗するわけではないですが、それに挑戦するような動きとして、つまり、国家の歴史と個人の歴史、その間にどういう可能性があるのか。国家中心の歴史観だけで語られてきた近代の歴史像を修正する一つの努力は、まさに中国における個人史、個人の日記、そういうものの出版を通して探求していくプロセスでした。それからもう一つは「他者への理解」もキーワードとして出てきました。それは加害者と被害者が非常にはっきりしている中で、加害者に対する理解のあり方はどうあるべきかというような、かつてありえないような大胆な問題提起も出されました。もちろん他者への理解は他者への賛同、承認という意味ではないのですが、それにもかかわらず、やはり理解が必要であるという新しい歴史のあり方の提出です。他にもたくさんあります。例えば記憶と忘却の、競争の問題です。これもまた後でお話します。

日本については、この歴史像は先ほど塩出先生が教科書を通して、非常に明確に示されました。一つの流れとしてはやはり「加害と被害の歴史観の逆転」といいますか、これは50年代以降の日本の歴史教育と歴史研究の、あるいは社会全体の、歴史像の一つの変化です。この中で、特に近隣諸国条項というのが80年代に出されますが、このこと自体もやはり、いわば歴史観や、あるいは加害被害の話とは別に、近隣諸国への配慮の中でできる歴史像もある意味重要です。そして歴史認識問題をめぐって、近隣の国々との間で何度もこの論争が展開されていったわけですが、その論争の中でできた新たな時代像もあると思います。さらに先ほど自分史とか自伝を通して、国家の歴史像と違う歴史像を模索してきたということですが。

このように3カ国は、戦後70年間かけて各自の歴史像をずっと模索してきたわけです。その模索のプロセスはもちろん終着点に到達したわけではありません。そこで当然発生する問題としては、国家間の歴史認識と新たに構築しようという歴史像、その間の距離をどう縮めたらいいのかが一つの問題として出てきま

したし、さらに今後歴史像を再構築することの将来はどういうふうになるのか。例えば中国の話で言うと、中国の将来は今、この主流の歴史観への挑戦の中で、新しく作られてきたこの歴史像をそのまま拡大して行くのか、持続して行くのか、それともまた逆戻りをするのか。そのことは歴史家にとって大変重要な課題になっているのではないかということです。この「歴史像の再構築」の話が一点目です。

二点目として、あえて「新史学」という言葉を使ってみたいと思います。これは東アジアの新しい歴史をどう作っていくのか。例えば韓国では「東アジアの歴史」、日本では「歴史総合」という形で、先ほど何人かの先生が指摘されたようにかなり共通点があります。こうした共通点をもたらした理由の一つは、多くの方が指摘された民主化という概念です。民主化によって達成されることと、それができないものというのがやはりあるわけです。

中国は先ほどお話にありましたように、上海の一部の地域で「歴史」という教科書を作ってこれを2～3年使ったあと中止されたということでしたが、それはまさに「歴史総合」であるとか、「東アジアの歴史」であるとか、その流れのものとして考えることができます。中国はこの部分においては中絶してしまったということになるわけですが……。したがって、この新しい歴史学、新史学というものを、どのようにこの地域の共通のものとして新たに構築して行くのか、あるいはそもそもその可能性はないのかどうかです。その場合、多くのことは多分、これは中国が解決しなければならない問題です。そして中国ではなく、ほかの国々と問題を共有していることもいくつかあると思います。並べてみますと、一つは「何を記憶するのか」、そして「何を忘却するのか」を「誰が決めるのか」です。誰が決めるのかについては、歴史家はその中でどういう役割を果たすのかということです。

それから「他者への理解」の話ですが、他者への理解は、まさに東アジアの和解につながる問題だと思います。昨日の懇親会で三谷先生もおっしゃいましたが、謝る人とその謝罪を一応受け入れる人、この双方がないと和解は成立しません。ですから、被害の歴史が非常に歴然としている中で、どのように他者への理解を追求していくのか。これは歴史家の責任でもあるかもしれません。

それから「政治と歴史の関係」、これは中国の歴史家が直面している最大の問題ですが、これは中国だけではない。おそらく全ての歴史家がこのことを考えなければならない問題だと思います。それから道徳と歴史の問題ですね。あるいは、そもそも歴史学、歴史そのものの持っている意味は、先ほどの話の中でもありましたように、中国と韓国と日本は違ふと。特に中国は歴史の持っている意味が違うわけです。そういうことを前提に考えた場合には、この歴史対話のあり方はどうすべきなのか。そもそも中国の歴史がもしアジアのほかの国と違ふならば、この歴史のまま対話を続けて、そこで合意を追求していくのか、それとも何を変えなければならないのかです。これは歴史家が考えなければならない問題だと思います。

もう一つ、歴史家の仕事としては、「史料の問題」。これも提起されましたが、つまり、歴史家が史料を探して読んで歴史を書くことだけではなくて、今の時代

は史料をある意味作る、自分の手で作る、それは話させること、書かせることによって新しい時代の歴史のあり方、これをどう追求していくのかです。このようなことを全部新史学と考える。かつて梁啓超^{りやうけいちょう}が提唱した新史学がありますが、時代が変わって新史学の中身はもう変わりますが、この新史学をアジアのこの三カ国の歴史家たちはどのように追求したらいいのかは、まさに我々の課題です。この新史学を共に追求する中で、歴史の中のいろいろな問題を乗り越えて、新しい歴史、和解の可能性が、そこに生まれるのではないかと思います。

私の問題関心に即して、今日の議論を少し感想的に整理してみました。明日の議論がどう展開されていくのか非常に楽しみにしています。本日発表された先生方、本当にありがとうございました。それから通訳の皆様もありがとうございました。

以上で終わりにしたいと思います。

第5セッション

指定討論／全体討議

司会：鄭 淳一 高麗大学

議論を始めるに当たって：

三谷 博 東京大学名誉教授

指定討論者：金 憲柱

(発言順)

袁 慶豊

吉井文美

史 博公

国立ハンバット大学

中国伝媒大学

国立歴史民俗博物館

中国伝媒大学

[発言は母国語、翻訳：尹在彦（韓国語）、于寧（中国語）]



■ 鄭 淳一 こんにちは。第5セッションの司会を務めさせていただきます、高麗大学の鄭淳一と申します。本題に入る前に、東京大学名誉教授の三谷博先生が「議論を始めるに当たって」というテーマでお話しくさることになっています。三谷先生お願いします。

■ 議論を始めるに当たって

■ 三谷 博 おはようございます。最初に私からひと言話すようにということなので、蛇足と思いますが、お話ししたいと思います。

昨日は、「教育」、「メディア」、「研究」、それぞれのテーマについて、極めて創造的な発表が行われたと思います。そのかなりの部分が、「歴史家がどう現在のパブリックと過去の世界を結びつけるのか」を問うものでした。それはこの会議の趣旨である、国境を越える歴史対話の推進にかなう提言だと感じました。その上で、皆さんの議論が始まる前に1点、問題提起したいと思います。

過去を伝えるその手がかりは史料です。「現在」に関しては、昨日お話があっ

たように、史料を我々が作ることができます。しかしながら、歴史の大部分は過去にすでにできてしまっている「物」を探して、その中から情報を取り出す作業です。新しく作るのは、はっきりいって歴史学の基本から見れば、極めて危険な行為だと思います。史料を作るのは、民衆史を可視的にするには有力な方法です。しかしながら、普通の歴史はそうではない。過去にできてしまった「物」から情報を取り出すわけですが、その場合にほしい史料が手に入らない、証拠になる「物」が残っていない場合もあります。今日ここにお集まりの先生方は、アカデミズム史学をいったんは学んでいると思いますが、そこでは、史料を根拠としない解釈は排除されます。そしてまた、自然科学に近い、厳しい「ファクト・チェック」が課されることとなります。史料の提示とその信憑性の吟味、つまり「史料批判」が学問としての歴史学の根本にあります。

昨日は記憶の生成・管理が論じられました。ただ、記憶はどこまで信用できるでしょうか。私は、中学校で野球をやっていましたが、その最後の決勝戦で負けました。30年ほどのちに、チームメイトと回想録を書いたのですが、その最初の原稿では、我々は初めは勝っていたのに、終盤で逆転されて負けたと書きました。しかし、実は当時のスコアブックが残ってしまっていて、その記録を見ると最初から負け続けていたのです。このように、記憶というものは、相当怪しい。どうしても我々はドラマティックに話を作り上げてしまう。それを信じていいのだろうか。私の経験を少しお話しさせていただきました。

それから、私の場合は極めて古典的な分野の研究を行っています。歴史の中で一番古い政治史です。しかしながら、アカデミズムの原則に本当に忠実に従ったならば、困ったことが起きます。あるはずの史料が見つからないことがあるのです。私は明治維新の研究者ですが、明治維新で起きた最大の変化は何かといえば、世襲身分制がなくなったことです。江戸時代を支配した侍たちが一人もいなくなった。大規模な階級革命です。ところが、世襲身分制を壊したいと語った史料がないのです。つまり、「今の世は生まれながらに身分が異なり、差別されている。これは正義に反する。力を合わせて身分制を壊そう」。このような訴えを述べた史料を我々は探したくなります。でもありません。なぜそのようなことが起きているのかはとても面白い問題なのですが、ともかく、あるはずのものがありません。実際にこの大きな変化の背後に、身分制への強い不満が蓄積されていたことは間違いありません。明治維新の後になって、福沢諭吉や渋沢栄一といった人達がそんな回想録を書いています。幕末の同時代の史料にはないのです。では、史料がないから彼らは不満を持っていなかったのかというと、決してそんなことはありません。このように、アカデミズムの原則にそのまま従っていたら、どうにも解決できない問題があるのです。

それから、民衆史が昨日話題になったのですが、その有力な史料としては裁判の記録があります。民衆史の研究では、しばしば民事裁判の記録が使われてきました。訴訟の記録ですから、そこに現れる民衆の姿はきわめて生々しく、利害や立場のぶつかり合い、その背後にある社会がよく見えます。ところが、日本政府は近代の民事裁判記録は廃棄してしまったのです。我々は江戸時代の民衆については詳しい裁判の記録があるのでよくわかる。けれども近代は記録がないのでわ

からない。民衆の生き様については、近い時代より遠い時代の方が分かりやすいという妙なことになっています。このように、史料がなくなったことが、大きな研究上の障害をもたらしています。

まとめます。史料がないから、それが語るはずの過去は存在しなかったのだと、そんなことは言えるわけがありません。しかし、史料抜きに好き勝手な物語を創ることも、また健全ではありません。文学者や評論家はそういう勝手な歴史を、例えば日本に関してはたくさん書き、またYouTubeなどで発信しています。その物語と我々歴史学者の物語はどこが違うのか。歴史学は文学や評論と異なります。アカデミズム史学は「ファクト・チェック」の良い訓練場です。我々はときに、文学の領域に足を踏み入れざるを得ないかもしれませんが、学者であろうとする限り、根拠地たる史料批判を捨てるわけにはいかないでしょう。この境界領域について、みなさん、それぞれの専門に即して考えていただきたいと思います。

それから1点つけ加えると、昨日もお話ししましたが、これから始まる討論は昨日以上に多様な論点が提示されるはずで、それは我々全員にとってまたとない学ぶ機会です。自分で考えられることには限界があります。人から学ぶ。人から知恵を借りる。歴史家というのは一生それを続けるものだと思います。ですから、ぜひ他の方の発言に耳を傾けて、そこから何を獲得できるかを考えていただきたいと思います。

■ 指定討論／全体討議

鄭淳一 三谷先生、どうもありがとうございました。それでは第5セッションの指定討論に移ります。議論に先立ち、二つだけ簡単に私のお話をさせていただきます。

私は早稲田大学院で勉強をしました。会場が早稲田大学の建物であるため、留学生時代を思い出しました。一つ目は留学生時代、毎朝NHKの「おはよう日本」というニュースを見ながら一日を始めました。今朝ちょうど彭浩先生と早めに会うことになって、たまたま7時頃に起きたらNHKで「おはよう日本」が始まっていました。最初の話は、今日の8月9日が1945年8月9日の長崎原爆投下から78年というニュースがちょうど流れ、いろいろな意味で本日の植民地時代と戦争をテーマとする国史たちの対話と重なる部分がある、意味のある日だと思いました。

そしてもう一つ、留学生時代を思い出します。私は運良く早稲田大学からたくさんの奨学金をいただくことができましたし、渥美財団からも奨学金をいただいで比較的楽に留学生生活を送った立場ではありますが、それでもアルバイトをかなりしていました。その中で一番好きで有益だったアルバイトとして記憶されるのが通訳でした。私は当時は自信にあふれていて韓日通訳が上手だと思っていましたが、実はとても苦勞しました。しかも逐次通訳だったので大変でした。今、この話を通訳してくださっている通訳者の方々がいらっしゃいますが、ましてや同時通訳というのはとても大変な作業です。

ですから、先生方が後で討論される時、常に通訳を意識して発言することがと

でも大事です。我々は母国では皆、権威がある第一人者かもしれませんが、国際学術会議では話す内容がどのように外国語に通訳されるかが重要です。結局、我々の話を発信してくれるのは通訳です。ですから、先生方が「はっきりかつゆっくり」という大原則の下でお話ししてくださると、研究内容と考えがよく伝わるので、その点を注意していただきたいです。

それでは、もう一点だけ申し上げて討論に移りたいと思います。昨日、指定討論者の方々に申し上げたように、お一人につき7分程、コメントをお願いしました。コメントはもう一つの発表ではなく、昨日発表された内容と関連する感想や質問の形式にさせていただいた方が望ましいです。そして質問の場合、どの発表者に答弁を求めるのか、どの発表者に意見を求めるのか具体的に名前を教えてください。できれば質疑応答に有益になると思います。現在、指定討論者の先生方が7人予定されていますが、そのうち第5セッションでは4人の指定討論者の方々に先にマイクをお渡ししようと思います。

順番は先ほどお話ししましたが、国立ハンバット大学の金憲柱先生、史博公先生、吉井文美先生、そして袁慶豊先生の順に、4人にマイクをお渡ししたいと思います。最初は国立ハンバット大学の金先生にまずコメントをお願いしたいと思います。

金 憲柱

こんにちは。今回の韓中日3カ国の国史研究者たちの対話という企画に合わせ、各国の文脈がよく表れた発表を注意深く拝聴しました。私は韓国史研究者として中国史、日本史については初歩的な知識しかなく、今回の発表文を拝見しながらたくさんのことを学んだので、私の感想と質問、そして今後の展望を議論するという形でお話を続けたいと思います。

本格的な討論に先立ち申し上げたいことがあります。私は、韓中日3カ国の20世紀の歴史はそれぞれ異なる経験をしています。共通点の一つがあると思います。それは「被害者の叙事」です。「victimhood narrative」になるでしょう。この被害者の叙事がそれぞれ異なる文脈で語られています。この被害者の叙事の克服が東アジア歴史の特定の問題を解決する上で、重要な端緒になると先に申し上げてから始めたいと思います。

まず、塩出先生のご発表を通じて、戦後の日本人が戦争によって日本が被害を受け、国家権力によって戦争を強いられたという観念を持っていたということを知りました。そういう面で、日本人の被害者意識をどのように認識するかは重要なテーマだと思います。福間先生の論文でも戦後の若い世代が戦中派世代の被害者意識を批判する部分がありますが、要するに、戦後の日本人の被害者意識あるいは被害者の叙事は明らかに広範囲に存在していたようです。

このような文章を読みながら、2013年に公開された宮崎駿監督のアニメ「風立ちぬ」を思い出したりもしました。この映画は第二次世界大戦時の日本人の戦闘機設計士の人生を少しロマンチックに描き出しましたが、韓国国内では帝国日本の歴史的加害に対する文脈が抜けているという理由で、「親日映画」として多くの批判を受けました。ところが当時、私はその映画に対する評価とは別に、戦争の記憶が日本人の戦争経験の中でどのように成り立っただけか、というのがいつも気になっ

ていました。今回の発表文を読みながら、その疑問が少し解けたように思います。要するに、戦争と植民地支配に対して日本人が悔しさを感じる理由が、結局被害者の叙事に基づいていると整理できそうです。

ところが被害者の叙事はどのような条件でも登場します。日本の被害者の叙事が自国の歴史を顧みる過程で出た反作用だとすれば、韓国の場合も被害者の叙事を過度に主張している面があります。例えば、韓国の場合、ベトナム戦争に参戦し、その過程で戦争犯罪を犯したという最近の判決が出て、韓国もやはり日本との歴史的状況とは関係ありませんが、とにかく加害の経験があります。ところが、この加害の記憶はまだ公式の叙事としては認められておらず、戦争に参加した軍人の中には、枯葉剤の被害を受けて身体的に多くの問題を抱えている、気の毒な軍人さんたちもおり、自らを被害者と規定しています。

私はこのようなやり方が日本人の被害の叙事と非常に似ていると思います。要するに、日本は植民地支配という加害よりは、米国から受けた被害をより覚えているようで、韓国は植民地支配の被害をはっきりと覚えているにもかかわらず、ベトナムに対する加害をきちんと認識できていません。ナショナリズムが強固に存在する限り、どの歴史的経験があっても被害者の叙事は強固に存在するでしょう。こうした面で韓日両国に対しては共通点を見出すことができます。

このように共通点を発見して終わるわけではありません。我々はここで責任の問題をきちんと直視する必要があります。私の尊敬するテッサ・モリス＝スズキ (Tessa Morris-Suzuki) という歴史学者がいます。英国出身で、オーストラリア国立大学に在職しながら日本の歴史を勉強されている方ですが、こんな話をします。「植民地支配の責任から加害国の国民は自分の意思と関係なく植民地支配の責任に関わっている」と説明します。例えば、現代日本の目覚ましい成長の背景には20世紀初頭から半ばにかけての東アジア諸国に対する植民地支配の影響があり、世界10位圏の経済大国となった大韓民国の繁栄にはベトナム戦争への参戦という歴史的加害が持分としてあるからです。

その内容と重みで明らかな違いがある韓日両国の歴史的経験をあえて紹介したのは、両国の歴史教育とメディアなどがいずれも被害者の叙事だけ強調する傾向があるからです。このような東アジア各国の被害者の叙事を「犠牲者意識民族主義」という概念で説明する歴史学者もいます。西江大学の林志弦教授がこのような主張をしていますが、このように絶え間ない被害者の叙事の連鎖で、責任と省察は常に後回しにされているのではないかと思います。従って、この被害者の叙事の克服が東アジア歴史の対話において重要なポイントになると思います。

このような問題意識で塩出先生に質問したいと思います。先生は「歴史総合」という方法を重要な課題として提示しましたが、発表文の内容だけを見ると、これが歴史問題解決の端緒になるのか気になる側面があります。実際に、2021年に検定を通過した「歴史総合」について河合幹雄という研究者が、世界史と日本史の統合のパートについて、世界史の中に日本史を部分的に取り入れたレベルに過ぎないと批判しました。日本の近代化を礼賛する問題点があると批判したりもしました。韓国の学者、ソ・ヒョンジュの研究によると「歴史総合」の慰安婦の記述を見ますと、出版社ごとに違いはありますが、強制動員と慰安婦の部分で強

制動員関連の記述は「歴史総合」以前より減り、慰安婦の部分は記述の内容と量の側面で進展していないという研究結果があります。

このような「歴史総合」を通じて先生が発表された内容を見ると、以前よりは明確に発展し、また多くの重要な試みだったということは私も理解できましたが、私が最初に申し上げた被害の叙事に対する克服と、加害に対する関与を理解する段階まで到達しているのか疑問に思います。もしそうであれば「歴史総合」が総合ではなく「收拾（訳注：一時的に問題を收拾させる意味の「縫合」の訳語）」に過ぎないのではないかと思うのですが、私が「歴史総合」に対する理解が不足し誤解しているかもしれません。私の提示した議論が「歴史総合」に反映されているか詳細な説明をお願いします。

次に、三つ目として加害の構造的問題についてです。その延長線上で福岡先生が1980年代以前の日本のメディア文化で見られる加害の構造的省察という質問を引き出したところは興味深かったです。また1980年代以降、加害と顕彰という二項対立だけが再生産され、加害の構造に対する問いが消えたという点も非常に興味深かったです。ただ、ここで福岡先生は1980年代以前、つまり1960～70年代のメディア文化でそれなりの答えを探していらっしゃるようです。

しかし、実際に1960～70年代の日本社会の雰囲気の中でそれなりに意味のある議論が出てきましたが、むしろ特殊な状況だったのではないかという気がします。私の浅い知識でその時期の戦後日本の戦争責任論の台頭、また全共闘のような闘争を見ると1980年代に民主化運動が起こった時の韓国の雰囲気と似ているように思います。その時代的文脈の中での議論が現状で再び生かせるのか、発表文では、最近では注目に値する議論が見つからないと言及されました。日本社会も多様な性格を帯びていると思うので、そのような議論が全くないわけではないと思いますが、一定の意味を与えうる動きやメディアのコンテンツがあれば追加のコメントをお願いいたします。

そして最後に、江浦先生の満州での中国人協力者の発表文をかなり興味深く拝読しました。民衆の生存権と日常での協力の実体を覗いてみようという問題意識にも同感します。個人的に韓国の近代社会運動史を勉強しながら、似たような事例をたくさん発見できたので、より共感できました。ただし、こうした実体に対する分析の後、どういった展望ができるのかという問題意識もあります。もちろん、発表文で言及された協力の事例が韓国の歴史にも同様に出てきますが、時間の関係上、省略させていただきます。

そこで具体的な質問と疑問点をいくつか申し上げますと、まず協力の原因を困窮や日常に還元する方法です。この発表文の論調に従う場合、日本の支配、満州国の支配という抑圧的構造が従属変数のように見えます。しかし、私が見るに協力は協力者が自律的に決定できるのではなく、支配の構造に従属します。王朝時代には王と支配階級に、植民地時代には植民地支配権力に協力することになるでしょう。韓国での植民地統治を例に挙げますと、1920年代以降、朝鮮総督府が計画的に日本への協力者を量産する政策を取っていたことを考えると、協力問題の本質は支配構造にあることは明らかだと思います。この文章では満州国の統治方式と協力の関係性についての分析が見当たりませんが、この点はどのようにお

考えなのか質問させていただきたいと思います。全く言及がないわけではありませんが、あまり出ていないように感じました。

そして昨日の発表でハンナ・アーレント（Hannah Arendt）の『エルサレムのアイヒマン』の悪の陳腐さのテーゼについておっしゃってくださいました。ところが最近、ドイツの歴史学界の研究によると、この事例、つまりアイヒマンが無知の状態で虐殺を行ったということが実証的に反論されています。要するに、アイヒマンが単に命令に従っただけではなく、積極的に虐殺の方法について意見を述べていたということです。これは単に実証的にテーゼが崩れたということではなく、言説に基づいて実状を判断することの危険性を示しています。

合わせて日常と陳腐さという側面に過度に埋没する場合、ハンナ・アーレントがアイヒマンの欺瞞的な陳述に没入したように、歴史学者たちもやはり歴史的個人の史料という手法を通じて出てくる陳述に埋没する恐れがあると思います。この前提を認めたとしても、おっしゃっていた施明儒の事例が民衆の概念に入るのか少し曖昧です。満州国軍人という特殊な位置にある存在で、通信大隊副隊長という将校になった人物なので、民衆の範疇をどのような概念として設定されたのか少し気になります。

最後に、この文章を読みながら、2000年代初めの韓国史学界で出版された漢陽大学の尹海東教授の『植民地の灰色地帯』という本を思い出しました。本書では、韓国植民地の歴史を支配と抵抗の二分法とする見方を批判し、支配と抵抗の間に灰色地帯で葛藤し協力する主体に注目しようと主張しました。当時はかなり破格な内容でした。今では多くの内容が受け入れられていますが、当時は批判に直面しました。中国学界の研究動向には無知ですが、先生のこのような議論が中国学界でどのような位置を占めており、どのように受け止められているか気になります。私の討論を終えたいと思います。ありがとうございました。

■ 鄭淳一 金先生、ありがとうございます。昨日発表してくださった先生方がとても緊張しながら傾聴する姿が、私にはとても面白く見えました。「私の名前が出るか出ないか」、こんな感じで聞いていらっしやったようですが、金先生のコメントでは具体的に3人の先生方のお名前とご発表に対する言及があったと思います。福間先生、塩出先生、江先生について具体的なコメントをいただきましたので、後ほど3人の先生方にご回答及びコメントをお願いしますので、ご準備いただければ幸いです。

次に史博公先生をお願いしたいのですが、少し事情があるようなので、順番を少し変えて袁慶豊先生に先にコメントをお願いしたいのですが、よろしいでしょうか。はい、よろしく申し上げます。

■ 袁慶豊 皆さん、おはようございます。今回のシンポジウムに招待してくださった主催者に感謝の意を申し上げます。皆様のご発表を拝聴して、大変勉強になりました。今回のシンポジウムに出席している皆さんは優秀な歴史研究者ですので、質問を持って参加させていただきました。私は中国映画史を研究するものですが、日本と韓国の研究者に私の質問を答えていただければ幸いです。

1937年7月に、日本軍の侵略に対する全面抗戦が勃発しました。1カ月後の1937年8月に、日本は東北の占領区にある長春で「満洲映画協会」(略称は「満映」と呼ばれる映画撮影所を設立しました。もちろん、偽満洲国はその時すでに成立していました。「満映」は当時アジア最大の映画撮影所であり、日本が敗戦した1945年8月まで存在していました。戦争が終わる1年前の1944年の統計では、「満映」には脚本家、監督、俳優、技術者を含めた職員1857人が所属していました。その中で日本人は1075人、中国人は711人、朝鮮人は51人、台湾人は20人で、それぞれ、57.9%、38.3%、2.7%、1.1%を占めました。8年間の間に、「満映」は300本以上の映画を制作し、その中で物語映画は100本以上ありました。私が調べた資料によると、「満映」が制作した作品は主に中国における日本の占領区で上映されましたが、一部の作品は日本本土と朝鮮でも上映されたと考えられます。

次は私からの質問になります。皆さんは歴史学の訓練を受けた専門家ですので、ぜひ答えていただければと存じます。この8年間にわたって、「満映」が制作したこれらの映画は中国映画でしょうか、それとも日本映画でしょうか。

この問題について、中国映画史研究界では、まだ立場を表明できていません。現在問題になっているのは、研究者にしても、「満映」の作品は1本しか見られない状況が続いているということです。話によると、ソ連が東北を占領した後、「満映」の資料を全部ソ連に持ち帰りました。1990年代に、日本はロシアからこれらの資料を購入し、中国本土にもコピー一式を贈与したと聞いています。私もこれについていろいろ確認しようとしたのですが、中国映画資料館は応じてくれませんでした。今回東京に来て、今の質問について皆さんのご意見を伺うほか、日本でこれらの作品を観るチャンスがあるかどうかも知りたいです。

私の質問は以上です。ぜひご教授お願い致します。

■ 鄭淳一 袁慶豊先生、コメント及びご質問、ありがとうございます。具体的に発表者のお名前はおっしゃっていませんが、一つ目、二つ目のご質問、とても重みのあるご質問をしてくださったと思います。後ほど、この二つの質問について一緒に議論する時間を設けたいと思います。

それでは3番目の、日本の国立歴史民俗博物館にいらっしゃる吉井文美先生のコメントをお願いしたいのですが、吉井先生が個人的な事情がありまして、本日オンラインでコメントをいただくことになっていたのですが、(オンラインでお話することができなくなったため) 予め司会者の方にコメントを送っていただきました。司会者2人のうち、声はるかに良い彭先生に代わりに読んでいただきます。お願いいたします。

■ 吉井(彭浩代読) 昨日は大変有意義なご発表や議論をお聞かせ頂きまして、ありがとうございます。せっかく討論者に指名して頂いたところ大変申し訳ないのですが、家庭の事情のため本日急遽出席できなくなりましたので、コメント内容を書面にして提出させていただきます。コメントは2点あります。

1点目は、個人目から歴史を見ることについてです。江沛先生の満洲国の下級官吏を務めた中国人についてのご報告を聞いて、私は、開灤炭鉱という、河北

省の唐山にある石炭の炭鉱を経営していたイギリス人のことを思い出しました。彼の名前はネースン（Nathan）といいます。1930年代において開灤炭鉱は中国大陸で撫順炭鉱に続く第2位の石炭産出量をほこっていた大炭鉱で、経営の実権はイギリス人が握っていました。ネースンは天津イギリス租界に住み、炭鉱経営にあたっていました。

唐山は1935年の華北分離工作（華北事変）ののち、日本が作った冀東防共自治政府の支配下に置かれます。日本は開灤炭鉱に対して、冀東政府に納税したり登記したりするよう迫りました。開灤炭鉱を経営するイギリス人は、当初これを拒否します。冀東政府は「事実上の政府」でしかなく、中国を支配する「正当な政府」ではないからです。しかし、日中戦争が始まり、戦争の長期化が明らかになると、ネースンらイギリス人はそれまで行っていた南京国民政府への納税をやめ、冀東政府への納税を始めるなど態度を変化させていきました。この事情について、「日本の支配勢力は、華北から消え去りそうにないので仕方がない」とネースンは述べています。

その後日本が東亜新秩序を声明したり、華北で貿易や経済への統制を強めたりすると、ネースンは、現地を支配する日本に対して拒否感を示し、日本占領下で経営を続けることに不安を募らせていきます。そして、イギリス政府に対して、炭鉱を守るために日本に圧力をかけるよう求めるのですが、当時東アジアに介入する余裕のなかったイギリス外務省はこれを拒否しました。本国からのサポートが得られないなか、華北で経営を続けるためには現地を支配する日本の勢力と折り合いをつけることが必要と考え、炭鉱を経営するイギリス人は、もともと上海や香港向けに販売していた分を日本への販売に切り替えるなど、日本との関係を強化していきました。中国を侵略し、東南アジアにも進出しようとする日本と良好な関係を築き、軍需産業を支える石炭を大量に日本に販売しているネースンを、ますますイギリス外務省は疎んじるようになりました。

日本の侵略に対するネースンの対応も、「不安から受容、服従へと変容していく過程」（江論文 p58）であり、日本の「権力下での生存」（江論文 p67）のあり方の一側面を映していると思います。

ネースンの史料はオックスフォード大学に残されているのですが、私はこの史料を読み、1930年代における開灤炭鉱と日本の関係について研究したとき、会社の利益を守るために臨時政府を承認するようにさえイギリス外務省に求めるイギリス人がいたことに驚きました。ネースンの考えは、イギリス政府の対東アジア政策とは異なるものですが、日本の占領下におかれた天津で、莫大な富をもたらす炭鉱を維持しようとする経営者としての立場に立てば、一理ある選択だったようにも思います。

ネースンという個人の目を通して歴史を見ることは、劉傑先生が論点整理された「国家の歴史認識と新たに構築する歴史像の距離」の問題とも関わると思います。この距離を認識したうえで次にどうするのかという点についてですが、私がネースンを通して明らかにできた小さな事実は、日中戦争期の日本による華北支配には現地のイギリス人の協力が不可欠であったこと、そして日本がネースンら現地のイギリス人を切り崩して支配を強化していく具体的な過程です。このよう

な小さな事実の解明を積み重ねることで、「国家の歴史認識と新たに構築する歴史像の距離」を縮めたり、なぜ距離があるのかを考えたりするきっかけになり、戦争や植民地支配を多元的に理解することにつながるのではないかと信じています。

施明儒やネースンのように「複雑で困難な選択」の連続を、同時代的に日記や手記を残すことで後世に伝えることができなくても、研究者や地域の人々の導きによって自分史という形で自己表現をすることができたのが、安岡健一先生が紹介された、中国と日本にルーツを持ち、自分史を書き上げた相沢莉依さんの例ではないかと思います。国と国との関係として括られない個人の経験や個人の記憶に触れ、その個別の事例を積み上げていくことで、歴史を再構築していく営みは、歴史史料の多様化と併せて今後ますます重要になると思います。

2点目は、劉傑先生が整理された「他者への理解」について、私が所属している国立歴史民俗博物館との関係からご紹介させて頂きたいことがあります。2019年10月～2020年2月に韓国国立民族博物館にて、弊館と共催で「昆布とミヨク」という企画展が開催されました。

この展示は、主に民俗学を専門とする研究者が数年間にわたる共同研究を経て開催したもので、「日本と韓国の、海をめぐるありふれた日常の歴史とその移り変わりに、類似と相違という観点から光をあてるとともに、先人たちが互いに影響しあい、主体的に相手の文化を受け入れてきた躍動的な姿を描くこと」が展示の趣旨となっています。展示は3部構成で、最後の「海を越える」というセクションでは、近代の漁民の移動の様相とそれによる文化の混交が展示されていました。その大半は植民地期に関わるものでした。

この展示が開幕する直前に、韓国でいわゆる徴用工裁判の大法院判決が下されたり、日本政府が韓国を貿易上のホワイト国から除外したりして、日韓関係が戦後最悪とも言われる状態になっていました。そのような時期、日韓の文化交流に関わる展示が開催されたことは歴史学を専門とする者としてとても興味深く、その理由を探りたいと思い、私はソウルに展示を見に行きました。

展示の近代の箇所では、日本人漁民による新たな漁法の導入と、東アジアにおける広域的な経済圏への朝鮮半島の編入が、韓国在来の漁業に急激な変革をもたらすとともに、韓国の食文化にも大きな影響を与えたことや、日本へ渡った済州島のヘニョ（海女）がもたらした文化が今も日本に残っていることなどが紹介されていました。植民地期に日本人がもたらした煮干の文化が、現在の韓国に定着していることや、日本の食卓でなじみ深い明太子は、戦後の九州・博多で、韓国での思い出の味が再現されたのが始まりだったことなど皆さんはご存じでしょうか。私は展示を通して初めて知りました。

日本による植民地統治下において、日本人と韓国人の間に権力関係があったことは忘れてはなりません。人びとの日常生活のレベルでは日本人と韓国人が互いに影響しあいながら、主体的に相手の文化を受け入れ、自分の生活のなかに取り込んでいくという営みもあったこと、そして、その文化交流の痕跡が現在の私たちの生活の中にも溶け込んでいることが、展示を通して描かれていたように思います。民俗学の視点の面白さが活かされていました。

植民地統治をご専門とされている先生がお聞きになったら、私の見方は少し樂觀的かもしれませんが、この展示は支配と被支配、加害と被害という植民地期の構図から一歩足を踏み出して過去を捉える一つのきっかけを提供しているのではないかと私は感じました。だからこそ、日韓関係が悪化した時期においても開幕し、ソウルで多くの方々が展示をご覧になったのかもしれませんが。

劉傑先生が論点整理された「他者への理解」、そして他者との関係性のなかで自己理解を深化させる例として、ご紹介させていただきます。以上です。

■ 鄭淳一 彭先生、ありがとうございます。やはり吉井先生のコメントも、加害と被害という二項対立的歴史認識あるいは二項対立的捉え方に対する相対化、またそのような相対化のための努力にかなりの魅力を感じていらっしゃるのではないかと思います。具体的には、江先生、安岡先生、劉先生のお名前が言及されています。後ほどまたコメントを伺いたいと思います。

それでは、第5セッションの最後の指定討論者で、史先生にマイクをお渡ししたいと思います。今オンラインで接続していらっしゃいますが、昨日、史先生は自己紹介の時間が取れなかったので、簡単に自己紹介をしていただいてから、コメントを約7分程度にまとめていただければ幸いです。お願いします。

■ 鄭淳一 (オンライン接続不良のため) それでは大変申し訳ありませんが、司会者として少し順番を変えて、史先生がシステムを点検される間、コメントで言及された先生方の方にまず時間をかけ、ご答弁をいただきたいと思います。それでは、福間先生にまずマイクをお渡しして、その次に塩出先生、安岡先生、そして江先生についてのコメントが多かったので、その順でご答弁、ご補足をお願いしたいと思います。それでは福間先生、お願いします。

■ 福間良明 コメントありがとうございます。一つは1960年代に加害や責任をめぐる議論が生まれてきた状況は、特殊ではないかという質問でした。昨日申し上げたように、1960年代に加害や被害を巡る議論が噴出したということは、その時代にある種、特徴的なことではあったわけですが、他方でどのような言説であっても、その時々々の社会構造や社会背景にもある程度規定されるところがあるように思います。何が普遍的で何が特殊なのかは、なかなか言いにくいところがありますが、1960年代の社会的なバックグラウンドを考えると、戦中世代に社会的な発言力がある一方で、若い世代もこれから発言力を持つとする時期、つまり発言力の世代交代の時期でもあったように思います。下の世代が上の世代を突き上げる中で、上の世代を批判するロジックとして、被害者意識批判、加害責任という議論が出てきた。一方で上の世代は加害の問題も必ずしも無視していたわけではないのですが、その中で戦争体験、あるいはその記憶といったものを、その時々々の政治に流用するのがいいのかどうかといった論点を提示していったこともあると思います。

戦後の日本人の中に、ある種の被害者意識のようなものが確かに広がってはいたわけですが、少し考えてもいいように思うのは、加害の問題の取り上げ方です。

というのも、昨日お話ししたことにもつながりますが、加害を論じるときに、体験がない世代はやはり「言いやすい」という構図がどうしてもあると思うのです。それは、自分が同じ条件に放り込まれたら、自分も同じ加害を起こすかもしれないという恐れがないがゆえに、加害責任を追及しやすいところがあると思います。責任がないと確かに責任を追及しやすいわけなのですが、やはり同じような状況に放り込まれて、同じような暴力を自分は行使しないと言えるのかどうか。その点は日本の戦中世代だけではなく、さまざまな世代、それ以外の人々についても考えていいのではないかと思います。昨日少しお話ししたことにもつながりますが、悪逆な暴力が悪逆に見えないようなシチュエーション、行動ですよ。暴力そのものだけではなくて、その暴力がある種の正しささえ帯びてしまうような行動をどう捉えるのかです。昨日お話ししたのは1960年代の世代間のぶつかり合いの中で生まれていた議論だと個人的には思います。その上で加害と検証の議論が80年代、90年代、今に至るまでその二項対立の形で続いているというお話をしたわけです。今後は可能性がないのかというと、もちろんそうではなくて、日本の中ではここ10年、15年ほど、「戦争社会学」という議論が少し盛り上がりを見せつつあります。そこではある意味、従来のような正しさとか規範から少し距離をとるといえるか、正しさのあり方そのものを捉え返すというような議論が出てきているように思います。その意味で歴史認識の是非だけではなくて、そういう議論がどういう社会背景の中で作られて、その中で何が見落とされてきたのかという議論が、比較的若い、中堅若手の世代を中心に深まりつつある状況であると思います。

もう一つのご質問の「満映」のことについては、私自身はそれほど詳しくないのでなかなかお答えできないところはありますが、日本でしたら近代フィルムセンターの研究員の方などに問い合わせしてみるのも一つかと思えますし、谷川建司先生や板倉史明先生など、戦前期の映画史に詳しい先生方に当たられるのも、一つの近道なのかなと思います。

■ 鄭淳一 福間先生、どうもありがとうございました。金先生のコメントについてお話をしながら、袁先生が言及してくださった満州映画協会に対する日本側の事情についても補足してくださり、とても役に立ったと思います。

私が塩出先生の答弁の前にこのようなお話をして申し訳ありませんが、コメントは3分程度と考えていただいて、延長の場合でも5分を超えないようにしていただければ、より多くの先生が発言の時間を持てると思います。お願いいたします。

■ 塩出浩之 金憲柱先生、ご質問ありがとうございました。「歴史総合」という科目、あるいは教科書にいろいろな課題があることは、おっしゃる通りだと思います。まず、「世界史の中に日本史を入れただけではないか」という批判は、実際に教科書の分量で言うと、日本史は3分の1ぐらいで残りの3分の2は世界史というか、それ以外ですから、世界史中心の記述になっていることは明らかです。それから実際に「これを誰が現場で教えるか」という問題があります。つまり、これまでの

高校の先生方は、世界史の先生と日本史の先生という体制をとられてきましたから、それではどちらが担当するのですか？ということになって、世界史が主だから世界史の先生がやるか、あるいは分担でやるか、日本史の先生がやるか、あるいはこれまで歴史を担当していなかった人がやるかとか、現場では非常にいろいろな課題があるらしいと伺ったことがあります。ただ、内容から言いますと単に世界史と日本史を合体させたわけではなく、両者にまたがるような記述にかなり留意した教科書もありますし、必ずしも足し算で作ったわけではありません。各社それなりの工夫はしているのではないかとも思います。

それから日本近代礼讃という批判があるのは、これも非常によくわかる面です。これにはいくつか理由があって、一つは自民党政権側の圧力のようなものが学習指導要領に表れているように思ったこともあります。ただ、いくつか避けられない問題があるように思います。それはつまり、教科書で学んだ日本の子供たちが、自分の国を好きになれるかどうかということがあります。これは昨日の発表でも紹介しましたが、良い面も悪い面も学んで自分の国を好きになれるようになりたかったという学生のコメントは、少し考えてみる必要があると思います。つまり、ネガティブな面だけを教わって、果たしてそれを受け入れられるだろうかということがあるので、逆に日本は過去のあらゆる面において正しかったといったようなことは、健全ではないのは明らかですが、やはりそのバランスに尽きるのではないかと思います。その上で残る問題として、今の「歴史総合」の教科書全体に、昨日の梁知恵先生のお話とも重なるのですが、近代化論というトーンが強いですね。それから、経済成長に対して非常にポジティブな見方を取ってしまっていて、おそらくそれが近代礼賛、日本の近代を礼賛というよりは、近代化礼賛というような色彩があるのではないかと。だから、それに対してどう考えるかは、今後の大きな課題ではないかとも思っています。

慰安婦・強制動員に関する掲載が、以前よりも減っているとの評価があるのは理解できます。この問題は、近隣の国々から注目される一方で国内の右翼からも大変注目されていて、両者がチェックリストを作ってくださいということがあり、非常に執筆者、教科書会社とも気にしているところですが、私が関与した教科書では、しっかり本文に書いていることをつけ加えておきたいと思います。

■ 鄭淳一 塩出先生、どうもありがとうございました。最後に、塩出先生が執筆された教科書には、慰安婦問題が明確に執筆されているというところをもう一度強調したいと思います。それでは、今中国側と電話がつながっているそうです。史先生と電話でつないで、音声がかえりかわりませんが、いかがでしょうか。それでは史先生の自己紹介とコメントをお願いします。

■ 史博公 みなさん、こんにちは。まずは今回のような勉強と交流の貴重な機会を与えてくださった主催者に感謝の意を表します。「第二次世界大戦を題材にした映画やドラマが民族間の和解に持つ意義について」というテーマでお話したいと思います。

国家間の積怨に関しては、歴史を尊重するという原則のもとで、できる限り早

く「和解」が達成できる方法を見つけるべきで、そうすることで世界の平和と発展を促進することが可能になると私は考えます。「和解」を達成する重要な前提の一つは、虚偽の歴史知識ではなく、歴史の真実を国民に押し広めることです。同時に、お互いの実際の状況に関する交流を強化し、相互理解を深める必要もあります。このような使命を実行する時、政府の指導と学校教育のほか、メディアも重要な効力を持っていると思います。その中で、第二次世界大戦を題材にした映画やドラマが社会にもたらした影響は特に顕著なのです。

具体的に見ると、1930年代から現在まで、日中韓3カ国はこれをテーマとした数多くの映画を制作しました。その中には、日本の『二十四の瞳』や中国の『將軍与孤女』などのような正しい歴史観と価値観を持つ素晴らしい作品があります。もちろん、一部深刻な問題性のある作品も存在しており、それらが悪い影響をもたらしました。このような作品は中国にも、日本にも、そして韓国にも見られますが、中国の「抗日神劇」の問題性はとりわけ深刻です。

「抗日神劇」とは、「素手で日本軍を引き裂く」や「石で戦闘機を撃沈する」、「発射した弾丸を曲げる」、「ズボンの股に手榴弾を隠す」など軍事的常識と人間の論理に反するでたらめなプロットを用いて抗日戦争の歴史を描いた映画やドラマを指します。代表的な作品には、『追撃阿多丸』や『抗日奇侠』、『一起打鬼子』、『永不磨滅の番号』などがあります。このような作品が大量に制作されたのは21世紀の最初頃の10年間です。これらの作品が派生した論理やその創作理念について、私は論文（「抗日神劇」的衍生邏輯、伝播効応及創作反思、『抗日戦争研究』2020年第3号）ですでに説明しましたので、ここでは主にこれらの作品の放送がもたらした影響と今回のシンポジウムに参加した感想についてお話ししたいと思います。

まず、「抗日神劇」が中国の視聴者にもたらしたのは大体ネガティブなイメージです。これらの作品は残酷な戦争と真剣に扱うべき歴史を茶化し、物語も演出も軽々しく可笑しくて、歴史や文明、人間性、常識、理性に反する現象が満載です。それは歴史の真相を歪曲し、民族間の憎悪を助長し、ただ低俗な欲望を発散させるゴミのようなものと言ってもよいでしょう。そのため、中国の文化界や研究界、そして主流メディアは「抗日神劇」を厳しく批判する態度を取っています。このような作品はもうほとんどなくなりましたが、十数年間も存在していた文化現象として、それに対する真剣な批評と反省が必要だと思います。

そして、「抗日神劇」は中華民族の国際イメージをひどく損なっています。特にこのような作品が大量に制作されることで、中国人が歪んだ価値観を持ち、芸術的素養も低いという誤解を外国人に与えてしまいます。本当は「抗日神劇」は中国の映画やドラマの歴史において、一時的な逆流に過ぎません。第二次世界大戦を題材にした映画やドラマに関しては、今までの80年間において、中国は『玉色蝴蝶』（1980年）や『未完の対局』（1982年）、『將軍与孤女』（1984年）、『乳泉村の子』（1991年）など戦争に反対し、平和を訴えるような優れた作品を多く制作しました。これらの作品は日中両国民が助け合いながら困難を共に乗り越える深い情誼と戦争が両国民にもたらした深刻な被害を描きました。戦争の罪深さを回避しないが、昔の恨みに囚われることなく、民族を超える「人間愛」で過去

の傷を癒し、未来への希望を描き出そうとします。このような作品は世界に歴史の警鐘を鳴らし、視聴者の心に平和の種をまき、日中両国間の和解やその発展にもポジティブな影響を与えたでしょう。

以上から見ると、映画やドラマの優れた作品は民族間の和解と共感を促進することができますが、質の悪い作品は民族間の対立や敵視を煽ることに繋がります。このような真逆の二種類の作品が同時に存在する場合、国際文化交流の重要性が浮き彫りになります。国際交流を通じて、偏りのない正しい情報をお互いに発信し、偏見から延々と恨みが生まれ続ける状況を根絶することができます。この意味で、渥美財団と早稲田大学の今回のような取り組みは今の時代にとって非常に重要な意義を持っています。

周知のように、現在の世界情勢は不安定で、激しく衝突している地域があり、東アジア情勢もますます厳しくなっています。その原因は非常に複雑ですが、お互いの交流不足に起因する一部の現象に対する誤った判断から紛争に発展してしまうケースも少なくありません。そのため、政府レベルから民間レベルまでの交流を深めることは民族間の和解を促進する有効な方法です。ですから、渥美財団と早稲田大学が主催する今回のような学術交流がこれからも多く開催できることを願います。歴史を尊重する前提のもと、日中韓3カ国が早く昔の恨みに囚われる状況から脱却し、ともにアジアの平和と発展のために貢献するようになっていけばと思います。

そのほか、シンポジウムの主催者に少し要望があります。これからは「日中韓における民間での友好交流の歴史に関する研究」を専門的に議論するセッションを設けていただければ嬉しいです。具体的なテーマ設定に関しては、清末と民国初期における在日中国人留学生に関する研究や、中国と日本がお互いに行った災害支援の歴史研究、日中韓国際結婚に関する研究などが挙げられます。

私の発言は以上です。

■ 鄭淳一 今、中国まで聞こえるか分かりませんが、会場では大きな拍手が起こりました。史先生、ありがとうございます。抗日関連のドラマのお話をしてくださるかと思っただら、また歴史教育に関連する重要なお話をしてくださいましたし、ドラマやメディアで戦争を取り上げることが、単に「戦争を起こした人が悪いです」、「私たちがこんなに多くの被害を受けました」という話にとどまってはならず、戦争に対する反省と省察につながらなければならない、また平和についての議論につながるべきだというメッセージを同時に発信されたのではないかと思います。

それでは続いて先ほど答弁が一旦中断しておりましたが、安岡先生にマイクをお渡しして、吉井先生のコメントで少し言及された自分史についてのコメントに補足をさせていただけることがありましたら、お願いいたします。

■ 安岡健一 質問をいくつかいただいてありがとうございます。司会者から吉井先生のご質問への回答をとの提示がありましたが、最初に袁慶豊先生のコメントに少し触れたいと思います。

袁先生のコメントで、満洲の映画、満映の作品は中国映画か日本映画かという

問いかけがありました。この問題は、近代の様々な局面において見られる問題だと思います。日本からたくさん移民がありました。ブラジルやアメリカ合衆国に行き、コミュニティを作って、そこでさまざまな文化活動が行われています。そうしたものは日本の歴史なのか？あるいは日本の植民地支配の結果、日本に住むことになった在日コリアンの人たちが日本で作ったコミュニティ、そこで行われた教育や文化、そうしたものが、果たして日本の歴史だと分類されるのか？

私の考えでは、それはどのような日本を展望するのか、あるいはどのような中国を展望するのかという、これから先にどのような社会であるのかを考えることと、歴史叙述が密接に結びついていると思います。一つの時代や地域が排他的に、つまりどちらかにしか属せないものとして社会を想像するのか、あるいは両方が流動し、交差する、そうした存在として、そうしたネーションのようなものもあり得ると考えようとするのか、そのことが過去の位置づけについても関わってくるのではないのでしょうか。

私はこの問題を考えるときに、個人から歴史を見るという吉井先生からいただいたコメントを改めて考えたいと思うのです。それは途中で議論された加害と被害の問題にも密接に関わっていきます。侵略と支配が加害であったことは、これは明白な事実です。しかし、今回取り上げられたグレーゾーンに属するようなことはまさに不正義、正義ではないことが構造化された状況の中で、人間がどのように生きるのかというその複雑な要素を理解するべきだということかと思えます。状況そのものが不正義であるということ。そのことと、その中で人間がいかに振舞ったのかを、明らかにしていくためにも、個人の記録、そういったものから学ぶこと、学べることは多いのではないかと思うのです。また、この加害と被害という枠組みが、時に被害なるものをすでにわかっているものとして扱ってしまうことを私は恐れます。犠牲者意識ナショナリズムの話もありましたけれども、犠牲のあり方自体もまだわかってないことがすごく多いはずなのです。

冒頭の挨拶で三谷先生が史料を作ることに関わる危険性を指摘されました。私も同意します。危険性はあると思います。しかし、だからこそきちんと専門家が取り組むべきなのであって、そうすることによって明らかにできることは多いのです。日本人慰安婦の方の証言は、ほとんど得られていません。また、徴用工をめぐる問題でも日本の徴用された人間がどのような経験をしたのかに関する調査も、その実態に比べて乏しいです。私たちは犠牲者意識、あるいは被害と加害ということを論じる時に、あたかもそれがもう分かったことであるかのように振舞っていないだろうか。まだまだ忘れ去られていることがあるのであれば、ではどのようにすれば記録し、考えることができるのか、そういうことを考えるためにも、私は一人一人の人間がどのようなことを考えているのかに耳を傾ける努力が必要ではないかと思っています。

■ 鄭淳一 安岡先生、ありがとうございます。とても幅広い内容についてお話しくさって、いろいろなテーマにまたがる良い議論だったと思います。それでは早速江先生にマイクをお渡しします。

江 沛 お答えいたします。私に対する質問が多いですね。それは論文がうまく書けず、問題点が多いからでしょう。また私が提示した占領地区の民衆の心理状態という問題は、他の戦争状態や強権下の民衆に関する多くの問題と共通しているからかもしれません。

金先生、袁先生、そして吉井文美先生から質問をいただき、ありがとうございます。金先生の質問はとても複雑な問題です。占領地区で生きる民衆をどう認識すべきかという問題は我々の歴史に関する評価基準に関わります。私が強調したように、今日でも民族国家の立場から脱却できない状況の中、同時に民衆の立場を持ち、人間性への尊重を育むべきだと思います。この両者を融合させることが今のジレンマから脱却する手がかりになるでしょう。昨日の発表でも言及しましたが、民族主義的な意識に対して、当時の中国においてエリート層と下層の民衆の間に違いが存在しました。現在読める資料のほとんどは知識人や政治のエリートによる記述です。民衆のレベルでは、民族主義的な意識はまだ弱いものでした。当時の中国の民衆には、「誰であれ、統治者になれば、その人に租税を納める」という言葉がありました。統治者が誰かということは、彼らにとって重要ではなかったようです。ここから分かるように、当時彼らの民族と国家に対する立場は今日の私たちと大きく異なります。

日本軍が中国の華北地域に侵入した当時、華北地域に「聯庄会」という村連合の民間組織がありました。そのスローガンは「日本に抵抗も降伏もせずに故郷を守る」でした。要するに、日本軍に攻撃されなければ、自らも日本に抵抗することもなく、故郷を守ることが最も重要な目標でした。ここから分かるのは、当時は民族主義的な意識は薄く、家族主義や地域主義の方が強かったということで、これは非常に重要なポイントになります。今の時点で戦争中の時期を議論する際に、民族国家の立場からの脱却を私は主張しているのですが、それは、民族国家というマクロ視点では強権下の一億人を超える民衆がいかに生きていたかという問題が無視されてしまうからです。彼らの生存問題へ関心を向けることこそ歴史学のすべきことでしょう。日本そして傀儡政権は協力者に利益を与えることで、協力者を従順にすることができたでしょう。しかし、協力者が完全に支配者に同一化するには、時間がかかると思います。例を挙げると、清軍が山海関を突破して明を滅ぼした後、漢民族に辮髪を強制しました。それは民族の象徴であるため、多くの人々が反発しました。清軍は「頭を留める者は髪を留めず、髪を留める者は頭を留めず」という政策を定め、頭髪を剃る人は命が助かるが、剃らない人は殺されました。これは明白な植民政策です。しかし、268年後、清王朝が滅び、辮髪を切ることになりましたが、その時多くの人々は辮髪を切りたくなくなっていたのです。彼らはすでに辮髪を自分の文化的象徴と見なしており、その文化に同一化されたのです。これはとても興味深い問題です。民族主義的な意識がまだ普遍的に浸透されていない時代の民衆たちに対して、現在の私たちと共有されている想像の民族的共同体の概念をもって彼らの行動を理解しようとしたら、多くのことが理解不能になってしまいます。華北地域では、ただ十数人の日本軍とその傀儡政権だけで一つの市を統治できたケースがあったのです。

また、施明儒は傀儡軍の士官ですから、民衆として見なすべきではないという

疑問を呈した先生もいました。彼のランクはとても低く、ただの通信隊の副隊長で十数人の部下しか持っていませんでした。高等教育を受けたこともなく、軍事学校に通っただけでした。彼は基本組織の末端にいたので、高級官僚とは全く異なり、一般民衆に属していると私は思います。

そして、金先生はハンナ・アーレントに言及し、彼女はアドルフ・アイヒマンが裁判で行った陳述の一部を認めたことを述べました。そのため、アーレントのその本の不十分なところを批判する別の本が出版されたわけです。ただ、アーレントは「アイヒマン現象」という非常に重要な話題を提起してくれたのです。自分が行ったのはユダヤ人に対する虐殺であるとアイヒマンは分かっていたのですが、それは自分が担当した職務の役目であるため職務犯罪であると主張し、自分の罪を言い逃れようとしていました。アーレントはそれを「悪の陳腐さ」と説明しました。これは私にたいへんな啓発を与えました。占領地区の日本支配を議論する時、日本軍の中国人への加害だけが取り上げられますが、自分の命と良い生活を優先することで、中国人同胞間の加害もあったのではないのでしょうか。これはもっと複雑な問題で、これについて考える必要があると私は思います。

そのほか、オーラルヒストリーの資料や、日記などを史料として取り扱う際に客観的な判断が必要だと言及する先生もいました。私はそれに同意します。今回の発表で私がなぜこの日記を取り扱ったかという、その記述に信憑性があると思ったからです。その書き手は日記を書く習慣を持った一般人で、ただ自分の日常を記しただけでした。自分の日記は将来絶対誰かに読まれるとの自覚を持っていた蒋介石と異なり、一般民衆による日常生活に関する記録の方がより信憑性が高いと思います。一方、1980年代と1990年代に書かれた多くの回想録は、執筆当時の制限を受け、意図的にも、無意識的にも、自分の記憶を修正する傾向が見られます。これらの資料を使うと時には問題が起こります。

最後になりますが、吉井文美先生がネースンというイギリス人の例を紹介してくださり、本当にありがとうございます。これからも吉井先生と交流を続けたいと思います。そして偽満洲国の時期に作られた映画は中国と日本のどちらの所有になるのかという質問を袁先生は提起しました。それは日本に占領された時期に生産されただけなので、中国の所有になるだろうと私は思います。傅葆石（ポシエック・フー）の上海映画をテーマとした著作では、非常に複雑な問題を取り上げました。これについて会議の後でも交流しましょう。他に、傀儡政権下の大学や、新聞などもあります。それを民族の恥辱と見なされますが、それも我々の歴史の一部であるに違いません。歴史である以上、継承しなければなりません。傀儡政権下の大学に通った人を殺すわけにはいかないでしょう。傀儡政権を経験したとはいえ、彼らはまだ中国人ですから、生存権を保障する必要があるでしょう。以上です。

■ 鄭淳一 コメントありがとうございます。事前にフロアからコメントをしてもよいか、というリクエストがいくつかありました。三谷博先生がまずリクエストしてくださったんですけれども。三谷先生も、川崎先生も2分程度でよろしいですか。まず、三谷博先生をお願いします。

■ 三谷博 金憲柱先生から「歴史総合」についての質問があって、塩出さんが答えてくださいましたが、私はその元になったプランを書いたことがあるので、背景事情を説明します。

文部科学省が学習指導要領を作り、それをもとに教科書を書いて、教室の現場で教える。日本の歴史教育はだいたいこの3段階で行われています。「歴史総合」という科目に関しては、実は文部科学省が学習指導要領を作る前に、日本学術会議という組織が「『歴史基礎』という授業を作ろう」と提案いたしました。その時のプランニングをやったのは4、5人でしたが、私もその一人です。この「歴史基礎」という提案は、世界史と日本史を融合するということが重要な柱になっていました。そのほか、グローバル化という現象を重視するということと、それから近隣との関係を重視することも構成原則の重要な柱になっていました。文部科学省はこれを参照したかもしれませんが、実際に「歴史総合」という科目を創って指導要領を作った時はこのグローバル化と近隣関係の重視という二つの柱をカットしてしまいました。聞いたところでは、この学習指導要領の骨組みをつくる際に、歴史学者は一人も関係していません。文部科学省の中には歴史の専門家もいるのですが、彼らも排除されたと聞きます。事務官と訳の分からない誰かと教育学者がこれを作ったのです。歴史家は排除された。非常に恥ずかしい事情が実はあります。これは当時の内閣は日本の戦後史のなかで非常に特殊な内閣だった。今の内閣がそうであるかどうかはまだわかりません。そういう政治的事情があったので、このようにねじ曲がったものが作られました。しかしながら、指導要領が実際に書かれたときは、非常に優れた歴史家や教育者が起草者に入ったために、一応は使える指導要領ができました。そしてまた教科書を作る段階でそれを使えるようなものに変えてきました。そして教室ではまたもっと良い授業ができるように現場の先生方が努力なさっている。元はひどい枠組みだったのですが、実際の教育はそのような形で始まっています。あと7年後には新しい指導要領が作られるはずなので、今からもっとましなものを作るように準備しなければいけないと、私はこのように考えております。

■ 鄭淳一 三谷先生から「歴史総合」の誕生に関連した秘話と聞いていますか、裏話を聞けたと思います。それでは第5セッションの最後になるかもしれませんが、川崎先生にマイクをお渡しします。お願いいたします。

■ 川崎剛 早稲田大学社会科学部の英語学位プログラムで日本のメディアを担当しています。歴史の専門家ではなく、数年前まで朝日新聞の記者でした。歴史の専門家、エキスパートへのリスペクトを常に忘れないジェネラリストでありたいと思っています。

10年ほど前になるのですが、若いころから交流があった国立大学の先生が退官するときに、そのころの朝日新聞のいろいろな記事について、「若い記者たちの歴史についての認識がない」という苦言の混じった挨拶をもらったことがあります。戦争の記憶、原爆忌、8月15日など8月の歴史の記事を担当するのは、多くは若い記者です。新聞社やテレビ局の社会部や地方各県にある地方

総局では、平和担当とか戦争記録担当などという分担で、彼らが自分で材料を探し、取材をして新聞記事にしたり番組にしたりします。戦争関連や戦争に至る歴史の検証が夏に集中するので、「8月のジャーナリズム」とか「夏の金魚売り」などという批判されることもあります。基本的なことがわかっていない記述もあるかもしれません。デスクによって修正できなかったという問題もあるかもしれません。しかし、一言触れておきたいのは、朝日新聞だけではないのですが、メディアに入ってきた若者たちは、少なくともその時期のベスト・アンド・ブライテストに近い若者たちです。彼らはいくつか月前まで大学にいて、教室で歴史学の先生たちとも交流していたのではないのでしょうか。大学で自分の歴史観をつちかう環境がないのに、どうして新聞などのメディアだけが歴史的に正しい記事を掲載し続けることができるのでしょうか。若い記者を批判する前に、ひと呼吸おいてもらいたいというふうなつたない反論のメールを出したことがあります。

敗戦後何十年も毎年夏の戦争回顧ものの記事は続いています。最近私が気づいたのはこういうことです。私は20世紀の後半生まれですが、少年期にまだしも戦争の記憶は社会に残っていたし、語ってくれる被爆者や元兵士はいました。新聞記者になってから、在韓被爆者の長い証言を掲載したこともあります。今の若い記者は、その記憶がないままに戦争の企画記事を担当しなければならない。恐らく今の若い記者は長崎や広島に被爆者団体や大学の現代史の先生たちに会い、史料や本を読み、戦争犠牲者本人や家族、遺族などから話を聞いたり、今ならば侵略の記憶や伝承を語ってくれる朝鮮や中国の人や戦後の日本を占領したアメリカの関係者などにも接触したりすることは可能でしょう。とにかく彼らはそうやって「夏の金魚売り」と言われながら、自分の担当する地域で戦争にまつわるエピソードを探します。そしてその中の良いものは歴史として残されるかもしれません。夏の戦争記事を担当することで記者は成長します。そして、もっと普遍的な歴史という存在を意識するようになり、歴史に向き合うようになり、そして彼らのその後の記者活動で活かされていく。それが理想的なあり方だと思います。もちろんこれは新聞だけではなく、テレビの若い記者たちも数多く挑戦しているテーマです。歴史的なテーマに挑戦しようとする若い記者たちも出てきている。NHKの夏の特集番組は特に評価が高く、数年前は日本軍のビルマのインパール作戦の詳細な記録から、日本軍の上層部がいかに無謀・無計画・無能力だったかを暴き出しています。記者たちが証言を聞いたり、取材したりするだけでは少し足りない。それを記事や番組という形に作り上げることが最も重要です。それが新聞記事・放送番組という形で読者・視聴者に届く。その一連の面倒くさい作業がメディア記者の歴史認識づくりにとりわけ必要なことだと思います。メインストリームメディアやフリーランスのジャーナリストによるノンフィクションは、アカデミズムとは別の形で日本人にとって歴史を検証し続けようという試みだと思います。

1923年9月1日の関東大震災から今年が百年目です。たくさんのレポートや番組がこれから制作されることでしょう。日本の社会は東京都知事が朝鮮人虐殺の被害者を記録する集会への挨拶を拒否するような社会状況にあります。「8月ジャーナリズム」といわれても、報道メディアが、たとえ8月だけであろうとも、

近現代史の検証に挑戦することをやめることはないと思います。メディアにはたくさん課題がありますが、歴史家の先生方とともに考えていきたいと思っています。

■ 鄭淳一 ありがとうございます。川崎先生がメディア関係者の立場からコメントをしてくださったと思います。時間は少しオーバーしていますが、彭先生と相談して時間を調整しました。第5セッションで言及されたお話に関して、これだけはこの場でぜひ話したいという方がいらっしゃると思います。たくさんの方に機会を与えることはできないので、お一人程度、機会を差し上げられると思います。はい、平山先生、お願いします。

■ 平山昇 まず、昨日の第4セッションに関連して、一つ重要な補足をおきます。専門の歴史研究者の成果を大衆にわかりやすく広める人たちが日本にいるかという質問が、唐小兵先生から出たのですが、それに対する安岡健一先生・福岡良明先生の説明では言及されなかった重要なものがあります。それは、テレビの時代劇のドラマの「時代考証」です。日本ではテレビ局（特にNHK）が放送する時代劇ドラマは、もちろん史実と異なるフィクションや演出を多く含むのですが、舞台となる時代を専門とする歴史研究者に「時代考証」を依頼することが慣行となっています。昨年、時代考証を担当した若手の研究者が、ドラマ制作関係者たちとやりとりをした経験について詳しく学会誌で書いていましたが〔木下竜馬「時代考証の領分 大河ドラマ『鎌倉殿の13人』との日々」『歴史評論』870号、2022年10月〕、脚本家や制作責任者たちがかなり丁寧に史料と研究を読み込んで、ドラマのリアリティを高めようとしていることが明らかにされていました。最近の若者は、インターネットとスマホの普及によりテレビから離れているとよく言われるのですが、人気アイドルが出演するNHKの時代劇は、大勢の若者のファンが見るということも起こっておりまして、世代を越えたドラマの影響力は現在もあります。そのようなドラマが専門の研究者の知見を重視していることは、大変注目すべきことであると思います。韓国と中国では同じようなことはあるのかどうか、私は知りたいと思いました。以上、補足としてのコメントです。

■ 鄭淳一 平山先生、とても重要な補足だったと思います。改めてお礼申し上げます。今お話したいことはたくさんありますが、司会者の能力不足でそれ以上の議論は不可能だったと思います。

セッション司会の彭先生に大きな宿題を残して私は去ることになりますが、それだけ大きな楽しみになるのが最後の第6セッションではないかと思われまます。お疲れ様でした。ありがとうございました。

第6セッション

指定討論／全体討議

司会：彭 浩 大阪公立大学
指定討論者：張 曉剛 長春師範大学
(発言順) 金 滸 ソウル大学
平山 昇 神奈川大学

[発言は母国語、翻訳：于 寧 (中国語)、尹 在彦 (韓国語)]



■ 彭 浩 第6セッションの全体討議に入りたいと思います。前半ではすでに熱い雰囲気を感じたかと思いますが、皆さんがますます早口になるのが心配です。ゆっくり発言するようにお願いします。後半でもまずは3名の指定討論者から発言していただきます。まずは張曉剛先生、次に金滸先生、最後に平山先生という順番で発言していただいてもよろしいでしょうか。まずはオンライン参加の張曉剛先生にコメントをお願いします。

■ 張 曉剛 先生方、皆さま、おはようございます。昨日先生方のご発言を拝聴し、とても勉強になりました。今回のシンポジウムに参加できて、大変光栄に思います。劉傑教授や、司会を担当してくださった先生たち、実行委員会の先生方、同時通訳を担当してくださった皆さん、そしてスタッフの皆さんのご尽力に心より感謝いたします。また、私は先月にコロナに感染し、現在は回復中とのことで会場参加できなくなったことをお詫び申し上げます。対面で皆さんと交流する機会を失ったことを大変残念に思います。昨日と今日の午前中のシンポジウムは大成功だと思えます。昨日は韓国の李基勳先生と交流を行いました。そして、日記や手紙、

オーラルヒストリーの資料そして回想録などの史料の信憑性について、南開大学の江沛教授が本日のシンポジウムの前半で答えてくださいました。江先生の答えは妥当だと思います。特に挙げてくださった『蒋介石日記』の例について、作者（蒋介石）が自身の日記は将来絶対公開されると分かっていたので記述された内容に取捨選択があるだろうと考えると、この日記を完全に信用するのではなく、別の史料との照合が必要だという江先生の分析は一理あると思います。そのほか、日本との戦争において漢奸が多く存在した問題や、中国の抵抗力が弱かったことなど、お聞きしたい質問がありますが、また次の機会にお伺いできればと思います。

時間の制限がありますので、これからは主に日本の植民地主義と植民地への侵略の実践について日本の研究者にお伺いしたいと思います。塩出浩之先生と安岡健一先生のご発表にもこれらの問題が取り上げられました。今回の会議では日本の植民地支配の歴史について、教育やメディアの視点からの分析が多く、植民地主義や植民学などの概念に関する理論的な探求が少ないと感じました。この分野に関しては、私は全然専門家ではなくて、ある意味門外漢ではありますが、ここ数年は日本の植民地主義に関する理論問題、特に日本の北大学派に対してとても関心を持っています。北大学派とは北海道大学（前身は札幌農学校）学派とのことで、その中には多くの代表的な人物がいました。佐藤昌介は最初にここで植民学を教え、教育や理論の側面から探求を行いました。その後の代表的な人物には、『武士道』を書いた有名な研究者である新渡戸稲造などがいました。彼らは欧米に留学し、帰国してから北海道大学で教鞭をとり、多くの学生を育成しました。その代表者の一人は東郷実で、彼も後に植民学を研究しながらも、台湾などの植民地に着任したこともあり、植民地の管理を指導するような実践的な仕事を行いました。彼らは北海道大学で学んだ植民地に関する理論と実践的な知識を植民地に対する管理の仕事に活用しました。日本政府はこのような知識を持った植民地官僚を台湾や朝鮮半島などに派遣し、現地に対する指導や管理の仕事を担当させました。もちろん、「関東州」への派遣もありました。「関東州」とは中国の大連と旅順地域のことで、当時の東北地域と同一視することはできません。皆さんをご存知のように、日清戦争に負けたことで、清王朝は日本に遼東半島を割譲しましたが、三国干渉により、ロシアがその租借権を獲得しました。日露戦争後、日本は再び「関東州」を占領しました。日本の関東州での植民地支配は台湾や朝鮮半島、そして東北の偽満洲国での植民地支配体系とは異なっていました。一件、これと関連性のあることを紹介します。私は明治時代から昭和時代（太平洋戦争時期）までの十数枚の日本地図を収集しております。これらの地図では「関東州」、すなわち遼東半島や朝鮮半島、台湾、日本本土、そして樺太の南部は全部暗赤色で表示されています。これは、当時の日本人がこれらの地域を全て日本の領土として理解していたことを意味しているでしょう。事実上、遼東半島（「関東州」）は租借地であったため、台湾と違い、日本の領土ではなかったのです。もちろん、偽満洲国は日本の関東軍の支持で作られた傀儡政権であったため、その状況もまた変わります。

多くの日本の研究者は中国の東北、すなわち偽満洲国について長く研究してき

ました。私もさまざまな学術会議で、日本から中国東北への移民問題や開拓団問題、東北地域における都市化と工業化などの問題をどう認識すべきかについて、よく日本の研究者と交流しています。塩出浩之先生のご発表では、教科書の視点から日中戦争の時期における日本の教育と植民地支配の問題を分析しました。また、安岡健一先生はご発表で個人に対する研究を通じて、植民地支配と20世紀の戦争の問題を考察するアプローチを提示してくれました。お二人の研究は植民地主義の問題について更なる発展が必要だろうとは思いますが、提示くださったアプローチや考え方、提案などは非常に啓発的で、私を含めた中国の研究者にとって非常に参考になると思います。特に安岡先生が提出してくださった個人も歴史を書く権利を有すること、戦争と植民地支配の歴史から和解の手がかりを探求すること、学術研究を通じて東アジア人民間の和解の可能性を議論することなどの主張に同意します。そのほか、安岡先生は個人の歴史著述における重要性を強調しましたが、この点に関しては中国の研究者もそれにもっと注意を払うべきだと思います。客観的に言うと、個人、特に歴史研究者である個人の独自の見解や、丹念に研究する姿勢、確かな史料に基づいて実証的に結論を導いた研究はとても重要です。

江浦先生は日記やオーラルヒストリーの重要な役割について言及し、安岡先生も個人の記述の重要性を提示しました。これについて、日本の幕末にあった開港に関する史料を連想しました。黒船来航について、オフィシャルな記録のほか、民間の史料として、農民や商人、学者などが書き下ろした日記や手紙における記述も存在します。それも歴史の事実を記述し、当時の歴史を反映する重要な資料です。江浦先生が述べたように、これらの記録者もその日記や手紙がほかの誰かに読まれることを想定しなかったため、利害関係がないゆえにその記述の信憑性が高いと考えられます。これも注目すべき問題だと思います。

ここからは二人の先生に質問したいと思います。まずは塩出先生にお伺いしたいのですが、日本の教科書に関する研究を進める中で、植民地や植民地支配などのテーマについて、統計解析や社会調査などを行ったことはありますか。例えば、インタビュー対象者の日本の植民地支配の歴史に対する態度について、それぞれ批判的、肯定的、そして中立的な立場の割合はどうなっているのでしょうか。日本の研究界においては、「植民地主義」という言葉はもともと特にマイナスな性質を持つ概念ではありませんでした。第二次世界大戦が終わった後、植民地が続々と独立するにつれて、研究界も植民地主義に対して、理論からの分析と批判が行われるようになりました。そこで、中国東北への移民について、安岡先生にお伺いしたいです。20世紀の戦争と植民地支配に関する研究において、中国東北への移民に関する歴史の発掘を言及していただきましたが、それは日本政府が派遣した開拓団の問題に限定するのでしょうか。東北への移民について、他に何か注目すべきで、特に注意を払い、より深く研究すべき具体的な問題はあるのでしょうか。他にもいろいろ質問はありますが、時間が制限されていますので、また次の機会にお伺いできればと思います。私の質問は以上です。

■ 彭浩 張先生、ありがとうございます。植民学に関する知識や研究動向についている

いろいろ補足していただきました。他の先生に質問とコメントもしていただきました。時間の関係でご発言に対する要約は以上になります。次は金湊先生にお願いします。発言を7分以内にしてください。よろしくお願いします。

金湊

昨夜、美味しいビールと料理をいただけないまま準備した討論文なのでゆっくり全部読みたいと思います。討論の前に、三谷先生が他人の声に耳を傾ける姿勢について話してくださいました。孔子は3人だけ集まっても学ぶことがあるとおっしゃいましたが、この場だけで30人以上の先生方がいらっしゃるの、学べる内容がとても多かったと申し上げたいです。このような討論会を準備して下さった渥美財団の関係者の皆様に改めて感謝申し上げます。

実際、今回の討論会の最も重要なテーマはやはり未来のための歴史学の実践です。最も重要な問題となるのは、未来の歴史学は何であり、何のための実践であるべきかということです。E・H・カーは『歴史とは何か』の中で「立派な歴史家ならば未来に関して考えようが考えまいが、未来のことを骨の髄まで感じている人だ」、「歴史家は『なぜ』という質問に加え『どこへ』という質問を提起しなければならない」と述べています。名言です。一言で言えば、歴史学者は過去のノスタルジーを呼び起こす人間ではなく、未来のための代案を提示する責務を担っており、そのため歴史学は常にこのようなプレッシャーの危機にさらされていると言えます。

この点はとても重要です。過去そのものを深く探求することも簡単なことではありませんが、歴史学者をより困らせるのは、未来のための実践に歴史学がどのように寄与するかという問題です。これが歴史学者たちに非常に強い責任感を覚えさせるため、実はこの場も歴史学者たちにその責任感を自覚させる場であり、私が参加を躊躇した理由です。

しかし、歴史学の未来についての議論がないと、それが共同体の歴史の保存であれ、個人の暮らしの維持であれ、世界平和の発展であれ、それは一種の責任放棄、厳しく言えば職務放棄のようなものではないかと思います。もちろん米国の哲学者リチャード・ローティ (Richard McKay Rorty) は「過去についての議論は必要ない。未来に対する共通の希望だけでいくらかでも新しい連帯を作り出すことができる」と主張しています。私は同意しない主張であり、ロツティが激しいワードで表現したのですが、実は今の歴史家たちが最も深く考えなければならない問題だと思います。

まず、梁先生は生態史に関して発展を超える新しい答えとして、先生の論文の末尾に人々が生きていく手段としての世界でなく、隣り合って生きていく場所としての世界を、万物を貨幣で測定できるという自信ではなく、膨張と限界が存在するという点を明確に認識する新しい歴史を主張しています。生態環境への強調は、個人史や国家単位の共同体を越えて歴史を捉える新しい観点の導入という点で興味深いのですが、生態を議論して数十年が経った今でも、依然として国民国家単位の歴史的想像力を超える平和の歴史観が成り立たない理由については、引き続き問うていくべきでしょう。

陳先生は中華民国期の中国人の日本軍閥に対する理解を細かく整理され、とて

も楽しく拝聴いたしました。興味深いことに、軍閥を日本帝国主義の侵略の原因と捉える論点は、日本の国家と市民社会を軍部とは切り離して、アジアに対する日本の侵略を軍部の暴走のせいにするような雰囲気がかえりました。しかしこのような形で歴史の記憶を呼び起こすことが、歴史の因果論を巡ってさまざまな議論を可能にさせると共に、歴史の責任というより根本的な議論でどのような実践的問題を引き起こすかも問わざるを得ません。市民社会と軍部を切り離すような議論は、ハンナ・アーレントが言う悪の陳腐さと関連し、我々が顧みなければならないという宿題を与え続けています。個人の特定の共同体への帰属と共通の歴史的記憶の共有というのは、確かに個人の次元をきちんと認識できないようにする可能性が高いです。これと関連し、どのような歴史の叙述が可能でしょうか。

安岡先生の発表からも分かるように、自分史の趣旨は興味深い論点を提示しています。安岡先生は「全ての個人に自分史を」という趣旨で、日本国内の歴史学界の自分史の研究動向を紹介し、これまで歴史学が審判官の役割を果たしてきたとすれば、これからは弁護士の役割を果たすべきだと主張しています。ということで、全ての個人は自分自身を弁護するためのツールを手に入れました。自らを弁護するためには各自が語ることに語らないこと、そして語れないことと語るべきことを巡り、正しいこととそうでないことに関する基準、即ち正義のレベルを高めていかなければならないと思います。自らの弁護を許容することの自由と権利に対し、それだけの義務とそこから発生する重みを感じなければならぬという点からです。

このような主張と関連し自然と歴史教育の重要性を考えてみたいと思います。私はもう一度E・H・カーの議論を引き合いに出したいと思います。カーは自著の中で「歴史家は魚屋の棚の上にある魚のように文書や碑文等の事実を選ぶことができる」、「歴史家はそれらを集めてから、家に持ち帰って自分の意のままの方法で料理して出す」と述べています。

「歴史家と彼の事実」という章でカーは、歴史家の作業が過去をそのまま複製するのではなく、必要な材料とレシピの構図によって新しく創造することだと話したことがあります。まさに「なぜ」を越え「どこへ」という問題意識と哲学こそ、新しい料理を作ることのできる土台です。実はスーパーに行くと、魚以外にもキノコなどの野菜や、豚、牛肉などの肉類が並んでいます。「今日の昼に何を食べるのか。太っても脂っこい食べ物を食べよう」という「どこへ」への意志は、野菜中心のサラダで献立を構成しようとする意志とはかなり違う料理を食卓に出すでしょう。これまで決められた献立表通りに食事をしてきた学校の給食とは異なり、自分自身の料理を構想して作れるという点は良くも悪くも選択肢が多くなった状況を意味します。

もちろん、ある人はこのような状況を、ただ単に与えられたまま食べていた楽な状況から複雑な状況に追いやられたと批判するかもしれませんが、自分が望まなかった給食を食べずに残していた人の立場からは、自分で選べるバイキングの献立や、さらにはバイキングの多様な食べ物を超え自分の料理を作る自由を得たと言えます。新しい歴史教育はこのように定められた給食から自由な料理への転換です。

これと関連して塩出先生の論文で「歴史総合」から日本の歴史教育の未来を見ました。特に高校必修科目である「歴史総合」は非常に興味深い実験であり、どこへ進むのかを示す積極的な歴史教育の事例です。そこに述べられているように「歴史総合」の目標は、若い世代に世界の舞台で活躍するために必要な基礎的素養を与えること以外に、近代日本や近隣で発生した問題について、日本人がほとんど無知だった状況を改善することを目的としています。

ところが、私はそこよりも「歴史総合」のもう一つの特徴である、資料から情報を読み取ること、そして問いを提示し資料を土台に議論することを重視するという点に注目したいと思います。教育の目的が講義と暗記で構成された歴史教育から、「なぜ」、「どうして」という問いに学生自らが取り組むことで深い理解を引き出す歴史教育への転換するという事実です。特に、教育の権威主義的な構造を見直そうとする意図が非常に重要です。

ただ、私が少し残念に思うのは、「なぜ」、「どうして」だけでなく「どこへ」という方向性が少し弱いという印象です。歴史叙述と「どこへ」という方向は、即ち歴史と未来との関係を意味します。歴史は「現在と過去の対話」というより「未来と過去の対話」だからです。これは唐先生の発表と直接関係しています。先生は戦争に対する記憶が到達できる歴史的、道徳的目標をどこに置くべきかと質問します。カーの「どこへ」の問題提起と同じ趣旨だと思います。

先生は王明珂の議論を借りて「歴史にはただ一つの声だけ存在するわけではない。これは過去に対する解釈権を巡る戦いであり、また認定と権力を巡る闘争である」とはっきり述べています。この過程で憐憫が理性を覆い隠しているとか、理性的な反省が歴史的構造と行動の中で犠牲になった個人を埋没させてしまっているという批判が重なっています。

これに対して先生は、我々が特定の歴史のページを振り返って記録する時、必ず慎重でなければならないとおっしゃいました。慎重さは歴史研究者の重要な徳目です。ところで、果たして慎重さ以外に何が必要でしょうか。唐先生は論文の冒頭で白永瑞先生の「忘却の反対は記憶ではなく正義だ」という言葉を引用しています。慎重の土台に確実に正義がなければならないという点を主張します。発表文で見られる楊念群先生の「銃弾受けの歴史学」という用語は、一方では正義を語ると同時に、他方では侮辱の感情を刺激することもあります。

果たして侮辱のない正義はどのように可能でしょうか。正義のために侮辱は避けられないのでしょうか。私は正義という単語の下に礎石をもう一つ押し込まなければならぬと思います。正義の下に人間尊重と人間愛を押し込まなければなりません。歴史学はどこへ向かえば良いのでしょうか。相手を尊重する社会の形成は、相手を侮辱しない社会から始まります。人間への尊重は一次的にお互いに侮辱しない感覚から可能になると思います。これについて最後までもう少し申し上げます。

正義と侮辱など、胸を熱くする単語を避けて教育の問題についてもう少し言及します。私は学生たちが批判的思考を訓練する歴史教育を通じ、省察的な歴史のナラティブの構想を経験できれば、教科書をはじめとして様々なメディアを批判的に捉える脳の筋肉が鍛えられると信じています。私の経験からも確信しています。

私は長い間、教師を養成する大学で歴史を教えていました。そして数年間、教師たちと共に小さな歴史の叙述、「スモール・ヒストリー・プロジェクト」ということを実施した経緯があります。小さな歴史とは大文字のヒストリーでなく小文字の歴史です。「スモール」は自分の歴史を書く歴史家の体験を含みます。学生たちに歴史家の経験をしてもらうためには、まず教師たちと共に作文プロジェクトの授業をしなければならないので、授業を構成主義的な観点から実施しました。

しかし、材料をある程度制限すると、教師たちの想像力は該当テーマと関連して提供された材料の範囲を越えることが困難でした。また、レシピが複雑すぎると、料理を完成することもできませんでした。考えてもらうための歴史の授業は思ったより難しいです。歴史教育のための材料は品質が良く新鮮で、多様な選択肢の中で選んで準備しなければならず、レシピは単純すぎても、逆に複雑すぎてもいけません。それでこそ、料理の楽しさを感じ、歴史を書くことに挑戦できます。あまりにも単純すぎない方が、歴史の叙述に慎重に取り組み、料理の難しさに気づくことができます。

しかし、最も重要なことは、最終的な料理を誰と一緒に食べるかを考える姿勢です。シェフと一緒に食べる人への尊重を込めて料理します。商売人も客のために真心と尊重の心を込めますが、ましてや家族や友人のための料理はなおさらです。なぜ、どのように、そしてお互いの睦まじい人間関係のためにということが重要です。そうしてこそ、真心が入り、他人に対する配慮が料理に加わります。

歴史を料理に例えた理由は、未来の歴史学が人間に対する尊重を込めなければならないからです。どうすれば相互間の侮辱を止め、尊重することができるのでしょうか。平和を叫びながらも、日常的に戦争するようにさせてはいけません。国家という制度が構成員を侮辱するように放っておいてはいけません。国家自体が無駄だとして無政府主義を叫んでもいけません。竹林の隠遁者のように、どの制度でも自分自身と関係ないと言ってはいけません。

ひいては国家の暴力や軍閥の暴走を批判するだけでなく、悪の陳腐さをやはり真剣に顧みなければなりません。共同体の記憶と歴史は、人間尊重に基づいて正義の記憶を構想しなければなりません。私は主に18世紀の韓国のことを勉強していますが、私が探求する茶山（訳注：丁若鏞の号）丁若鏞先生の文章を引用してみようと思います。彼は18世紀後半、殺人罪を罰金刑に処する当時の慣行、即ち「金がなければ有罪、あれば無罪」といった慣行に対し、かかとを切ったり首を叩いたりする身体刑として補完することこそ正義に適しているという主張に直面します。

これに対し茶山は朝鮮の身体に対する不仁さを批判し、生命尊重の法文化を作ってきた400年の歴史を一気に覆し野蛮の時代に戻ることにはできないと批判しました。暴力そのものの野蛮性、私はそれを「不仁」と言いますが、詮索せざるを得ない主張です。人間の生命に対する尊重の上でのみ、正義が成り立つからです。互いを尊重し侮辱しない方法は、人間としてどうしても分からない一線を慎重に守ることと関連しています。

以上で、私の議論を終わらせたいと思います。韓中日の学者たちが集まったので、共通して使ってきた言葉を持ち出してみようと思います。仁、そして義は聞

き慣れています。定義は簡単でない単語です。私は仁とは何か、義とは何かを説明する代わりに、不仁と不義により注目してみたいと思います。仁と義よりは、不仁と不義への感覚を鋭敏に鍛えるべきだと思います。何か正しくないという感覚、不義の感覚、何か侮辱されているような感覚、不仁の感覚、まさに歴史学はこの不仁と不義への感覚を鍛えることに貢献できると思います。

例えば、正しさと正義を激しく叫んでいたのに命を奪ったり人間を侮辱したりすることが発生してはなりません。従って、不仁の感覚で正義の暴走を制御できなければなりません。我慢してはならないことの限界をどのように決めるのか、慎重に議論しなければなりません。その次に、家族や国家などの特別な共同体に対する愛を強調するあまり、正しくないことをしてしまう可能性に気づかなければなりません。何か不義だという感覚を通じ、共同体に対する過度な愛を制御しなければなりません。是々非々の感覚をどのように使うかを慎重に考えなければなりません。言い換えれば、不仁の感覚で適切に義を統制することです。つまり、不義にならないようにするということです。

そして、不義の感覚で適切に仁を制御しなければなりません。不仁にならないように、です。このように、不仁と不義の感覚で過度な義と偏狭な仁を制御し、作り出す仁義のベクトルの空間で未来の歴史が新たに模索されることを望みます。ありがとうございました。

彭浩 金先生、ありがとうございます。金先生はよく準備してくださいまして、発言の内容も非常に充実しています。特に史学史や史学理論に関するコメントが多く、いろいろ建設的なアドバイスもいただきました。未来に向けた歴史学の実践や、お互いを尊重するうえで歴史問題を議論することなど、更なる議論が必要なテーマを提示してくださいました。昨日の発表に対する質問も多く提出してくださいましたので、これからの全体討議の時に取り上げたいと思います。最後の指定討論者になりますが、平山先生、ご発言をお願いします。

平山昇 今回の会議で私は「国史」と地域的多様性との関係について、さらに歴史のイメージが社会の中でどのように形成されるのかということについて考えさせられました。以下3点に分けてコメントを述べます。

まず第1は、国家の歴史と地方の歴史の関係についてです。第2セッションの金泰雄先生にお尋ねしたいのですが、残念ながら今日はいらっしゃらないので、韓国のどなたかに教えて頂ければと思います。金先生は、戦後、韓国の歴史教育で日本史の内容が大きく削られたことを説明してくださいましたが、そのとき、釜山はどのような扱いになったのでしょうか？ 日本との関係史がほとんどない「国史」というのは、日本との交流や対立の最前線にたってきた歴史を有する釜山の人々にとって大変不自然に思われたのではないかと思います。一方で、韓国で1990年代以降に「東アジア史」「韓日関係史」の枠組みが重視されるようになったことは、歴史教科書で釜山の記述も増加させたのではないのでしょうか。

「国史」が国家の中央によって操作されるとき、必然的に自国の歴史の地域的多様性を軽視することを伴います。これは第3セッションの李基勳先生の報告

で、方言を使わずに標準語で統一した民族共同体を表現した映画が論じられたこととも関連すると思います。同じことはどの国の「国史」にも当てはまります。もし日本の「国史」が朝鮮との関係史を軽視するのであれば、それは対馬も軽視することになります。吉井先生のコメントにあった博多明太子、私は大好きなのですが、博多明太子のルーツも見えなくなってしまいます。同じことは中国の「国史」でも、どこの国でも生じ得ることだと思います。

個人的な経験を補足しますと、私は長崎県出身で、私の先祖の平山家は、朝鮮と日本の交渉を担っていた対馬の宗家の家臣でした。しかし、私が小学生のころに住んでいた長崎県長崎市内の小学校の歴史教育は、江戸時代の出島におけるオランダ・中国との交流史と1945年の原子爆弾の被害ばかりを強調し、対馬の歴史については、全く教えてくれませんでした。当時の日本全体で使用されていた小学校の教科書に沿って、長崎県の歴史が切り取られ、対馬が抜け落ちた歴史イメージを小学生たちに植え付けていたわけです。

第2点ですが、今回参加されている中国、韓国のどの先生でもよいので教えていただきたいことがあります。第1の点と関連するのですが、地方においてプロフェッショナルの歴史学者が育成されるような研究・教育の制度的基盤があるのかということです。

先ほど述べたように、長崎県が標準的な「国史」に従順な歴史教育をしてきたことは、長崎県内の大学に文学部の歴史学科が全く存在せず、この地域の歴史が学術研究を抜きにして「観光」に従属させられやすい構造があったことが一因かもしれません。

「観光」というのは、単純化された歴史のストーリーを利用する傾向が極めて強いので、日本の他の地域から長崎を訪れる観光客は「出島と原爆」というステレオタイプをさらに固定化させてしまいます。

例えば、韓国の釜山ではどうだったのでしょうか。釜山の大学に歴史学科が存在し、中央が作り上げた歴史像を相対化するようなことはあったのでしょうか、それともなかったのでしょうか。あるいは中国ではどうなのでしょうか。

いずれにしても、国家の中央だけでなく、さまざまな地方においてプロフェッショナルの歴史学者を育成して、「国史」と「観光」の政治的力学を相対化させることができる。そういう学問の基盤が地方においてどれほど定着しているのか？ このことについて、今回参加している中国、韓国の先生方から教えていただければありがたいと思います。

最後に第3点なのですが、これは質問というよりは皆さんへの提案になります。第2の点に関連して、日本と韓国の修学旅行について述べます。

人々の歴史意識に影響を与えるものとして、この会議では学校教育だけでなくメディアにも着目しました。また、学校教育についても、塩出先生が授業を受ける子どもの家族の反応にも着目しました。いずれも非常に重要なアプローチだと思います。ただし、日本と韓国についてはもう一つ視野に入れておくべきことがあります。それは「修学旅行」です。

日本は、同じ学校の同じ学年の生徒たちが数日間かけて一緒に団体旅行を行う「修学旅行」が、小学校・中学校・高校すべてで行われます。韓国も同様のよう

ですが、これは実は世界的には非常に珍しいことなんですね。

修学旅行は「教育+観光」を同時に経験する団体行動です。戦前の日本では皇室の祖先神をまつる伊勢神宮への修学旅行が行われ、戦後は平和教育のために長崎、広島、沖縄へ行くことが一般化しました。私が大学で教えている学生たちに修学旅行の経験について聞いてみると、教科書の内容はテストが終わってしまったら忘れてしまうのですが、修学旅行は「一生に一度」の経験であるために何年経ってもよく覚えている傾向が見られます。少なくともどこに行ったのかを忘れることは絶対にありません。

そこで問題となるのは、修学旅行で子どもたちがどのような歴史像に触れるのかということです。第2セッションで塩出先生は、日本人の被害ばかりを強調する日本の歴史教育の傾向を指摘されましたが、これは修学旅行でも基本的に同じです。広島・長崎の原爆や沖縄の地上戦での犠牲者の中に、朝鮮人や中国人もいたことや、日本の植民地支配などの加害の面について、修学旅行で学ぶことは稀です。また、平和教育とは別に、京都や奈良などの古い神社仏閣を訪れて日本の文化や歴史に誇りを持たせるタイプの修学旅行が、戦前から現代に至るまでずっと続いています。韓国の修学旅行ではどうなのでしょう。

このように、韓国と日本の修学旅行の経験が人々の歴史イメージにどのように影響を与えているのかについて考える必要があります。また、中国でも日帰り歴史を学びに現地を訪れるということが行われているでしょうから、その影響について考えてみることも有益だと思います。

ついでに一つだけ提案をしてみたいと思います。日本の修学旅行は、どこに行っても、いつも一緒にいる自分の学校の先生と生徒たちだけで固まって行動して、現地の人とあまり交流しないという問題点があります。そして、日本では高校生が修学旅行で海外に行くことが珍しくありません。しかしながら、訪問先の高校生たちと交流するということは私は聞いたことがありません。今回参加されている高校の先生に、最新の状況を教えていただきたいと思っていたので、昨日聞きましたが、やっぱりないそうです。韓国でも現在では高校の修学旅行で外国に行く場合があると聞いております。第1セッションで三谷先生がおっしゃったように、私たち歴史学者や大学生たちは国境を越えて活発に交流するようになっていますが、しかし、歴史の専門家ではない普通の中学生や高校生が国境を越えて対話する機会はまだまだ多くありません。たとえば日本、韓国の修学旅行の生徒たちが訪問先の高校生たちと一緒に戦争や植民地支配にかかわる場所を訪れて対話するといったように、すでに行われている日本や韓国の海外への修学旅行を、国境を越えた中学生や高校生の歴史対話に活用することはできないでしょうか。以上で私のコメントを終わりたいと思います。ありがとうございます。

彭浩 平山先生、ありがとうございます。平山先生は自分の経験と関連しながら、国家の歴史と地方の歴史の関係性について述べました。元々は指定討論の後、発表者に応答していただく予定でしたが、時間の関係で、以下のように調整させていただきます。発表者の皆さんは各自回答すべき質問をメモしておいてください。最後に集中的に回答をいただきます。平山先生のコメントでは教育の問題が取り上げ

られました。昨日皆さんと交流した時にも、教育問題に関する多くのご意見が寄せられました。多くの参加者は日本の歴史総合教育に関心を持っています。オンライン参加の市川先生からもご意見をいただいておりますので、市川先生からお伺いしたいと思います。1分以内でお願いします。

市川智生

沖縄国際大学の市川と申します。昨日から先生方のご報告を聞いて、大変勉強になりました。昨日の開会の最初に劉傑先生がお話された開催の趣旨について少し感じたことがあったので発言をします。

「20世紀、東アジアの歴史の大筋についての認識には大きな齟齬は存在しない」というようにおっしゃっていたのですが、率直に言うと私は違和感を覚えました。

研究者による理解が、どこまで大学生や一般の人々に共有されているのかという点についての疑問です。私は2010年前後に上海のある大学で日本近代史を教えていたことがあります。テキストを探している過程で、宋志勇先生の著作などにも目を通したのですが、結局日本の高校の教科書を自分で中国語に訳して講義を行いました。あまりうまくいかなかったように思います。学生は私の講義を聞いて、「だから何？」みたいな顔をしていました。日本の高校生向けの情報を中国語に訳しただけでは、中国人学生の思考回路とは違う次元の情報だったのだらうと思います。もちろん私の中国語能力の問題もあったに違いありません。よく覚えているのは、中国の多くの学生の認識が「日本は明治維新の結果、経済発展に成功した。それに対して、中国は近代化に失敗した」というものだったことです（10年前のことなので、現在は変化したかもしれません）。日本ではこういう考え方をする学生はいないのではないかと思います。私の疑問は、中国の学生は今お話ししたような見解をなぜ持つようになったのだらうかという点です。歴史研究者の情報発信に問題があるのか、それとも中国での初等教育から中等教育の結果なのか、あるいは何か全く別の問題があるのでしょうか。

この問題については、中国についてだけでなく、韓国の現状についても伺えればと思っています。

彭浩

市川先生、ありがとうございます。教育問題について議論を続けたいと思います。昨日は早稲田大学の浅野先生から国民性や国民国家と教育の関係について意見を述べたいと聞きましたので、浅野先生に発言していただきたいと思います。

浅野豊美

早稲田大学で日本政治史を教えております。金淵先生の「未来を構想しながら歴史を語らなくてはいけない」というお話がありました。私も全く同感です。それに関連して問題提起させていただきたいと思います。

2000年代初頭に生まれた学生たちがやがて90歳になる時、2090年は日本が開国した1858年から約230年以上、経っていることになります。つまり、いわゆる鎖国の時代というのは、ポルトガルの来航が止まった1630年から数えると230年弱ぐらい続いたわけですが、それに匹敵する長さです。我々はこの「国史たちの対話」で、これまでモンゴルの世界帝国や文禄・慶長の役を議論してきました

た。その延長に考えれば、ここで話すべきは、近代以前の伝統的社会をベースにして、近代を考えるということだと思います。近代以前には、王様がいたり、身分が存在していたり、それが当然の時代であったわけですが、そうした過去を想定しながら、未来を構想することが必要だと思います。

身分制度が無くなる過程においては植民地支配もあったし、戦争もありました。今の学生たちがやがて老人になっていく過程では、いわゆる日本の開国から230年ぐらい経っている時代を、今の若者たちは生きるわけです。平山先生が問題提起したような地方というものをやはり大事にしなければいけないし、さらには国民国家を超えた東アジアの地域というものも、未来のイメージの中で意識しないといけないと思います。「仁」や「義」という概念に象徴され、今でも我々が共有しているような何らかの遺産を、新しい文脈に生かせる可能性も我々は持っているのだと感じています。

第2セッションが「教育」、第3セッションが「メディア」、第4セッションは「研究」がテーマでした。教育のポイントは、身分がいかに消滅して国民というものができてきたのかに、大きな焦点を当てるべきではないでしょうか。第3セッションのメディアで出てきたような協力者の問題や、国民の歴史には、うまく「はまらない」ような存在、移民もそうですし、対日協力者もそうですし、一つの県をたった10数人の日本軍が支配してた話とか、要するに国民という意識がなかった時代における日本軍の占領だったと思いますが、未来を構想する時に国民の歴史にはまらないものがかえって大きな意味を持つことも大いにあり得ると思います。

ですから我々が歴史総合科目のあり方について、ここで話すべきことは、遠い過去と遠い未来を結びながら、今の時代を考える視点を養うための、教育の方策ではないかと思っています。未来を構想するためにこそ、遠い過去が重要で、特に身分があって王様がいた時代とない時代とを意識してこそ、国民という存在の上に築かれた現代を一つの時代として見るができるようになり、そうやってこそ、将来の世界における東アジアという地域と、あと釜山や博多や（私は福岡なのですが）、ローカルな地域が、国民というものを超えて、東アジアという大きな地域の中で結ばれていく未来の時代を構想できるようになると思うのです。できればこの後の残された時間の中で、今まで行ってきたモンゴルや文禄・慶長の役を意識しながら、議論を展開していただけないものかというのが私の要望です。

本当に今日は多くの先生方から、問題提起をいただいて勉強になりましたこと、合わせて感謝申し上げます。ありがとうございました。

■ 彭浩 浅野先生、ありがとうございます。教育問題についていろいろ議論しました。教育についてまだ質問したい方いらっしゃいますか。挙手の方がいらっしゃいますね。1分以内に短く質問してください。

■ フロア4 ありがとうございます。上海師範大学の教員です。加害と被害について質問したいと思います。この問題については、時間と空間の違いがあると言われていま

す。加害というのは、過去進行完了形の内容になりますが、被害というのは、傷口や伝説、さまざまな家庭での叙述を通じて伝えられていくことができます。そのため、現在から加害と被害の関係性について考える際は、これに注意を払う必要があると思います。加害は過去完了形であるため、すでに終わったと言えるからです。このような時間の問題のほか、空間に関する問題を考える必要もあります。私は長年日本で戦争に関するフィールドワークを行っております。大阪と東京で語られるのは空襲で、広島と長崎で語られるのは原爆です。この間は舞鶴市を訪れました。舞鶴市は引揚者を迎え入れた港だったため、シベリア抑留に関する記憶が強調されます。このように、日本では地域によって被害者の記憶も異なります。このような伝承において、加害の時間と空間について、みんなで何かできることがあるのか、教育の視点から先生方にお伺いしたいです。よろしく願います。

■ 彭浩 ありがとうございます。時間の関係で、教育問題に関する議論をここまでにします。先ほど市川先生から劉先生に質問がありましたが、劉先生からご回答をいただけますか。

■ 劉傑 市川先生、ご質問ありがとうございます。私の意図はこの文章全体を通して読んでいただくとわかるのかもしれないのですが、実はこの日本と中国、韓国の歴史対話が始まった時に、そもそも戦争とか植民地支配という非常に大きな枠組みについても、どこか認識の違いがあるのではないかという問題意識からスタートしたわけです。この20年ぐらいの対話の中で、「被害と加害」とか「植民地支配」とか「侵略」とか、このようなことについて話をするときに、議論が起きるとか意見が対立するようなことは、あまり見られなくなったという趣旨のことを言っているわけです。

ただ、その他ですが、私が書いた文章の次の段落のところに、それぞれの国の中の政治、社会的環境であるとか、自国史のコンテキストが違うというような中で、さまざまな違いがあるとか、誤解があるとか、あるいは不理解があるとか、その閉鎖的な歴史環境ということも、私は申し上げています。そういう意味では、歴史の情報についての知識の格差というものも歴然と存在しているということはあると思います。だから、この格差をどう縮めるのか、その格差によって生じる歴史認識の違いは、決して軽視することはできないと思っています。その意味では歴史教育のレベルの話はとても重要だと認識しています。全体としてはそのようなイメージで書いていたということです。ご質問ありがとうございました。

■ 彭浩 劉先生、ご回答ありがとうございます。教育問題について議論してきました。昨日は高校の教員である川島先生と田巻先生からもご発言をいただきましたが、今の新しい議論を聞いて、何か補足はありますか。

■ 川島啓一 同志社高校の川島啓一と申します。「『歴史総合』は東アジアの歴史問題の和解に寄与できるか」という大きな問いがあったと思いますが、私は数々の問題はあ

るものの、寄与の可能性はあると考えています。私が今考える回答を三つの視点、歴史教育の「目的論」「内容論」「方法論」から簡潔に答えたいと思います。

第1点目、「目的論」については、「歴史総合」では、何のために歴史を学習するのかということストレートに学ぶことができるようになりました。ただ単に歴史的な事実を高校教員が教えているだけでは、ずっと講義しているだけではダメだということです。ですので、歴史教員の権威主義をより克服する可能性が生まれました。高校生が自ら歴史を探究する、「何のために私は今高校で「歴史総合」を学ぶのか」という問題意識を持って高校生が探究できますので、より一層、歴史学習が高校生に身近になりました。高校生が「なぜ東アジアの歴史和解は難しいのか」ということを探究することも、「歴史総合」では可能です。

第2点目、「内容論」からは手短かに答えたいと思います。一つ目として「歴史総合」は歴史の学び方を教えることになりましたので、私たちは単に事実を教えるだけではなく、歴史をどのように学ぶのか、どのように歴史批判を行うのか、事実立脚性とは何か、論理整合性とはどういうことか、反証可能性とはどういうことか、ということも教えなければなりません。非常に難しいことですが、これを高校生と探究することができます。二つ目は、問いと史料の学習をより行うことができました。多面的・多角的という言葉を文部科学省も指導要領に書いているので、いわゆる批判的な、分析的な視点を持って、一つの視点からの史料ではなく、たとえば加害や被害の重層性を史料にして、学習することができます。一つの視点に偏らない、ナショナルヒストリーに偏らない学習をしなければならないと事実上規定されています。また、自ら高校生が調査し、発表し、議論し、対話し、書く＝叙述するところも規定されていますので、「ユネスコ学習権宣言」にある「高校生が自ら歴史を書く権利」、先ほどありましたスモールヒストリーズを高校生が自ら書く権利、これを保証しなければなりません。ここに高校生の「歴史総合」の探究の可能性が大きくあります。三つ目として、視点の枠組みが設定されていることです。「自由と制限」「平等と格差」「対立と強調」「統合と分化」「開発と保全」の五つです。昨日「開発と保全」の問題があったと思いますが、視点をうまく扱うようにというフレームワークが設定されています。さらに、現代的な諸課題を扱う視点、今高校生を取り巻く社会で問題になっていることを扱って、そこに学習に必要な過去を探究する学習も設定されています。こういうフレームワークが国から規定されることには、いろいろな問題もあると思いますが、高校生の探究の助けにはなると考えています。

第3点目は「方法論」です。教員がずっと歴史事実を一方的に話すだけではダメだと事実上、規定されました。対話的な学び、生徒同士がお互いに話し合いながら、教員とも話し合いながら、議論しながら学ぶという形をとっていくこととなりますので、対話というところで一つ大きく開かれました。または「深い学び」という規定もされましたので、相対主義を克服する可能性があります。どんな歴史の考え方があってもいいよね、あんなこともこんなこともいいよね、ではダメで、修正主義の言説や、ヘイト思想、差別のある解釈をした生徒については、それではダメではないかと、どんな根拠でその言葉を言っているのかと。あれもこれもあってもいいという相対主義をダメだよねと、きちっと未来に向かっ

て私たちはお互い歩み寄れる考え方を共有しないといけないよねという学習をすることがより一層可能になりました。以上が、私が考える東アジアの歴史和解を「歴史総合」でうまくクリアできるのではないかと思うところです。

■ 彭浩 ありがとうございます。川島先生から詳しい説明をいただきました。田巻先生からも補足があれば、1分以内で短くご発言をいただけますか。

■ 田巻慶 千葉県の私立中高一貫校・芝浦工大柏から参りました。私の方からは「歴史総合」を実際、現場で実践してみて抱いた問題意識と、授業を実際にやってみて、現場の先生が今どういうことに関心を持っていたりするのかについて、私見となりますが2点補足させていただきます。

まず一つ目は、史料批判の教材化にすごく関心があります。というのも、いろいろな歴史の解釈ですとか、論理的に叙述するとか、反証可能性を考えるというのは、例えば生徒にテーマを主体的に決めてもらってレポートを書く。あとは生徒に問いを表現してもらった活動の中で担保できます。しかし、史料批判というのは生徒に主体的に体験させることがなかなか難しいのです。ですので、そこはある程度一緒にレクチャーも挟みながら、生徒と一緒に体験的に学んでいく必要があるのかなと思います。ただ一方で史料批判というのはこうすればいいという解説で留まるようなものではありません。どこに注目するかは史料によっても異なると思いますので、史料の種類、いろいろなパターンに対して、こういうところに着眼点があるという視点を提示できるようにするにはどうしたらいいか。総合的に考えて、そういう史料の教材化が今後ますます重要になると思っています。

二つ目は、現代的な諸課題を考えるための歴史の科目という視点が重視され始めましたので、時事問題を多く扱うようになっていきます。そこで、今回メディアの話もありますので、少しお伝えしておきたいのが、新聞記事を授業の中で取り入れたり、時事問題を使ったりする実践が増えています。ただ、そうすると今はデジタル化が進んでいて、新聞を読んでいないご家庭がすごく多いので、その辺に対して、新聞をどう読み取って、それを習慣づけて、そこから歴史とどうリンクさせるのが、これから現場の教員の人たちが工夫して課題とするところかと思っています。

■ 彭浩 ありがとうございます。先生方は史料の扱い方に関する問題も言及してくださいました。これは教育だけではなく、研究にも関わる問題です。先ほど三谷先生はオーラルヒストリーの史料について述べてくださいましたが、昨日の発表でも議論されたオーラルヒストリーや個人史、大衆史においてもオーラルヒストリーの史料が使われました。ただオーラルヒストリーの史料の使用に関しては、いろいろ気を付けなければならないことがあります。例えば、慰安婦問題をめぐって多くの論争が行われました。河野談話は中国と韓国で評価されましたが、日本国内では批判されました。韓国側の史料には慰安婦に対する調査があり、歴史研究者にとって、それはオーラルヒストリーの史料になりますが、日本の一部の政治家にとってそれは確かな史料と言えず、信憑性が疑われています。これについて

私たちも考えるべきだと思います。オーラルヒストリーと歴史大衆化について質問したい方いらっしゃいますか。大久保先生、お願いします。

大久保健晴

慶應義塾大学の久保健晴と申します。この2日間、大変興味深く議論を拝聴させていただき、多くのことを学ばせていただきました。私は、東アジアの政治思想史を専門としており、法学部政治学科に所属しています。そのため、歴史の研究をしながら、他方で政治学も教えています。その観点から質問させていただきます。

昨日の安岡先生のご報告をはじめ、今回の会議ではさまざまな方から、オーラルヒストリーの重要性について、次のような指摘がなされました。オーラルヒストリー研究を通じて、個人の歴史を深く掘りさげて検討し、その人物が生きた時代の不正義、さらにはそこに伏在する帝国主義の構造的な暴力を描き出すことによって、国家を越えて、さまざまな地域をつなぐグローバルな歴史像を再構築することが可能となる。これは、本日の浅野先生のご指摘とも重なります。ここには、従来の国家中心的な枠組みを克服し、それぞれの地域をグローバルにつなぐ、未来志向的な歴史研究の可能性が示されています。

しかし他方で、私自身、政治学科に所属し、現代の韓国政治や中国政治の研究者と話をしていると、やはり今起こっている問題は、現代に生きる我々が解決しなければならない、という議論に触れます。特に近年の慰安婦問題や旧朝鮮半島出身労働者問題（徴用工問題）などは、国家賠償が一つの重要な論点となっています。そこでは、国家が果たす役割やナショナルな問題を無視することはできません。

もちろん、歴史学者として「過去」の歴史を研究することによって、国家を越えたグローバルな連帯や世界像を求める「未来」志向的な姿勢は、高く評価されるべき素晴らしいものです。しかし同時に、「現在」の国家間に存在する紛争や諸問題を、自ら研究する時代や歴史の視座から捉え直すこともまた、歴史学者として避けて通ることのできない課題ではないでしょうか。これは研究だけではなく、学校教育の現場でも問われるものです。

この問題について、どう考えればよいのか。未来志向的なグローバルな研究と、現在の国家間が抱える課題への応答とを、いかにして架橋することが可能か。安岡先生をはじめとした先生方にご教示いただけますと幸いです。よろしくごお願い致します。

彭浩

大久保先生、ありがとうございます。大久保先生も新しい論点を補足してくださいました。教育やオーラルヒストリーなどの研究方法、またはメディアについてまだ質問したい方いらっしゃいますか。いらっしゃらないのであれば、ここからは発表者からご回答をいただきたいと思います。一人2、3分をお願いします。できるだけ簡潔にお答えください。まずは陳先生をお願いします。

陳紅民

私は論文において、当時中国のメディアそして政治指導者が用いた「日本軍閥と日本国民の対立」には、事実的根拠がなく、効果もあまりなかったと分析しま

した。そこで、この研究の意義はどこにあるのかと金満教授から質問がありました。私は概念史という方法を用いてこの研究を行いました。概念が生まれた以上、それに意義があるというのが、概念史の基本理念です。これが1点目です。2点目、当時蒋介石と中国のメディアの「日本軍閥」に対する用語の使い方は非常に感情的でした。当時の中国人は日本には勝てないと分かっていました。だから「日本軍閥」という言葉、そして「日本軍閥と日本国民の二分法」を用いることで、日本軍を撃退することは可能であると宣伝し、中国の民衆を動員し、奮い立たせたのです。この概念の使用は、戦争動員と宣伝の側面の意図が明白であると思います。まとめると、この歴史的概念には研究する価値があり、また当時においては戦争動員の意義を持っていました。以上の2点から、研究する価値があると考えます。

昨日唐小兵先生も言及しましたが、蒋介石の周りにいた知日派の官僚たちが、それが実現不可能だと分かりながらも、なぜ蒋介石を止めなかったか、あるいはなぜほかの実現可能な方法を提言しなかったのかという質問がありました。知日派と言ったら、国民党政府においては、最も日本を分かっていたのが蒋介石本人だと思います。他の知日派は全然及びません。蒋介石は日本で軍事を勉強したため、日本の状況に誰よりも詳しく知っていました。ならば、なぜ彼自身もそれが実現不可能だと分かりながらもそうしたのでしょうか。それは先ほど金満先生への回答で話したように、当時の中国の政治的指導者として、日本は強すぎて到底勝てないと敗北主義的な情緒を表してはならなかったからです。彼には、この実際は実現不可能だが、理論上では実現可能に見える方法を取るしかなかったのです。これは蒋介石が取った戦略だと思います。

先ほど史料について議論されましたが、最後に史料としての日記の信憑性についてお答えします。江沛先生のご発表も日記を取り扱っていますが、その書き手は無名の人で、その日記も誰にも読まれないだろうという意識の元に書かれたということを経験し、その日記の信憑性を裏付けました。一方、蒋介石の日記に関しては、将来読まれる可能性を想定して執筆したかもしれないため、信憑性がないだろうと皆さんが指摘しました。蒋介石の日記を史料として数多くの研究を行ってきた研究者の一人として、今まで、『蒋介石日記』に事実の捏造が存在すると指摘した正統派研究者は一人もいないと断言します。『蒋介石日記』に記されたのは明白な事実です。蒋介石は50数年にわたって日記を書き続けました。日記は誰かに読まれるから、自分の「人物設定」を維持するために捏造しようと毎日考えるのは大変なことです。毎晩日記を書く際に、読者を想定して、自分のイメージを維持できるように計算的に構文するのはさすがに無理でしょう。そもそも、蒋介石も日記を書き始めた頃は無名の人でした。『蒋介石日記』は、少なくとも歴史的事実のレベルでは信憑性があると思います。日記を書く際の動機や、考え方などに関する信憑性については、恐らく誰でも一緒でしょう。学生は親に、恋愛中の人は恋人に日記を盗み読まれるのが怖いでしょう。その盗み読まれる可能性を想定したうえで、日記を書く際は、自分に不都合な出来事を避ける傾向は誰にもあるはずです。もちろん蒋介石も例外ではありません。ただ、彼は事実の捏造はしていないと考えられます。ですから、彼の日記を史料として用い

ること、あるいは重要な参照資料として他の史料と併用することは問題ありません。日記に関するジョークを紹介します。『邪不压正』（2018年）という中国映画に日記を書く人を「まともな人は日記を書くか」と揶揄する場面があり、このシーンに観客は爆笑します。要するに、無名の人にしろ、偉大な人物にしろ、日記を書く人はまともでないといふ多くの人に考えられており、まともな人は日記を書かないはずだと思われているのです。私の回答は以上です。

■ 彭浩 陳先生、ありがとうございます。次は梁先生をお願いします。最後の発言は座席順で行いたいと思います。お願いします。

■ 梁知恵 金先生、有意義なコメントをしてくださってありがとうございます。時間の関係上、簡単にお答えします。先生は韓国での生態史研究が国家単位の歴史を叙述するという限界の中に留まっているという点を指摘してくださいました。とても重要な問題点だと思います。今後の研究はもちろん、もう少し脱国境の、世界的な研究が必要でしょう。ただ、現在の研究水準と目標について私は少し異なる意見を申し上げたいと思います。

2000年代初め、韓国では脱民族主義、つまり解放以来続いてきた強い国家主義的歴史叙述を乗り越えるため、一つの解決ツールとして生態史研究を取り入れるべきだという議論が提起されました。非常に初期的な研究段階であり、解決する目標は韓国の国家主義だったと言えます。これによって、概ね前近代に関する研究が進められたと思います。ただ、私が発表で申し上げたような2011年の福島事故以降、そして我々がここ数年間のパンデミックを経て、韓国の歴史学界で生態史を巡る議論や目標が少しは変わったと思います。

韓国近現代史研究で見ると、生態史研究の水準は依然として非常に初歩的です。全般的な社会の雰囲気も依然として発展至上主義的です。ところが、このようなさまざまな社会的変化を経て狙うべき目標が少し変わったと思います。今の議論は脱国家や脱国境というより、むしろ消費と欲望、そして発展至上という世界中で共有されている方向そのものではないかと思います。ですから、国々がそれぞれの状況に基づいて何らかの議論を展開すること自体を「国家的」という理由で批判するより、むしろこうした各国の議論の中でどのように意味のある共通の課題を見つけるのかという議論が必要なのではないでしょうか。

また一例として、韓国では最近、気候変動が深刻化し全ての教育課程に生態基盤学習という新しい教科課程を共通して教えるように国家政策が変化しました。残念ながら、現場の多くの教師の方々に会った時、韓国史に関しては教えるコンテンツ自体がなくてとても困っているという不満をよく目の当たりにしました。ですから、今はもう少し現在の状況と条件に基づいて、国境または脱国境の議論の中で、もう少しずつ関連する議論を丹念に積み重ねていく必要があると思います。

■ 彭浩 梁先生、ありがとうございます。次は安岡先生をお願いします。

■ 安岡健一 たくさん質問をいただいたのですが、「人間の尊重」と「語りの信頼性」とい

う2点についてだけお話ししようと思います。質問やコメントの中で、被害が長く続く、犠牲というものが長い時間をかけて形成されるというお話もありました。私が今回取り上げた満州移民の記憶ですね。戦前に中国に渡った人たちの痛み、傷の経験が語られ始めるには戦後40年間ぐらいの時間が必要でした。それは、当時の地域社会の中では移民を送り出す側と送り出される側がいて、送り出す側は、戦後の地域社会においても有力者であり続けた側面があり、なかなか社会の中で自分の受けた傷を話すことができなかつた面があります。そうした人たちがいる程度いなくなった後、そしてきちんと耳を傾けようという人たち、その人の語りを尊重しようという人たちが現れた時にやっと語り出された歴史です。その中から私たちは、侵略、満州支配という行為が実際どういうものだったのかをようやく知ることができるようになったのです。コメントの中でありました「何が掘り下げられるのか」というところに、人が語るその背景をより深く掘り下げることが、戦後という社会の理解にも深く関わっていると思いますし、根本には人間と人間との関係の大切さも関わってこようかと思っています。

次に信頼性という問題です。口述の問題を扱っていると常に信頼性ということは言われてきましたが、二つの点で申し上げたいのは、例えば記憶間違いがあったとしても、では、なぜそういう間違いが起こるのかを考えることができるわけです。間違いがあるからダメだということだけではなくて、なぜそうした記憶違い、思い出し間違いが起こるのかも、考えることができる重要な材料になります。もう一つ、歴史学者が気をつけるべきなのは、時間が経ってからその出来事の意味、解釈が変わるということ、もう少し創造的な意味で考える必要があるということです。自分の話で申し訳ないのですが、私は中学生の時に阪神淡路大震災を経験しました。その時に何が起こったのかというのは、その時にはわかってなかったと思います。毎日やること、水汲みとか配給に並ぶとか、そういうことと受験が忙しかったからなのですが、そのことの意味は何年か経って、父親が死んだ時とか子供が大きくなった時とかに、だんだんあの時、何が起こったのか、そして戦争の歴史を学んだ後に、焼け跡みたいな場所にいることの意味などが、後から分かってくるということがあると思うのです。そうした形で解釈は変化します。歴史が重要視すべきなのは時間、日付の問題だと思っていますので、いつ何が誰によって、どのように語られたのかを正確に記録することを通じて、信頼性については、やはり専門家の側が確保すべき問題だと思っています。語り手の側にその責任を委ねないという点が私は重要なのではないかと考えています。そうした形で掘り起こしていき、では何が重要になるのかということ、途中で新聞記者と学者の関係のお話もありましたが、そういう形で学術成果を利用できる記者の方と交流する、あるいは学術的な成果をきちんと活用できる政策立案者とのコミュニケーションを図るなどしていく。自分たちが直ちに解決するというよりもどうすれば、さまざまな職能に基づいた関係を作っていくのかということに加えて、今回私たちが行っているような国の単位ではなくて、それを越えた集まり、世代を超えた集まりというものが本質的には重要だと思います。また、そういうところで自分の専門性が貢献できたらと思っています。以上でコメントのリプライとします。

彭浩 安岡先生、ありがとうございます。次は李基勳先生をお願いします。

李基勳 まず、地方と中央についてお話します。2点程、お話ししますが、まず冷戦期の民族主義が韓国を強力に中央集権化した国家として作り上げ、これは方言を含むローカル、地域、地方に対する全般的な抑圧をもたらしました。これは権力や行政的な問題でもありますが、観念の問題でもあります。

私は釜山出身で、ソウルで大学に通いました。大学1年生の時、とんでもない質問の一つを受けました。夏休みに私が「釜山に帰る」と言ったら、ソウルの友達が「田舎に行くの」と、人口300万人地域なのにそう言われました。釜山がこれくらいなら、本当の田舎に対する感覚はどうであったかは明確です。

翻って考えてみると、韓国の民主化過程というものは、この観念からの解放を意味するものです。方言とローカル、民衆の発見の過程であり、再構成過程です。ある意味、1990年代や2000年代以降、地方大学で歴史学科が発展していくのは、地方史が活性化していく過程でした。平山先生は釜山大学のことに言及されましたが、私の地元は釜山ですが、木浦大学に長く勤務しました。木浦大学、群山大学のような大学は地方史研究に伝統があります。特に海洋史、島嶼海洋史が強いです。

ここまでが啓蒙的価値としてローカルが発見される過程ですが、現在韓国の大学が直面している問題は、この啓蒙的価値が現実と向き合っているという状況です。地方が崩壊しています。日本も経験している過程ですが、韓国の方がはるかに深刻な形で進んでいる地方崩壊は、地方大学の崩壊に真っ先に現れています。多くの地方大学が育ててきた地方史研究の伝統が危険にさらされています。まだ持ちこたえてはいますが、現実には難しいです。歴史が価値を追求する上で、現実の圧力にぶつかる時、どのように解決するのか、真実と価値の問題ではなく、価値と現実の乖離という側面も実はまた別の歴史学の実践がぶつかっている問題だと思えます。

そして「満州映画」の問題は、正解はありません。北朝鮮と韓国、つまり南韓が違う形で処理しています。北朝鮮ではよく親日映画と言われる映画を映画史、小説から外します。韓国では親日映画というカテゴリーを設定し、その中で扱っています。

彭浩 李先生、ありがとうございます。次は福間良明先生にまとめの発言をお願いします。

福間良明 先ほど加害と被害をめぐる時間と空間の関係性についてというご質問があったかと思うのですが、それについて少しばかり述べさせて頂ければと思います。私自身は、主に日本のことで、沖縄とか広島とか長崎のこともテーマにしたことがあるのですが、おっしゃるように時間的な差異と空間的な差異は重要だと思っています。戦争をめぐる語られ方ですとか、加害とか被害という論点が出てくること自体がその時々々の社会状況の変化の中で、作られてくる場所があるように思います。私自身は加害と被害の問題が、是非の問題もさることながら、社会的に

どう構築されていくのかということに関心があります。ちなみに沖縄のことで言いますと、もちろん沖縄戦体験はさまざまに語られてきたわけですが、1960年代に復帰運動から盛り上がった、日本への返還運動ですね。その時には実は旧日本軍の加害を巡る議論は抑えられる傾向があって、それはやはり日本に復帰したいという動きがあって、それが絡んでいたということになるわけです。それが、いざ沖縄返還が実現しそうになってきて、それに伴って米軍基地がすごく多く残されるということが露見してきた。そういう中で旧日本軍の沖縄に対するその加害の問題も、焦点化されていくわけなのです。ただそれと同時に沖縄の中での加害の問題ですね。沖縄の学校教師が沖縄の生徒に対して、皇民化教育を行ったりだとか、沖縄の出身者がそれぞれ朝鮮人軍属などに対して暴力を振るったりだとか、そういう沖縄の加害の問題も焦点化されてくることがありました。

一方で、広島とか長崎のことで言うと、ご質問くださった先生の方がお詳しいと思うのですが、どちらかという和被爆体験をめぐる議論でしたら広島の方がリードしているイメージがなんとなくあると思うのですが、他方で1970年代、80年代ぐらいでしょうか。どちらかという長崎の方がむしろ証言記録運動が盛んで、広島の方が長崎に遅れをとっているというような議論も結構あったりしました。その意味で時間的な差異と同時に、どういう論点がどのように作られてくるのかということは、例えば広島、長崎、沖縄それぞれで違いがあるように思います。ただ一方で、ベトナム戦争のインパクトという点では、それぞれに共通しているところがあるように思います。沖縄返還はベトナム戦争ともやはり絡んでいましたし、広島とか沖縄における体験記録が生み出されるプロセスでも、やはり佐世保へのエンタープライズの寄港そのものが、ベトナム戦争の問題と絡んでいます。時間的な変遷も扱いつつ、と同時に空間的な差異ということである、それぞれのその地域の差異が、もちろんあると同時に、他方で多くの地域に共通して、インパクトを与えているような社会的なバックグラウンドみたいなものもあります。そういうところを見ていく中で、どういう地域で、どういう時に、どういう議論が語られて、そこにどういう可能性があったり、あるいは何が見落とされたのかという、そういうことを細かく読み解いていく中で今の我々の議論のあり方を問い直すという。過去から現在あるいは未来を問い直すということは、個人的にはそういうことなのかなと考えております。

■ 彭浩 福間先生、ありがとうございます。次は江先生をお願いします。

■ 江沛 先生方のご発表を拝聴して、中国は韓国、日本の歴史教育と大きな違いがあることに気付き、いろいろ考えさせられました。日本と韓国には修学旅行があり、学生たちは修学旅行で地域や歴史に対する認識を深めると平山先生が述べました。私が所属する南開大学にも似たような制度があります。私が南開大学に通っていた時は、2年生の時に現地調査のプログラムがありました。現在は4年生が卒業する前に実習があり、歴史のある地域に行って実際に研究調査を行います。そのほか、夏休み期間中には「社会的実践」も行われます。それは日本と韓国の修学旅行のように、さまざまな場所を訪問することができます。その経費の一部

は大学の負担となります。もちろん、それが勉強になる人もいれば、ただの旅行に過ぎないと感じる人もいて、効果はそれぞれです。

先ほど市川先生が言及した問題について、日本の先生方に質問させてください。中国の学生たちは、明治維新を日本が飛躍的な成長を遂げた一つの鍵と認識し、そしてほぼ同じ時期にあった中国の洋務運動がさまざまな原因で失敗したことが日清戦争に負けるほど日本との国力の差が生まれた大きな原因の一つであると認識していますが、日本の学生にはそのような認識がないと市川先生は述べました。なぜ日本の学生はそう思わないのかについて、日本史専門の先生方から説明していただけないでしょうか。そして中国が日清戦争に負けた原因に対する日本史研究界の認識についてもご教授いただければ幸いです。

■ 彭浩 江先生、ありがとうございます。江先生は最後に質問を提出しました。塩出先生、もしお答えいただければ、簡潔にお願いします。

■ 塩出浩之 せっかくですので、続けて簡潔にお答えします。実は日本の研究では、最近の考えは大きく変わりました。つまり、中国では洋務運動は失敗したという理解はあると思うのですが、なぜ失敗したのかを考える際に、中国は近代化できなかったという考え方は現在の研究ではしていません。そうではなくて、やはり清のシステム、仕組みが非常に完成されたものであった。つまり宋代以降の中国というのは極めて強靱な仕組みを持っていたために、それを簡単に変えることは非常に難しかったし、ある意味で言えば、それで西洋の衝撃に対応できたという面があります。だから、それを変える必要がなかなか認識されなかったと理解することが多いと思います。日本の場合はそうではなくて、開国した衝撃で一発で国がバラバラになって、また別の国になってしまったという非常に大きな変化があるわけです。ただ、それを近代化できた日本、できなかった中国という見方は、現在の日本の研究ではしていません。ところが、中学・高校の中で語られる議論になると必ずしもそうはなっていません。近代化できた日本、できなかった中国というような語り方を採用される先生方も多くいらっしゃるかと思います。これは私が「歴史総合」の教科書を執筆する中でも、高校の先生方と協力して作業しましたけれども、感じられたところでした。

では、いただいた質問にお答えしたいと思います。特に金濤先生ありがとうございます。「なぜどうして」だけではなく、「どこへ」というような問いも歴史教育において必要ではないかということは、非常に大事なご提案だと思いました。ただ、これを直接問うことは、なかなか難しい面があります。つまり、意見を求めることになった場合に、歴史と関係ない意見が出てくることもあり得るからです。それをどうすべきなのかということですが、一つは「なぜどうして」という問いが、実は暗黙のうちに「どこへ」という問いを含むのではないかと思うのです。つまりそもそも「なぜどうして」と考えるときに、どこからその「なぜどうして」が出てくるのかというと、やはりある価値判断があるわけですね、暗黙のうちに。だから実はそういうものを問うていると思いますし、あるいはそのように問うべきではないかとも思います。つまり、どういう「なぜどうして」を設定

すればいいかがとても大事だと思います。それからもう一つ言えることは、未来を直接問うのはなかなか難しいところがあるのですが、ただし、やはり歴史の中で普遍的な問いが見いだされる局面がいくつかあると思うのです。選択肢がいくつかある中で、なぜこれを当時選んだのだろうかというようなことがあると思います。そういうことをある種の普遍性のある問題として考えることはできるかもしれないと思います。

具体例を一つ挙げるならば、1920年代から30年代の日本が、なぜ中国を侵略して国際的に孤立し、世界戦争に突き進んだのかといったような問題は、その中でも特に大きなものだと思います。つまり、なぜ国際協調を捨てたのかとか、なぜどうしても中国を侵略しなければいけなかったのかという問いは、その中で最も重要な例題の一つになるのではないかと思います。これをもう一歩進んで言えば、現在ロシアとウクライナの戦争と極めて日本の中国侵略は似た部分があるわけですね、国際社会との関係を含めて。そういった問題を生徒に考えてもらう上でも、重要な問いになるのではないかと思います。

■ 彭浩 塩出先生、ご回答ありがとうございます。最後は唐先生をお願いします。

■ 唐小兵 彭浩先生、どうもありがとうございます。私に対する質問は特にはないようですが、興味深いと思ういくつかのポイントについて発言させていただきます。一つ目は平山昇教授が言及した歴史学がどのように地方の人々と関連性を持つかという問題です。これについて、私が所属している華東師範大学歴史学部の取り組みを紹介したいと思います。華東師範大学には「民間記憶と地方文献研究センター」が設置されています。本センターは各地の地方志弁公室（地誌を編纂する機構）や博物館など地方の文化と歴史に携わる機構と連携し、「地方文化歴史研修コース」を毎年開催しており、今年は7回目になります。本コースでは、地方機構の職員を受講生に、地方史研究などを専門とする教授たちが地方史研究やオーラルヒストリーなどのやり方を教えるなど、学術研究のトレーニングを行います。今まで、華南学派に属する香港中文大学のデイビット・フォーレ教授、中山大学の劉志偉教授、厦門大学の鄭振滿教授や、華東師範大学歴史学部の馮篠才教授や李世衆准教授などがコースの教師を担当してくれました。コースの成果が出ているので、毎年開催するように頑張っています。

そのほか、地方政府や機構と連携して、学部生や大学院生を地方に連れて行って、地方史研究を行っています。例えば、浙江省温州市との連携が強く、温州の通史を編纂するなどさまざまな共同作業を行ってきました。華東師範大学歴史学部はこのような実践に長く取り組んでおり、積極的に地方社会と連携しようとしています。地方史の発掘などの事業を促進するために、歴史学の専門力を持つ人材の育成に努めています。

日本と韓国には修学旅行がありますが、中国にはそのようなものがあるかどうかという問題も先ほど言及されました。ここ数年は新型コロナウイルスの影響で多くの行事が中断されましたが、今年の夏休みに華東師範大学歴史学部は学生を対象に歴史調査の実習を中国の江南や北西などの地域で行いました。歴史研究に

携わっている先生たちの指導を受けながら、選抜された学生たち（学年ごとに10数名）が現地で京杭大運河や陝西省の文化遺跡などに対する研究調査を行い、調査レポートを作成するというしっかりした実習でした。華東師範大学では、歴史学に関する非常に重要な取り組みとして、このような実践が行われています。以上は平山教授への応答です。

また、金濤先生は歴史著述や歴史教育の意義について、歴史学がいかにして現在において過去と未来を繋げていくかという歴史学者の社会に対する責任に言及し、それが私の心にも刺さりました。歴史著述は侮辱や傷害をもたらすべきではなく、人の尊厳を尊重する文化を培うべきと金先生は述べましたが、それは非常に重要な指摘で、私も同意します。真の歴史学は人文主義の歴史学であるべく、文化そして人の尊厳に対して、価値的関心と本質的な尊重を持たなければなりません。そうすると、その歴史著述においては、対象がエリートであれ、知識人であれ、ひいては一般市民であっても、それは関係なく人の尊厳に心を配り、これらを一つにすることができます。このような歴史著述は私が好きなフランスの思想家であるアレクシ・ド・トクヴィルが提唱した理念に到達するでしょう。トクヴィルが『旧体制と大革命』において「過去はもはや未来を照らさず、精神は闇の中を進んでいる」と述べたように、過去という次元が隠され、意図的に抑圧されたら、私たちの未来に対する理解、そして精神的落ち着きを難しくしてしまいます。以上は金濤先生への簡単な応答です。

そして、韓国の金憲柱先生は被害者のナラティブについて話してくださいました。この二日間、江先生を含め、多くの先生はハンナ・アーレントに言及しました。アーレントは私も好きな政治思想家で、彼女がエルサレムで行われた裁判でのナチス・ドイツの士官であるアドルフ・アイヒマンの言動に対して提出した「悪の陳腐さ」というコンセプトは大きな影響力をもたらしました。先ほど金先生も言及しましたが、「悪の陳腐さ」が主に論じているのは、いわゆる支配者と被支配者の間に存在するグレーゾーンであり、それはもちろん私たちも考察すべきところですが、それに対する補足ですが、アーレントは責任と判断、個人責任と集団責任を論じる文集において、服従と支持の区別を強調しました。アイヒマンであれ、偽満洲国の士官であれ、多くの個人は自身の職種による消極的あるいは受動的な服従があることを強調します。この服従の概念は、自己弁護性と消極性を帯びており、高度に政治化された時代において、自分および家族の命を守るために仕方がないことを強調します。これに対して、アーレントは服従と支持を区別する問題を提起しました。服従を支持（support）として理解すると、それがより能動性を持つ概念となります。そうすると、個人としての責任感もより強くなり、最終的な責任を負うこととなります。この意味では服従は政治暴力と強権統治を支持することとなります。このような概念の転化によって、個人の思考や判断、選択の重要性が浮かび出るようになります。これに関連して、彼女が提示したもう一つの重要な見方があります。ナチス・ドイツの責任について再考した際に、ドイツの戦後の世代は「私たち全員に罪があり、責任がある」と思いましたが、全体として罪を認めて謝罪すると、実は個々人の責任を軽く免れることになってしまうとアーレントは指摘しました。これによって、彼女は責任と罪を区

別しようとし、個人も裁判を受け、最終的な責任を負わなければなりません。そうすると過ちと道徳観念は別の概念となり、両者の区別を彼女は同時に強調しました。ドイツの戦後の世代を取り上げた書籍をいくつか読んだことがあります。その中に彼らの日常生活を描いた『彼らは自由だと思っていた：元ナチ党員十人の思想と行動』という一冊があります。戦後、一般のドイツ人の多くは実はこの歴史に直面したくないと考え、彼らはどちらかという、一人の服従者あるいは支持者でした。アライダ・アスマンの『記憶のなかの歴史：個人的経験から公的演出へ』もこの記憶と反省という中心課題を取り上げました。しかし、1960年代以降、ドイツの若い世代が大人になり、彼らはより広い視野を持つことができ、またヨーロッパの左翼運動の影響を受け、自分の親や祖父母にナチス・ドイツの時にやったことについて聞くようになりました。世代間の反作用の促進を受け、自身の責任について見直すようになりました。これは非常に意義があると思います。

最後は三谷先生が言及した史料に関するいくつかの要点について応答します。それは非常に意義のある指摘だと思います。史料に対する考証と分析は歴史学の根本的な基盤で、非常に重要です。多くの歴史的出来事には史料による記載は存在しないと三谷先生が言及しましたが、それに対して、質問させてください。歴史学というのは史料学ですので、歴史学にとって、想像力は必要でしょうか。見えるものから見えない物事に到達する必要があるのでしょうか。これは常識や人情、論理的推論を通じて歴史を発見する方法で、歴史学の非常に重要な能力の一つでもあります。これに関するトレーニングも非常に重要です。また、記憶の信憑性についても言及されまして、これもとても重要な問題だと思います。ノーベル文学賞の受賞作家であるギュンター・グラスの回想録『玉ねぎの皮をむきながら』を読んだことがあります。グラスはその晩年の回想録において、1944年前後にナチスの親衛隊に属する組織に参加したことを記述しました。晩年の彼はこの過去をなかつたことにすることができず、この秘密にしていた個人の記憶を回想録において率直に表現しました。彼は回想と記憶の区別にも言及しましたが、このような誠実さと懺悔は華人の個人の記憶にはあまり見られません。私が読んだ限り、20世紀の中国に関する中国本土の回想録やオーラルヒストリーの多くは、自己を崇高視したり（例えば、軍隊の将官など）、自身が受けた苦難を訴えたりして、客観的に過去の真実に向き合うものは比較的少ないです。私が昨日の発表で言及した王鼎鈞先生の回想録は例外です。これについてはまだいろいろ考える余地があり、とても意義のある問題だと思います。以上感想のようなコメントと簡単な応答をさせていただきました。

■ 彭浩 唐先生、ありがとうございます。皆さんに十分な時間を与えられず、大変失礼しました。ここからは趙先生から閉会挨拶をいただきます。趙先生、お願いします。

趙 琬

高麗大学名誉教授

[原文は韓国語 翻訳：尹在彦（立教大学）]



韓国、日本、中国間の国史の対話の可能性は、2020年1月のフィリピン大会以来、久しぶりにお互いに会って直接話し合う機会ができました。

今回の対話のテーマは「20世紀の戦争・植民地支配と和解はどのように語られてきたのか」ということです。このテーマが教育とメディア、研究の分野にわたり議論されました。全世界を停止させた感染症の時代にも「国史の対話」は止まりませんでした。時代の争点を積極的に反映した様々なテーマを土台に対話を積み重ねてきたので、我々は20世紀の戦争、植民地支配とその和解という大きなテーマに正面から向き合うことができたと思います。

東アジア、特に韓国、日本、中国の3カ国は長い歴史を共にしてきました。当然ですが、その歴史を巡り認識の差を示すところも少なくありませんでした。そして鋭い論争と解き難い問題が近現代、特に20世紀の戦争と植民地の歴史にあるという事実にはほぼ同意したとしても、その事件に関する解釈には意見の相違がありました。このような状況で第8回対話はこのテーマを直接扱うことにしたと思われま

しかし、古典的な論点の繰り返しにはとどまりませんでした。今回の大会では歴史家が歴史をどのように研究してきたのか、歴史認識が最も明確に反映される結果物である教育とメディアでその認識の研究がどのように取り上げられたのかに注目することにしました。そのため、歴史を解釈する基本的な枠組みを提供するメタ・ヒストリー（meta-history）に対する関心も今回の大会を通じて表れました。そして、このメタヒストリーという一つの理論的側面以外にも、日常史（l'histoire quotidienne）、オーラル・ヒストリー（oral history）など20世紀後半の歴史学界で確立された方法が歴史教育の現場でも直接駆使されている状況も確認できました。今回の大会では3カ国の考えや問題意識、そして研究状況をよく表してくれたと思います。

日本の研究者の方々は、日本が歴史を教育、メディア、そして個人という次元でどのように論議してきたかを忠実に検討してくださいました。歴史家の基本的素養とも言える自己客観化と伝達者としての歴史家ないし歴史教育者の間のジレンマ、現代歴史学で振り返るべき個人史の価値の間を絶妙に行き来しながら発表してくださいました。

韓国は植民地と韓国戦争という激戦の経験を歴史的な痛みとして持っています。解放直後、歴史研究者たちは韓国史を植民地的な状況からどのように救出しようとしたのか、植民地時代の経済に対する韓国の学界の論争点は何なのかを説明してくださいました。そして歴史と異なるところのメディアではこれをどのよ

うに記憶しようとしたのか、生き生きとした歴史の映像資料と共に興味深く紹介してくださいました。

中国も、韓国とほぼ同時期、激しい歴史の変動に直面しました。満州国の協力者で、また別の側面から見ますと、場合によっては「愛国者」であったかもしれない両面を持った人物の人生、中華民国期の中国人の日本軍閥認識の多様な側面、1945年から49年にかけての中国の歴史における大きな転換を捉える、相反する見方は、韓国と日本の研究者にも少なからず刺激を与えたと思われます。そして、私は中国の仲間の発表を通じ、歴史研究の巨大な変化が中国大陸から芽生えているのではないかと考えたりもしました。

今回の「国史対話」は新たな研究の可能性を検証するためのある種の挑戦でした。そして各国の公式史である、それぞれの国史を補完するための熾烈な努力も確認できました。そして新しい変化と発展のための可能性を今回の対話を通じて見つけることができました。我々研究者たちのこのような努力は、隣国との歴史和解と東アジアの歴史発展に必ず貢献することになるでしょう。

様々な難しい分野をテーマに、多様な視点を紹介して下さった各国の研究者の方々にお礼を申し上げたいと思います。一方、「国史対話」の醍醐味は一方的な発表でなく、相互間の討論です。討論を通じて相手に対する正確な理解が可能になり、相互の共同理解に到達することもできるからです。今回は久しぶりに比較的十分な討論時間が与えられました。もちろん司会者の方をはじめ、多くの参加者が時間不足を感じてはいましたが、この程度の討論ができれば国際学術大会では比較的良い分量だと思います。討論者たちは発表の翌日、十分に熟成した考えに基づいて真剣な討論に臨んでくださいました。

ここで考えてみると、これから2年後の2025年は第二次世界大戦が終わって80年になる年です。これは世界の歴史学界で現代史を研究する良いきっかけとなっています。これに関する研究を準備する動きが、多くの国で研究者によってすでに出ています。既に韓中日の3カ国もそれぞれ韓国と北朝鮮では「光復」と表現し、中国の立場では「勝戦」で、日本は「終戦」という異なる用語や概念、そしてその記念する日付にも違いがあります。これらの事件について、それぞれが歴史の評価をおそらく2年後にまた新たに行うことになるでしょう。

このような展望をする時、今回の中心テーマに定めた「20世紀の戦争・植民地支配と和解はどのように語られてきたのか」は非常に卓越した選択だったと思われます。今回選ばれたこのテーマは、既存の教育、即ち学校教育の現場と関連した問題、そして社会教育の重要な軸となっているメディアと歴史の問題、そしてこれらのテーマに関する研究の問題が真剣に議論されました。今回の大会で発表されたテーマは、それ自体が独立した意味を持っています。また、同時に韓中日3カ国の現代史に第二次世界大戦が及ぼした影響を深く認識する上でも一つの踏み台となるでしょう。我々はその戦争が持っている歴史的意味を振り返り、未来に伝えるべきことは何かを考えるでしょう。

改めて「国史たちの対話」を第8回まで支援して下さった渥美国際交流財団の今西常務理事に感謝申し上げます。今西先生は卓越した企画者であり、また非常に熟練した運営者だと思います。そして、この大会を組織して下さった三谷

先生、劉先生、今回の大会が円滑に進められるよう努めてくださった様々なスタッフの方々にも感謝申し上げます。

国史たちの対話は、これまで築いてきた意味ある対話に続き、3カ国がそれぞれの歴史を語ると同時に、一緒に話せることが何なのか、共生する未来のためにどのような成果物を共に作ることができるのかを考える場を設け、その可能性を私は今回の対話を通じさらに強く確認することができました。国史対話に参加してくださった全ての方々にもう一度感謝申し上げながら、閉会の挨拶といたします。誠にありがとうございました。

ふりかえりとこれから

今西 淳子

渥美財団



みなさま、1日半の大変内容の濃い議論をありがとうございました。

国史対話プロジェクトは2015年7月に、ここ早稲田大学で開催した第49回SGRAフォーラムに端を発します。東アジアに「知の共有空間」あるいは「知のプラットフォーム」を構築し、そこから和解につながる知恵を東アジアに供給することの意義を話し合いました。

このプラットフォームの上に設置されたのが、2016年9月に北九州のアジア未来会議で開催された第1回「国史たちの対話」でした。第2回は2017年8月に、やはり北九州で「蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」、第3回は、2018年8月にソウルのアジア未来会議で「17世紀東アジアの国際関係」、そして第4回は、2020年1月にフィリピンのアジア未来会議で「『東アジア』の誕生－19世紀における国際秩序の転換－」を開催しました。そして第5回は20世紀をテーマに東京の早稲田大学で開催することが決まっていたのですが、コロナ禍に襲われ延期になりました。コロナの間は、3時間程度の短いオンラインのプログラムで、「感染症」、「人の移動」、「歴史の大衆化」などをテーマに対話を重ねました。今回のフォーラムは対面とオンラインの両方を合わせたハイブリッド形式で初めて開催しましたが、この形式はおそらく今後も続きます。

渥美財団は、もともと日本の大学院で博士論文を執筆中の外国人研究者を支援する奨学財団から出発し、元奨学生のネットワークを活かして国際的かつ学際的な学术交流事業を行っていますが、劉傑先生が提唱される「知のプラットフォーム」と出会うことによって、国史対話プロジェクトが生まれました。したがって、このプロジェクトは、日中韓3カ国の先生方に国境を越える活発な対話を続けていただくことを主眼としています。1日半の充実した議論をしても何の結論も出なかったとがっかりされることなく、もやもやした気持ちを持ちながらも、今回の対話の経験を活かして、さらなる対話による信頼関係の醸成に務めていただきたいと思います。

国史対話の成果は、今回展示しましたようにSGRAレポートとして3言語で発行しています。PDF版は、日中韓英の4言語で展開しているSGRAのホームページからダウンロードしていただけますので、是非ご利用ください。

そして、今回、この成果をさらに活用するために、教材化プロジェクトを始めることにしました。対象は大学1～2年生を想定しており、それまでの暗記の歴史から、自分で考える歴史へ導くような、動画の教材を考えています。残念ながら今回は間に合わなかったのが、次回国史対話を楽しみにしてください。そして、教材ができましたら、是非先生方の授業で使ってください。

最後にこれからの予定です。今後も国史対話は、渥美財団が2年に1回開催するアジア未来会議という500人規模の国際研究交流の場を使って開催しようと思います。次回は2024年8月にタイ国バンコク市で開催します。今まで、13世紀、17世紀、19世紀、20世紀をテーマに続けてきた今の形の国史対話は一段落したので、三つのサブテーマについて日中韓3名の先生方に9本の論文を書いていただく方式は、今回で終了します。これからはオンライン対話で感染症や大衆化をテーマに行ったように、ひとつの問題提起に対して指定討論を各言語1～2名決め、さらに自由討論を多くする形をハイブリッド形式で開催したいと思っています。自由討論には、是非今回出席された方にも参加していただきたいです。対面で参加していただける方は、国史対話だけでなくアジア未来会議をお楽しみいただきたいです。先生方が指導される学生さんも一緒にパネル参加などもご検討ください。今までに国史対話に登壇された方々は登録費免除などの特典を考えています。学生さんには奨学金や優秀論文賞にもチャレンジしていただけます。

ということで、国史対話はまだまだ続きます。今回猛暑の中、早稲田にお集りいただいた先生方にも続いてご参加ご協力いただきますようお願いいたします。そして、次回、バンコクで再会いたしましょう。

著者略歴

■ 金 泰雄 / KIM, Taewoong

1984年、ソウル大師範大学歴史教育科卒業。1990年同大学大学院国史学科修士、1997年同大学大学院博士。文学博士。現職はソウル大師範大学歴史教育科教授、専門分野：韓国近代史、韓国社会経済史。主な著作：『뿌리 깊은 한국사 샘이 깊은 이야기 6 - 근대편 (根の深い韓国史 泉の深い物語 6 - 近代編)』(솔, 2003)。『한국근대 지방재정 연구 (韓国近代における地方財政の研究)』(아카넷, 2012)。『대한제국과 31운동 (大韓帝国と3・1運動)』(휴머니스트, 2022)。

■ 唐 小兵 / TANG, Xiaobing

華東師範大学歴史学部教授。歴史学博士。博士課程指導教員。ハーバード・イェンチン研究所訪問学者。専門分野：清末から民国時代における新聞・雑誌の歴史、20世紀の中国知識人の歴史と思想文化史、左翼文化と中国革命、回想録・オーラルヒストリーと20世紀の中国における歴史の記憶など。『現代中国的公共輿論——以『大公報』「星期論文」和『申報』「自由談」為例』、『十字街頭的知识人』、『与民国遭遇』、『書架上的近代中国——一個人的閱讀史』、『北米学踪：從溫哥華到波士頓』などの著書を出版。論文は『China Information』や『新聞与伝播研究』、『史林』、『中共党史研究』、『二十一世紀』(香港)、『思想』(台湾)など国内外の雑誌に掲載。華東師範大学第一回青年教師育人貢獻賞を受賞。2014年に『東方歴史評論』誌が主催の「中国傑出青年歴史学人」に入選(全国計15人)。主な著作：『戦争、苦難与新聞——試論抗戰時期民間報刊的輿論動員』、『新聞与伝播研究』、2015年第8号。「民国時期中小知識青年的聚集与左翼化——以二十世紀二三十年代의上海為中心』、『中共党史研究』、2017年第11号。「後五四的家庭革命与社会改造思潮——以『中国青年』『生活週刊』『申報』為中心的討論』、『天津社会科学』、2022年第2号。

■ 塩出浩之 / SHIODE, Hiroyuki

1997年、東京大学教養学部学士。1999年、東京大学総合文化研究科地域文化研究専攻修士。2004年、東京大学総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程修了。博士(学術)。琉球大学法文学部准教授、同教授、京都大学大学院文学研究科准教授を経て、現職は京都大学大学院文学研究科教授。専門分野：日本近現代史、日本政治史、東アジア国際関係史。主な著作：『岡倉天心と大川周明「アジア」を考えた知識人たち』(山川出版社、2011年)、『越境者の政治史 アジア太平洋における日本人の移民と植民』(名古屋大学出版会、2015年)、編著『公論と交際の東アジア近代』(東京大学出版会、2016年)。

■ 江 沛 / JIANG, Pei

南開大学歴史学院教授。南開大学中外文明交叉科学研究センター執行主任。中国史学会理事、中国現代史学会副会長、天津歴史学学会副理事長を兼任。2014年から2020年までは南開大学歴史学院院长を務めた。『中国近代交通社会史叢書』などの編集を主宰。日本大阪大学、広島大学、中国台湾政治大学の客員教授を歴任。専門分野：専攻は民国史、中国近代社会史。現在は首席専門家として国家社会科学基金・抗戰研究プロジェクトを主宰。主な著作：『戦国作派思潮研究』(天津人民出版社、2001年)、『国民党結構史論(下卷)』(中華書局、2011年『城市化進程研究』(中華民国專題史叢書之九)』(南京大学出版社、2015年)。

■ 福間良明 / FUKUMA, Yoshiaki

1969年、熊本市生まれ。1992年、同志社大学文学部社会学科新聞学専攻卒業。出版社勤務を経て、2003年、京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了。博士(人間・環境学)。香川大学経済学部准教授を経て、現在、立命館大学産業社会学部教授。専門分野：歴史社会学・メディア史。主な著作：『「戦争体験」の戦後史——世代・教養・イデオロギー』(中公新書、2009年)、『戦後日本、記憶の力学——「継承という断絶」と無難さの政治学』(作品社、2020年)、『司馬遼太郎の時代——歴史と大衆教養主義』(中公新書、2022年)。

■ 李基勳 / LEE, Kihoon

1991年ソウル大國史学科卒業、1993年同大学大学院國史学科修士、2005年同大学大学院博士。木浦大学史学科教授を経て、現在延世大学史学科教授。季刊『歴史批評』編集主幹、歴史問題研究所副所長。

専門分野：専攻分野は近代社会史及び文化史。

主な著作：「언니의 곡절 - 한국 근대 가족과 여자 어린이 노동」(『역사비평』141、2022年)、『무한경쟁의 수레바퀴: 1960-1970년대 학교와 학생』(서해문집、2018年)、『청년아 청년아우리 청년아: 근대 청년을 호명하다』(청년사、2014年)。

■ 安岡健一 / YASUOKA, Kenichi

2004年京都大学農学部生物資源経済学科卒業。2006年京都大学大学院農学研究科修士課程卒業。2009年京都大学大学院農学研究科博士課程指導認定退学。京都大学博士(農学)。現職は、大阪大学大学院人文学研究科准教授。

専門分野：日本近現代史、オーラルヒストリー。

主な著作：『「他者」たちの農業史』(京都大学学術出版会、2014年)、「共に生きる「仲間」を目指して」高谷幸編『多文化共生の実験室：大阪から考える』(青弓社、2022年)、「聞き取り／オーラルヒストリー」岩城卓二ほか編『論点・日本史学』(ミネルヴァ書房、2022年8月)。

■ 梁知恵 / YANG, Jihye

2021年漢陽大学大学院史学科博士修了。東北アジア歴史財団研究委員。

専門分野：韓国近現代の社会経済史、生態環境史専攻。

主な著作：'植民地期朝鮮における日本窒素の水力発電所建設と「開発難民」問題、日韓相互認識9、2019年。A Locked City: The Japanese Company Nitchitsu's Building of Hŭngnam, Seoul Journal of Japanese Studies 8, 2022年、Competing Memories of Mega-Dam Development in Colonial Korea: From Science to Disaster, Acta Koreana, 25-2, 2022年。

■ 陳紅民 / CHEN, Hongmin

山東省泰安市出身。歴史学博士(南京大学中国近現代史専攻)。浙江大学求是特聘教授。蔣介石と近代中国研究センター主任。博士課程指導教員。浙江省歴史学会副会長。1985年から2006年までは南京大学歴史学部に勤め(助教、講師、副教授、教授)、南京大学中華民国史研究センター副主任を務めた。2006年から現在に至って、浙江大学歴史学部(歴史研究科)に勤める。歴史学部主任、中国近現代史研究所所長を務めた。

専門分野：専攻は中華民国史、蔣介石と近代中国。『美国哈佛大学哈佛燕京図書館蔵蔣廷黻資料』など学術著書30点余りを出版。学術論文は150本余りを掲載。研究成果は省と国家教育部レベルの奨励に複数受賞。アメリカ、イギリス、イタリア、オーストラリア、日本、韓国などの国や、香港、マカオ、台湾などの地域で学術交流を行った。

主な著作：『函電里的人際關係与政治』生活・新知・読書三聯書店、2003年。『蔣介石の後半生』浙江大学出版社、2010年4月。『美国哈佛大学哈佛燕京図書館蔵蔣廷黻資料』(哈佛燕京図書館文献叢刊第九種)(24冊)広西師範大学出版社、2015年6月。「九一八事変後的胡漢民」『歴史研究』1986年第3号。「周辺の存在の国民党内派閥闘争に対する影響——胡漢民の政治主張を中心とする研究(1931-1936)」『周辺から見た20世紀中国』中国書店、2002年。「相異何其大——台湾時代蔣介石与胡適対彼此間交往的記録」『近代史研究』2011年第2号。「抗戦後期蔣介石对美国与中国共产党接触的忧懼和破壞：以『蔣介石日記』为中心的考察」『中共党史研究』2023年第1号。

金キョンテ 全南大学

8月8日、やや曇った空の下で第8回韓国・日本・中国における国史たちの対話の可能性「20世紀の戦争・植民地支配と和解はどのように語られてきたのか—教育・メディア・研究」が対面とオンラインで始まった。

早稲田大学に設けられた会場では一般参加者も席を埋め尽くした。初日は四つのセッションで構成され最初のセッションは村和明先生（東京大学）の司会で行われた。本格的な報告に先立ち、劉傑先生（早稲田大学）の開会挨拶と三谷博先生（東京大学名誉教授）の趣旨説明、発表討論及び参加者の自己紹介があった。劉傑先生は20世紀の戦争と植民地支配、和解が各国でこれまでどのように語られていたかについて過去に開催された「国史たちの対話」に基づき「冷静かつ落ち着いた議論を続けることができると期待している」とし、相手国の歴史認識に耳を傾ける機会になると強調した。

三谷先生は「未来のために」というキーワードをまず提示。国史たちの対話に関する企画が出た時から今回のテーマをどうしても試みたいと思っていたが、今になってようやく話せるようになったことを嬉しく思うと話された。続いて、このような大きな学術的な集いを立ち上げたきっかけについて説明して下さった。日本だけでなく、様々な国が歴史に関する対話を積み重ねていく中で、政府の対決政策により逆風が吹いたこともあったが、それでも歴史対話が再開されたということに意味があると話された。

第2から第4セッションは、それぞれ教育、メディア、研究をテーマにした三つの発表と相互討論で構成。2番目の「教育」セッションは南基正先生（ソウル大学）の司会で進行された。最初は金泰雄先生（ソウル大学）の「解放後における韓国人知識人層の脱植民地議論と歴史叙事構成の変化」だった。この発表では、韓国における解放（1945年8月15日の独立）後の歴史教科書の記述の変遷過程を説明しながら、韓国の国内外の政治と歴史教科書の内容との関係を緻密に追跡した。唐小兵先生（華東師範大学）は「歴史をめぐる記憶の戦争と著述の倫理—20世紀半ばの中国に関する『歴史の戦い』」と題して長春包圍戦に対する相反する記憶及び評価を紹介し、歴史と啓蒙との緊張関係という問題を提示した。

塩出浩之先生（京都大学）は「日本の歴史教育は戦争と植民地支配をどう伝えてきたか—教科書と教育現場から考える」と題して日本が戦後において教科書を制作する過程で経験した変化と変化のきっかけについて説明したが、特に教科書が教育現場でどのように認識され使用されたかについての部分や、現在進行形の課題（加害者と被害者としての両面性等）はこれまで聞くことができなかった内容であり、韓国と中国の研究者にとって大いに参考になった。

続く討論では、日本の教育現場で働いている教師の方々の課題を聞くことができた。新しい歴史総合科目をどのように教えるか、歴史教育において史料の重要

性が非常に大きいにもかかわらず現場で集中的に扱うことが難しいという（受験等による）現状等が挙げられた。韓国と中国も似たような経験や課題があるという事実を共有することができた。記憶が啓蒙や共感のために（厳密な歴史的事実と異なるかもしれない方向で）使われる事例があり、個人の多様な記録のような（やはり歴史的事実とは異なる可能性があり得る）資料が注目されている問題も議論されたが、必ずしもそれを否定的に捉える必要はないとの意見が少なくなかった。これは今回の「対話」の主要な論点の一つだった。

第3セッションは「メディア」をテーマに李恩民先生（桜美林大学）が司会を担当した。江沛先生（南開大学）は「保身、愛国と屈服：ある偽満州国の『協力者』の心理状態に対する考察」で、中国における日中戦争は国家対国家の戦争として明確に記録されているが、果たして当時中国に住んでいた人々もそうだったのかという点について、ある人物の日記を通して考察した。当時の人々には生存が重要であり、様々な顔（反国と愛国）を持った人も存在していたということであった。歴史学者は弱者である民衆に目を向け、人間の尊厳を尊重すべきだと指摘した。

福岡良明先生（立命館大学）は「戦後日本のメディア文化と『戦争の語り』の変容」で映画を中心にメディアが戦争を語る手法の変化の流れと時代的背景を同時に説明した。被害と加害、その両方の立場があり得ることへの葛藤を詳しく紹介し、このような葛藤が薄れている現在、そしてその中間の市民社会の間で歴史研究者がどのような役割を果たすべきかを考えなければならないという課題を投げかけた。

李基勳先生（延世大学）は「現代韓国メディアの植民地、戦争経験の形象化とその影響—映画、ドラマを中心に」というテーマで韓国の戦争映画を分析した。韓国において植民地と戦争は異なる経験であった。しかし、韓国が国民国家を形成する過程でそれらが一緒に語られることもあり、その過程で善と悪が二項対立する典型的なイメージが作られる様相、そして21世紀に近づく変化が発生する様相を映画を通じて示した。

第4セッションのテーマは「研究」。宋志勇先生（南開大学）の司会でこの日の最後のセッションが行われた。安岡健一先生（大阪大学）は「『わたし』の歴史、『わたしたち』の歴史—色川大吉の『自分史』論を手がかりに」で伝統的な歴史認識の「外部」にいる一般市民の歴史認識、そしてそれに関する歴史学の認識をテーマとした。「私の歴史」を書くことでステレオタイプの歴史に飲み込まれなかった物語が残ることもある。これをどのように生かすかを考えなければならず、これこそ歴史学が市民社会に貢献できる部分だという意見を提示した。

梁知恵先生（東北亜歴史財団）は「『発展』を越える、新しい歴史叙述の可能性：韓国における植民地期経済史研究の行方」と題して、まず韓国における植民地時代の経済史研究のいくつかの方向性（植民地収奪論、植民地近代化論、そして植民地近代性論）について説明した。21世紀に入り、既存の研究動向の速度が下がり、学術的な議論を越えた強烈な政治的攻撃が登場し危機に直面しているが、環境と生態のような批判的な代案が登場しているという事実希望を示す研究だった。

陳紅民先生（浙江大学）は「民国期の中国人は『日本軍閥』という概念をどのように認識したか」で、用語に付与される歴史性について問題提起をしながら、「日本軍閥」という用語に注目した。我々が知っている歴史用語の意味と当時の意味は異なることもあり、時代、発言の主体、陣営によって異なる文脈で使われたりしたという事実を想起しなければならないと述べた。データベースの構築と活用、ビッグデータの活用等が活発化している現在の学界で、このような問題意識に基づいた研究が積極的に試みられるものと期待される。

最後のセッションの討論では主に（歴史学者ではなく）個人の歴史叙述に関する問題（歴史と個人史の衝突可能性）、個人の歴史叙述に対する歴史学者の介入の仕方等をめぐる3カ国の研究者たちの課題について議論が交わされた。意見が一致したわけではなかったが、個人の歴史、自分史の歴史叙述に対する肯定的な意見は興味深かった。

最後に劉傑先生が初日の論点をまとめてくださった。3カ国が現代に経験してきた歴史的な文脈が異なるため、各国で戦後の歴史像を作る際に異なる部分が現れたということ、この異なる文脈に基づいた様々な模索が（肯定的な方向にも）進んでいるということ、しかしこの異なる歴史観の間の距離をどう縮めるかという問題が残っているということだった。そして歴史教育において、いわゆる東アジアの新しい歴史像をどのように作るかについて、かなり共通した部分（日本の歴史総合、韓国の東アジア史、中国上海での試み）が見られるという点も取り上げた。このような状況において歴史家はどのような役割を果たすべきか、今回の発表では政治と歴史、歴史と道徳、史料の問題が論点として登場したが、そのような問題意識に基づいた努力が維持できれば、歴史和解は可能だという展望が提示された。

8月9日は総合討論が行われた。議論を始める前に三谷先生のコメントがあった。「パブリック」をどのように歴史につなげるかについての課題を個人的な研究経験に照らして丁寧に聞かせてくださった。すなわち、研究テーマによっては史料が存在しないこともあり得るが、史料に限界がある状況で物語を作って良いかというジレンマに注意してほしいという要望だった。

討論は二つのセッションに分けて行われた。第5セッションは鄭淳一先生（高麗大学）が司会を務めた。このセッションでは「3カ国のそれぞれ異なる文脈の被害者の敘事について」「日本の50～70年代のメディア文化は現代の代案になり得るのか」「満州の『協力者』に対する解釈の平面性」（金憲柱先生（国立ハンバット大学））、「満州国で作った映画はどの国の映画として見るべきか」（袁慶豊先生（中国伝媒大学））、「個人の目で見た歴史に関する事例（イギリスの鉱山経営者ネイサン）と戦争と植民地支配の多元的理解の可能性」「韓国と日本が政治的に対立していた時期に開かれた日韓共同展示から見られた可能性」（吉井文美先生（国立歴史民俗博物館））、「抗日ドラマの生成ロジックと伝播方式、そして一般人への影響」（史博公先生（中国伝媒大学））等の指定討論者からの質疑があった。

新しい教科書に対する議論も活発に行われ、歴史総合の場合誰が教えるか等現場で直面する様々な課題が残っており、内容に対する批判もあるが、以前の問題

を乗り越えながらも学生たちが日本の歴史を好きになるよう努力してきたという事例が紹介された。三谷先生は世界史と日本史を融合することによってグローバル化と隣国との関係を重視するという要素がカットされる等の限界があったため、今後はきちんとした指導要領を作るために努力しなければならないという点を補足説明した。

フロアからも有意義なコメントがあった。川崎剛氏（元朝日新聞）がマスコミに掲載される歴史的記事が若い記者によって作成されるため問題もあり得るとの事例を紹介した後、それが事実とはいえ、大手マスコミの記者こそ大学で教育を受けているので教育界の責任がないとは言い切れないこと、若い記者たちは近現代史の主要な事件を経験することができなかったため限界がないわけではない点等に言及した。そして若い記者たちは困難を経験しながら記事を作成するしかないが、今後「関東大震災100周年」等多様な記事が配信されるので、学界も共に努力してほしいという要請で発言を結んだ。これは今回の対話の論点とも合致するコメントだった。歴史研究者はプロフェッショナルとしての自らの素養を守りつつも、新しい時代において求められる役割も担うべきであり、そのため様々な「集団」と意思疎通できなければならないということだ。

第6セッションは彭浩先生（大阪公立大学）の司会で行われた。「蒋介石日記の真実性について」（張曉剛先生（長春師範大学））、「生態史が国民国家単位の歴史を越えられるのか」「共同体内の悪の陳腐さに対する省察と残された宿題」「歴史教育は『なぜ』、『どのように』を越え『どこへ』という方向も提示しなければならない」「歴史学の未来に関する議論が必要であり、それは人間への尊重を込めたものでなければならない」（金濤先生（ソウル大学））、「国家の歴史と地方（地域）の歴史との関係」「地方でプロフェッショナルな歴史学者を育成する基盤に関する問題」「修学旅行を例に挙げた地方の歴史（教育）と観光のジレンマ」（平山昇先生（神奈川大学））等の指定討論者による発言以外にも、「中国の学生たちの近代化に対する認識問題の原因」（市川智生先生（沖縄国際大学））と史料批判を教材化する必要性に対する現場の教師の方々からの要請もあった。

最後に、趙琬先生（高麗大学名誉教授）の閉会挨拶と今西淳子渥美国際交流財団常務理事の振り返りの時間が設けられた。趙琬先生は久しぶりに開催された対面会議で比較的十分な討論時間が確保されただけに、最近では最も満足できる会議になったと評価し、2025年の「第2次世界大戦終戦80周年」を控え、3カ国でそれぞれ「光復」、「勝戦」、「終戦」という異なる用語と概念で理解されているこの事件に対し、それぞれ歴史的評価が行われるだろうが、「国史たちの対話」が役割を果たすことを期待すると述べられた。今西常務理事はこれまでの「国史たちの対話」を振り返りながら、来年のタイでの再会を約束した。

3カ国の研究者たちは各国が直面している現状とその背景からもたらされる各国の課題を聞かせてくれた。3カ国は20世紀の激動する国際情勢の中で東アジアという同じ地域に存在しつつも異なる困難を経験した。研究者はそれをどのように評価し記録するかについて葛藤し、それも歴史の研究対象になってきた。自国の歴史に対する評価と解釈をめぐる議論は今なお続いており、「解決」されていない部分も多いことが今回分かった。しかし、希望も見出せた。葛藤と課題の

中には共通するものもあれば、他国との関係の中で発生したものもあった。自国史での議論と悩みを共有することから3カ国の歴史対話を合理的かつ肯定的な方向へ導く糸口を見出すこともできるという期待が生まれた。

筆者は中学・高校の歴史教師を養成する歴史教育科に在職している。今回の対話は筆者本人にも大いに勉強になった。この経験を生かして生徒、教師と共に努力していきたい。今回の対話では日本の教育現場の方々と話を交わす機会もあった。研究者たちと同様、日本の教師の方々もやはり韓国の教師と似た悩みを抱えていた。研究者だけでなく韓国と日本、そして中国の教師と研究者たちが共に意思疎通する場がより多く用意されるよう努力しなければならない。

最も多く取り上げられた論点は、個人の歴史と歴史教育現場に対するものだった。これは急変する時代、来たる未来に歴史学が担うべき役割への課題が込められたものだった。反知性主義の蔓延、AIの発展、出生率の低下等、急変する時代に「もはや歴史学の役割は終わった」と嘆く歴史学者たちもいる。歴史学はどのような役割を果たすべきで、何ができるのだろうか。歴史学は従来の研究手法も維持しつつ、新しい時代の要求にも答えていかなければならない。

個人的には金滸先生の提言が記憶に残る。「未来の歴史学は相互の侮辱を止め、『人間に対する尊重』を抱え込むべき」「仁義の持つ排他性を警戒し、不仁と不義に対する感覚を鍛え、過度な義と偏狭な仁を制御しよう」。私は最近見た映画と本を思い出した。有名な「エブリシング・エブリウェア・オール・アット・ワンス」は互いを慰め合い、他人に親切に接しようというメッセージを伝え共感を呼んだ。『なぜ魚は存在しないのか』という本で、ルルー・ミラーは「価値のない生命はない。我々の人生は全て大切だ」と叫んでいる。時代が望んでいるのはひょっとしてこのような考え方ではないか。そしてそれは、歴史学の新しい役割の一つになり得るものではないか。

歴史学が長年築いてきた学問としての基本原則を守りながらも、多様な可能性、方法論に門戸を開くならば、対決して誰かに（歴史の対象であれ、現在の隣人であれ）勝たなければならないという義務感を振り払うことができれば、そして学問の親切さを広めれば、歴史学は新しい生命力を持つことができるのではないか。今回の対話を通じてこのような期待が膨らんだ。

（金キョンテ「第8回国史たちの対話『20世紀の戦争・植民地支配と和解はどのように語られてきたのか—教育・メディア・研究』レポート」より転載）

■ 金キョンテ (キム・キョンテ) KIM Kyongtae

韓国浦項市生まれ。韓国史専攻。高麗大学韓国史学科博士課程中の2010年～2011年、東京大学大学院日本文化研究専攻（日本史学）外国人研究生。2014年高麗大学韓国史学科で博士号取得。韓国学中央研究院研究員、高麗大学人文力量強化事業団研究教授を経て、全南大学歴史教育科助教授。戦争の破壊的な本性と戦争が荒らした土地にも必ず生まれ育つ平和の歴史に関心を持っている。

主な著作：壬辰戦争期講和交渉研究（博士論文）、虚勢と妥協 - 壬辰倭乱をめぐる三国の協商 - （東北亜歴史財団、2019）



第8回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性
 円卓会議参加者リスト

| | 氏名 (ローマ字) | 氏名 (日本語) | 氏名 (韓国語) | 氏名 (中国語) | 所属 (日本語) |
|-------------------|--------------------|--------------------|----------------|--------------------|---------------|
| 発表者 | | | | | |
| 1 | KIM Taewoong | 金 泰雄 | 김태웅 | 金 泰雄 | ソウル大学 |
| 2 | TANG Xiaobing | 唐小兵 | 탕샤오빙 | 唐 小兵 | 華東師範大学 |
| 3 | JIANG Pei | 江 沛 | 장페이 | 江 沛 | 南開大学 |
| 4 | FUKUMA Yoshiaki | 福間良明 | 후쿠마 요시아키 | 福間良明 | 立命館大学 |
| 5 | LEE Kihoon | 李 基勳 | 이기훈 | 李 基勳 | 延世大学 |
| 6 | YASUOKA Kenichi | 安岡健一 | 야스오카 겐이치 | 安岡健一 | 大阪大学 |
| 7 | YANG Jihye | 梁 知恵 | 양지혜 | 梁 知恵 | 東北亜歴史財団 |
| 8 | CHEN Hongmin | 陳 紅民 | 천홍민 | 陈 紅民 | 浙江大学 |
| 発表者 / 実行委員 | | | | | |
| 9 | SHIODE Hiroyuki | 塩出浩之 | 시오데 히로유키 | 盐出浩之 | 京都大学 |
| 指定討論者 | | | | | |
| 10 | HIRAYAMA Noboru | 平山 昇 | 히라야마 노보루 | 平山 升 | 神奈川大学 |
| 11 | KIM Ho | 金 滸 | 김호 | 金 滸 | ソウル大学 |
| 12 | KIM Hunjoo | 金 憲柱 | 김헌주 | 金 宪柱 | 国立ハンバット大学 |
| 13 | SHI Bogong | 史 博公 | 시보공 | 史 博公 | 中国伝媒大学 |
| 14 | YOSHII Fumi | 吉井文美 | 요시이 후미 | 吉井文美 | 国立歴史民俗博物館 |
| 15 | YUAN Qingfeng | 袁 慶豊 | 위안칭펑 | 袁 庆丰 | 中国伝媒大学 |
| 16 | ZHANG Xiaogang | 張 曉剛 | 장샤오강 | 张 晓刚 | 長春師範大学 |
| 自由討論パネリスト | | | | | |
| 17 | ASANO Toyomi | 浅野豊美 | 아사노 도요미 | 浅野丰美 | 早稲田大学 |
| 18 | DUAN Ruicong | 段 瑞聡 | 완루이충 | 段 瑞聡 | 慶応義塾大学 |
| 19 | ICHIKAWA Tomoo | 市川 智生 | 이치카와 토모오 | 市川智生 | 沖繩国際大学 |
| 20 | Justin Kyle Aukema | ジャスティン カエル アウケマ | 저스틴 카일 아우케마 | Justin Kyle Aukema | 大阪公立大学 |
| 21 | KAWASAKI Takeshi | 川崎 剛 | 가와사키 다케시 | 川崎 剛 | 早稲田大学 |
| 22 | KAWASHIMA Keiichi | 川島啓一 | 가와시마 케이이치 | 川島啓一 | 同志社中学校・高等学校 |
| 23 | KIM Hyunsun | 金 賢善 | 김현선 | 金 贤善 | 明和大学 |
| 24 | MURAI Ryota | 村井良太 | 무라이 료타 | 村井良太 | 駒沢大学 |
| 25 | OKUBO Takeharu | 大久保健晴 | 오쿠보 다케하루 | 大久保健晴 | 慶応義塾大学 |
| 26 | TAMAKI Kei | 田巻 慶 | 다마키 케이 | 田巻 庆 | 芝浦工業大学柏中学高等学校 |
| 実行委員 | | | | | |
| 27 | Chen Lu | 陳 璐 | 첸루 | 陈 璐 | 早稲田大学 |
| 28 | Cho Kwang | 趙 珧 | 조광 | 赵 珧 | 高麗大学名誉教授 |
| 29 | Chong Soonil | 鄭 淳一 | 정순일 | 郑 淳一 | 高麗大学 |
| 30 | Kim Kyongtae | 金 キョンテ | 김경태 | 金 囧泰 | 全南大学 |
| 31 | Li Enmin | 李 恩民 | 리엔민 | 李 恩民 | 桜美林大学 |
| 32 | Liu Jie | 劉 傑 | 류지에 | 刘 杰 | 早稲田大学 |
| 33 | Mitani Hiroshi | 三谷 博 | 미타니 히로시 | 三谷 博 | 東京大学名誉教授 |
| 34 | MURA Kazuaki | 村 和明 | 무라 가즈아키 | 村 和明 | 東京大学 |
| 35 | Nam Kijeong | 南 基正 | 남기정 | 南 基正 | ソウル大学 |
| 36 | Peng Hao | 彭 浩 | 펑하오 | 彭 浩 | 大阪公立大学 |
| 37 | Song Zhiyong | 宋 志勇 | 송지용 | 宋 志勇 | 南開大学 |
| 同時通訳 | | | | | |
| 38 | Ding Li | 丁 莉 | 딩리 | 丁 莉 | 北京大学 |
| 39 | Song Gang | 宋 剛 | 송강 | 宋 剛 | 北京外国語大学 |
| 40 | Lee Hyeri | 李 ヘリ | 이혜리 | 李 惠利 | 韓国外国語大学 |
| 41 | Ahn Younghee | 安 ヨンヒ | 안영희 | 安 暎姬 | 韓国外国語大学 |
| 42 | Jin Danshi | 金 丹実 | 김단실 | 金 丹实 | 通訳翻訳者 |
| 43 | Piao Xian | 朴 賢 | 박현 | 朴 贤 | 京都大学 |
| 翻訳 | | | | | |
| 44 | Hong Yongil | 洪 龍日 | 홍용일 | 洪 龙日 | 東京大学 |
| 45 | Yu Ning | 于 寧 | 유닝 | 于 宁 | 東京大学 |
| 46 | Yun Jae-un | 尹 在彦 | 윤재언 | 尹 在彦 | 立教大学 |
| 事務局 | | | | | |
| 47 | Imanishi Junko | 今西淳子 | 이마니시 준코 | 今西淳子 | 渥美財団 |
| 48 | Tsunoda Eiichi | 角田英一 | 쓰노다 에이이치 | 角田英一 | 渥美財団 |
| 49 | Nagai Ayumi | 長井亜弓 | 나가이 아유미 | 长井亚弓 | 渥美財団 |
| 50 | Miyake Aya | 三宅 綾 | 미야케 아야 | 三宅 綾 | 渥美財団 |

SGRA レポート バックナンバーのご案内

- SGRA レポート01 設立記念講演録 「21世紀の日本とアジア」 船橋洋一 2001. 1. 30 発行
- SGRA レポート02 CISV国際シンポジウム講演録 「グローバル化への挑戦：多様性の中に調和を求めて」
今西淳子、高 偉俊、F. マキト、金 雄熙、李 來賛 2001. 1. 15 発行
- SGRA レポート03 渥美奨学生の集い講演録 「技術の創造」 畑村洋太郎 2001. 3. 15 発行
- SGRA レポート04 第1回フォーラム講演録 「地球市民の皆さんへ」 関 啓子、L. ビッヒラー、高 熙卓 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート05 第2回フォーラム講演録 「グローバル化のなかの新しい東アジア：経済協力をどう考えるべきか」
平川 均、F. マキト、李 鋼哲 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート06 投稿 「今日の留学」「はじめの一步」 工藤正司 今西淳子 2001. 8. 30 発行
- SGRA レポート07 第3回フォーラム講演録 「共生時代のエネルギーを考える：ライフスタイルからの工夫」
木村建一、D. バート、高 偉俊 2001. 10. 10 発行
- SGRA レポート08 第4回フォーラム講演録 「IT 教育革命：ITは教育をどう変えるか」
白井建彦、西野篤夫、V. コストブ、F. マキト、J. スリスマンティオ、蔣 恵玲、楊 接期、
李 來賛、斎藤信男 2002. 1. 20 発行
- SGRA レポート09 第5回フォーラム講演録 「グローバル化と民族主義：対話と共生をキーワードに」
ペマ・ギャルポ、林 泉忠 2002. 2. 28 発行
- SGRA レポート10 第6回フォーラム講演録 「日本とイスラーム：文明間の対話のために」
S. ギュレチ、板垣雄三 2002. 6. 15 発行
- SGRA レポート11 投稿 「中国はなぜWTOに加盟したのか」 金香海 2002. 7. 8 発行
- SGRA レポート12 第7回フォーラム講演録 「地球環境診断：地球の砂漠化を考える」
建石隆太郎、B. プレンサイン 2002. 10. 25 発行
- SGRA レポート13 投稿 「経済特区：フィリピンの視点から」 F. マキト 2002. 12. 12 発行
- SGRA レポート14 第8回フォーラム講演録 「グローバル化の中の新しい東アジア」 + 宮澤喜一元総理大臣をお迎えして
フリーディスカッション
平川 均、李 鎮奎、ガト・アルヤ・プートゥラ、孟 健軍、B. ヴィリエガス 日本語版2003. 1. 31 発行、
韓国語版2003. 3. 31 発行、中国語版2003. 5. 30 発行、英語版2003. 3. 6 発行
- SGRA レポート15 投稿 「中国における行政訴訟—請求と処理状況に対する考察—」 呉東鎬 2003. 1. 31 発行
- SGRA レポート16 第9回フォーラム講演録 「情報化と教育」 苑 復傑、遊間和子 2003. 5. 30 発行
- SGRA レポート17 第10回フォーラム講演録 「21世紀の世界安全保障と東アジア」
白石 隆、南 基正、李 恩民、村田晃嗣 日本語版2003. 3. 30 発行、英語版2003. 6. 6 発行
- SGRA レポート18 第11回フォーラム講演録 「地球市民研究：国境を越える取り組み」 高橋 甫、貫戸朋子 2003. 8. 30 発行
- SGRA レポート19 投稿 「海軍の誕生と近代日本—幕末期海軍建設の再検討と『海軍革命』の仮説」 朴 榮濬
2003. 12. 4 発行
- SGRA レポート20 第12回フォーラム講演録 「環境問題と国際協力：C O P 3 の目標は実現可能か」
外岡豊、李海峰、鄭成春、高偉俊 2004. 3. 10 発行
- SGRA レポート21 日韓アジア未来フォーラム 「アジア共同体構築に向けての日本及び韓国の役割について」2004. 6. 30 発行
- SGRA レポート22 渥美奨学生の集い講演録 「民族紛争—どうして起こるのか どう解決するか」 明石康 2004. 4. 20 発行
- SGRA レポート23 第13回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか」
宮島喬、イコ・プラムティオノ 2004. 2. 25 発行
- SGRA レポート24 投稿 「1945年のモンゴル人民共和国の中国に対する援助：その評価の歴史」 フスレ 2004. 10. 25 発行
- SGRA レポート25 第14回フォーラム講演録 「国境を越えるE-Learning」
斎藤信男、福田収一、渡辺吉鎔、F. マキト、金 雄熙 2005. 3. 31 発行
- SGRA レポート26 第15回フォーラム講演録 「この夏、東京の電気は大丈夫？」 中上英俊、高 偉俊 2005. 1. 24 発行
- SGRA レポート27 第16回フォーラム講演録 「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」
竹田いさみ、R. エルドリッチ、朴 榮濬、渡辺 剛、伊藤裕子 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート28 第17回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか- 地球市民の義務教育-」
宮島 喬、ヤマガチ・アナ・エリーザ、朴 校熙、小林宏美 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート29 第18回フォーラム・第4回日韓アジア未来フォーラム講演録 「韓流・日流：東アジア地域協力における
ソフトパワー」 李 鎮奎、林 夏生、金 智龍、道上尚史、木宮正史、李 元徳、金 雄熙 2005. 5. 20 発行

- SGRA レポート30 第19回フォーラム講演録 「東アジア文化再考－自由と市民社会をキーワードに－」
宮崎法子、東島 誠 2005. 12. 20 発行
- SGRA レポート31 第20回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合：雁はまだ飛んでいるか」
平川 均、渡辺利夫、トラン・ヴァン・トウ、範 建亭、白 寅秀、エンクバヤル・シャグダル、F. マキト
2006. 2. 20 発行
- SGRA レポート32 第21回フォーラム講演録 「日本人は外国人をどう受け入れるべきか－留学生－」
横田雅弘、白石勝己、鄭仁豪、カンピラバープ・スネート、王雪萍、黒田一雄、大塚晶、徐向東、
角田英一 2006. 4. 10 発行
- SGRA レポート33 第22回フォーラム講演録 「戦後和解プロセスの研究」 小菅信子、李 恩民 2006. 7. 10 発行
- SGRA レポート34 第23回フォーラム講演録 「日本人と宗教：宗教って何なの？」
島蘭 進、ノルマン・ヘイヴンズ、ランジャンナ・ムコパディヤーヤ、ミラ・ゾンターク、
セリム・ユジェル・ギュレチ 2006. 11. 10 発行
- SGRA レポート35 第24回フォーラム講演録 「ごみ処理と国境を越える資源循環～私が分別したごみはどこへ行くの？～」
鈴木進一、間宮 尚、李 海峰、中西 徹、外岡 豊 2007. 3. 20 発行
- SGRA レポート36 第25回フォーラム講演録 「ITは教育を強化できるか」
高橋富士信、藤谷哲、楊接期、江蘇蘇 2007. 4. 20 発行
- SGRA レポート37 第1回チャイナ・フォーラム in 北京講演録 「パネルディスカッション『若者の未来と日本語』」
池崎美代子、武田春仁、張 潤北、徐 向東、孫 建軍、朴 貞姫 2007. 6. 10 発行
- SGRA レポート38 第6回日韓フォーラム in 葉山講演録 「親日・反日・克日：多様化する韓国の対日観」
金 範洙、趙 寛子、玄 大松、小針 進、南 基正 2007. 8. 31 発行
- SGRA レポート39 第26回フォーラム講演録 「東アジアにおける日本思想史～私たちの出会いと将来～」
黒住 真、韓 東育、趙 寛子、林 少陽、孫 軍悦 2007. 11. 30 発行
- SGRA レポート40 第27回フォーラム講演録 「アジアにおける外来種問題～ひとの生活との関わりを考える～」
多紀保彦、加納光樹、プラチャー・ムシカシントーン、今西淳子 2008. 5. 30 発行
- SGRA レポート41 第28回フォーラム講演録 「いのちの尊厳と宗教の役割」
島蘭進、秋葉悦子、井上ウイマラ、大谷いづみ、ランジャンナ・ムコパディヤーヤ 2008. 3. 15 発行
- SGRA レポート42 第2回チャイナ・フォーラム in 北京&新疆講演録 「黄土高原緑化協力の15年－無理解と失敗から
相互理解と信頼へ－」 高見邦雄 日本語版、中国語版 2008. 1. 30 発行
- SGRA レポート43 渥美奨学生の集い講演録 「鹿島守之助とパン・アジア主義」 平川均 2008. 3. 1 発行
- SGRA レポート44 第29回フォーラム講演録 「広告と社会の複雑な関係」 関沢 英彦、徐 向東、オリガ・ホメンコ
2008. 6. 25 発行
- SGRA レポート45 第30回フォーラム講演録 「教育における『負け組』をどう考えるか～
日本、中国、シンガポール～」 佐藤香、山口真美、シム・チュン・キャット 2008. 9. 20 発行
- SGRA レポート46 第31回フォーラム講演録 「水田から油田へ：日本のエネルギー供給、食糧安全と地域の活性化」
東城清秀、田村啓二、外岡 豊 2009. 1. 10 発行
- SGRA レポート47 第32回フォーラム講演録 「オリンピックと東アジアの平和繁栄」
清水 諭、池田慎太郎、朴 榮濬、劉傑、南 基正 2008. 8. 8 発行
- SGRA レポート48 第3回チャイナ・フォーラム in 延辺&北京講演録 「一燈やがて万燈となる如く－
アジアの留学生と生活を共にした協会の50年」 工藤正司 日本語版、中国語版 2009. 4. 15 発行
- SGRA レポート49 第33回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合が格差を縮めるか」
東 茂樹、平川 均、ド・マン・ホーン、フェルディナンド・C・マキト 2009. 6. 30 発行
- SGRA レポート50 第8回日韓アジア未来フォーラム講演録 「日韓の東アジア地域構想と中国観」
平川 均、孫 洌、川島 真、金 湘培、李 鋼哲 日本語版、韓国語 Web 版 2009. 9. 25 発行

- SGRA レポート51 第35回フォーラム講演録「テレビゲームが子どもの成長に与える影響を考える」
大多和直樹、佐々木 敏、渋谷明子、ユ・ティ・ルイン、江 蘇蘇 2009. 11. 15 発行
- SGRA レポート52 第36回フォーラム講演録「東アジアの市民社会と21世紀の課題」
宮島 喬、都築 勉、高 熙卓、中西 徹、林 泉忠、ブ・ティ・ミン・チイ、
劉 傑、孫 軍悦 2010. 3. 25 発行
- SGRA レポート53 第4回チャイナ・フォーラム in 北京&上海講演録「世界的課題に向けていま若者ができること〜
TABLE FOR TWO〜」近藤正晃ジェームス 2010. 4. 30 発行
- SGRA レポート54 第37回フォーラム講演録「エリート教育は国に『希望』をもたらすか：
東アジアのエリート高校教育の現状と課題」玄田有史 シム・チュンキョット
金 範洙 張 健 2010. 5. 10 発行
- SGRA レポート55 第38回フォーラム講演録「Better City, Better Life 〜東アジアにおける都市・
建築のエネルギー事情とライフスタイル〜」木村建一、高 偉俊、
Mochamad Donny Koerniawan、Max Maquito、Pham Van Quan、
葉 文昌、Supreedee Rittironk、郭 榮珠、王 劍宏、福田展淳 2010. 12. 15 発行
- SGRA レポート56 第5回チャイナ・フォーラム in 北京&フフホト講演録「中国の環境問題と日中民間協力」
第一部（北京）：「北京の水問題を中心に」高見邦雄、汪 敏、張 昌玉
第二部（フフホト）：「地下資源開発を中心に」高見邦雄、オンドロナ、ブレンサイン
2011. 5. 10 発行
- SGRA レポート57 第39回フォーラム講演録「ポスト社会主義時代における宗教の復興」井上まどか、
ティムール・ダダバエフ、ゾンターク・ミラ、エリック・シッケタンツ、島 蘭 進、陳 継東
2011. 12. 30 発行
- SGRA レポート58 投稿 「鹿島守之助とパン・アジア論への一試論」平川 均 2011. 2. 15 発行
- SGRA レポート59 第10回日韓アジア未来フォーラム講演録「1300年前の東アジア地域交流」
朴 亨國、金 尚泰、胡 潔、李 成制、陸 載和、清水重敦、林 慶澤 2012. 1. 10 発行
- SGRA レポート60 第40回フォーラム講演録「東アジアの少子高齢化問題と福祉」
田多英範、李 蓮花、羅 仁淑、平川 均、シム・チュンキョット、F・マキト 2011. 11. 30 発行
- SGRA レポート61 第41回SGRAフォーラム講演録「東アジア共同体の現状と展望」恒川恵市、黒柳米司、朴 榮濬、
劉 傑、林 泉忠、ブレンサイン、李 成日、南 基正、平川 均 2012. 6. 18 発行
- SGRA レポート62 第6回チャイナ・フォーラム in 北京&フフホト講演録
「Sound Economy 〜私がミナマタから学んだこと〜」柳田耕一
「内モンゴル草原の生態系：鉱山採掘がもたらしている生態系破壊と環境汚染問題」郭 偉
2012. 6. 15 発行
- SGRA レポート64 第43回SGRAフォーラム in 蓼科 講演録「東アジア軍事同盟の課題と展望」
朴 榮濬、渡辺 剛、伊藤裕子、南 基正、林 泉忠、竹田いさみ 2012. 11. 20 発行
- SGRA レポート65 第44回SGRAフォーラム in 蓼科 講演録「21世紀型学力を育むフューチャースクールの戦略と課題」
赤堀侃司、影戸誠、曹圭福、シム・チュンキョット、石澤紀雄 2013. 2. 1 発行
- SGRA レポート66 渥美奨学生の集い講演録「日英戦後和解（1994-1998年）」（日本語・英語・中国語）沼田貞昭
2013. 10. 20 発行
- SGRA レポート67 第12回日韓アジア未来フォーラム講演録「アジア太平洋時代における東アジア新秩序の模索」
平川 均、加茂具樹、金 雄熙、木宮正史、李 元徳、金 敬黙 2014. 2. 25 発行
- SGRA レポート68 第7回SGRAチャイナ・フォーラム in 北京講演録「ボランティア・志願者論」
（日本語・中国語・英語）宮崎幸雄 2014. 5. 15 発行
- SGRA レポート69 第45回SGRAフォーラム講演録「紛争の海から平和の海へー東アジア海洋秩序の現状と展望ー」
村瀬信也、南 基正、李 成日、林 泉忠、福原裕二、朴 榮濬 2014. 10. 20 発行

- SGRA レポート70 第46回 SGRA フォーラム講演録「インクルーシブ教育：子どもの多様なニーズにどう応えるか」
荒川 智、上原芳枝、ヴィラーク ヴィクトル、中村ノーマン、崔 佳英 2015. 4. 20 発行
- SGRA レポート71 第47回 SGRA フォーラム講演録「科学技術とリスク社会－福島第一原発事故から考える科学技術
と倫理－」崔 勝媛、島藺 進、平川秀幸 2015. 5. 25 発行
- SGRA レポート72 第8回チャイナ・フォーラム講演録「近代日本美術史と近代中国」
佐藤道信、木田拓也 2015. 10. 20 発行
- SGRA レポート73 第14回日韓アジア未来フォーラム、第48回SGRA フォーラム講演録「アジア経済のダイナミズム－
物流を中心に」李 鎮奎、金 雄熙、榎原英資、安 秉民、ドマン ホーン、李 鋼哲 2015. 11. 10 発行
- SGRA レポート74 第49回SGRA フォーラム講演録：円卓会議「日本研究の新しいパラダイムを求めて」
劉 傑、平野健一郎、南 基正 他15名 2016. 6. 20 発行
- SGRA レポート75 第50回SGRA フォーラム in 北九州講演録「青空、水、くらしー環境と女性と未来に向けて」
神崎智子、斉藤淳子、李 允淑、小林直子、田村慶子 2016. 6. 27 発行
- SGRA レポート76 第9回SGRA チャイナ・フォーラム in フフホト&北京講演録「日中200年－文化史からの再検討」
劉 建輝 2020. 6. 18 発行
- SGRA レポート77 第15回日韓アジア未来フォーラム講演録「これからの日韓の国際開発協力－共進化アーキテクチャ
の模索」孫赫相、深川由紀子、平川均、フェルディナンド・C・マキト 2016. 11. 10 発行
- SGRA レポート78 第51回SGRA フォーラム講演録「今、再び平和について－平和のための東アジア知識人連帯を考え
る－」南基正、木宮正史、朴栄濬、宋均營、林泉忠、都築勉 2017. 3. 27 発行
- SGRA レポート79 第52回SGRA フォーラム講演録「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性(1)」
劉傑、趙珧、葛兆光、三谷博、八百啓介、橋本雄、松田麻美子、徐静波、鄭淳一、金キョンテ
2017. 6. 9 発行
- SGRA レポート80 第16回日韓アジア未来フォーラム講演録「日中韓の国際開発協力－新たなアジア型モデルの模索－」
金雄熙、李恩民、孫赫相、李鋼哲 2017. 5. 16 発行
- SGRA レポート81 第56回SGRA フォーラム講演録「人を幸せにするロボット－人とロボットの共生社会をめざして第
2回－」稲葉雅幸、李周浩、文景楠、瀬戸文美 2017. 11. 20 発行
- SGRA レポート82 第57回SGRA フォーラム講演録「第2回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性－蒙
古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」葛兆光、四日市康博、チョグト、橋本雄、エルデニ
バートル、向正樹、孫衛国、金甫枕、李命美、ツェレンドルジ、趙阮、張佳 2018. 5. 10 発行
- SGRA レポート83 第58回SGRA フォーラム講演録「アジアを結ぶ？『一帯一路』の地政学」朱建榮、李彦銘、朴栄
濬、古賀慶、朴准儀 2018. 11. 16 発行
- SGRA レポート84 第11回SGRA チャイナフォーラム講演録「東アジアからみた中国美術史学」塚本磨充、呉孟晋
2019. 5. 17 発行
- SGRA レポート85 第17回日韓アジア未来フォーラム講演録「北朝鮮開発協力：各アクターから現状と今後を聞く」
孫赫相、朱建榮、文旻鍊 2019. 11. 22 発行
- SGRA レポート86 第59回SGRA フォーラム講演録「第3回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：17世
紀東アジアの国際関係－戦乱から安定へ－」三谷博、劉傑、趙珧、崔永昌、鄭潔西、荒木和憲、許
泰玖、鈴木開、祁美琴、牧原成征、崔姪姫、趙軼峰 2019. 9. 20 発行
- SGRA レポート87 第61回SGRA フォーラム講演録「日本の高等教育のグローバル化!？」
沈雨香、吉田文、シン・ジョンチョル、関沢和泉、ムラット・チャクル、金範洙 2019. 3. 26 発行
- SGRA レポート88 第12回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「日中映画交流の可能性」
刈間文俊、王衆一 2020. 9. 25 発行
- SGRA レポート89 第62回SGRA フォーラム講演録「再生可能エネルギーが世界を変える時…？——不都合な真実を超えて」
ルウェリン・ヒューズ、ハンス＝ヨゼフ・フェル、朴准儀、高偉俊、葉文昌、佐藤健太、近藤恵
2019. 11. 1 発行

- SGRA レポート 90 第63回SGRAフォーラム講演録「第4回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：『東アジア』の誕生—19世紀における国際秩序の転換—」三谷博、大久保健晴、韓承勳、孫青、大川真、南基玄、郭衛東、塩出浩之、韓成敏、秦方 2020. 11. 20 発行
- SGRA レポート 91 第13回SGRA-Vカフェ講演録「ポスト・コロナ時代の東アジア」林 泉忠 2020. 11. 20 発行
- SGRA レポート 92 第13回SGRAチャイナ・フォーラム講演録「国際日本学としてのアニメ研究」大塚英志、秦 剛、古市雅子、陳 龔 2021. 6. 18 発行
- SGRA レポート 93 第14回SGRAチャイナ・フォーラム講演録「東西思想の接触圏としての日本近代美術史再考」稲賀繁美、劉 曉峰、塚本磨充、王 中忱、林 少陽 2021. 6. 18 発行
- SGRA レポート 94 第65回SGRA-Vフォーラム講演録「第5回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：19世紀東アジアにおける感染症の流行と社会的対応」朴 漢珉、市川智生、余 新忠 2021. 10. 05 発行
- SGRA レポート 95 第19回日韓アジア未来フォーラム講演録「岐路に立つ日韓関係：これからどうすればいいか」小此木 政夫、李 元徳、沈 揆先、伊集院 敦、金 志英、小針 進、朴 榮濬、西野 純也 2021. 11. 17 発行
- SGRA レポート 96 第66回SGRAフォーラム講演録「第6回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性 人の移動と境界・権力・民族」塩出浩之、趙 阮、張 佳、榎本 渉、韓 成敏、秦 方、大久保健晴 2022. 6. 9 発行
- SGRA レポート 97 第67回SGRAフォーラム講演録「『誰一人取り残さない』如何にパンデミックを乗り越えSDGs実現に向かうか—世界各地からの現状報告—」佐渡友 哲、フェルディナンド・C・マキト、杜 世鑫、ダルウィッシュ ホサム、李 鋼哲、モハメド・オマル・アブディン 2022. 2. 10 発行
- SGRA レポート 98 第15回SGRAチャイナ・フォーラム講演録「アジアはいかに作られ、モダンはいかなる変化を生んだのか?—空間アジアの形成と生活世界の近代・現代—」山室信一 2022. 6. 9 発行
- SGRA レポート 99 第68回SGRAフォーラム講演録「夢・希望・嘘—メディアとジェンダー・セクシュアリティの関係性を探る—」ハンブルトン・アレクサンドラ、バラニャク平田ズザンナ、于寧、洪ユン伸 2022. 11. 1 発行
- SGRA レポート 100 第20回日韓アジア未来フォーラム講演録「進撃のKカルチャー——新韓流現象とその影響力」小針 進、韓 準、チュ・スワン・ザオ 2022. 11. 16 発行
- SGRA レポート 101 第69回SGRAフォーラム講演録「第7回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：『歴史大衆化』と東アジアの歴史学」韓 成敏 2023. 3. 22 発行
- SGRA レポート 102 第16回SGRAチャイナ・フォーラム講演録「モダンの衝撃とアジアの百年—異中同あり、通底・反転するグローバリゼーション—」山室信一 2023. 6. 14 発行
- SGRA レポート 103 第70回SGRAフォーラム講演録「木造建築文化財の修復・保存について考える」竹口泰生、姜 璿慧、永 旻群、アレハンドロ・マルティネス、塩原フローニ・フリデリケ 2023. 11. 10 発行
- SGRA レポート 104 第21回日韓アジア未来フォーラム講演録「新たな脅威（エマージングリスク）・新たな安全保障（エマージングセキュリティ）—これからの政策への挑戦—」金 湘培、鈴木一人 2023. 11. 15 発行
- SGRA レポート 105 第71回SGRAフォーラム講演録「20世紀前半、北東アジアに現れた『緑のウクライナ』という特別な空間」オリガ・ホメンコ、塚瀬 進、ナヒヤ、グロリア・ヤン ユー、マグダレナ・コウオジェイ 2023. 10. 30 発行

■ レポートご希望の方は、SGRA 事務局（Tel：03-3943-7612 Email：sgra@aisf.or.jp）へご連絡ください。

SGRAレポート No. 0106

第72回SGRAフォーラム

第8回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性
20世紀の戦争・植民地支配と和解はどのように語られてきたのか
—教育・メディア・研究—

編集・発行 (公財) 渥美国際交流財団関口グローバル研究会 (SGRA)
〒112-0014 東京都文京区関口3-5-8
Tel: 03-3943-7612 Fax: 03-3943-1512
SGRA ホームページ: <http://www.aisf.or.jp/sgra/>
電子メール: sgra@aisf.or.jp

発行日 2024年4月12日
発行責任者 今西淳子
印刷 (株) 平河工業社

©関口グローバル研究会 禁無断転載 本誌記事のお尋ねならびに引用の場合はご連絡ください。
©Sekiguchi Global Research Association Copying is Prohibited. For inquiries or quotes, please contact us.



Sekiguchi Global Research Association
ATSUMI INTERNATIONAL FOUNDATION